

女にとって 子どもとは

あじ

19号

つくられた“母性”をいま考える

- 日本近代の国家と母性
- 家族社会学と母子関係
- 現代日本の子殺しにみる母の孤立
- 反母性論——女権拡張運動の申し子〈母性〉
- 日本の女性運動をどう展開するか（その2）
- 資料●妊娠・出産に関するアンケート中間集約
- 優性保護法改訂をめぐる経過と論義

女にとって子どもとは

あ　こ　ら　19　号



生む性を持つ女は、生まれ落ちた日から、運命の予感を持つ。いつの日か生命を創造する可能性をからだのなかに抱えこみつゝ女は伸び、育ち、やがて月ごとに一つずつ卵を生み続ける。しかし、この輝かしい特性のゆえに、女は、△女・子ども△とひとくくりにされ、生産の場では、△負△の要素にさえなる。子を生めぬ女は肩を落とし、子を育てぬ女は肩をひそめられる。この世に子を生むにせよ生まないにせよ、卵をからだの奥深くかかえこむ女は、必ず子と向かい合わなければならない。育児の社会化がどんなに進んだとしても、内なる女と内なる子は、無限の対話を続けるであらうし、この世に生まれ出た子をめぐって、女と子は、女と女は、そして女と男は、はてしない喜びと重みを頒ち合い、担い合い、考え続けるだろう。女にとって子どもとは何か。

まさに女であるがゆえに直面し、決断し、かわりあわなければならぬ問題を、“女” “母性”といったあらゆる既成概念を突き離して、たじろがず、まっすぐに、見つめてみたい。

特集 女にとって子どもとは

日本近代の国家と母性……………中 嶌 邦……………6

家族社会学と母子関係……………酒 井 はるみ……………16

現代日本の子殺しにみる母の孤立……………佐々木 宏 子……………26

反母性論——女権拡張運動の申し子〈母性〉——国 沢 静 子……………40

インタビュ― 自分の精神的財産を与えてやりたい

小室加代子さん

守ってやらなければならない気がして

鎮目 恭夫さん……………54

随想●私にとって子どもとは……………62

佐伯 康子 河野貴代美 辻 友子 舟本 恵美

田部井京子 佐原 啓子 幾代 昌子 保科 朋子

ティーチ・イン●日本の女性解放運動をどう展開するか(その2)……………93

小沢 遼子 紀平 梯子 斎藤 千代 佐山 サチ 高橋ますみ 田中寿美子

中島 通子 舟本 恵美 松井やより 水沢 耶奈 山田 朋子

女の手に子宮を取り戻そうⅡ試験官ベビーに思う……………114
 《窓》 一九八〇年に向ける期待と不安Ⅱ女性団体大連合の動き……………115
 まず集うことに意味Ⅱ初の国際女性性学会東京会議……………117

紹介 I 「八〇年国際婦人年会議に向けて」……………119
 II ニュー・フェミニズム宣言……………125

△グループ紹介Ⅰ 男と女のための子供講座……………126

ひまわり文庫……………128

国際婦人年大阪連絡会……………130

△会員紹介Ⅰ 自由に呼吸したい……………あこら△武蔵野△世話人 丹羽雅代さん……………132

あこら読書室……………134

あこらのあこら……………142

新聞切り抜き帖……………148

資料	
1	妊娠出産に関するアンケート調査中間集約……………211
2	優生保護法の一部を「改正」する法律案提案理由説明……………222
3	優生保護法改訂案と条文対照表……………223
4	優生保護法の変遷と社会の移り変わり……………225
5	国民優生法(抄)……………227
6	刑法(抄)……………227
7	受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律(第一次案)……………228

日本近代の国家と母性

中 島 邦

最近、知人の姉が出産したのだが、八か月の未熟児で生まれた。順調に育ってきているようで、周囲の者はほっと胸をなでおろしている状況なのだが、ここに一つの問題が生じている。出産した病院が母乳を子に与えることを強く奨励しているので、退院した母の乳をしばって氷づめにしてひやし、毎日病院まで運び、哺育器に入っている子にのませるのである。その役目は隣県に住む母親の仕事となっていて日参の苦勞は並大抵でないということである。短い期間のことではあるが、母親が倒れそうだと聞くと、それまでにして母乳を子に与えるのかという感がなくもない。母乳を与えること自体は結構なことだし、右の状況に対しても単に私的な範囲で解決できる方法がありそうだし、またもっと公的な条件がととのっていたらと思わせられることもある。

それにしても、私自身の子育てと比較して、戦後の乳児の育て方もずいぶん変わってきたなと思わせられるのである。母乳の問題だけに限定しても、母親の健康やスタイルや、母乳の代わりとなる乳製品の質的向上と豊富な出回りによって、母乳を与えても与えなくても、大した問題ではないといった時期があったように思う。また、母乳をといった声が出はじめてからも母体の汚染が問題となったりして、消極的な対応であった。母親のスタイルが授乳との関係で取りざたされたのはアメリカの影響であったし、乳製品の問題は最も栄養のバランスがとれ、理想的なのはむしろ製品のほうであるといった企業側の宣伝にのった感がある。妊娠中から出産後まで、企業は病院とタイアップしてミルクの宣伝販売を行

なっていた。日本は小さな国であり、マスコミも発達していて、いったんよいという風評がたつと、あっという間に、ひとしなみに一色となってしまふ傾向があるのだが、戦後の三十年ばかりの短い期間をとっても、授乳のあり方はいろいろに変わって来ており、外国との比較などもやたらに紹介されてきたといえよう。

母乳の重視が行なわれたした頃と相前後して、近來母性の再検討が登場し、さまざまな角度から母性問題が論じられるようになった。この時期に「母性」が日本近代国家の中でどのように遇せられて来たかを検討することも意味があろう。

この母性をどう評価するかについては敗戦が大きな劃期となっている。ということは大きな変化をみせたときであった。後述するように敗戦前は母性が肯定され、高い評価が与えられたが、戦後は逆に母性はあまり問題ではなくなった。むしろ母性・女性といったものは、娘・嫁・老婆と同様に、一人の人間の単なる属性にすぎず、この属性を強調し、重視することはあやまりであり、一人の人間として認めることをさまたげるものだとする論調がジャーナリズムの一般的傾向であったように思う。

もちろん、こうした否定的論調が行なわれていても、現実には母性の肯定、賛美は生きつづけ、最近の母性論の中に、戦前の母性論と同質の手ばなしの母性賛美論あるいは女性⇨母性論が復活して来ているのを見ることが出来る。この母性論の復活は、戦前までの長期にわたる母性肯定の思潮につながっていることはいうまでもない。特に、日中戦争・太平洋戦争（一九三七—四五年）昭和十二年—同二十年の戦時期にみられた母性高揚論が大きく尾をひいているといえよう。例えば次の主張を見られたい。

母性・育児、それは何といつても、最大至高唯一無二の女性の天職である。悪しき母に碌な児なし、男後家の育てた子供は大抵不良化す、六年の学校教育より哺乳期の母のお伽という金言さえある、寡婦が懸命に育てた子は、殆ど立派だ。（中略）戦争が大きくなり、又長くなれば、それだけ寡婦孤児が氾濫する、これは何とも致し方がない。後家さんの血戦すべき悲壮な戦場が、随所に展開せられる

ことになる。立派な遺児を育て上げる、これこそ名誉ある夫の戦死に劣らぬ、実質的勲功であらねばならぬ。

これは、一九三七年に出た、国風会による『国家総動員』という書の一節である。国をあげての総力戦に際して、多くの戦傷死者が出ることが前提とされ、残された子を母が守り育てていく、これが当然の仕事として賞揚されたのである。後半の戦争との関連を述べた部分を除けば、現在の母性待望の論旨にも共通する。女は何よりも母なのであり、女への期待は母性への期待である。以後、母性への期待はさらにエスカレートしていく。一九四二(昭和十七)年に文部省社会教育局から出た「戦時家庭教育指導に関する件」では、(1)わが国に於ける家の特質と闡明並に其の使命の自覚 (2)健全なる家風の樹立 (3)母性の教養訓練 (4)子女の薰陶養護 (5)家庭生活の刷新充実の五項があげられ、(3)母性の教養訓練は、(イ)国家観念・社会観念の涵養 (ロ)日本婦道の修練 (ハ)母性の自覚 (ニ)時局認識 (ホ)科学的教養の向上 (ヘ)健全なる趣味の向上 (ロ)強健なる母体の錬成の七点が留意すべき点とし、母性の活動が戦時下の国家・社会の生活に寄与し、皇国子女の育成に果たす役割を自覚することが強調されている。その他さまざまの対策や機会を通じて、母性の重要性が強調されていく。

その中で生まれて来たのが「国家的母性」論である。「結婚は小乗的な家庭的母性生活への道であり、職業は大乗的な国家的母性生活への道であって、いずれも女性の本性からかけ離れたものではなく、深い豊かな愛情を基にした女性本来の生活」(笠原政江『働く婦人の生活設計』)であるとか、「生れよ殖えよが国策となり、子を生み育てる母は私の母にあらず、又子は私の子にあらず、その子と母性には国家の期待がかけられることになりました。(中略)子が国の子であり、母性が国の母であるとなつたとき、原則としてその子の養育の任は国が負うべきであり、その育児教育の目標も明らかに国家目的にそうべきものとせらるるにいたしました」(伊福部敦子『母性の歴史』)と述べられる。森泰子は『国家的母性の構造』で、自然的母性(動物的)と理念的母性(空智・無為の為、一切を包容し生ぜしめ育てる力)を国家を通して弁証法的に統一したところに国家的母性があると主張する。母性という性別にも

とついた觀念を強調し、「小国民」Ⅱ国家の子どもの増殖と育成という役割を明確化し、家の母という私は、同時に国家の母という公の中に位置づけられ、母性意識の高揚をはかったのである。その母に具體的に望まれたことは、第一に、長期戦に備えるための人的資源を確保する意味で、出生率を可能な限り高めることであつた。結婚が奨励され、多産多子を求め、優良多子家庭の表彰が行なわれ、「人口政策確立要綱」によって、人口の増加を期した。第二には、家庭生活の中心的存在として、家族の健康や精神的陶冶を担う責任と使命を自覚させ、畜家治国の実をあげさせることに努めた。

しかしこうした要望がスムーズに進行したわけではない。国家総力戦という現実と敗戦への急速な傾斜は、母性のそのままの発現に問題を投げかけた。論としても一方で、儒教的な女性論が復活、横行し、三従の道（父の家にありては父にしたがい、夫の家にゆきては夫にしたがい、夫死しては子にしたがうを三従という）——貝原益軒が、日本の伝統的な婦道として解説つきで紹介された。この中には母への期待はほとんど述べられていない。その一方で、婦人の社会的活動はあらゆる面で必要とされ、働けるものはすべて動員する態勢をとらざるを得なかった。すなわち、現実には、家に止まることなく、子育てに専念することなく、妊娠・出産のための余暇をもとり得ずに、戦時動員に応ずることが緊急の国家的要請として出され、戦が激しく、絶望的になっていくほどに觀念的な母性の尊重は、完全に空洞化していったのである。

戦時期の母性は総力戦という非常事態の国家目的とつよく結ばれて強調されたのであるが、国家の母性重視はこの期に始まつたことではない。

日本は本来が母性社会であるという指摘もあるが、こうした母性的なものを意識すると否とにかかわらず、政策的にとりこみ、国家に役立たしめたのが、日本近代の流れであつたといえる。

明治政府は近代国家を出発させるにあたって、新しい政策を次々と打ち出したが、その一つは国民教育である。幕藩体制期までの、「知らしめず、依らしむべし」の方向から「知らしめて依らしむる」の

やり方に変えるべく、まず初等教育から教育制度の整備を始めた。十九世紀の後半のこの時期に、全国を統一的・画一的にわかち、教育の普及をはかったことは、世界的にも注目すべき政策といえるだろう。したがって女子も当然、男子と同様、機会均等に学校教育を受けさせることとし、一八七二（明治五）年、学制の発布を行なった。太政官の布告「学事奨励に関する被仰出書」には「人々自ら其の身を立て、其産を修め、其業を昌にして以て其生を遂るゆえんのは他なし、身を修め智を開き才芸を長するに由るなり」と冒頭にあって、そのためにはすべての人々が学校において学ぶことが奨励されている。これまで学校に無関係であった「一般の人民、華土族農工商及婦女子」すべてに就学がすすめられた。特に「婦女子」と特記されたのは、幕藩体制下の儒教倫理の中に「女は学なきをよしとす」といった女子教育不用論があり、寺子屋などの女子就学率も男子と比べるとまだまだ低いので、新しい学校への就学について奨励する必要を認めたからである。

では男子も女子も、同一内容、同一方法をして同一の教場で教育することが意図されていたのであるうか。その授業内容を検討すると、明らかに男子に期待するものと女子へのそれが異なっているのである。文部省が左院に提出した当面の計画の一つに「一般の女子男子と均しく教育を被らしむべき事」があるが、そこには次のように述べられている。

人間の道、男女の差ある事なし。男子己に学有り。女子学ぶ事なかるべからず。且つ人の子学問の端緒を開き其以て物理を弁うるゆえんのもの母親教育の力多きに居る。故に博く一般を論ずれば其子の才不才、其母の賢不賢により、既己に其分を素定すと云へし。而して今日の女子後日の母なり。女子学ひざるべからざる義誠に大なりとす。

ここにあらわれているように、女子の教育は将来母となる必要性の上に奨励されているのである。子女教育には母の影響が大きいから、女子に教育を与えようとするのである。つまり一人の人間として、当然うけるべき、与えられるべきものとして教育があるのではない。

右のような賢母期待の教育姿勢は明治初期の他の啓蒙家たちの見解にも共通に見られる。例えばこの

時期の注目すべき啓蒙家集団であつた明六社の人々の言説がある。中村正直は「善良なる母を造る説」を書き、森有礼は「妻妾論」の中で、知的な母の育成を説いた。箕作秋坪・阪谷素なども同様である。

当時の識者たちの賢母教育の必要論は、一つは日本の模範であつた当時の欧米諸国においても母の子女への感化力が大きいことへの認識があり、日本も賢母教育をすすめたいと考えたからであるが、母親教育の重視はそればかりではない。幕藩体制期の女子教育論はよく言われるように儒教的な「三従の道」に基本があり、常に人に従うことを求められているのであるが、その中に親に対する孝養が述べられている。儒教倫理の中で重要な位置を占めるものとして「孝」の倫理があり、母親も孝の対象として尊重されなければならなかった。また、母は自己を抑える三従の道を身につけることによって、家内及び社会の淳風美俗の維持者として存在していた。幕藩体制の崩壊とそれのもたらす社会的変動に対応して、幕藩体制の維持者たちは期待をかけたのである。いわば社会的荒波にもてあそばされる小舟である「家」を、母の力によって、何とか維持し、乗り切つてほしい。ここに従来の三従の道を越えて母の存在を強調し、現在は苦しくとも、子女の教育を母が見事に果たすことによって、将来が開けてくる、という考え方が強くなる。そのためには母もまた賢くなければならない。明治維新时期にそう数多くはないが、藩による女学校が設置されるに至つたのはそうした母への期待の表われである。このような幕藩体制下の士族層における母意識を基礎として、新しい近代国家を形成するにあたって、母の影響力を国民の育成に役立てたいと考えたのである。

学制において、女子教育の目標・必要性を、将来母となり、家庭教育にあたる者においたことは教育の内容や方法も、男子と異なつたものにとらえたことであり、「女も一人の人間である」ではなくて、「女は母となる」という認識に立つた教育政策をとつたことであり、近代日本の女子教育に大きなワクを与えたといえる。

さらに、一八七九（明治一二）年の教育令によって、男は男の教育を、女は女の教育を与えるべきであるとして男女の別学が法制化された。ただし、原則は別学であるが、小学校段階では共学を行なつて

もよいとされていた。こうして教育の機会均等はやぶれ、教育政策的にも儒教派が台頭し、婦徳の養成を求める中で、賢母教育が強調されていく。内閣制がひかれて初めての文部大臣となった森有礼は、女子教育の重要性を説いたが、「入隊する前母と別れる子の姿」、「戦死の報母に達する」等の絵を学校教育の中でとりあげさせたという挿話からも推察できるように、国家主義の立場からする母親教育の強調であった。「時代が違ったのです。新しいこれからの社会に生きていかなければならない貴方のお子さんやお孫さんに、新しい学校教育を与えることが必要です。殊に女の子は子供を育てるのですから、女の子にも新しい教育をうけさせて賢い子にしておけば、孫も賢くなり、お母さんも幸福です」。こういった女子就学奨励策が、各県から出ており、こうした説得は一般庶民の耳朶に入りやすく、徐々に女子も小学校に行かせるようになって、就学率が上昇した。しかし、それはせいぜい四年制の小学校までであって、その上の高等小学校や、女学校への進学はごくわずかな状況がつづいていく。

しかし、女子の初等教育の就学率を一举にあげさせ、中等教育進学も増加し、中等教育機関を整備させる契機となったのは日清戦争である。日清戦争という大きな対外戦争にぶつかることで、国家意識をもちあげ、さらにこの戦に勝つことで国際的な地位もたかまり、同時に帝国主義諸国との競争関係に入ることとなり、国家的見地から女子教育にも力を入れるようになったのである。

それまでどちらかといえば女子教育は私立学校にまかせ、公的機関は男子教育の充実に力を注ぐといった姿勢であったのが、一八九九（明治三二）年、高等女学校令を公布して、女子の中等教育を、初めて学校教育体系の中に明確に位置づけた。以後、内容的にも整備されていく。この高等女学校令によって打ち出された教育方針こそ、よくいわれる「良妻賢母主義教育」である。良き妻であり、賢い母であることは、それ自体としては問題はない。今、あなたは良妻であり賢母であるかと聞かれれば、返答に窮するのが実状であろう。しかしこの場合の良妻賢母は、女兒が成長して結婚すると、夫の家の、つまり婚家のよき妻とならなければならないし、その家での賢い母でなければならぬ。そのことで、家が安泰となり、ひいては家を単位として成立している国家も強固なものとなり得る、という考え方の良妻

賢母育成なのである。したがって、現在、高等女学校令下の女子教育理念として、良妻賢母を称するときは、良妻賢母主義教育という表現をとって区別する。

良妻賢母が一つの熟語として女子教育の理念を示すようになったのは、当時の文部大臣菊地大麓が用いてからだといわれるが、それまでは良妻と賢母が別々に用いられ、賢母良妻と言ったりしている。教育政策の責任者が用いることで、熟語として一定したのであろう。

良妻賢母というが、当時の妻は法的には非常に低い地位におかれている。家は戸主によって統括されているが、戸主となり得るのは原則として男子(祖父・父・夫・兄・弟・息子など)であり、財産管理権など重要な権利はほとんど与えられず、自己の財産でも夫の管理下におかれ、準禁治産者並の扱いであるといえるほどに、妻の地位は低いのである。妻が持つ力をこのようにおさえたのは、戸主を頂点とするヒエラルキーに家族をおき、家制度を統治せしめようとしたからであり、この家をつめて国家とする、日本独特の国家観・国体観による。それは家族国家観とよばれ、あたかも一国が一家のように一体化することを理想とした。天皇は国主(戸主)であり、父である。国民は小家族の一員であると共に国家という大家族の一員であり、天皇に対する赤子である。ここに父と子という関係を重層的にもって、天皇制国家の家族に属することとなる。この場合、上位にあるのはもちろん国家である。妻の場合、家族の一員として戸主(夫)の活動を内助すること、それを通しての国家への忠誠に止まるが、妻の位置に対して、母親はどうか。母親もまた、親権を行使することは父親に一步をゆずるが、国家政策の上では、より積極的な役割を付加された。

明治後半から「楠正行の母」「水兵の母」を代表とする母ものが、教科書の中に登場し、子への私情を抑え、子を君のため、国のために捧げるという、公に殉じ、公に献身する母像が描かれ、理想的な母像として子女に印象づけられる。こうした母ものは次第に教科書の中に増加していく。家族のために献身し、忍耐し、心をくだく母ばかりでなく、国家のために苦難をかってでる母である。それは子への盲目的な感性的な愛情ではなく、強くて厳しい態度を持った、りんとした母像である。教科書ばかりでな

く、例えば『明治国民龜鑑』にみられるように、国民の鏡として表彰された母親は、極貧の生活の中から兵役に赴く息子に、忠君愛国を説き、国家のために自分の身を犠牲にすることをすすめる母であり、そうした母が称賛され、褒章が与えられ、推賞されているのである。子が戦死するならば「靖国の母」がここに生まれる。こうして賢母は、ナショナリズムを背景として、未来を背負う子の育成を担うものとして位置づけられ、期待されることが大であった。

良妻賢母主義教育は、天皇制国家体制の中にくみこまれ、国家のその時々々の要請に応じて家を守り、子女の教育にあたることを重点として女子教育の中に生きつづけ、第二次世界大戦の敗戦に至るまで、強められこそすれ、弱体化することなく継承されたのである。高等女学校令の施行以後、全県にそれぞれ県立校を設置し、高等女学校令による教育内容を持つものだけが、高等女学校を称し得ることとし、あとは女学校であった。宗教教育は禁止されたため、キリスト教系女学校は、高等女学校となる道を失うなど、私立学校の独自性も圧迫された。明治末期には、家事教育を重視した実科高等女学校も設立した。私立校と公立校の社会的地位は逆転したのである。

大正期になると、全般的に女子の中等・高等教育機関への進学率が増加するが、女子は高等女学校（男子の中学校にあたる）まで教育すれば、良妻賢母たり得ると判断していた文部行政関係者は、教員養成校は別として、女子のための高等教育機関を設けることはせず、私立校にまかせたままで消極的な態度であった。むしろ、明治末期から広がってきた社会教育に力を入れ、良妻賢母主義教育をその分野でも広めていった。全国に散在する処女会といった若い娘たちの団体を漸次組織化すると共に、愛国婦人会をはじめとする婦人団体を育成し、そうした諸団体に講演者を送ったり、宣伝活動をしたりして活動を助成した。また大正デモクラシー期のさまざまな思潮や運動や世相の変化に対応して、講演会や展示会・講演会を開いて啓蒙活動を展開した。家族国家観につつまこまれたままで良妻賢母主義の教育像はより広範囲に影響を与えたのである。

大正期は一方で、欧米の教育思潮の刺激をうけて、児童中心主義の新教育運動が展開した時期であり

「二十世紀は子どもの世紀である」とし、児童の個性・意欲・表現・自由などをひき出す教育が試みられたから、当然、子に対する母への関心が高まった。母性論が論ぜられる条件をつくったといえよう。欧米の女性論・婦人論が婦人ジャーナリズムの盛行期と重なって流入し、紹介されたが、その中でエレン・ケイの母性主義思想の導入は大きな刺激となった。平塚らいてふ・与謝野晶子・山川菊栄・山田わかなどによる「母性保護論争」はそうした動向を反映するものである。エレン・ケイはもちろん、在野における母性論は、しばしば良妻賢母主義教育のそれとは本質的に異なったものを持つているのだが、母性重視という共通性によって、政策的な女子教育論と抵触することが少ないとみられていた。こうした母への期待、母性の理想型は良妻賢母主義教育の重要な核として位置づけられたばかりでなく、昭和に入り、ファシズム期に突入していくにつれて、次第にエスカレートしていく。その行きついたところが、先にふれた「国家的母性」なのである。

近代国家の中で、母性はつねに未来の国民を育成するものとして、国家の存続と繁栄を担うものとして期待され、位置づけられて来た。母性は私的な自然な血肉をわけた子に対する母という関係を越えた価値を与えられた。それは近代日本の社会的秩序における女の地位の低さを覆うものでもあった。

だが、いくつかの事実だけは最後に指摘しておきたい。

良妻賢母主義教育は知的水準において男子に劣り、道徳的・技能的教科の偏重がみられる。戸主中心の民法は改正されることなく戦後まで続いており、女性の社会的発言や活動は法をもって抑えられてきた。富国強兵の国家的論理によって、生めよ殖やせよと人口増加政策は一貫して続けられたが、具体的な母性の保護政策はほとんどとられていない。貧困と子どもさんは表裏一体である。一九三七(昭和一二)年まがりなりに母子保護法の成立をみるが、この法制定の背後には多くの婦人自身の苦闘の歴史がある。

母性の尊重、母性の尊厳とは何なのか。戦前の国家と母性の歴史の残像を再吟味・再検討することは重要であろう。

(日本女子大学教授)

家族社会学と母子関係

酒井はるみ

男女の間に不平等なところは、何一つないといわれる。現行の法体制のもとで、労働し、家庭を維持し、子どもを育てながら、われわれ女性は実に多くの障害を経験させられる。そしてそのほとんどが何らかの形で男女の不平等につながっている。

子どもを産み育てることへの女性のかかわり方の大きさは、男性のそれとは比べようもないほどである。子産み・子育てが時間的にも空間的にも拘束を要求してくるものであるだけに、女性がそれまで遂行していた自己実現のためのさまざまな活動——なにかんづく労働——に重大な疎外要因として働かざるをえない。経済的にも精神的にも人間としての自立に不可欠の要素であることを考えるとき、労働はもともと日常的な人間の営みであるはずにもかかわらず、子産み・子育てというもう一つのもっとも日常的な人間の営みによって否定されかねないのである。

子産み・子育てへの男女のかかわり方の差の問題は、個人的なレベルのことではもちろんなく、社会制度上の問題である。何世紀にもわたって、男性は生計の担い手であり、女性は子産み・子育てと家事を担うという性役割にもとづく分業体系が、あるときは宗教を通じて、またあるときは教育によって、制度化されてきた。ここでは女性は産む性であり、子を産み育てることは女性の本能であるということ

が前提とされていた。しかし産業構造の高度化の過程で、女性は不可欠の労働力として大量に労働に参加せられることとなり、家庭のみならず社会においても重要な役割を引き受けるようになった。これとともに本能を強調した女性像も変化し始め、心理学者や精神医学者たちの間で次のように指摘するものが出てきた。

「母性の根本的なところというのは、非常に生物的な次元に近いでしょう。ですから現代の女性が自分の自我を確立するという行き方とは逆なんですね。……女性が自我を確立するという方向に姿勢を向けているときというのは、心の中の母性を否定するように思う。土にまみれたくない。だから土に結びつくような母性を否定する女性が増えてくるのではないかと思う」⁽¹⁾と述べるものや、「母性本能⁽²⁾というものがもしあるとしても、それは非常に傷つきやすく弱々しいものだと考えておかなくてはならない」ととらえる人たちである。長い間不変のものと考えられて来た母性も、社会のあり方によってはたちまち不安定になってしまうことが指摘されたのである。そしてさらに、子育てについても問い直しがなされているように、「『父親が育児に興味がなく、母親よりも無能である』という神話はくずれつつある⁽³⁾」という見解もあらわれてきた。このように、母性や親子関係は変動する現代社会に対応する形で変化しつつあることがうかがえるのである。

*

本稿でも、このような視点をふまえて、家族社会学の中で母子関係がどうとらえられているかを明らかにすることが主題になってくる。わが国における家族社会学の成果から母子関係がいかにとらえられてきたかを跡付けられればいいのであるが、実はそれはあまり生産的なことではない。というのは、日本では母子関係の研究はほとんどなされていないという状況があるからである。そこで枠をさらに広げて親子関係の中で母子関係の部分をひき出すことを考えた。まず、わが国、家族社会学における親子関係の研究のいくつかの特徴をまとめておくこととしたい。第一に、家族社会学は、親子関係を（親子のパーソナリティーの安定化の側面）と子どもの社会化の側面とに大きく分けている。情緒的側面の前者は

心理学に期待して、社会学は子どもの社会化により関心を払っている。社会化とは「社会の構成員として社会生活を営むに足る諸々の能力を身につけたおとなになる」⁽⁴⁾ための教育・訓練のことであるが、ここからわが国ではしつけが重要テーマとなってくる。親子関係の研究がいかなる説明もなく即しつけを内容とする場合さえ皆無ではないのである。第二に、しつけがわが国では年齢的にやや遅く開始されることや社会にかかわることでおこる問題（例えば非行）に関心を持つために、小学校高学年以上が対象とされ、子どもの中では年齢の高い方に偏っている。

第三に、研究者はまず家族という枠を設定し、その中の親子関係をとらえようとする。この場合の家族は両親がそろっていることを当然のこととしているために、母子家庭や父子家庭が欠損した家庭であると発想されることになるし、場合によっては共働き家族も逸脱した家族であるととらえられることになる。（これは問題であろう。例えば母子関係から家族を見るという視点が設定されるならば、母子家庭も相対的に等距離の位置におかれることになるのではあるまいか。現代の社会を考慮するならば、多様な解釈の可能性が確保される必要がある）。また家族内親子関係では、親という側面が強くとらえられるのに対し、親の性という側面は軽視されるか、問題としてはほとんど認識されないという特徴が認められる。例えば、母親がしつけの責任者となる場合は母親の中の親の側面が強調されている。母親の中の女の側面が強調された場合は、性役割の伝達が重要な問題になってくるのであろうが、ほとんど問題にされてこなかった。父・母と区別しているようでありながら、基本的には親というのとらえ方のほうが強いことであろう。第四に、すでに述べたように、わが国においては親子問題の研究は盛んではない。そのため理論面でも実証面でも外国（そのほとんどはアメリカ）の成果を補完的に取り入れていることがあげられるだろう。

このような家族社会学における親子関係の特徴をふまえて、既存の成果を母子関係に焦点を当てて概観することとしたい。

わが国においては、親子関係への関心はしつけに集中している。まず戦前と比較した戦後のしつけの

変化として厳格型から放任型への傾向、家事参加のしつけの減少などが認められている。しつけ責任者は「厳父慈母型」から「母中心型」に移り、しつけからの父親の後退が著しいが、同時に両親のしつけ領域の分担傾向がやや不明確になってきた。しつけ責任者としての母親の間では「体罰は必要」、「男は男らしく、女は女らしくしつける」、「しつけは合理性より情愛が優先」が圧倒的に支持され、伝統的価値態度が強い。しかし他方ではしつけを学校へ依存する態度、父親には「友達型」を希望する態度などが明らかな傾向となっている。

しつけの目標を徳目によって見ると、自律的・行動的な徳目（ひとにたよらず自分でやる）「自分の責任を果たす」、子ども志向的な徳目（「明るい」）のほうが、他人志向的（「仲間に入気」「ひとにまけない」）、適応的（「明るい」「ひとに親切」）、おとな志向的（「おとなしくすなお」「親孝行」）徳目よりも、子の性別や親の属性をこえてより多くの親によって望まれている。子どもを性別で比較すると、父母とも男の子に対しては自律の徳目・行動の徳目をより多く望み、女の子に対しては適応的性質の徳目、他人志向的徳目をより多く望むなど、徳目に性差がはっきり出てくる。また父と母とを比べると、男の子に対しても女の子に対しても、父が行動の徳目をえらぶことが多いが、母は適応的性質の徳目をえらぶことが多く、徳目の選択に性差が認められる。

親子関係の研究がしつけに集中しているだけに、その他の項目の研究は数少ない。母子関係に関連して、コミュニケーション・非行・かぎっ子・欠損家族をとりあげたい。

コミュニケーションについては男子より女子が、父より母が頻度が高く、男子は年齢の上昇とともに少なくなる傾向があるのに対して、女子は中学生より高校生が明らかに対話が多くなる。結局高校生男子と父親の間で対話が最も少なく、高校生女子と母親の間で最も多い。母親は主として子どもの情報を得るために行なっている。また親子の接触度の高いグループは夫婦の対話量が多い。

非行者には親子間の愛情関係と一貫した賞罰体制をとまなうしつけが欠けており、時間的離隔が長いことも認められた。留守家族家庭の児童・生徒と一般家庭の児童・生徒との行動面等に見られた差は、

親が働くということ自体より、それにともなうしつけの不十分さに問題があり、親の不在を考慮したしつけ上の配慮がなされれば解決することであり、共働きは非行を生むという通俗的見解が否定された。

働く母親を対象に行なわれたかぎっ子の調査によると、母親が帰宅後いちばん使いたいと思っている時間は子どもとの接触であった。その順位は話相手になることが第一位で、勉強の相談相手になるとか身のまわりの世話をするがこれにつづいた。子どもの生活に関する認知程度では、テストとクラブ活動所属については主婦専業の母親との間に有意な差はないが、友人関係では知らない割合が増えて差が見られる。一方子どもたちは母親の就労に肯定的な態度を示し、母親も自分のことは自分でする、独立心がつよくなった、手伝いをするようになった等、子どもにプラスの影響を見ているが、学校では基本的な習慣・自主性・情緒の安定・成績などが若干劣るという調査結果が出されている。

欠損家族は役割の過重から愛情関係を圧迫し、ひいては社会化機能に支障をきたしやすい構造的な特徴を持つという。子どもは家事手伝いといった家族集団維持のための仕事については規則で統制されるが、しつけにまつわる規則は決まっていないことが多く、とくに母子家族より父子家族にその傾向がはつきり認められた。

はなはだ簡単なものであったが、わが国における母子関係を中心とする成果を概観したわけである。わが国の母子関係の特徴をまとめると、母親は家族の間でのコミュニケーション頻度が高く、子どもの情報を得るという目的意識も高い。そして家族の機能として最も重要なものの一つであるしつけの主体者であるが、それはまた、父親が「厳父型」から「友達型」に変容したことによって、中心者でもある。しかし必ずしも強力なしつけ手ではなく学校への依存態度を持っている。しつけの徳目としては、男の子には自律的・行動的徳目を望み、女の子に対しては適応的・他人志向的徳目を望んでいるが男女を問わず子どもに対して父が行動の徳目を選ぶことが多いのに対し、母の方は適応的性質の徳目をえらぶことが多いのである。

母親の家庭で占める位置がこのように大きなものであるために、母親不在の家族の問題が非行やかぎ

つ子という形でクローズアップされることとなる。親の不在を考慮したしつけや在宅時の子どもとの接触状況なども母中心に尋ねられるのである。

*

親子関係の研究、また母子関係の研究をさらにふくらませるために、アメリカの研究動向を知ることには意味があるように思われる。一九六〇年代の親子関係の研究動向を紹介した論文があるが、本稿で対象とした諸調査と年代が重なり、われわれにとって示唆するところ大なので概観することとしたい。⁽⁵⁾

親子関係のテーマとして、親の態度と行動、子どもの性による親の影響の違い、親との同一化、性役割認知、親志向か友人志向か、父親の不在、離婚・継親・養子縁組の子への影響、精神病・情緒障害・問題行動、健全な子と身障の子および子どもの虐待、学業成績、指導力、創造的思考、職業選択、上昇志向、子どもの両親認識の違い、親と成人した子との関係、国際比較などが取り上げられており、かなり広い領域がカバーされている。これらの研究成果から次のようなことが明らかにされた。従来母子関係の研究が中心であったが、父親の重要性が指摘された。そして従来父子関係においてであったが、父子娘関係においても同様に考察をすすめる必要があるという。現代の娘たちは多様なモデルから自分たちの役割を学んでいるからである。また男の子のほうが親の影響を受けやすいことも明らかにされた。そして、今や子どもを親の影響の産物と考える時代は去り、逆に子どもが親子関係によい影響を与えていることがわかった。あたたかい親子関係は、子の学業成績・リーダーシップ・創造的思考・職業選択・性行動などに深く影響することが知られた。階層別では、中流階級の親は、低階層の親に比べて統制的・支持的で、体罰を用いず対話によるしつけを行なっている。青年の役割習得において仲間集団がますます重要になっていくこと、家族以外の成人との関係は公教育の中で得られるもの以外ほとんどないことなどが明らかにされた。調査結果から、一定の結論を一般化することはほとんどできないこと、また現在の研究が依拠している理論は近年の階級間の役割の変化や人種間の役割の変化を考慮していないことが指摘された。

このような成果をふまえて、理論的・方法的な提起がなされたが大略次のようなものである。

①従来の仮説の再検討の必要性和心理学者や臨床医との共同作業を通して人間の相互作用の理解に一層貢献しうる家族理論を構築すること。母親の子どもへの影響力の強さという信念から、父親のそれを見逃してきたことや、母親に比べて愛情と理解を子に示さないことによって父親は道具的・表出的性役割分化を推し進めていること。

②方法の精緻化として、関連した変数をより広い範囲でコントロールする必要性があること、事実を見るに際して偏見を取り除く努力をつみ重ねてゆく必要がある。

③父子関係の研究、老親と成人した子との関係の研究、州レベルや全国レベルの調査研究、親子関係の長期的研究など、従来欠落していた領域の研究を進める。とくに長期的家族研究のために国立家族研究所の設置を提言する。

④コミュニケーションの親子関係とか育児への影響など従来とは異なる親子関係の研究がすすめられなければならない。

⑤現実の社会の問題状況（たとえば薬の乱用問題と親子関係など）に切り込むような研究や、たとえばより積極的なやり方で失敗状況に应诉することを子どもが学ぶ手助けを研究者がするというような経験的なタイプの研究は非常に意義深く今後必要とされてゆくだろう。

最後に、親子関係の研究の進展のためには、研究者は既存の研究方法に固執しがちな傾向を排して、創造的・革新的な研究方法を探究すべきことを強調して結びにかえている。

本題の母子関係の問題からは、はずれてしまったが、ここに述べられている問題の指摘は、日本における今後の親子関係の研究にとってきわめて示唆に富むものであると思われるので、あえて概観してみたのである。

*

さて、これまでの母子関係のとりえ方とは全く異質なレベルで母子関係がとりあげられたことがある

ので最後に述べておくこととしたい。

家族社会学は核家族が普遍的に存在することをもって家族分析の基礎単位とした。したがって「核家族説こそ現代の家族社会学の出発点をなす」⁽⁶⁾のであるが、これに対し社会人類学者スミスは英領ギニアの黒人家族の調査から、家族の基本的構造は母と子の単位であることを明らかにした。ギニアの黒人村落では男が村落の外に出て働くことを余儀なくされる社会経済的な条件があるために、夫婦関係は著しく不安定である。しかし母子の単位は母中心であることによって子の養育の周期を終わるまでは「核単位」として安定的状態を保っていることを確認した。スミスを支持する研究者は他にもあったが、山室氏はこれを受けて日本の家族を検討した結果、核家族のもつ二つの機能のうち、夫婦のパーソナリティーの安定化についても(例えば姑と気まづくなったときの夫の態度に妻を支持する者が少ない等)、子の基本的な社会化の担い手についても(例えば母が育てていないことが多く、祖母が育てている)、核家族としての自立性を持っていないと述べた。山室氏は日本では核家族の存在を認めがたいとし、またアメリカでもすでに一九五〇年代に核家族は全体の三分の一を下回って、母子世帯の割合の増加を示しており、歴史的・社会的状況とのかかわりの中で家族をとらえるべきであると述べた。同時に核家族論は現代における家族の危機や解体を正当に理解しえないばかりか、問題解決の妨げになることさえ危惧されると核家族論を批判した。

*

わが国では母親が家庭の中心に位置する形で母子関係がむすばれていることが知られた。しかし、産業社会の高度化、管理社会化、生活条件としての環境の悪化、あるいは女性の社会進出や女性解放運動が進む中で、われわれは、アメリカの例にみられるように、これまで経験しなかったさまざまな家族問題と対峙することとなるであろう。そのさいやはり母親中心の家族(母子ダイアド)を核単位とする形もふくめて)がつくられるであろうか。家族における母子ダイアドを支持する研究者のある者は、その強さの根拠を生物学的基礎としての母子子においている。母子ダイアドは現象的にも高度に発展

したアメリカにもまた対極的な中米にも存在するというのである。他方で母性の否定が見とおされたり、母親の子捨て・子殺しが問題になっている。

いずれにしても、母—子の深い結びつきは生物学的な次元の問題であるよりは、社会的な次元の問題と考えるほうが説得力がありそうである。家族社会学に課された課題であらう。

(茨城大学講師)

注

- (1) 河合隼雄・藤田統・小嶋謙四郎『どう考えるか——母なるもの』二玄社 一九七七年 八五頁
 - (2) 柏木恵子・松田惺・宮本美沙子・久世敏雄・三輪弘道『親子関係の心理』有斐閣 一九七八年 五三頁
 - (3) 柏木他、前掲書 六二頁
 - (4) 山村健『親子関係』田村健二・岡村益編『現代家族関係学』高文堂出版社 一九七〇年 一六七頁
 - (5) James Walters & Nick Sinnett, "Parent-Child Relationships: A Decade Review of Research," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 33 No. 1 (1971) pp. 70~111
 - (6) 森岡清美編『家族社会学』有斐閣 一九七七年 八頁
 - (7) 山室周平「核家族論と日本の家族(一)」『ケース研究』七七号 一九六三年 二三頁~三二頁 同「核家族論と日本の家族(二)」『ケース研究』七八号 一九六三年九頁~二二頁
- 参考文献(調査報告が収録されているもの)
- 青井和夫・田村喜代「親子関係にあらわれた役割期待と役割行動——青年前期の子を中心として——」小山隆編『現代家族の役割構造』培風館 一九六七年 所収
- 増田光吉「親子関係——しつけの問題」山室周平・姫岡勤共編『現代家族の社会学』培風館 一九七〇年 所収
- 増田光吉『アメリカの家族・日本の家族』日本放送出版協会 一九七〇年
- 姫岡勤・上子武次・増田光吉編著『現代のしつけと親子関係』川島書店 一九七四年
- 大塩俊介「変動期における親子関係——その若干の側面に関する検討——」岩井弘融「共働き家族としつけ」家族問題研究会編『現代日本の家族——動態・問題・調整——』培風館 一九七四年 所収
- 松原治郎「親子関係としつけ」大橋重・増田光吉編著『改訂家族社会学』川島書店 一九七六年 所収
- 社会福祉法人真生会 社会福祉研究所『母子研究』No. 1 一九七八年

企画から営業まで女の力だけで運営
サイレントマイノリティの——BOC出版

自分を変える本

リン・ブルーム、カレン・コバーン
他共著 女流心理学者による自己
変革の実用書。新聞等に好評
紹介。重版出来。 1300円
日本図書館協会選定図書

不思議な釣鐘

文・美森成生 絵・藤川秀之 花
の中から雲の中から遠い声が聞こ
える。異色の民話集。1800円
日本図書館協会選定図書

菜の花と雷さま

文・美森成生 絵・日暮修一 好
評の「不思議な……」に続く民話第
二集。ふるさとの詩。1800円
日本図書館協会選定図書
全国学校図書館協議会選定図書

アテナノナイテガミ

大里知子著 一台のカナタイプ
で初めて心を語れたノ重度身障
者の感動の記録。 580円

砂色の小さい蛇

山下智恵子著 女流新人賞受賞
作を含む処女短編集。自分の生
きる場所を持たず、漂い模索す
る女達を鋭く描く。 1000円

現代日本の子殺しに見る母の孤立

佐々木 宏子

◎なぜ、いまも親は子を殺すのか

いつの時代、どの世界においても、子どもはその「生存権」を親によって支配されてきた。貧しさのなかで間引きされ、餓死させられ、遺棄された多くの子どもたち、しつけという名目のもとにせっかんされ、体罰を加えられ、打ちのめされた子どもたち。

家の「名誉」を守るといふ理由のために、または宗教的迷信のため、双生児の片方が殺されたり。障害をもつて生まれた子どもは即殺されることもあった。

現代という時点からそれらの歴史をふりかえるとき、人間のもつ動物的エゴイズムのあまりにもなまなましい表出に、目を覆いたくなるが、その一方で、その時代の

さまざまな「限界」を思うと、それなりに事実をのみこまざるを得ない。

そして現代。戦後の日本は生活を豊かにするために多くの物質を生産し、歴史上かつてないほどの経済的繁栄を達成し、人々が平等に平和に生きるための努力をつづ

第1表 嬰兒殺の発生認知・検挙件数

年次	認知	検挙	検挙率
昭和42	138件	152件	83.1%
43	222	183	82.4
44	185	163	88.1
45	210	187	89.0
46	189	149	78.8
47	174	152	87.4
48	196	156	79.6
49	190	160	84.2
50	207	177	85.5
51	183	161	88.0
52	187	168	89.8

(警察庁『昭和42年～52年の犯罪』より)

けてきた。

しかし、それにもかかわらず、第一表にみるように、子殺しの数は一向に減少せず、しかも母親が加害者になる比率はここ十年くらいほぼ九〇%前後になっている。

最近のマスコミは、これら子殺しの事件をかなりセンセーショナルに報道する。しかし、その報道のあり方も「ではどうすれば子殺しはなくなるのか」「子殺しの本当の原因は何なのか」を深く追究するわけではない。

たとえば、最近の不況のなかで目立つ父親による子殺しの場合、マスコミは必ず「そのとき母は何をしていたのか」についてしつこく食いさがる。

しかし、逆に母による子殺しが発生したとき、「そのとき父は何をしていたのか」については、ほとんどいっていいくらい言及されない。

このあり方にも、戦後日本における子殺しの数が一向に減少しない原因があるように思えてならない。

なぜいまも母は子どもを殺すのだろうか。戦後の「繁栄」は、日本の母と子の幸福な生き方とは無関係な部分で達成されたのだろうか。それとも「繁栄」と信じられていたものが、人間のなかに何か新しい形の緊張を生み出してきたのだろうか。または、そのいずれでもなく、もっと他のまだ解明されていないところに何かの要因が

あるのだろうか。

この稿においては、戦後の日本における子殺しの実態を中心にみつ、諸外国の資料も取り入れ、子殺しはなぜ、どのような理由によってひきおこされるのかについて考えてみたい。

もしその理由が解明されるならば、それは、日本の母子関係の特殊性を明らかにし、ひいては多くの日本の母親のかかえている悩み・矛盾のありかをも明らかにしてくれるだろう。

ただし、初めにお断りしておかねばならないことは、「子殺し」「母子心中」などに関する統計資料の不完全さについてである。第一表にも示してあるとおり、日本においては、満一歳までの「嬰兒殺」については、警察庁がその統計資料を発表する。しかし、他の実子殺しや母子心中などに関する統計は、すべてが「殺人」という範ちゅうのなかに含められて処理されるために、全国レベルでの正確なデータはどこにもないといっている。

したがって、この稿で私が引用させていただく統計資料も、さまざまな研究者が、さまざまな資料から作成されたものであり、多少の不統一さはまぬがれえないことをお許し願いたい。

◎母子のみが取り残された疑似「家庭」の中で

—— 母子心中 ——

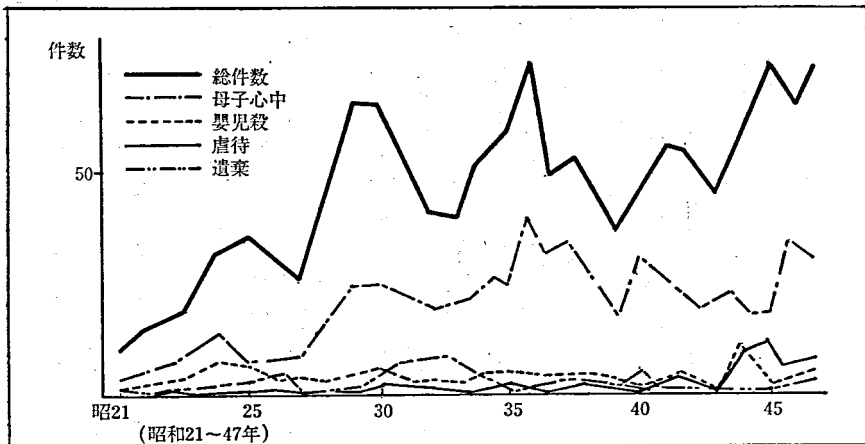
このところ連日のように「サラ金」にまつわる親子無
理心中事件が報道されている。今朝（昭和五十三年八月
二十四日付け朝日新聞）の新聞にも、サラ金の借金に追
われて夫が家出、「絶望の妻、二児連れ放火心中」と、
大きく見出しが出ている。このように、日本における子
殺しの多くは、母子心中——子殺しプラス自殺——とい
う形態をとることがよく知られている。

第一図は、栗栖瑛子が昭和二十一年から同四十七年ま
での間に朝日新聞で報道された母子心中・嬰兒殺・虐待・
遺棄などの記事から事件数の推移を見たものである。⁽¹⁾

それによると、二十七年間の総報道件数は千二百九件
であり、そのうち一家心中百九十九件（一六・五％）、
母子心中五百五十四件（四五・八％）、父子心中八十五
件（七・〇％）、殺児百四件（八・六％）、嬰兒殺百十四
件（九・四％）、虐待五十九件（四・九％）、遺棄九十四
件（七・五％）となっている。

また、われわれ宇都宮大学幼児教育研究協議会のメン
バーは、昭和四十一年から同五十年の十年間に、栃木県

第1図 母子心中・嬰兒殺・虐待・遺棄の新聞報道件数推移



（栗栖瑛子『ジュリスト577号』1974より）

下で発生した全子殺し事件（十八歳未満）について、県警察本部の資料をもとに調査した。その結果、十年間の子殺しの総件数は、五十件あり、そのうち四四％の二十二件が親子心中、さらに親子心中の八一・八％である十八件が母子心中であることがわかった。⁽²⁾

その他心中に関する統計資料としては、昭和四十九年四月～同六月の三か月間に全国でひきおこされたもののデータがある。⁽³⁾ この文献のなかで田村健二は、この三か月間に全国でひきおこされた親子心中事件は五十九件であり、そのうち八割にあたる四十八件が母子心中であると述べている。

また、諸外国とくに欧米における母子心中の実態は、その正確な統計的資料が存在しないため詳細なことはわからないが、稲村博によってその一部のケースが報告されている。⁽⁴⁾ しかし、欧米の文献の流れを見る限り、「虐待による子殺し」が最も目立ち⁽⁵⁾・⁽⁶⁾、私たちが最近行なった「在日外国人から見た日本の子殺し・母子心中」⁽⁷⁾のアンケートにも、日本における母子心中の特異性を指摘する声が多かった。

また大原健士郎も、母子心中はわが国にずば抜けて発生頻度が高い⁽⁸⁾と述べているところから、母子心中は、日本の子殺しの典型的な特徴の一つと位置づけてよいだ

ろう。ではなぜ日本の母は子どもを追つれに自殺するのだろうか。

そもそも「親子心中」という形態の殺人は、大正時代までではなく、大正末期から昭和の初めまでの親子心中は、別名「貧困心中」と言われるように、経済不況を背景にしたものが多かったといわれている。

現代の母子心中も、やはり経済的不況が背景にあるのだろうか。前出の田村健二は、母子心中の特徴を十二項目にわたってまとめているが、その中で主要なものを引用してみると、1 母子心中は都市型であり（市部は郡部の三倍）、2 不安定な職業の家族に多く、3 母親は無職者に多く（有職者の六倍）、4 有配偶者が多く（無配偶者の四倍）、5 母親の年齢は二十五歳～三十四歳が多い、と述べている。また直接動機としては、疾病・障害は三三％、家庭不和は三一％を占め、その他の動機はいずれも一〇％を下まわっている。

それゆえ、田村はこのデータから「子どものことや嫁姑関係もさることながら、夫婦の人間関係と健康が母子心中発生の直接動機として最多であり、動機の半ばを占めることがわかる」と述べている。⁽⁹⁾

筆者は、以上の母子心中の資料を背景に、最近の日本の核家族家庭の中で共通に発生する、主婦の悩みについ

て考えてみたい。

専業主婦としてそれほど豊かでない家計をやりくりし、乳幼児二人くらの育児をすべて引き受け、夫の側はひたすら「仕事」にはげみ、しらずしらずのうちに家庭が「母子家庭」になっていることの問題である。五十一年度の国民生活白書においても、日本の男子の家事時間は○・五時間ときわめて短く、欧米諸国の半分から三分の一で（トップはフランス・西ドイツ・ソ連）あることが明らかにされており、日本においては夫の家庭への参加がきわめて希薄であることが明らかになっている。

このように閉ざされた家庭においては、妻の唯一の生きがいはず育てになり、すべてのことは「子育て」というメガネを通してしか見られなくなる。その結果、日本の多くの専業主婦は、経済的には夫に依存し、精神的には子どもに依存することになる。いかに子どもを自分が「育てて」いるつもりでいても、子育てが自己の生き方の中で位置づけられるのではなく、子どもを育てるということへ自己を従属させるならば、それは子どもへの精神的依存でなくて何であらう。それゆえ、ほんの少し子どもが育児書どおり（標準なみ）にならないからといって感情的に揺れ動き（精神的よりどころの喪失）、ささいな夫婦関係のもつれ（経済的よりどころの喪失）に絶

望し、子どもを道づれに自殺する。

そして、日本においては、このような母子心中が子殺しであるにもかかわらず「不憫」がられ「同情」され、新聞は加害者の母にも敬称をつけ、ほとんど非難することはない。

母子心中は、社会から経済的にも精神的にも自立を要求されていない母が、ひたすらそのように「素直」に生きた結果ゆきづまり、子どもを道づれに自殺するのだから非難できないのだろうか。母子心中は、母親の生き方の失敗や責任でなく、その間の事情は多くの人々に「理解」され、十人に一人の母親にも「私だってそのような状況におかれたら子殺しをするかもしれない」と思われるほど一般性をもっているため、非難の声がきかれないのだろうか。もし、ほんとうに子どもを殺すことへの批判や怒りが社会の中に存在するならば、当然のことながら、子どもを殺し、自己をも殺す日本の母親の生き方へと問題の追求がすすむはずである。

戦後三十年、母子心中が一向に減少しないことの理由は、「わが国の母親には、子どもの生命を軽視する心情が生活の基盤に流れている」というような主観的なものではなく、子どもを産み育てる母親の生き方そのものが軽視され、少しも反省されることなくきたことの結果

にすぎない。

そして、社会から孤立して生きる家庭の主婦に、今後社会的な諸矛盾（夫の過重労働と低賃金・受験戦争・障害児・住宅の狭さ、等々）の最終的なつじつまを合わせる役目を押しつけるならば、外へ向かつて自己を表現することを学ばなかった日本の主婦のエネルギーは、ひたすら内向的で屈折した動きとなって表われつつけるだろう。

◎「育児は母」の分業思想にとらわれて

——育児ノイローゼ——

子殺しの発生のたびに新聞はセンセーショナルに報道し、その理由をいくつか書きつらねる。しかし、すでに述べたように「嬰兒殺」以外の「子殺し」に関する全国的な統計資料の正確なものはなく、多くの研究者がそのデータを新聞報道などにたよっているため、真の理由・原因等については、なかなか明確にならない。

そのような中であって、「子殺しは特殊な精神異常者の犯行」という言い方がされる場合も少なくない。たとえば近年、しばしば子殺しの理由について「育児ノイローゼによる」という表現が目立つ。この「育児ノイローゼ」

や「うつ病の症状を呈していた」などの表現も、それが精神科医のはっきりとした診断によるものなのか、そうではなく事件がひきおこされたのち、周囲の者が勝手にそのように表現したのか全く区別がつかない。

稲村博は、朝日新聞に掲載された昭和四十八年から同五十三年の三年間における全実子殺しの事件を、次のような「動機別分類」に分けている（第二表参照）⁽⁴⁾

稲村は、この分類について「自殺の場合と同様に、動機の解析は一般に困難なことが多い」と述べてつも、「精神異常」の項目に、新聞記事の中の「医師から精神分裂症と診断されていた」も「近頃ノイローゼ気味であった」「うつ病が疑われる」などの表現も、すべて含めたと述べている。

しかし、他方、母子心中の「動機分類」ではあるが、高橋重宏のように、「精神病」を「既往に診断されているもの」という厳密な尺度で分類すると第三表のようになる。⁽⁵⁾ 高橋は、「ノイローゼ六十九例のうち、育児に自信を失った。育児に疲れた、産後ノイローゼ状態となったが三十四例、ノイローゼとだけ記されているもの二十四例、子どもの奇形や疾病によりノイローゼ状態となったもの十二例、夫（母）の死後ノイローゼ状態となったもの三例である」と述べている。このように、母によ

る子殺しの動機分類については、学者によってもかなり異なった視点があることがわかる。

人間にとつての殺人は、どんな理由があれば、それが現実にはひきおこされてしまうならば、結果的には「異常」そのものとなる。それにもかかわらず、筆者が非常に恐れることは、「生活苦」や「夫婦不和」、それに「疾病」等が独自の分類項目として設定されているにもかかわらず、「育児労働」の中で個々の事情により発生する子殺しの理由が、すべて「精神異常」「育児ノイローゼ」として十把一からげにされてしまうことの問題である。「貧困」や「不和」は、場合によっては、人をも傷つける外的理由として「公認」されていながら、「育児疲労」は、その具体的状況が何ら科学的に追究されないまま、すべて「ノイローゼ」「精神異常」という項目に入れられ、母親の心理的要因へと主たる原因がおかれてしまう。とくに日本のように「育児は母親の天職」といった分業思想の強い国では、育児が現代の社会の中でどんなに困難で、大変な行為であるかが気づかれていない。

高学歴社会の中で社会的・知的能力を高め、今まで多くの人間関係を楽しみつつ生活していた女性が、出産と同時に閉鎖的な家庭の中で育時・家事のみにかかわる。狭い家の中で慢性的な睡眠不足に悩み、言葉の通じない

の 動 機

父 母				不 明 ほ か				計 [%]
昭和 48	49	50	小 計	昭和 48	49	50	小 計	
					1(1)	5	6(1)	59(4)[14.4]
1	3	5	9			1	1	48(2)[11.4]
	2	1	3					37(11)[11.0]
1			1	1	7	4	12	42(2)[10.1]
4	4	4(1)	12(1)		3		3	30(1)[7.1]
1	2	3	6		2	2	4	24(5)[6.6]
	2		2	1(1)	1		2(1)	15(13)[6.4]
					2(1)	3(4)	5(5)	7(5)[2.7]
2		1	3					9 [2.1]
							2	[0.5]
(1)	3(5)	2(1)	5(7)	1(4)	6(1)	8(3)	15(8)	39(24)[14.4]
1	3	1	5	7	10(1)	2(5)	19(6)	48(10)[13.3]
10(1)	19(5)	17(2)	46(8)	10(5)	32(4)	25(12)	67(21)	360(77)[100]

(稲村博『子殺し』1976より)

まるで「サル」のような乳児を相手に、たったひとり向き合う。子どもの笑顔はどんなにかわいくても、育児労働の中身は、その大部分が子どもの生命を維持するための神経をはりつめた単純労働の繰り返しである。夫は協力してくれず、悩みを打ち明けても「それは女の仕事」と逃げてしまう。「産じょく期うつ病」という病名があるが、多くの女性は、出産後三か月くらいをピークに、うつ症状となることが知られている。

さらに「育児は女の仕事」という分業思想の強い日本では、保育学や発達心理学の理論も、やたらに「スキップ」とか「母性的養育行動」のように、育児行為のある部分のみを強調するような情報ばかりが、外国から輸入され広められる。

戦時下から戦争直後の非常に劣悪な収容施設のもとのデータを、そのまま未整理な形で「母性万能論」のような発達理論にまとめて発表したボウルヴィツらの理論を、ベルクは次のように批判する。「もっと親の愛情を、という主張には、気をつけねばならない。わたしはとくに（それがどんな種類のものであれ）問題をもつ子どもの親、しかも良識のある親のことを考えている。行動上、明らかに正常でふつうの洞察をもっている良識ある親は子どもに十分な愛情を与えているものだ。（中略）

第2表 子 殺 し

動機	加害者 年次	母				父			
		昭和 48	49	50	小 計	昭和 48	49	50	小 計
精 神 異 常		10	15(1)	17(1)	42(2)		5	6(1)	11(1)
疾 病 苦		7	11(1)	6	24(1)	3	4(1)	7	14(1)
家 庭 不 和		9(2)	5(1)	6	20(3)	2(4)	6(1)	6(3)	14(8)
激 怒		5	2	1	8	4	9(2)	8	21(2)
経 済 問 題			4	5	9		3	3	6
痴 情		2	3(4)	2(1)	7(5)	5	2		7
子 ども 忌 避		5(3)	(6)	3(1)	8(10)	1(2)	1	1	3(2)
利 得 追 求						2			2
犯罪への反応		1	1	1	3		3		3
死 別			1	1	2				
そ の 他		3(1)	6	6	15(1)	1(4)	2(2)	1(2)	4(8)
不 明		1	6(3)	10(1)	17(4)		2	5	7
計		43(6)	54(16)	58(4)	155(26)	18(10)	37(6)	37(6)	92(22)

() 内は非致死件数

第3表 母子心中の動機

(昭和37年～昭和50年 8月31日, 東京都23区内)

単位%

動 機	総 数	昭和37～40年	41～45	46～50
総 数	100.0(201)	100.0(68)	100.0(69)	100.0(64)
ノ イ ロ ー ゼ	34.2(69)	23.5	42.1	37.5
精 神 病	8.4(17)	10.3	5.8	9.4
夫 の 不 貞 (三角関係)	8.0(16)	8.8	11.6	3.1
家 庭 不 和 (夫婦関係)	8.0(16)	7.4	2.9	14.1
経 済 問 題	6.0(12)	10.3	4.3	3.1
病 気	4.0(8)	1.5	5.8	4.7
そ の 他	5.5(11)	5.9	5.8	4.7
不 明	25.9(52)	32.3	21.7	23.4

(高橋重宏『厚生指標』1975より)

だ後回しにするだけである」。⁴⁴筆者は、このような助言こそが、今の日本の母親にもっともふさわしいと思う。同じベルクの「神経症を生む要素は、母親の愛情過多、とくにこの愛情がわざとらしいところに存在する」という発言も、まさに日本の母子関係のゆがみをズバリ指摘しているような気がしてならない。

人間の発達には、相互発達であるべきだ。そこにかかわるすべての人間が平等に発達する権利を与えられないならば、その人間関係はどこかで障害を生じるであろう。日本では、なぜ育てられる側の子どもの権利のみが主張されて、育てる母の立場は無視されるのだろうか。子どもは子育てにかかわるべきである。

アメリカの心理学者ダドソンは、「父親が多く犯した誤ちを避けよ。子どもが大きくなるのを待つのではなく、生まれた瞬間からしつけがはじまるのだ。腕に抱いたり、風呂に入れたりといった体のふれあいを持たなくては、子どもに深い愛情を持つことはできない。子どもとのふれあいとは、ミルクを与えたり、おむつを換えたり、風呂に入れたりといった毎日の世話を指している」⁴⁵と、父親にもっと育児にかかわるよう警告している。

また、おそらくは年間七百人にのぼる虐待児殺しがあ

だから、もっと愛情を、というアドバイスはまちがっている。子どもに問題があるばあい、ときにはそのアドバイスが役立つと思われることもあるかも知れない。しかし、長い目で見たとき、それはよりおおきな問題を、た

るだろうといわれるイギリスで、「幼児虐待」の研究を精力的につづけているレンボイツも次のように述べている。⁶⁰「私自身も思い出すけれど、わが子を家につれて帰ってはじめての夜、わが子が喉をつまらせて窒息しはしまいかと恐れて目を閉じることでもできなかった。（中略）子どもについて私ははじめなほど無知であって、夫の思いやりとひんばんに参考にしたスボック博士の育児書がなかったなら、果たして、私と赤ん坊がどのようにしてあの時期を切りぬけたか、見当もつかないのだ。新たに母となった女性はともかく大切に、可愛がってあげるべきだ」と。

今、日本の母による子殺しは、「育児労働とは何か」「育児労働は母のみの役割なのか」について、もっと科学的に考えることを要求している。そのためには、まず「子どものいる家での家事は、なまじ忙しいと当人が思っている男性の仕事よりよっぽど大変だ。（中略）買い物に行ったり子守りをしたり、赤ん坊に半日もつきあっていると、くたびれ果ててしまう⁶¹」という、夫の側の体験的実感を広げることが何よりも大切になるだろう。

◎ 女が自らの生理と心理を支配できない弱さの中
で
——望まれない妊娠と出産——

すでに第一表において見たように、生後十二か月未満の子殺しを「嬰兒殺」といい、その数は一向に減少していかないことがわかった。とくに戦後二十一年間の嬰兒殺百十四件を新聞記事から抽出した栗栖は、嬰兒殺について次のように特徴づけている。⁶²まず嬰兒殺では、結婚状況の不明のものが多く、一〇・五％は未婚の母が占めている。また嬰兒殺では六か月未満のものが八三・六％を占め、その中で生後すぐに殺害されているものが約五〇％を占めている。そして、動機多くは不明であるが、母の病氣、生活苦などがあげられている。

次に第四表・第五表は、昭和四十七年中におきた嬰兒殺の加害者百六十三名の年齢別・学歴別統計である。

ここでは、既述の概念とは異なり、とくに「嬰兒殺群」が生後二十四時間以内、「乳児殺群」は一日を超え一年未満の乳児という特殊な概念分けになっているので注意されたい。

これらの二つの資料からわかることは、一歳未満の子殺しのうちで、出産後二十四時間以内に子どもを殺してしまふケースが非常に多いことである。これはまさに不要の子、欲しくもないのに生まれてしまった子どもの被害であり、女が自己の生理と心理を十分に支配できていないことをしめすものである。

第4表 加害者の年齢分布

(昭和47年)

	※嬰兒殺群		※乳児殺群		計	
	人 員	構成比	人 員	構成比	人 員	構成比
20 歳 未 満	2	2.1	2	3.0	4	2.5
20 ～ 23 "	31	32.3	8	11.9	39	23.9
23 ～ 25 "	9	9.4	12	17.9	21	12.9
25 ～ 30 "	24	25.0	31	46.3	55	33.7
30 ～ 35 "	12	12.5	11	16.4	23	14.1
35 ～ 40 "	8	8.3	2	3.0	19	6.1
40 ～ 45 "	4	4.2	—	—	4	2.5
45 歳 以 上	4	4.2	1	1.5	5	3.1
不 明	2	2.1	—	—	2	1.2
計	96	100.0	67	100.0	163	100.0

(土屋真一『法務総合研究所紀要』1973より)

筆者注 ※本分類の「嬰兒殺群」は生後24時間以内のもの。

※「乳児殺群」は1日以上1歳未満のもの。

第5表 加害者の最終学歴

(昭和47年)

	※嬰兒殺群		※乳児殺群		計	
	人 員	構成比	人 員	構成比	人 員	構成比
中 学 未 修	15	15.7	5	7.5	20	12.2
中 学 卒 業	61	63.5	32	47.8	93	57.1
高在・高卒以上	17	17.7	22	32.8	39	23.9
不 明	3	3.1	8	11.9	11	6.7
計	96	100.0	67	100.0	163	100.0

(土屋真一『法務総合研究所紀要』1973より)

これら出産直後の子殺しは、いろいろな理由で産児制限に失敗し、中絶したくてもお金がなくてズルズルと出産してしまったケース。内縁の夫や愛人等に捨てられ、仕方なく殺してしまつたケース。男性の歎心をつなぎとめるつもりが裏目に出たケース。未婚の母が世間体を恥じて殺すケース等々。どれひとつ取り上げても祝福されない子どもの結末に暗たんとするばかりである。

第五表にもあるように、生後二十四時間以内の子殺しは、学歴の低い女性に多く、このことは性的な知識や明確な自己意識が形成される機会のないまま、このような子殺しに至つたケースが非常に多いと推察される。このような事件がおこるたびに、若い娘の性的非行や「中絶天国日本」の女性の生命軽視の風潮がとりざたされる。

しかし、「妊娠」という事實は、男女の性的結合ぬきに成立するわけがなく、一方的に女性の側にのみ責任が負わされるというこはうなづけけない。ちなみにドイツにおいては「自己の妊娠させた婦人が妊娠または分娩のために必要とする援助を不誠実に拒み、そのために母または子どもを危険にさらした者は、五年以下の自由刑に処する」という刑法が、すでに一九四三年に発令されていることを確認しておきたい。⁽⁴⁾

女性週刊誌やテレビを通して「性情報」が氾濫しながら、

ら、女性が自己の人生を生きるうえで本当に必要な性知識は、どこでも教えられず、ピル等の避妊のための具体的方法なども女性にのみ負担が多く、結果的には産む側の性である女にばかりそのしわよせがまわってくる。

国や社会は、女がもっと自己の生理と心理を支配し、その主人公となりうるような教育を徹底すべきであるし、女自身ももっと自らの性について知る努力をすべきである。子どもは「子宝」で、天からの授かりものなどというあいまいな「生命観」の強い日本においては、性を科学的に究明しようとする態度は、従来ともすれば大きな心理的抵抗をひきおこしてきた。しかし、その代償が「中絶の頻発」や「子殺し」であるならば、何とも逆説的でつじつまが合わないではないか。

また今回は、紙数の関係でふれられないが、未婚の母の問題がある。欧米諸国においては、日本と比較にならないくらい未婚の母の出生率が高い。しかし、スウェーデンでは、非嫡出子に対する社会的差別もなく、未婚の母と子に対する社会福祉行政も行き届いているため、嬰兒殺のケースは一件もないことが報告されている。⁽⁵⁾ このスウェーデンの例は、日本における未婚の母の子殺し問題に大きな示唆を与えるが、だからと言って、父のない子どもが一般的な意味で、幸福であるはずがなからう。

子どもが育つために必要なことは、まず父(男)と母(女)の愛情と協力であり、それをつつむ社会の連帯で

(祇園寺学園短大助教授)

参考文献

- (1) 栗栖瑛子・子どもの養育に関する社会病理的考察・ジュリスト五七七号・一九七四
- (2) 佐藤カッコ・母親による子殺しとその背景・犯罪社会学研究二号・一九七七
- (3) 田村健二・親子心中にみるもの・書斎の窓九月号・有斐閣・一九七七
- (4) 稲村博・「子殺し」・誠信書房・一九七八
- (5) レンボイツ(沢村・久保訳)・「幼児虐待」・星和書店・一九七七
- (6) Helfer, R. and Kempe, H. "The battered child." The University of Chicago Press, 1968
- (7) 中村悦子・佐々木宏子・佐々木保行・在日外国人から見た日本の子殺し・母子心中・日本教育心理学会第二十回総会論文集・一九七八
- (8) 大原健士郎・母子心中・総合乳幼児研究 Vol.2 No.1 同文書院・一九七八
- (9) 田村健二・前掲書
- (10) 佐々木保行・中村悦子・佐藤カッコ・「子殺し」の心理学的研究(1) 宇都宮大学幼児教育研究協議会研究報告第一集・一九七四
- (11) 大原健士郎・前掲書
- (12) 稲村博・前掲書
- (13) 高橋重宏・育児病理と社会福祉的支援に関する考察・第二十七回全国乳幼児院協議会論文集・一九七七
- (14) ボウルヴィ(黒田訳)・「乳幼児の精神衛生」・岸崎学術出版・一九六七
- (15) ベルク(足立・田中訳)・「疑わしき母性愛」・川島書店・一九七七
- (16) ダトソン「ダトソン博士の父親学入門」・タイムズ・一九七五
- (17) レンボイツ・前掲書
- (18) 和田誠・男と女・朝日新聞八月二十九日・一九七八
- (19) 栗栖瑛子・前掲書
- (20) 中谷瑾子・幼児殺傷・遺棄・ジュリスト五四〇号・一九七三
- (21) 中谷瑾子・前掲書

お領内の寺々から集められた釣鐘が、城の片すみに、一時の間、野積みにされつつたそうなが、夜になると、延命寺の鐘が、ひとりで、

かアன்றいたやのーン、オンオンオンで、鳴りだすそうな。最初の鐘は、海に沈んでも、これは、そのあと、新しくこさえた鐘じゃのに、おんなしように、かアன்றいたやのーン、オンオンオンで、夜になると、ひとりで鳴るんじやとい。

不思議な釣鐘

美森成生 ● 絵

藤川秀之



日本図書館協会選定図書

BOC出版部
¥1800円

反母性論——女権拡張運動の申し子へ母性——

国 沢 静 子

——月ごとに血を流し、性交し、妊娠、産み、乳房を腫らす……、生を享けてここにあるヒトとしての営為に、女の異論があるわけではない。女の異論は、二十世紀末の文明のただ中、退廃の色濃い文化生活に身をおき、歴史の重みをずっしり詰めこまれた言語で自分の存在を確かめざるを得ない女の状況が、太古より繰り返しているヒトとしてのカラダのありようと齟齬し、己のへ母性という生身の現場で悲鳴のような軋みをあげることにほじまる。

(一) へ母性V || へ産む性V + へ育てる性V

母性1——官製の女規定語

一言でいうならへ母性Vの語は両刃の剣で、片面刃こぼしして使わないと、女解放に向かうはずが女を傷つけ血を出させしばかりつける。どういう側面か。結論的にいえば官製語、したがって国家的大局的見地の用語として使われる場合には、女解放の全実現に向かうためのけん引力ではなく歯止めとして、女をへ母Vと固定する規定語である。

個々の女、この時代を共にする女、だれにでもきいてもらっても結構。「あなたは、どんなふうに生

きたいか……」。新旧左右階級的思想性さえ問わない。いわく「良妻賢母。料理がうまい女。やさしいおかあさん。時には娼婦のように。かわゆい女。ナウな女。自立する女。自立した女。働きつづける女。女大臣になりたい。闘う女……ETC」決して、個人の生き方の描写として「母性を貫徹したい」「母性を拒否したい」なんてことはない。もうおわかりと思うが、 \wedge 母性 \vee という語は個々の女の生き方、具体的な生活像人生像を満たすことばとして、女自身が主体的にえらぶことは決してない。ところが、おかしなことに女総体ふうな話になると俄然 \wedge 母性 \vee の語が横行しはじめる。なぜか、それは \wedge 母性 \vee の語が元来官僚サイドの統計用語、女に対する蓋然的な規定語だからである。女は産みかつ育てる性であり、その性に所属するものは \wedge 母性 \vee 本能があるという、女の個々の意志選択の猶予をまったく与えぬ社会規範的なきめつけのことばである。そしてこの語の真のねらいは産むことにスポットをあて母の語をつかいながら、実際には産まなくても（カラダの偶然や女の意志で）育てる性でもあるのだから他者に対しどんな場でも \wedge 母 \vee となつてやさしいサービスをすることを要求してくる、いわゆる女子の特性観を必ず側面に付随させ、女を第二の性たらしめる働きをする。

そこで \wedge 母性 \vee 一語、女の側から使えば社会における女総体の扱いが限界される。まず \wedge 母性 \vee をもつ第二の性である女の \wedge 特性論 \vee を女が承認せざるを得ない。そういう意味での規定語であると同時に、女たちを同じ \wedge 産む性 \vee でありながら \wedge 母性 \vee の語をくさびにうちこみ母・娘・子持ち・石女と差別分断する。その分断が実は性差別社会を支える機能を果たしているにもかかわらず、個々の女たちには、女自身の心がけによる階層の分化としかみえず、たがいに怨嗟、軽侮しあい、女たちの間に共にすべき痛みもやさしさも姿を消し連帯のきずなをむすびあう契機を逸してしまふ。

さきに、女の個々の生きかたの描写の中に \wedge 母性 \vee の語は出てこないといったが、女が自己の意志で階層をえらびなおす、——生きなおそうとすることに世間から投げかけられるきわめつきの惹句としては女個人にも使われる。仕事百パーセントの女が子産みを機に育児に全力投球すると宣言して専業主婦化していくとき、意志薄弱でどうしようもない甘ったれ屋の男との愛一途、生活費稼ぎもこみでパンと

引きうけようとするとき、△母性▽という本能がめばえた、と喝采を送ってくる。身近のさらなる弱者（子）を殺すことでしか弱者として抑圧された自己の回復ができなかった追いつめられた女、自由を求めてあえて幼児を婚家先においてきた女、生まれてまもない子を託して働きに出る女には△母性▽の本能がないといって切りつけてくる……。

念のためにいいそえるとこの本能の語に女のやさしい心はいつもおびやかされているが、よく見てみれば△本能▽なら無いはずなどありえない。食と性に関しては私はカラダの自然なる要求・リズムとして本能の語をみとめるのにやぶさかではないが、△母性本能▽といいかにもあるように言われるコトバの意味は、本能の語を使う者の口もとを見れば、それが人類・国家・社会・家族という組織に対する女の母性義務、義務を自ら天職と思ひなす忍従の要求でしかないことは明白である。

母性2——保護・給付による女の分断

女の自立にむかうための要件として△母性▽の社会的な容認の上に各種の給付を求める立場、△母性保護要求▽△母性権利主張▽は、△母性▽の内実を女総体で確認する作業がすんでいないため、女たちを差別分断している。

社会を変革する主体としてのプロレタリア階級への所属、働きつづけることで社会参加し成長があるとする自己充実願望、何より働いてお金とらなくては今日明日の生活費に事欠く貧しさ。女たちひとりひとりの、いま生きる場からの主張に、私は決して軽重をつけたくない。軽重をつけたくない、という思いが深いゆえにこそ他から軽重をつけられることには反撃せざるを得ない。

△母性保護▽……一見、女総体にとって何の異論もなさそうなオイシイことば。しかしこの語によって女はいま二分・三分されてしまっている。労基法の歴史的役割にふれる余裕はないが、現在管理職ほしさにエリート女からは深夜勤・残業枠をとれといわれ、そんなことをしたら、工場の機械工は三交

替で若い女の子がスクラップになると女工哀史以来のつらい歴史をひきずっている工場労働者の側から反撥があつて、かううじて労基法改悪をとどめている。むろん、労基法の保護からすべてこぼれ落ちたと規定するのがふさわしいパート労働者は時給の日給の月給、生理日で休めば自己負担つまり収入減、生活にひびくからなかなか休めない。職場で生理日といえは「だからミスった、だから現金があわない」ぐらいの反応ゆえにひたかくす。産休・育休はもちろん自己負担、つまり無期限で無給の就業先不明の労働権放棄以外に休みはとれない。しかも戦後三十年こんな一見誰にも異論のない大義名分の要求で大労組の力をもってして何がとれているか。産前産後六週ポッキリ、(育休ではなく産休といいかえると六週の先は全くとれないとさえいわれる)この状況への反省なくして「一定程度の前進」なるいいわけで、乳幼児をかかえ退職におこまれる女教師がイマ何千人救われる式の小乗的理由で、母性重視のにせ専門職である教員・看護婦・保母などの分野で「育休」がつまみぐいされてしまった。

かつて小中学校の女教師は地域の女たちの文化的中心で、母親連絡会も実態は女教師で支えられていたし、母親大会も地方では女教師たちの運営能力にずいぶん助けられてきた。女の子のリアルな将来像「学校の先生」への思慕と尊敬は女親のものでもある。にもかかわらず、ふつうの母親たちは女教師が好きでないと年中世論のお説教をくらっている。なぜか。「おんなじ母親」ではないからなのだ。片やハ母性Vを保護され労働権を、意志さえあれば失わず復職、年金と終身展望があり、片や専業主婦化せざるを得ない(労働権を妊娠・出産・育児の中で己の意志の有無にかかわらず社会構造上剥奪された)階層であれば、そこはかとなない敵意は当然である。ハ母性Vが大切だという社会的認識があつたとれた育休ではなく、組織で大票田であり間接民主主義の国だからとれたにすぎない。労基法では困る(一応ぜんぶの女にタテマエ的にでも広げねばならないのは、法に依拠し支えられる官僚のいちばん困るところ、ここ日本も法治国!!)から特殊立法でいきましよう。決して、ライフサイクル論を階層的に適用され、子育て後期や終了後に安く再就業させられるパート層のエサにハ育児Vの字句が入ったのではない。

ILOへの言いわけ、ディスプレイ用に一部母性保護を認めることは、国外に円だかドルだかおきつ

ばなしにしているお金をためる機構にとつても、どうせ税金・国家予算ですることだから自分のオナカはちつとも痛まないゆえ、あえて反対せず、しかして有給化することは完全反対……。『何とか三原則』などはじめから実現するつもりがなかったのでは。本当に女解放には \wedge 母性保護 \vee が必要であり、かつ、女教師が女の状況をゆるがす中核であるならば、せめて労基法へのよりこみに努力したはずである。

友人の女教師は産休だけでそれを夏休みにつなぎ(なんと涙ぐましい計画妊娠、エロス喪失裏の \wedge 産む性 \vee の私的实现化か……)職場を守った。育児時間を朝夕とする。「でもね、その時間ってたいいてい職員会議とか打ち合わせ、教材研究とか……それみんな切っちゃったらほんとに教師としてなりたないのよ」

運よく会議の内容を教えてくれる友人が同僚にいても、それもまた校長や主任という男たちよりは同じ女。「女が、子持ち理由で職場を早退欠勤遅刻……いろいろ穴あけると、それを埋めるのはまわりの女、とくに独身ゆえに管理職になったりした女、めいわくするのは私たちだから、子どものいる人は職場にこないで!!」ある女問題の会合で聞いた独身婦人連盟の女の声である。女のあけた穴は女が埋めよ!! 女は己のカラダに \wedge 産む性 \vee を具現化しないでも、男社会では産む性としてのおとし前をいろいろなかたちで取らされる。時には賃金、地位といった待遇上で、時には定年三十歳ということで、時には出産、子持ち……時には女はいりません、と労働権さえ実現しない。 \wedge 産む性 \vee による差別をこそ女の総力で撃たねばならぬ。それなのに子持ちは職場に来るなと女の口からいわれれば、子持ちの女はムツとする。互いの傷つけ合いをなんとか辻つまあわせようとその場を糊塗しようとするのが \wedge 産む性 \vee 育てる性 \vee \wedge 母性 \vee の語を自ら使つての社会的母性の保護要求である。

「労組があつても、女がおどおどするがぎり母性保護関係の給付はとりはぐれる。生休の有休は無休に、うっかりするとビルあげるから週末にしてくれぐらいのことさえいわれる」「ガンバレ、ガンバレ」そういわれ、多くの事例報告にあるよう個々の女のガンバリで \wedge 母性保護給付 \vee は、不承不承のうちに獲得されてきた。そしてなお、母性保護関係の要求は労組婦人部の古くて新しいテーマでありつづけているほど取りにくい。

官公労を中心に、なぜ、こんなに個別的で出費の多い一部要求（使用者側からみて）をのんできたか。この分の支出・繁雑を超える十分なメリット、公序良俗としての女のあり方の規定が社会秩序の安定のために必要なのである。△母性保護▽の一部での実現の代価は女には△母性▽なるものがある、△母性▽は△母性本能▽という生来のもので、いわば△女子の特性▽であり、女本人の意志にかかわらず△家庭責任▽をとらされることにある。女階層の中でみれば日の当たる一部エリート女の男の自立とひきかえに底辺の女たちの家庭責任Ⅱ主婦の状況は一層重くなる仕組みである。

母性3——△産む性▽をこそ拠点に

すべて、人心になじんで公序良俗であること、女からいえば性差別の内実そのもの、女規定語としての△母性▽は女の手で打倒せねば他者の手は皆無である。社会に向かつては△産む性▽の要求こそ出すべきである。解放への熱い思い、女たちの重い状況は、婦人運動で参政権を求め、女性解放運動の中で社会的待遇の差別を求めるなかで、そしていま女解放を求めるなかで、ずっと続いている。にもかかわらず女性解放運動のなかでなぜ△母性▽保護をとるというターゲットが女たちに差別・階層分化をおこしてしまったか。

まず、女性解放運動が、婦人運動と同じく女権拡張の域を出ず、あれをとれ、これをとれ、と男にあつて女にない社会的な地位を求めてきたことによる。図式的にいえば解放の旗手はすでに自己の解放のすんだ人、市川房枝さんや女性問題のプロたちであり、その下に終身保証のある官公労に所属する行政官、大学・マスコミなどに地位をもつエリート女たち、その下に女の特性を生かすという△聖母神話▽に補佐されたニセ専門職としての小学校教師・保母・看護婦、その下にライフサイクル説の出所となる若手労働者とパート主婦層、そして職のない潜在失業者としての専業主婦層と、専業主婦にさえなれずに己の△産む性▽を一身に負いながら働きつづける自営業（農家や豆腐屋や商家の女たち）というピラ

ミッド型に分断されて、頂点の女を鑑とし具体的には一階層ずつ上がるよう、個人の努力向学心克己心等々を「啓蒙」されつづけてきた。

このピラミッド型の階層を一つずつ上昇する志向こそが女性解放運動であり、上昇のためのネックになる「母性」は権利としての、社会的な保護要求というかたちで登場した。この保護要求はそれゆえに実際に産んだ女に公費負担給付という切符を特配することでゲタをはかせ上昇を目ざし下降をとどめようという思想をもつ。したがって女中間層、つまり有職の「勤労婦人福祉」そのものである。特配チケットはだから専業主婦層、専業主婦にもなれない層には配られない。

六人産んで一回もその特配チケットにありつかない怨みでこんなことを言っているわけではない。女性解放運動が、ただの女の私にまで及ばない理由が、無期限出産休暇・無就職先・費用はすべて私費である産褥のベッドの上で十分にあったのだ。

母性保護で何とか性差別の根源的解決をごまかそうというのは、育てる性をこみで産む性の女におしつけてくる男社会、国家ばかりではない。これを支持する女性解放運動の旗手たちが産む性を自己貫徹しないゆえのよわさから「母性」を聖化し、さらに「母性」の語感に幻惑されるからである。ただの女たちはまだ「解放」の語が及ぶには「母性」の語をとりはらい「産む性」としての女の自己規定のなかで「女解放」の視座を得なければならない。

母性4——「育てる性」規定を超える

「母性」は両刃の剣といったが、「産む性」こそは女の解放の出発点であるということではプラスの切れ味をもつ。もう一つの内実「育てる性」については、女と子の関係の正確なみづめなおしのなかで、「子の解放」を含む新たな展望を女側から出さぬかぎりやはり女の分断にしか役立たない。

女と子とともに家族組織の中で父権によって抑圧された存在ではあるが、子はさらに女の「母性」に

よって抑圧されている。産む産まないは女の自由という言い方に象徴されるように、こう言って女は国家や家族の抑圧を断ってきたが、子に対しては生殺与奪の強者化してしまっているのが、女性解放運動の限界である。子を家族の恣意下におき、その生育に関する責任をひきうけることをタテに、国家からは産む産まないは家族の（男と女の）自由という承認をとっているのが優性保護法である。この家族の恣意下にある子という存在は、現在の文化では育てるのに手間ひまかかるゆえに先に生きる男と女の自由の足かせと見られる。そして、すべての行為が金銭行為である現在、子育てもまたカネがかかるゆえをもって、一部エリート女からは現物（保育所・育休・育児時間……）給付の要求が人母性Vの社会的人類の使命を理由に出されてくる。蚕食的に一部の権利は認められているが、児童福祉法でさえ、父母の許で育てられることの至福をうたう中で、理念的には家族の責任にされているのが現状である。

本稿では残念ながら詳述できないが、人子Vを主体に考えれば、その育ちゆく場を恣意的な男女の性の場限定することは、育ちゆく力・可塑性に決して有効ではない。子の母にあたる女の就労未就労、表面的な労働へのかかわりでその子が識別され、さらに自ら育つ場の設定が変わる（たとえば保育所に入るとか……）ことになる。育児費の国家と親の分担分がちがうということは、子に対する差別でもある。いったい、国家・社会の側で子育て費用を出す気があるのか、子は家族の私物ではないという認識の責任はどこまでとるのか、この点がはっきりしていないのがいちばんいけない。女が、この問題をこういう形で出さないで、「ガキのぬくもりの心地よさ」こみで背中にしてしまっているから、問題の所在さえ顕在化しない。

うさんくさい人母性保護Vではなく、女の子育てによる消耗の補綴としての、月経（広義の流産である）・妊娠・出産・授乳などに対する母体への給付、出生後の子の二十四時間すべての保育に対する給付の要求を、人母性Vとして女は人類にむけて出すべきなのだ。そうすれば生きがいほしさに人聖母Vへむけて精進し人母Vになってしまふことはない。

こういう基本を放置して取れるところだけが取るといふ育児給付は女の分断のくさびになる。第一子

第二子に児童手当がなぜないのか。こういえば、一・二子には家族手当として相当分が出ているという反論がくる。しかし給料に家族手当として付加されるのは組織労働者だけで日給月給力仕事での賃金とりにそれはない。産業の二重構造のあおりをもちに受けて育児費などどこからも給付されないボーダーライン層がある。総評など大所の理論生計費の算出にも、家族や子に対するパースペクティブがないから、現状の親子四人2DKマイホームにひきずられる。まさに無原則状態の中で、働く女の権利を守れ、働く女の足をひっぱるなど、手あたり次第取りやすい所からバラバラに欲しいものを取っているだけである。本来なら取ることでは、他の取れない所も展望もてる、要求がダイナミックになるはずだがそういう視点のない所では、強い所が沢山とるだけに終わる（長時間保育での論争はまさにこの典型である）。そんなことをいっても、現に八産む性V周辺が重すぎて、労働権が貫徹できないじゃないか、女の解放の一つの柱八経済的自立Vという古典的な命題からはずれたことをいうな、といわれるのを承知で、あえて八母性保護Vがまるで平和や幸福や真実などと同じような八聖Vなるイメージで提出されることに異をとねえざるをえない。

現状ではこの要求が女権拡張である女性解放運動（パワー派）の中で出されているかぎり女の階層を固定化し、下層ほど主婦の状況が重く、その結果社会的労働と私的労働のかきねをとりはらいたいとする女解放の動きは萌芽さえたきつぷされるからである。したがってあらためて、社会的労働権、経済的自立の内実を視なおさなければならぬ。

(二) 経済的自立論の陥穽

いま、働き続けられている女の自立の限界

八自立Vというコトバはリブの語と同様、女の自我意識を過剰なまでにくすぐる。自立願望、自立幻

想……思いはあふれる。が、一步自立の内側をのぞくと実に混沌として、女解放の方向性どころの話ではない。△自立▽一語にこめられた願い、どのような女がどのような組織の中で一人前の人格として他者とわたりあえることを目ざしているのか、階層分化されている女の各々のおかれている状況ごとにそれは全くちがう。すでに労働権を実現している女は職場の花ではなく職能を全うできる一人前でありたいと国や社会での性差別闘争の戦列に加わることをいい、労働権を阻まれている女は何よりも労働権の獲得を社会参加とよび自立という。また自ら労働権の入手を何らかの事情で断念している女は、いわゆる市民運動や子どものための活動（PTAとか子ども会の世話、文庫……）あるいは趣味の集りなどで社会的なかわりをもち自己を充実することであるという。あるいは家族の世話に没頭することで（病人がいる、子が幼いなどの理由で）自己のエネルギーを少人数の者に濃密に投入することで効率のよいコミュニケーションをもち△愛▽の名のもとに謝意を一身にあつめ自ら△聖母▽化することをいう。

いずれの場合も△自立▽の語のうらには対人関係において差別をうけない人格を想定しているもので、欲ばつていえばこの世のすべての性差別をなべて消滅することこそ目ざすべきだ。けれども、最も声高に△経済的自立▽こそといわれるのはなぜだろうか。

それは現在のわれわれの住む社会の構造の反映でしかない。労働の質が直耕直織の時代からずっとかはなれ、高度に分業化した文明を作動させるパーツとして労働することを要求されているゆえに起きている。TVとマイカーとマイホームとクーラーと……さまざまなインテリアにかこまれ、クーラーの中で人造秋をつくり実らせたミカンをとたべ、片や青田刈りを強制しながら生産した米をとたべ、一人二人の子にピアノやギアの沢山ある自転車を買いたえ、シーズンごとに親子の服を新調するような、一年中一日中電力なしにはすまされないオーバーヒート気味のこの文化生活を支える、△生産現場▽での労働があるためである。この文化を支えるために男が働き女は家の中でこれを磨き上げセッティングし消費するという効率の良い分業が一般化しているゆえである。女の目から見れば性差別構造そのものが文化全体を支えている。この文化をそのままにして女が労働権を得るのは、文化内で容認される部分の

みである。パワー派の解放論がこの構造にはふれず（したがって自己の状況規定をあいまいにしたまま）、平面的な正義論一途に母性保護さえ十全なら女は働ける、働ければ解放される、というのは部分を全体に及ぼす理論上の甘さがある。

労働権の獲得は女たちすべての課題であることは私にも異論はない。しかし今、経済的自立論は母性保護要求と表裏をなしてパワー派によって政治的に使われている。すなわち階層的に子を生むことで生産現場から追い出されている専業主婦たちに対する恫喝として使われている。専業主婦側の内在するエネルギークからの要求ではなく専業主婦は奴隷の身分だなどというアジェーションで、あるいは夫が死んだら生活保護か一家心中だ……と欠損家族の特殊な問題を一般化してくるという手法で。

経済的自立という言い方がそのことをうらづけている。賃金のとれる労働に女がつくことは女がプロレタリアとしてスト権をもつためには重要だが、女は労働につかずとも潜在労働としてプールされている以上、専業だろうが兼業だろうがおかまいなくプロレタリアであることにちがいはない。むしろ労働権の回復とか奪還というのが、現在職のない女の気持ちにびつたりくる。

ではなぜ今経済的自立をいうか。それは金をとれる女は、男との関係で自立的だという変な思いこみがエリート女の中にあるためである。女が社会的労働につけば金が入る。それで男一人稼いでいるときより家計が豊かになる。豊かになればおかずがまずくてツンケンすることも少くなるし、愛の表現行為の疎外態——なんでも表現しようと思えば金を使うところの消費行動が実行でき、男や子がニンマリする。疲ればテナヤ物でもクリーニングでもお金でいくばくかの家事の代替もできる。いずれも社会的労働の結果のいわば副産物としてもたらされる家族間緊張の緩和にはかならない。収入が多いほど地位も相関し、その結果がスライドして家族の中にも影響してくるだけの話で、有職のしかも地位の高いエリート女で良妻賢母の人は多くハムVたることに誇りをもっている人も多い。にもかかわらず、主婦というエリート女たちはまるで異人種のように思っているし「私は主婦でないから主婦のことは良くわからない」という人も多く、ここに経済的自立論に毒された女の意識分断の典型をみる。家族のために

生きる専業主婦である女に象徴される「主婦的状况」は本来的には女総体の状况である。

性の抑圧の表象——「主婦的状况」

女は、すべて「単なる「産む性」である」というたったそれだけのことで、差別されている。この性による抑圧は国家・社会・家族におよび、特に家族が「性」をその組織の組成の契機とするゆえに具体的性差別の現場となる。家族の中の具体的な女の働きである主婦機能をこそがその具体性と正当性ゆえに「女特有の働き」と象徴化される。具体性・正当性とは女と子の関係につきる。女はみごもり産み授乳しさらに授乳しやすいよう働きやすいように自分の背にくくりつけ身辺にいつめではなくダンボールの箱に入れて寝かしておくという育てる性まで引きうけてきた。さらに幼児のあのいたいけな生命は個別的な心底まごころこめての新陳代謝の介助なくしては生きられないという切実さゆえの「正当性」を自他ともに認めてきた歴史的経過がある。

ヒトの生命にかかわる大切な仕事であるこのいわゆる家事労働自体に私が否定的なのではない。大切だと一生懸命やっているうちに、「子」が家族の中に「私」されることと平行してこの労働が私的労働とされたこと。さらにこの労働を拡大解釈しすでに身辺自立のすんだはずの成人にまでこのサービスを儀式的に（小笠原流から無数のインテリアのセッティングを含めて）する「主婦の仕事」が文化的退廃の中で構造されていることまでが正当化されていること。そしていったん正当化された「主婦性」は女のいるあらゆる場での仕事にフィードバックされること（職場での特性を生かせとか花であれとかやさしくお茶くめとかあるいはサービス業として使われたり、専門職でも「母」の思想を押しつけられた看護婦・保母・お手伝い・医師なら小児科、教師なら小学校など……）。以上のような女へのあらゆる場での特性の發揮の社会的なおしつけ、換言すれば、「産む性」にすぎないものが「育てる性」をつけ加えられあわせて「母性本能」説によりかかって女の特性として具体的所作としては「主婦性」を社会通

念として強要されることを「主婦的地位」Vという。

したがって「主婦的地位」Vは女の階層にかかわりなく加えられている「性差別」現象そのものである。そこで個々の女にとっては自己に加えられている「主婦的地位」Vを正確に認識する己の地位規定こそが、女解放への戦列に加わる第一の条件となる。この己の女としての地位規定こそが、労働権の獲得地位の確認（つまり専業主婦なら無職・プロレタリア失業者と……）と併せてなされることのなかで、女としての階級規定、つまり己の女解放への視座の獲得となる。付言するが、自己の家族の中で妻であるゆえをもって主婦であり男との関係性の中で（家事や家計をどの程度分担しあうとかの……）現在どのような主婦であるかニューファミリーふうとか古風とか超えてるふうであるとかいうことは、「家族」V内における一人一殺の程度の度合でしかも対関係の男の性質もあることだから女自身がすべて責を負うことではないし、これはその女の「主婦的地位」Vである。この「主婦的地位」Vを女解放を志すものとして性差別告発の視座から地位規定するなかでようやく、「主婦的地位」Vとなる。

現在、自分の家族内ではたしている主婦役割を生きがいとか拠点とか職業と思いこむことで自己を正当化せず社会的な「主婦的地位」Vの一つと客体視してみることがそのきっかけとなる。今まで女たちにこのような社会的・歴史的自己認識が欠けていた。客体化してみれば職業にある者も失業中のものもプロレタリアであることでは同じであり、主婦専業であろうと兼業であろうと既婚未婚、子持ち子なしにかかわらず「主婦的地位」Vにあることは同じである。

女解放はひとりひとりの女たちが、また各階層の女たちが、己の「性」と階級の地位規定Vをきちんとすることからはじまる。女性史を学ぶとは母系制の昔を偲ぶあうことではなく、現にある己の歴史的状況認識（階級概念では説明しにくいほどの階層化のなかで労働も産む性も社会も家族もなにかも疎外された態様しかもち得ない、いま現在……）をさだかにするためにこそ学ぶのが歴史学の正統でもある。主婦論などという小状況論の中で年金がほしいとか奴隷だと要求やきめつけを出しあっても「主婦的地位」Vなる性差別は撃てない。小状況論をこえて二千有余年にわたる歴史の中で家族の中にとじこめられつつ

女・エロス 11

社会評論社・780円

特集・何からの解放か

一九七八年——四者怪談／田村春子
 デッチ上げに繋がれた恋愛／前林則子
 キャリア・ウーマンを撃つ／村松てる子
 戦車から三里塚へ／山口雪子
 当世文明子殺し地獄／名無川砂利
 コミュニーンの中のリブ／ミオ
 自己変革とコミュニケーション革命／ボンコ
 座談会 現場から——明日をきりひらく
 講演 エロス革命／河野信子
 その他 女狙撃兵（リブ魂のない女性学なんて他）、女かわら版、アピール、書評

けた女と子を救いだすグローバルな家族論を本質的に展開しないかぎり、女は家族からも、したがって国家からも自由にはならない。女にいまある自由は疎外態としての虚構のたまさかの自由である。たしかにいま、男運が良くてお金や理解に恵まれた女、女運がよくてエリートになって職業をもつ女、祖母・母・姉妹・娘・保母やお手伝いさん——別の女手にめぐまれた女、そういう女が社会的労働や社会参加と称してさまざまな活動をしている。その現象にひきずられて、そういう現象が出る家族内条件づくり、自己意識の高揚につとめても、男・女・子の三者がおりなす人性関係としての家族Vについての家族内被抑圧者としての女と子の立場からの家族論にはならない。母・娘・妻・姑・嫁……女たちが歴史の軌の中でおいづづけた忍従の系譜を断ちうる女自身の家族論、具体性をこめれば、男との人性V関係・子との人性V関係を問いつめるなかで得る男と子との対等な地平の望みをこそ希求したい。

（主婦戦線星組）

国際ビデオシンポジウムの開催

国際女性研究会（世話人 井出祥子）とHKWビデオワークショップ（代表、渡辺晴子）の共催、国際文化会館の後援で。
 HKW制作「放送ジャーナリスト 江上フジ」（カラー三〇分）とマーサ スチュワート コミュニケーションズ制作の「国際婦人年のジャーナリスト」（カラー三〇分）の二本のビデオを題材とするもので、渥美育子氏らがパネリスト。

日時 十一月七日（火）午後六時半から
 場所 国際文化会館（港区六本木5-11-6）
 参加費 五〇〇円（コーヒータ）
 連絡先 三一一七六七四、四〇六三〇一二

自分の精神的財産を
与えてやりたい……

守ってやらなければ
ならない気がして…



小室 加代子

VS

鎮 目 恭 夫



——女といえば結婚して子を産み、育てることがきり離せない、つまり母性といううなことがどこにいてもついてまわるわけです。それで一体、母性とは何か。そんなものがほんとうに女だけに特有なものなのか。父性はないのか。このへんのところから、お二人にとって子どもはどういう存在なのか、子育ての意味なども含めて、自由にお話しいただきたいと思います。

小室 私、母性は本能のようなものだとは思えない。初めての子どもを妊娠したときも、母性愛も母乳も、なんとなく後から出てくるのだろうというような単純な自然信仰のようなものがあつた。ところが母乳も出ないし母性愛も出てこない(笑)。手をこまねいてあつけにとられて、しみじみ、母性愛などというものがあるといふのはウソだ、と思った。それほど子育ては私にとって絶望と努力の繰り返し。いまでも母性愛などないのね。あるのは人間としての愛情と、幼児体験の繰り返し、小さいときはあだだったとかこうだったとかいう体験の感性としての繰り返しをする契機みたいなものだけね。

鎮目 母性愛があるかないか、というこ

とだけど、一番基本的なことは人間は哺乳類である、ということね。母親が乳を与える、母性愛だがどうかかわらないけれども母性本能のようなものがある。

小室 それは本能ではなく、機能でしよう。

鎮目 それは本能の定義にもよるけれども……。基本的な行動パターンとしてある。

人間と他の哺乳動物との違いは、お乳をやらなくなつてから、一人前にしていくまでが非常に長い。猿だと三年、ライオンでも五年くらいかな。詳しいことは調べなければならぬけど。人間はこの間の子育てをどうしていくかということがある。だから母性があるかないか、というようなことは哺乳以降ということだと思ふ。これが一つ。もう一つは、近代社会になつてミルクなどがでてきたから母親がお乳をやらなくても子どもは育つようになった。

小室 そう。でもそれは比較的新しくて、前は、母体が危険だとか子どもが虚弱だとかいう理由だったわね。また母親が直接母乳を与えないということは、前からあつた。特権階級の女性とかね。だから

逆にいうと母性などということが強調されるようになったのは後の時代のような気がする……。

鎮目 母乳がでない母親というのは昔からいた。ただ最近、肉体的な理由でお乳をやらない母親がふえている。お乳をやるということは人間に限らず、面倒だという面があるわけね。でもなぜやるかというところ、動物の場合は、乳房がはつて苦しくなる、それで哺乳するとかね。実験心理学はそういつてる。苦痛が解放される。

人間の場合にもこれが言えるのではないか。文化が発達するにつれて、哺乳本能というか、そういうものが退化してきた。小室 それは機能といつてもいいと思ふね。

——そうですね。ここはかなり根本的な点だと思ひます。

鎮目 まあ、本能といわなくてもいいんだけど、そういう仕組みが、遺伝的に体の中に組み込まれている、学習によつて得られたものではない、という意味だよ。だからそういうものが退化してきた。小室 もしそういう意味で本能的なもの

であるならば、例えばお乳をあげられない女性はいらぬわけだから、だからといって、子育てができないということにはならないでしよう。

鎮目 退化がおきてきたのは文化的生活にもよるけれども、遺伝的にも退化してきたと思う。人工栄養が始まつたとき、それから、戦後の人工栄養が大衆化したという二つぐらいの段階があつて、これらにともなつて、哺乳機能のようなものが変化してきた。

小室 なぜ私が機能ということ強調するかというと、今の若い世代のお母さんたちになると、自分自身が母乳で育っていない、母乳をやるところを見てもいい。だからピンとこないといふところがあるのね。

鎮目 僕がさっきからいつてるのは、例えば言語本能のようなものは誰でもあるけれども、フランスで生まれたからフランス語能力があるというものではない。

本能的なものがあつても適当な条件があつて開発されなければでてこない。母性愛などもそういうものではないか、ということなんだ。

——ところで二人が、一緒に生活を始める以前に、それぞれに配偶者がいらして、二人ずつのお子さんをお持ちだったのが、小室さんと鎮目さんが一緒になられてから、互いに二人だけであつた子どもが倍の四人にふえたわけですよ。他人であつた二人の子たちが、縁あって他人でなくなり、いま生活を共にしていらっしゃるのですが、その生活の中の子育てを通して二人がどのように、ご自分と子どもとの関係をとらえているかを話していただきたいと思ひます。

小室 子育てについては最近私とあなたとの間で問題になっているんだけれど、私の場合は、三歳くらいまで保育園に預けたりしないで、ほとんど自分の手元で育てたんですね。だから割合細かく観察してたんだけど、人間というのはいつちよ前になるといふか、そういうふうになるまで実に時間のかかる動物だなと思うわけね。私の想像では、胎内というのは多分すごく暖かくて暗くて居心地のいい所だと思う。そこから、急にパッと明るい所へ出て来た。だからこそ厄介なところがあるわけだね、ある程度保護してや

んなきやならないみたいだね、それが、徐々に個として離していくというのが、一つの育児行動だと思う。あなたのやり方は、一般的に言つて、過保護なわけね。私のやり方は、あなたから見ると放任という格好になつて、夫婦ゲンカの原因の大半は育児のやり方について。あなたの過保護の根本的な原因を一年がかりでつきとめたんだけど、それは、胎児的に育てているわけで、子どもに個として対しているわけじゃないのね、全く。

あなたは、胎内経験を持つていないわけよね。それで胎内環境を子どもたちのために作つていた、そういう感じがあるみたい。

鎮目 女は、とにかく二百八十日、おなかの中で育てちゃうとね、それで、いい加減うんざりして、早く出してくれないかと。それで生まれると、やれやれ、ホッとした。その限りでは解放されるわけね。事実、その限りでは、子どもを自分の体からつき離した、あるいは、つき離したいみたいな気持ちは、女にはある。男には、少なくとも、僕の場合にはおなかの中で育てなかつた。それで生まれて

から、抽象的な意味だけれど、僕の子宮の中で育てるというか、保護しちゃうというか、子宮の中は相当保護された状態ですよね。男は子宮の中で育てたことがないからね。赤ん坊とか、幼児を引き受けるよね、空間に子宮を自分で設置しちゃうみたいなのところがあるかもしれない。僕自身の場合は、後から考えるとそういうところがあつたみたいです。君は、それと逆だったわけだ。

小室 それなの。私は、母乳を与えていたわけだけれど、そうするとだんだん重くなつてきて、めんどくさいでしゅ。だから早く離れて欲しいわけ。座つたらもうしめたもんで、トイレに座らしちゃって排泄を教えちゃうとか。正味九か月、お腹に居ただけでうんざり。また生まれてからでも、年がら年中しがみつかれていてと離したくて離したくてしょうがないわけね、全く。女ならばね、実感として経験できることだと思ふんだけど、そういうことを見ていると、人工栄養で育てたお母さんたちの方が、子離れが下手みたいなのところがあるのね。鎮目 それはあるかもしれない。

母乳で育てれば、これは骨が折れるわけだ。くっついてきて、いい加減なところで、つき離さなきゃしょうがないみたいなの……。人工栄養の場合は乳房にくっついていないから。

小室 とにかく哺乳ビンの長さだけ距離があるわけね。母乳だと六か月から一年ね、離すまでの期間は。その間なんとしてでも抱いていなきゃならないけど、人工栄養の場合は、それをしなくてもいいんだから、割合早く離れるはずだけど。距離としては離れているけれど、逆に気持ちの上ではいつまでも離れてないみたい。

鎮目 君の話を聞きながら思ったんだけど、個というやつね、個人とか、個体ね。親に対する個だけどね、個体という概念には二種類あると思う。

小室 それは確かね。

鎮目 物理的というか、一応生活できるという一人立ちができるという個と、それからもう一つは、非常に人間のあるいは自覚的な個なのね。死ぬことによって自己がなくなるといふ自己の根本的な意味では、自覚的な個ね。それと動物的な

意味での個ね。ライオンの子でも大きくなりや適当に離れていくわけね、親から。そういうときに個ができる。人間の子育ての場合にも、子どもの個体をいうとき、そういう物質的、生活的、経済的なことも含めて個として成長していくという、それが一つあって、人間の場合には、自覚的な個人というやつね、これが僕は両方あるような気がするのね。

小室 それは、分離しているようなものじゃないような気がするのよ。私の場合には。むしろ生活習慣とか、早くいちよ前になつて食べていけるようにすることを通じて、自覚的な個というか、自分の死に向かいあったときに、早く言えば、自己愛みたいなのを目覚めさせるというか。私は、やっぱり人間はなんだかんたと言つても自分しか愛せないと思う。エラそうなことをいっても自己愛しかないと思うのね。逆に自己愛というものがなかったら他人を愛せないよね。それとね自己愛を自覚させることが、私にとっての子育ての一つの目標でもあるわけね。自立というこばは、あまり好きじゃないから使いたくないけど、生活習慣

とか親離れとか、自分でなんでも処理できるということね。そういうことと割合密接な関係があると思う。そういう意味で面白いのは、私は、子どもを対等視しているの。子どもとまじめに大ゲンカするの。それが、あなたは、できないのよね。あなたは、子どもに対して保護してやらなくちゃとね、あなたの保護というのは、経済的に見てやるとか、死んでもらつちゃ困るとか、病気になるっちゃ困るとか、かわいそうだとか、困るといふようなかわいそうだという、そういう憐憫の情から発してかばつちゃう。あるいは、かかえ込んだじゃうとか、そういう傾向があなたは非常に強いね。

私ね、人間が自分以外の人間を意識するのはね、母親じゃないと思う。最初に子どもが自分以外の人間がいるということ、がわかるのは、ケンカしたときですよね。どういうときにケンカするかという、オモチャの取り合いです。ある程度大きくなると自分と同じくらいの子と接触するわけね。そこでまず、自分以外の人間がいると意識するでしょう。お母さんなんか人間だと思っていない。仕方のない

ことね。人間だと思ふようになるのは、ずつとあとのことだね、そうすると、逆に人間が、自分という自覚を持つときは保護ということからはずれたとき、ケンカとかぶつかり合いとか、物の取り合いとか、ガンと痛い目に合うとかね、そういうところでは、他人を意識できない存在だと思ふの。他人を大切にすると、自分への愛とか、逆に自分がやられたことで、他の人を同じ目にあわすのはイヤだといういたわりの感情……。

鎮目 話はちよつと変わるけど、最近小學生が自殺するとか、子どもの自殺が出てきた。日本では戦前は、死ぬと地獄へ行つて針の山があつて、釜ゆでされて大変こわいぞというような話を母親がしたもんだけれど……。絵本やなんかでもね。ところが、近頃では、死ぬとか地獄へ行つてこわいぞなんて話は出てこないんじゃないかな。

小室 母親もしない。

鎮目 死ぬとこわいぞという話が入り込んでくると死にたくないという自然な意志がでてくるんだらうけど、それが、死ぬと天国へ行くみたいな環境で育つと子

どもは思ふようにならないと親に向かつて死んでやるという言葉が出てくるわけだ。ウチの娘なんかもうそうだけれど。そういうことが自然に口から出てくるということは、死に対する恐怖とか地獄とかを知らないんじゃないかな。

小室 あなたの胎内環境的な育てた方は割合死にたいなどということを使うのよね。ところが私が育てた二人のほうは、とにかく何がこわいつて死ぬのがイヤだと言ふのよ。それで私はね、個性的な子とか創造力の豊かな子、というより自分で自分の身を守るとか、そう生活習慣みたいな具体的などころからしか、文化も何も私たちは、譲り渡せないような気がするの。

鎮目 それに、身を守る手段よりも、身を守るという意欲みたいなのね、要するに、死にたくないという気持ち、極端な言い方をすれば、確かに僕は、子どもを胎児みたいに育てたから、死なないように守つてやったわけだ。そんな中に入つてりや死ぬわけないから、死に対する恐怖みたいなものは出てきにくいだろうな。僕のような育て方をしたら、やがて

は、お父さんと意見が合わないから死んでやるとおどかす。

——子どもの育て方としては、阿極端であつたようですね。

鎮目 君の育て方のほうが基本だと思ふね。

小室 私のやり方のほうがね、本人の幸福とか、つまらないことで悩まないですむと思ふ。個ということとすごく関係があるんですけどね、それは子どもの個というだけじゃなくて。

日本の社会というのは、妙な人間関係の緊張が強い社会だと思ふ。その中で、なまはんかにやっていると、その人間が持つて生まれた能力などが発露しないうちにだめにされちゃう例つて、身近にいつぱい見ている。そういうバカバカしい日本の社会だけが持つている、人間的な緊張関係に毒されて欲しくないわけね。はね返す力があれば、私が味わつた苦しみを味わわずにすんで生きていけると思ふ。家族の中でやりたい放題、言いたい放題では最低だと思ふの。私は、子どもがとにかく歩き始めた段階から、食わし

てはやっているけれど、対等だという意識は強かったわ。

鎮目 フロイトの説には賛成じゃないんだが、エゴというかな、自我をちゃんと発達させることが必要なんだけど、人間として、社会集団をつくる上では、エゴを越える何ものかがいる。狭い意味でのエゴの発達じゃなくて、越えるようなものの形成が重要なので、子どもにもそれを要求するね。

小室 それから子育てに関しての違いで、私のやり方が健康的で、病氣しないのね。本人にとっても健康なほうが良いわ。けど、周りの人間も助かるわけよ。鎮目 そうね、痛がらないというのか、痛みに対する力が発達しているんだな。君の育てた子のほうがね。

——お二人にとって「子ども」とはスバリ言ってるんですか？

小室 私にとっては子どもって、二通りの意味があるの。一つはなぜ産んだかということ。私は、すごいエゴイストなのね。自分が狭いわね。独身時代に外を歩いていると、他の子どもをつきとばして

歩いていたの。要するに子どもが視野に入ってこなかったわけよ。よくお母さんに怒られてにらまれてましたよ。それで自分が子持ちになってみれば、多少は視野が変わるのではないかと。自分がもの書きとしてやっていく上にも、世の中全体を見なくちゃしょうがないわけで、そういう場合は子どもが入ってこないじゃだめだし。他の子を連れて来たんじゃないことになるし、たまたま産める身だから、産んだっていうことがあるのよ。それからもう一つは、自分は大学で教育学なんかやってたから、その理論を使ってみたいというか。それと私の場合には、母子家庭だったというのが影響しているわけね。当時の完全に高度成長期の中では、母子家庭というのは社会からはみ出していたわけ。いくら経済的にちゃんとしていようと、社会からはみ出してたということに関しては、ある種の被害者意識みたいなものがあったわけね。要するに世の中は、お父さん、お母さんと子どもがいるのが家庭で、それが、日本の国力を支えている部分であって、私の育った家庭は完全にはじき出

されている世の中だった。だから他人とうまくコミュニケーションできない部分があったんですよね。向こうもそういう目で見ると、私も同じこもった部分があったみたい。ちょうど教育ママのはしりの世代の母親で、PTAの席なんかで自分の子どもだけがかわいいとか、自分の子どもの利益のためとか、今から思えば、彼女たちは、実を言うと、何も持っていないわけ。経済力もないし、夫に食わせてもらっている。何があるかという、子どもだけしかない。財産なわけ。それで抱え込んでしまっている。血縁と親子の私有関係、完全に母親が子どもを私有しているわけね。そういうのはしりの時代に、たまたま私は、人より敏感だったかもしれないけれど、小さいときからにがにがしくながめて、自分は、ああはなりたくない、ああでない親子関係を作ってみたいというのがあった。私は、ある意味で、小さいときに私に不快を与えていた、いまはおばさんになった人たちに対する一つの最高のプロテストをした。そういう熱烈なレジスタンスの意識があつてね、逆にいうと、最低、その

へんのことをわかってくれる人間に育てたいと思ひ始めたのだと思うの。日本人間関係というのは、狭いわけよ。一緒に生活している家族すら、理解できないという生き方は、まずいんじゃないかという感じがするのね。そばに生きている人にすらわからねいで、なんで世の中に自分の生き方をわからせるのか。

鎮目 僕の場合は、もつと単純なんだな。子どもっていう奴は、第一には僕が欲した子どもは、二人いる。それで完結しているんだけど。もう一つは、二番目の子の場合、母親が産みたがったというよりは、不妊の失敗みたいなところがあるんだな。ところが、妊娠したからには、母親は、やはり産みたがるし、僕も産んだらよかるうと、まだその頃には、離婚とか、決裂の段階にはいってなかったからね。子どもを育てて母親とやっていけるつもりでいたから、ある意味で、子どもが生まれるというのは自然の法則でー。

ところが、子どもが生まれたら、母親は、あまり子どものめんどろを見ない。夜、寝るときなんかは、僕と一緒に寝て

いたね。僕にとって子どもとは、生まれたことは事実である。生まれたからには、こいつが一人前になるまで、自分で自分の道を選ぶようになるまで、保護してやろうと。生まれたからには、育てやろうと、存在しているからには生かしてやろうと。一人前とは、いつをもって一人前というのかも問題なんだけれど。親から離れていく能力と意志を持つ段階まで保護すべき対象なんだね。生まれただけからには、一人立ちできるまで育てるという考えそれ自体には、問題ないんだけれど、実際の子育てとなると、いろいろ問題があるというのに気づいてきたわけだ。

——個、つまり個人として自分のお子さんを見るという点はいかがですか？

鎮目 僕の場合には、子どもは、血のつながりがあるから子どもであるというところに関心を持ちえなかったんだな。多くの人の場合、ふつうはね、子どもに養ってもらおうとか、自分が死んでも子孫をつくったということで永遠の生命の持続という信仰が、多くの人にはどこにあると

思う。僕の場合には、子どもに養ってもらおうとも思わないし、子どもを残してそれによって自分の生命の持続っていうものがあるとも期待していない。とは言っても、自分の死後に、自分の子どもの中にはないんだけれど、社会的な存在としての自己っていうものの永遠の生命を求める気持ちっていうのがあるんですね。それは否定できない。すると子育てとか文化的な仕事をすることによって名を成すとかじゃなくて、自分自身が宇宙の中に生きてきたことの意味、永遠に生きるみたいな期待はある。それは、自分の子どもを産んだとか産まないとか関係ない。子を育てるなら、誰の子どもでもいいんだ。

小室 それから、私とあなたの子どもの関係、あなたと私の子どもとの関係、どちらがうまくいっているかというね、私とあなたの子ともより、あなたと私の二人の子ともとの関係のほうがうまくいっているのね。それは、やはり、あなたにそういう考えがあるから、割合うまくいっているというか、いかなるをえないというか。私のほうには自分の子どもという

か、自分がめんどろみて育ててやったといういきがりとか、思い込みみたいなものが多少あるのね。だからあなたみたいな認識にはおよばなくて、むしろ私の持っていた良いものを、四人にそれぞれ分け与えてやりたい。無形の財産という格好だね。友人とか、自分の考えとか。

四人に同じように。世の中の人が遺産相続でお金を分け与えるのなら、私はもっと自分の精神を与えるというか。一つには、私が過ごしたときより四人に幸福になつて欲しいと思う。私が最初の子を産んだ七〇年の頃っていうのは、学生運動の転換期だったわけね。むかし、自分が学生るとき一緒にやってきた仲間と話したことは、自分たちがやってきた運動は、髪ふり乱して革命だとやってきたけれど、これからの運動は、むしろニコニコ笑つてやる時代で、それはちょうどそのとき産んだ子の世代には、おそらく革命はそうなっているだろうという話があったわけ。私は自分がある種の犠牲を払つて子どもを産まなくたってよかったわけだし、むしろ仕事を続けていく上では非常にじやまになる部分であるわけでは

よう。それを、あえて産んでプーリー言つてヒステリーおこしながら育てているのは、自分が獲得してきたものに対して自信があるし、誇りを持つているし、それを自分に接している人、友人であり、なんであれ、分け与えたいというか、だから、早く私からものをつかみ取る良い友人に四人がなつて欲しいの。ひょっとしたらならないかもしれないけれどもね。

私とあなたは、なんかそういうところに違いがあるのね。私が育ててきたこんな小さいときから、何かしら親の期待に慣れている。あなたのほうの二人は、娘なんか私と違う所になんと十五年間、生きてきた。下の男の子も九年間くらい離れて育つてきたわけでしょう。特にあなたの過保護の二人にとっては、私からなんでこんなに期待されなくちゃならんのかと非常に迷惑なところがあると思う。ぎくしゃくした関係っていうのもあるような感じがするのよね。今日の話し合いでそんな自分の弱点がわかったわ。

鎮目 子どもは弱者だし、保護される立場にあるんだけど、子どもは個人なのね。人間なのね。あるいは、人間になり

うる存在であるんだね。子どもは小室 でもあんまりあなた、子どもを対等とは、思つてないみたいね。

鎮目 子どもは、保護されているうちは一人前じゃないと。だから僕は、子どもとは遊べない。対等でない奴とは遊べない、遊んでやることはあつてもね。そこに僕の子育てにおける弱点があるんだね。保護されている奴とは、ケンカもできない。そこがまずかったんだね。僕の場合は。小室 ある意味では、私のほうは、とつとつに対等だったのよね。そのかわり、対等たりうるように、生活感的なことも早くからしこんだし、だいたい、小便の世話なんかね。ネコなら生まれた翌日から自分でやるのに、二年近くもおしめなんか洗つてもらふなんて……。そんな不届きなことなんかないと、生まれて十か月目とつてしまふとかね。だから早く対等に仕立て上げるみたいところが、最初からあったのよね。

鎮目 僕のほうは、やがては、対等になるであらう。まだなつてはおらんけれどそういう存在だね。子供とは――。

――どうもありがとうございます。

私にとって子どもとは

佐伯康子

オホーツク海に面した北海道の原野。流水群のなたから渡ってきた一匹の雌キツネが、丘の上で美しい雌キツネに出会う。二匹のキツネたちは、夕日に染まる原野を、力のかぎり駆け、まろび、愛し合う。やがて、雌キツネは子どもを孕育。巣づくりが始まる。五匹の子どもたちが生まれた。ころころと可愛い子ギツネたち。だが、なんと食欲な子どもたち。父ギツネは、餌はこびに一日中駆けまわる。美しかった母ギツネの毛はみるみるうちに艶を失い、やせてゆく。くったくなく戯れる子どもたち。

画面を追いながら、私は深い吐息をつく。母キツネのやつれようが哀れだという、そのことだけではない。子ギツネたちが憎いわけでもない。ただ、まのあたりに見せつけられた動物たちの、なまなましい生に圧倒されたといえはよいのだろうか。

自分が妊娠したと知ったとき、私は自分の肉体にひどく裏切られた、と感じた。

幼い頃から、私は自分が女であることを認めるのがいやでいやでたまらなかった。受験勉強に熱中したり、女らしい装いを拒むことで、自分では自分の中の女を否定しているつもりになっていた。大学生にもなっていて、現実的な性の知識がなかったのは、全く恥ずかしい限りである。恋はしながらも、なおかつ、自分の女体を故意に否定し、目をつむっているようなところがあった。妊娠することは自分が望まないのだから、決して妊娠することはあるまい、という子どもじみた観念だけが先にあり、実際の防備などはなにもしないで、恋人とまじわっていた。

妊娠などという通俗的な（と当時は思った）ことが自分の身におころうとは思ってもみなかったから、私は狼狽した。私は大学の四年生。相手は三年生であり、ともに経済力をもたなかった。自分たちが子の親になるなどとは、想像の上だけでも、できなかった。子どもは、私の意志を無視して、私の肉体にしがみついた侵入者でしかなかった。自分の生きかたもみつけてはいないのに、得体のしれぬものにしがみつかれたくない、という恐怖感が先にくる。数日、恐れと嫌悪と当惑のいりまじった思いを抱いてすごした。

卒論の題名を、大学の教務課に提出しに行った帰り、下腹部の痛みとひどい出血にみまわれた。母親の拒否の気持ちを感じたかのより、はじめ

ての胎児は、自然流産してしまった。それでほんと救われたかというところ、そうでもなかった。相手も自分も、新しい生命の芽を前にして、ただ自分の都合だけを考へてうろたえた事実から、相手への不信感と、自己嫌悪の情が残った。

のちに、マーガレット・ドラブル作「礪臼^{ひきうす}」を読んで、迷ったすえに未婚の母となることを選んだ女主人公、ロザマンド・ステイシーを、どんなにかりっぱに思ったことだろう。イギリス社会と、日本の社会では、私生児とその母への風あたりの度合いがちがうとはいえ。

その後、私は就職し結婚した。仕事をもち続けたと思ったから、こどもはほしくなかった。だが、そんな気持ちとうらはらに、私も私は妊娠した。今度、胎児を拒んでしまえば、自分たちの結びつきにも、決定的な亀裂が入るような気がした。前と同様、肉体への侵入者という意識は抱きつつも、今度はその侵入者が自分の肉体の中で変化してゆく様を、じっと見てやろうという気持ちになった。家庭という生活の実体があり、侵入者を受け入れるだけの余裕ができたのであろうか。

はじめてこどもを分娩した。分娩は暴力的であり、私のなかのなにかを壊した。女であることを、痛みとともにしたたかに知らされた。一個の雌であることとの孤独をひしと感じた。産褥の期間中、自分をた

とえようもなく無力だと感じ、同時にすべてよく大地にへばりついていっているようにも思った。一人では生きられないような弱さ、もう何もこわいものはないといった矛盾した思いが、共存した。

こどもを育てつつ、働き続けることは、想像したよりも、ずっと大変なことであつた。毎日、疲れきり、こどもの健康状態や機嫌のよし悪しでふりまわされることを嘆きつつも、自分たちの未来の仲間を預かっているという思いも、どこかでしなくてもなかつた。

こどもが二人になった。肉体的・精神的疲労がつもりにつもつて、私はノイローゼになった。仕事に忠実であらうとすると、家庭人としては怠惰になり、妻として母としての領分で力を発揮すれば、職業人としては落第であるかのように、自分を責める日が続いた。母親だけがこどもを背負いこまなくてもいいはずだと、頭でいくらわかつていても、現実にはやはり、女の側に子育ての大部分が、のしかかってきた。

悩んだ末に、勤めを辞した。肉体的な疲労は日々にいやされていった。だが、挫折感と密室に閉じこめられたような思いが、あらたに私の精神を苦しめた。話しあえる友人はまわりにいなかった。いや、いないと思ひこんでいた。夫は、妻が何を不満に思っているのか、理解できないらしいかった。こどもを

産むと、女は不機嫌で怒りっぽくなるものだ、とも思っていたのだらうか。夫との会話がすくなくなり、心がしだいに離れていった。

二人のこどもたちが、小学校や幼稚園へ行くようになった頃、私は恋をした。夫やこどもの付属物でなく、一個の人間として見てくれる相手がいることは、喜びであった。恋を育ててゆくことが、同時に、豊かな人間として成長することに重なるように、思われた。

だが、またも私は夫の子をみごもっていた。他の人を想いながら、夫の子をみごもる自分のからだを、憎悪した。自分を娼婦のように感じた。日とともに大きくなってゆく腹部を持ちながら、ともに暮らすあてのない人を追い求める自分が、グロテスクに思われてならなかった。だが、子を抹殺する気にはなれなかった。自分の意志ではどうにもならぬ他者を肉体の奥深く抱えながら、私はただ現状維持のまま、宙ぶらりんの日を送った。

こどもが生まれた。胎内にいるとき、その存在を呪ったことの反動のように、こどもは可愛かった。母親に否定されても、なお生きのこった生命力の強さが、いとおしかった。私がつもとも苦しんでいたとき、傍観して何の助力もさしのべなかった恋人への気持ちは、急速に醒めていった。夫はなにも気づかないままだ。

今、三人のこどもたちは、それぞれの個性を発揮して生きている。私は夫とも、こどもたちとも、距離をもってつきあっている。こどもたちのほうが、私の心を熱く燃やしてくれるが。

いいも悪いもない。こどもたちは現に、生きている。私の一番身近なところで生きる仲間である。やがて巣立つことを予測しつつ、私は彼等を愛し、彼等から多くのことを、改めて教えられる。傷つきやすく生きにくい青春について。愛について。友情について。

あれこれと試行錯誤をくりかえす親の姿から、彼等もまた、人間の弱さやその存在のもろさ、迷いの多さなどについて、なにかを感じとって生きてゆくであろう。

命はとだえることがない

河野貴代美

私には十歳になる男の子がいる。彼は色が黒く背がヒョロリと高い。大食なのに横にはちつとも伸びず縦にはかりエネルギーがとられているようす。母

親の私に似ているのは大きな目で、彼は目でいろいろなことを表現する。無口で引込み思案だ。彼の目は臆病にいつもおどおどしている、とハラが立つたら母親は思い、きげんのいいときは、やさしい目をしてしていると彼女は思う。学校の成績は中くらいで指名されなければ自分から発言することもない、と受け持ちの教師に言われる。

「目立たない、ということが目立った特徴にならない現在の教育システムがおかしいのよ。そう思わない？」彼は母親にあおられて何か言いたそうに口をモゴモゴさせるが、結局、そんなこと受け持ちの教師のところに文句として言いに来てくれるな、と言う。

母親は仕事を持っているから彼は小さいときからかぎつ子で育った。父親はいない。私生児だからだ。少々大胆すぎるかなと思いがちでも小さい頃から火を使わせた。料理が上手である。母親が寝込むとチヨコチヨコしたものを作ってくれる。洗たく機に汚れものがたまつたなと思ったら洗ってくれている。要するに家庭的な内気な男の子なのだ。自身わがまま勝手な父親を持った彼女は男の子のやさしさに大いに満足していて、「ねえ、成績なんてどうってことないさ」としょっちゅう彼をなぐさめているから、彼も勉強などロクロクしない。

母親はかなり情緒不安定である。年中髪を逆立てて走りまわっている。自分の命はなんだ？ 哲学は

何だ？ 愛はどこだ？ と。彼は「そんな母親をやさしい目で見ている。時には黙って母親のそばに座って彼女のぐちを聞いている。仕事のぐち、同僚のぐち、乾いた皮肉で人をボンボンやつつけるけれども一種のカタルシスのようなもので、
「まあさ、こんな悪口言つたって君の気持ちまでやな感じになることはないでしょ」

「……」

「聞いてていやな感じ？ それだったら取り消すけれども」

「そうでもないよ。もう言っちゃったんだから取り消してもしょうがない」

「それもそうだね」

それから彼は「もうちょっとウイスキー飲む？」などと聞いてくれる。

彼は学校のことをあまり話したがらない。母親も強制しない。もし、ちょっとした変化に気がつけば、

「君、今日学校で何かあったの？」

「別に……」

「そうかな。何かあったって顔に書いてあるけどな、私そんなに信用ない？」

などとちょっと手をさしのべてみる。ニヤリとして何も言わないのはたいしたことがない証拠で、関係ないことをめずらしくべらべらしゃべりだしたら深刻という証拠。母親は心理学に明るいから彼の心

の動きをかなり理解してやることはできる。しかし彼が何か意地をはってムツリ反抗しだすと大げんかになる。母親はガンガンとなり、彼はますます引っ込み、憎しみの目で母親をにらんでいる。

翌日彼は学校から帰ると、手紙が来ているよ、というようなどうでもいいことを口実に職場に電話をかけてくる。母親の声もやさしくなり、そんな日には近所の駅で待ち合わせて食事をする次第。

母親はよく彼と、人生・政治から自分の男友達のことなどを話し、少々同僚的に育てすぎているな、と反省する。自分は少々オープン、感情的、率直すぎるかなとも反省する。ただ唯一、母親が信じているのは、彼女の人間であり女であり職業人であることは、彼女の母親であることと全く同程度大切なことであり、それぞれの役割の大きさや小ささが時や場所によって異なるということである。

×

×

このやさしい男の子がもし生きていたら彼と私の生活はまあこんなものではないか、と想像される。「生きていたら」という言葉は生きていることが当然とされながら死んでしまったような響きを持つが実際はそうではない。

「妊娠二か月ですよ」と冷たく医者が言った。なるべくハスッパな感じで「おろしてよ」などというか、あるいはうーんと間をおいて言いにくそうにそうし

てくれと頼むかちょっとまよったのち、自分も乾いた声で「おろしたいんですすけれど」と言った。

初夏のやわらかい日ざしが町にあふれていた日。医者は、ひどいなあ。これではいずれにしても育たなかったでしょう、と言った。何がひどいのか聞く気もしなかった。そのとき、男の子だと言われたような気がする。二か月余で性があきらかなのかどうか知らない。だから勝手な思い込みということもありうる。それなのに今になってもなぜか女の子であることは考えられない。

初夏の日ざしをあびて、ウツラウツラと寝つづけた。ベッドのふとんの柔らかさは、まだ記憶など持たない非常に幼い頃どこかで膚にふれていたようななつかしい快さだった。いいんだよ、いいんだよ、心配しなくても、と誰かがやさしくやさしくなぐさめてくれているような……。

夕方になって迎えに来ると言った恋人はなかなか現われず、私は伝言を頼み看護婦にいてねいとお礼を言って、ソロソロ歩いて自分のアパートに帰ってきた。それから部屋の清掃をした。私は習慣として夜清掃をすることがない。夜清掃をしたのはこのときが最初で最後である。二、三時間遅くなつてやって来た恋人は黙々と清掃をしている私を見てびっくりし、「寝てたほうがいいよ。ねえ、寝ていなよ」とオロオロし困り果てていた。

しかし、医者に言われたとおり一週間仕事を休んだ。重い物を持ったり電車に乗ったり刺激物を食べてはいけないと言われ、それも守った。殺した（あるいは死んだ——ある理由で今この言葉上のあるいは実質的な違いにあまりセンシティブでありたくない）子どものことは全く考えなかった。恋人と一緒にいられることだけしか考えなかった。そしてあとはぼんやり暮らした。

一週間たつて初めて出勤した日、国電の高架線の下に産婦人科医院が見えた。そのとき、鋭い痛みが頭の先から足の先まで稲妻のように走り、顔が硬直してサーととりはだがつた。尿意をもよおしそうに下腹や胸がいたんだ。

どれくらいの期間、そんな思いにとらわれていただろうか？ しかし日がたつにつれて激情はやわらぎ、甘い悲しみが変わっていった。手術の日の柔らかいベッドでたまらないほどの安逸をむさぼっていたあのときの情緒につながった何か……。赤ん坊をみると甘い悲しみは蘇生し、その感情は実に生き生きしていた。これはナルシズムとよばれるものなのか。マゾヒズムとよばれるものなのか。

それから十年がたった。子どもを持つことを考える余裕など全くないような、右往左往の生活が続いた、ひもじいときにパンを分けてくれ、寒いときにコ

ートのほじにそつと入れてくれる人もいた。やっとな自分でもパンもコートも買い、余った分をどうしようかなと考えられるようになった最近、やさしい男の子の小さな小さな葬式をだした。会葬者は私一人。イタリアの著名なジャーナリスト、オリアナ・ファラチさんが書いた「Letter to A Child Never Born」（死んだ子供への手紙）というおあつらえのレクイエムも手に入った。真つ赤なバラをいけ、「君、生きていなかった？ それとも死んでしまっていてよかったです？」と静かに聞いてやりながら、私はさめざめと初めて涙を流した。

男の子の葬式が終わったのち、私は子どもを持つと決心した。子どもを持つとうと決心したとき、子どもを持たないという結論に達したのは皮肉だった。男が子どもをいらないという。私はもう子どもを作る最終年齢だと去年から医者に言われている。

いらないと言われて、彼と深く話し合ってみるエネルギーもないほど傷ついたと自分で思った。しかしそんなに傷ついてでもないことが後でわかった。男が子どもをほしくないと言ったからといって、もう二人の関係が終わりだなどと短絡に結びつける必要はない。「愛する人の子どもが生みたい」という言葉が陳腐なように「愛する人に子どもを生ませたくないのか」などという迫り方はいかがわしいニオ

イがする。男にも男の自由がある。それに加えて心理は、ないほうがいいわ、そくばくされなくて、といった類の合理化をたくさんする。子どもがいなくてはさびしくて生きていられない、などということ信じられない。男と一緒に暮らしているのはたまにたまそうしているだけであつても、父親になったり母親になったりするのとはまたまの問題ではない。そう簡単に結論しないほうがよいのではないか。なるほど。私のやさしい男の子がもし生きていて、なぜ自分を生んでくれたのだなどと聞くことがあるとすれば、私は何と答えたらいいのだろう。

そうだ、なるほど、と、わかったような気もするけれど、どこか私の知らないところで取り引きが行なわれて、ほら、これがお前さんの分だよ、と何かを渡されたような気がする。それが子どもを持たない代償としての自由というものか。

そこでこんどは心理はウンと飛躍する。なぜ女は愛する愛されるといったわくの中で子どもを作ることとのみ腐心するのだ？ どうして通りすがりの男と結ばれ、その男の子どもをみごもり育てることが許されないのか。あるいはできないのか。世の識者は、子どもは両親（単に生物学的に父親・母親がいるということだけではなくて、二人は結婚していて定職があつて「正常な人たち」）の下で育てられるべきだと口うらを合わせる。「それでは生まれてく

る子どものしあわせはどこにあるのだ。彼には選択権などないのだ。それなのに生みたい、ではお前さんのエゴイズムではないか」と誰かがささやく。そして堂々めぐりがまた始まるのだ。

それでは人工授精はどうだ。殺人という強制的閉止が犯罪なら人工授精という強制的開始も犯罪ではないか、といつか言った人がいた。これはどうも宗教的なニオイがする。

なぜ子どもがほしいのかと自問したことはない。答えなどないからだ。ある友人は子どもを持たないでどこで自己表現をするのだ、という。それで、早く生みなさい。かわいがつてあげると私は彼女に言う。

なぜ子どもがほしくないのかと自問したこともあまりない。私の友人は三十三歳で未婚なのに最近避妊手術をした、という。彼女は子どもが嫌いだと自認している。いろいろ避妊をやってみたけれどもどれも完全・安全でない。ダイヤフラムが一番適当だけれどあと十七年間もあんなもの持ち歩いていられない、という。「でも後で子どもがほしくなったらどうするの」と愚問。「それはいろいろ考えたわよ。でも三十三年間も子どもが嫌いだっただからね、これからも変わるとは思わない。もし後で変わったとしたら、それはそれで覚悟するしかないでしょ。人生そもそもがこういった難しい選択の連続じゃないの」と。私は彼女の結論に乾杯する。

そこで私はといえば、やわらかいフカフカした小さな身体を私の腕の中に抱きしめることを想像するだけで涙があふれそうな愛情があるという理由で子どもをほしがり、全く同じ理由で子どもを持ってないのだろうと思う。

私は近いうちに、決して生まれてくることのない私の子どものためにささやかなパーティーをしようと思っている。オリアナ・フラチさんを招待して彼女のレクイエムを読みあげてもらおう。「……こうしているあいだにも世界のいたるところで子どもが生まれている。やがては母親となつて子どもを生むための子どもたちが。人の命はお前さんをも私をも必要としないのだよ。とにかくお前は死んでしまった。多分私だって死に向かっている。でもそんなことはもうどうでもよいのだ。命はとだえることがないのだからね」。

私にとっての子ども

辻 友子

「独り」という単位

小さい頃から好きだった「作文」が、さまざまな曲折を経たのちに、職業としてわが手に残されていることに気づいたときには、私はもうとくに世間でいう婚期とか適齢期とかを過ぎていた。

とくに理由をつけて避けて通つたわけではない。誰もが持つ人生の曲がり角で、自分で行きたいほうを選んでただけだった。

「独り」という単位が割合に好きで、出版社をやめてフリーになったときの爽快感や、自由に歩き回れるうれしきは格別だった。「一匹狼」というほどいいせいはよくないが、とにかく組織やグループは苦手だった。そして、私の母親のほうが秘かに胸を痛めていた頃になってやっと私は出会い、一挙に夫と子どもを得ることになった。

はじめて妊娠を知ったときには、「これで当分身動きができなくなる」というとまどいが大きかった（実際には、そんなことはなかったのだが……）。

それが、だんだん大きくなるお腹を抱えているうちに、奇妙な陶酔感を味わうようになった。

「この小さな生命は、彼（彼女）にとっての唯一の生き場所を私のなかに見つけてくれた。私はひとつの宇宙を自分の体内につくりつつあるような気がする」と、私は当時の日記に書いている。

私にとっては目新しい、すばらしい経験を味わっているという気持ちが大きかった。

出産後の二、三か月は、誰もがそうであるように無我夢中だった。やわらかくてたよりない生きものを無事に生存させることだけがすべてで、わが子だけをみつめて暮らした。

生まれる前から私は、すくなくとも三歳まではどこにも預けず自分の手で育てようと決めていた。理由は第一に、母乳で育てたかったこと、それに子どもがどんなふうに成長していくのか、その過程に非常に興味があったのだ。

なるべく自宅のできる仕事を選ぶつもりだったが、実際には、三年の連載を約束して始めた月刊誌の仕事は、地方の取材が多かった。出産前後の時期を無事に切りぬけることができたのは、すぐ近くに住む私の母と、仕事仲間である写真家の協力のおかげだった。

半年過ぎた頃から、取材には子どもを連れて歩いた。一緒に行く人には申し訳なかったが、私より若いのに四児の父親であるこの写真家は迷惑そうな顔ひとつせず、つきあってくれた。これは、実にありがたかった。

インタビュールされる相手の方も驚いたことだろうし、私自身も、泣いたりぐずったりする子どもに困ったこともあるが、子どもを育てることと、ほそぼそとでも仕事を続けることは切り離せないものであり、私は頑固にそれを守り続けてきた。

子どもは束縛ではない

そんな私に時には苛立つこともあったようだが、それでも夫は、「仕事をやめてしまえ」とは一度も言ったことはなかった。

ただ、外と内とのバランスが崩れてくたびれてしまった私に、こう言ったことがある。

「でかけたり、活字にしたりすることだけが仕事ではない。じっと見たり、ものを考えることも仕事のうちだ」

この言葉がきっかけになって、私はほとと肩の力を抜くことができた。長い人生を考えれば数年間の休戦も大したことではない。

それに子どもと一緒に暮らすと、毎日、新しい発見がある。子どもが一人できると、たくさん大人の子どもたちが近づいてくることも私は知り、また違う世界が広がってきた。最近はずいぶん私たちのけたたましい声のなかで原稿を書くコツも、身についてきた。

しかし、平気で自分の存在を押しつけてくる子どもに、時には本気でカッとなることもある。他のさまざまな要因がからまりあって、子殺しにまで追いつめられる母親の気持ちも、わかるような気がする。

全く理不尽で、矛盾にみちたいきもの、とつきあうことで、私には、大きな視点の転換があったようだ。それは、長い間どうしても越えられなかった自分の内なる垣根を、苦もなく飛び越えさせてくれたと

もいえる。私にとって子どもは束縛ではなく、むしろ解き放されるために必要なひとつのステップだったと思う。

子どもの成長をみていると、私たちの経験はそれ自体断片的なものではなく、すべてが一本の河に流れこむように、人生をつくってゆくことを、実感として悟ることができた。そのときから私はもうそれほど迷いも苦しみもしなくなった。そのときを確かに生きてさえいればよい。

つくられた神聖なる母性の神話も、私の内なる「美しい母性」も、私は信じていない。

ただ、人生のある部分をひらくかぎに、子どもはなり得ることもあると私は思っている。

それは、無力な存在を自立させるまでの親の本能的な感覚に基づいているが、それを「母性」とよぶのなら、私は母性を否定も拒否もしない。

「親とは、子どもが自立するまでの仮の宿」と頭では割り切っているが、一方では、決して失ってはならない大切なものを所有してしまったという気持ちもぬぐえない。

ことに幼児殺しや子どもの事故などの報道には、弱くなった。なんでもよい、健康に生きていてさえくれればそれでよい、などと気弱なことを考える。それに自分自身に対しても、私は臆病になってしまった。以前なら、「しばらく事故がなかったから、

そろそろ落っこちる頃です」という軽飛行機に乗ってヒマラヤの山々の上を飛んでも、ブランコのように揺れる船で一晚エーゲ海で過ごしても、自分の生命を心配したことはなかったのに、今は、「まだ私は死ねない」という気持ちのほうが強い。

サガンの言葉ではないが、子どもを得て私は、勝手に死ぬ自由を失った。

しかし、皮膚感覚で育ててきた「母と子の蜜月」は、もう二歳前後で終わった。三歳になった息子は、いまや、自立しようと母親の腕のなかでもがきはじめている。

生の拡充

私は、親が子どもに与えるべきものは「健康」だけだと思っている。当節はやりの「自立心」や「教育」も、親が己を一生懸命に生きてさえいれば、自然に身につくものと思うからだ。

しかし、子どもの健康において母親の責任は大きく、ことに幼児期の食生活は一生を支配するという考え方を、私は重要視している。

そして、欺瞞にみちた食べ物現状に情けない思いをしていたとき、友人の紹介で、「たまごの会」という有機農業のグループを知り、入会した。

これは、五年前に数人の有志たちが資金を持ち寄り、茨城県八郷の松林を切り開いて、健康な土での野菜と、「ほんもの」の鶏卵を自分たちの手でつく

り、たべることを目指した会である。

松林の伐採、鶏舎や住居の建設などすべてを会員の手でやりとげた創始期が一応終わり、現在、農場専住は五家族を含めて二十三名、東京会員は約三百世帯という規模になった。

単なる養鶏だけではなく、その鶏糞を土に還元する。東京会員の残飯で飼っている豚は、肉と肥料づくりに利用するなど、本格的な有畜農業である。

農場専住者は、三十歳前後の人が主で、大学の農学部で共に学んだカップル、建築を学んだ人、大学闘争の闘士だった人等々……。東京会員も、大学の先生、映画製作者、市会議員、マスコミ関係者……とクセの強い人たちが多く、共同出資の共同経営、すべて完全平等の原則に徹し、月一度の世話人会はカンカンガクガクの議論が展開する。農場に住む五人の女性たちは全員子どもをもち、なかには四児の母親もいる。

ここでの生活は自給自足で、ハム・ベーコンも手づくりにする。財布は一つ、炊事は男も含めて交替制という共同生活のなかで、子どもはみんなが自分の子どもという考えのもとに育てられている。一つの共同体のなかで、どこまで他人にかかわれるかというテーマを、みんながもっているのだと思う。

ここで私が書きたいのは、この女性たちが「産む・産まない」の次元を越え、——あるいはその論

議自体、問題にならないのかもしれない——産み、育て、一年中休むことのない労働に明け暮れ、しかも常に、闘いの姿勢にあることなのだ。

闘いの相手は、体制であり、「つくる」ことの意味を理解しない都市生活者であり、そしてその現代に生きている自分自身でもある。いつも緊張し鋭い目を失わない彼女たちは、その意味で非常に美しい。子どもを産むのもよい。産まないのもよい。ただ、真剣に己の生の拡充をはかるなら、そのどちらが自分にとってよいのか、自然に答えが出てくると、私は思うのである。

卵子、あるのかなあ

舟 本 恵 美

今日、わたしの経血があふれている。周期をもつて血を流す。マグマのように、とは言うまい。生理の現象に、抽象的な比喻を探すことは、危険だ。思想の偏向を引き出すことになる。そう、子宮が豊穡な壺である、と。子宮をもつ女は母なる大地である、と。だから、女は子を産むものであるのだ、と。

汗のように、尿のように、経血が排泄される。わたしの体内のいささかの粘膜と、血が、リンパ液のように、胆汁のように、流れる。生理の機能にしたがって。軀の組織の一部として、無駄になった血が新しいものと代わるために捨てられる。それに、何の意味をもたせるといふのだから。

経血を嘗められるかどうか、解放された女かどうかの指標になる、と確か、グリーアが言っていた。指を切ったときの血をわたしは嘗める。経血だけを特別視してはいけない。グリーアが嘗められるかどうか、と言ったとき、経血を汚ない排泄物とらえてはいけない、と言うのだけではなく、経血だからといって価値付与をすべきではない、とも語っているのではないだろうか、とわたしは思う。

経血が神秘的な血であると規定すれば、そこに思想が、神話があらわれる。女はそれに溺れてきた。自分の意志ではなく、神話によって、常識によって、差別思想に基づき、選民思想に凝り固まって、子を産んできた歴史がある。女が子宮を使って、機能を使うことによって、自分を正当化してきた時代がある。わたしの子宮は今月もある種の生理現象を呈することはなかった。つまり、妊娠しなかった。受精しなかった。卵子はかさぶたのように落ち、粘膜ははげてしまう。胃液の分泌と変わらない。きわめて自然な現象。

しかし、自然なものとは、他人は思わないのだ。どうして、なぜ産まないの、と問われる。子どもは嫌いなのか、それとも欠陥が、と視線に聞かれる。男たちの、女たちの、無数の目からの問い。

なぜ、わたしの受精にまでかわってくるんだ。わたしの卵子の行方まで云々する権利があるんだ、あなたたちは。子孫という大義名分、女が子を産むという論理の鋳型。わたしは模型じゃないんだ。プラスチックの屑を糊でつけるように、わたしを妊娠させないでくれ。それは、わたしの選択なのだから。三十代半ばを超えて、まだ、妊娠したことがない。それでも、子宮は何もわめかない。とても調子が良い。周期は確実だし、わたしは生理的にきわめて健康だ。胎内が空っぽだという意識もないし、欠如感覚もないし、子宮はさびしがらないし、すき間風など吹いていない。

それと同時に、わたしの他の部分の肉体も健康だ。年齢相応に老いていつてるが、それとても自然なこと。まして、わたしの意識は明快に働いていてくれる。

子を産めばやさしくなる、という。女は一人前になる、という。その反対が、どうしていえるのか。子を産まない女はやさしくないのだ、と。なぜ言える。女がやさしくあろうと、なからうと、かまわな。しかし、その判断の機軸を受精したかどうか、

妊娠したかどうか、無事に出産したかどうか、にかかわってこれらと困るのだ。

子を育てるのは結果論のように思う。わたしたちが子ども論を話すとき、「子」という抽象論ではない。たぶん、二、三歳の可愛らしい盛りの子の人間の幼児時代、あるいは半年くらいの子の玩具のようなもの。あるいは出産もない神秘的行為の赤ん坊。あるいは、すでに老後になった母親のそばにいる成人した人間。血の思想につながれた、穏和な、正當な、輝かしい、倫理的な人間像のひとつである。そのとき、子どもはわたしたちが勝手に描いた想像上の子どもなのだ。物語の中の登場人物なのだ。女は、書き割りなのだ。

わたしは、登場人物を必要としていない。その必然性がない。わたしが生きてるこの芝居には、女たちや男たちがたくさん生きており、かかわっており、新しいことが次々と起こる。この上に、新しい主人公をいま、つけ加える筋書きが必要とされていない。つまり、わたしにとって、子どもという一人前の登場人物の出る幕はないのだ。

だから、妊娠しないようにしている。受胎の機を外そうと試みているだけの結果にすぎない。子を産む前での選択をしているのだ。それが確実に成功しているから、結果論としての子どもがいない、子どもを育てていない。

いまの世の中、子を産まないことのほうが、産むことよりも決断を要するようだ。一瞬ごとの決断の積み重ねでもある。だからといって、その決意のほうに価値をみいだそうとするわけでもない。ただ、わたしは、受精しない自然さと、受精し、出産する自然さとを区別してはいけなと思う。子を産んだ女と、産んでいない女を区別してはならないと思う。

逆に言えば、子を産んだ女が、子ゆえに差別されてはならない、ということだ。職場での差別があつてはいけな。子をもったがゆえに、その女の欲しない生き方を強要されてはならないんだ。それらは逆差別を引き出すことになるからだ。ひいては、産まない女を差別することになる。

どちらにしても、女は差別の構造に摺まりやすい。男が、勝者が、権力者が、作ってきた歴史の中では、それを書き直そうとしているわたしは女は、何をすればいいんだ。

子のいない女のほうが、今の世の中では身軽だし、概して経済的に恵まれているし、動きやすい。だからこそ、子を持つ女よりも活動できるはずなのだ。職場での母体保護の権利獲得とか、少し未来の世の中の構造とか、子どもたちが大きくなったときの教育問題とか。そして、女男差別のない世界像の確立とか。

女が、女であるための差別がなくなったとき、女は子を産むときに何を考えるだろう。そのときにも、子を無制限に産むことはあるまい。とすれば、幾人の子を産むかの選択をすることになる。もう、決して、子を産むことが自然な行為そのものであることはないのだ。わたしたちにとって、出産は自然さそのものではない。決断の、行為の、結果である。とすれば、産まないことの決断の、行為の、自然さをも認めねばなるまい。わたしは経血が排泄されるのをきわめて自然に眺めているのだ。尿が出るのと同じように。軀の機能は、わたしの意識の彼方にある。わたしの子どもなど、そのもつと向こうにある。ただ、卵子だけは、毎月、決まったように、ほろりと出てくるようだ。見たことはない。だから、卵があるのかどうかもわからない。もしかしたら、ないのかなあ。

レズビアンである

わたしからの発言

田部井 京子

ことさら「レズビアンの立場」が違いを生むのか

先日、△あごろ▽の方から、「女にとって子どもとは何か」ということを、レズビアンの立場から書いてほしいというお話があった。

さて引き受けてはみたものの、よくよく考えれば、レズビアンの立場などという特別な立場が、いたいあるんかいな、と思えてくる。

女が子どもをほしいと思ったり、ほしくないと思ったり、また、目の前の子どもが自分にとってどんな存在であるのかなどは、レズビアンであろうとなかろうとおんなじではないか。違うところは、その性関係に子どもをはらむ可能性が初めからあるかないかということだけであって、それが子どもに対するとらえ方に必然的な違いを生むとは思えない。なぜなら性愛と子どもは、もともと別の問題だからだ。絶対子どもをはらむことのない性愛を持つ女にとって、子どもとは何か、などと考えると、何か深遠な、むずかしい問題のように思えるだろうけれども、ことは単純明快で、そもそもレズビアンどもをはらむことのない性愛という問題の出し方がおかしいのだ。性愛と子どもを何となくつなげて考えるから、こんがらがるとだ。

子どもが欲しいという感情と、自分の好きな相手と性愛をわかちあいたいという感情とは、もともと別のジャンルに属すること、これにはだれでも思っているふしがあると思う。それが、女と男の場合

には、性愛の結果として子どもができたり、逆に、子どもをつくるために性行為をしたりするので、何か不可分のことのように感じられていただけなのである。

性愛それ自体に子どもをはらむ可能性が含まれている必要は全くない。女とかかわっているように、男とかかわっているように、子どもの問題について、その違いに起因した違いが当然あると考える根拠は、何もない。

わたしにとって子どもとは何か

しいて、レズビアンであるわたしにとって子どもとは何かといえば、別になくてもいいものである、という味もそつけない答えになる。

たしかに、子どもというのはみていてかわいいし、子どもが成長していく過程にかかわるのもいいものだろうなと思うこともあるけれども、概して執着は感じない。どちらかというと無頓着というほうがあったっている。

それよりも、わたしは女が好きで、そういう自分を大切にして生きていきたいし、やりたいこともいっぱいあるし、そっちのほうがずっと重要関心事項である。自分が生きたいように生きようとしていくことの中に、子どもの存在の必要性は、わたしの場合入ってこない。また、子どもを持たないことに、欠落感を感じるわけでもない。

むしろ、女の子どもに対する思い入れの問題は、女全体にかぶさっている圧倒的な疎外状況の問題としてあると思う。

なぜ女は子どもにこだわるのか

女が子どもにこだわるというのは、多分に、女が自分自身のために生きていけるような世の中になっていない、自分の力で自分の人生を作っていけるような条件を持ち得ていない、そんな疎外状況があるからだと思う。

このあいだ読んだ「誰のために子どもを生むか」という対談集にも載っていたけれども、現実には女にとって、子どもの存在というのが、どんな意味をもっているかというと、子どもにしか生きがいを感じられないような、ほかに選択の余地のない状況の中で、子どもが生きがいになっているとか、子どもによって自分の存在意味が確かめられるとか、また、老後に対する安心感だとか、そういう面が非常に大きい。これは、事実を言っているという意味で、まことに適確な答えだと思う。

それから、これは冷たい言い方だけれども、あたりまえのように生んでしまっただけで、生まれてみれば子どもはかわいいし、とにかく責任上育てなくちゃならないし（今の社会は一切めんどろをみてくれないので）、子育てのたいへんさは、それがたいへんなほど、どこかで自分を納得させていないと、わが身

がもたないということだつてあると思う。

また、同じ本の中で、自分の命がつかつていくという思いが、かえつて死を見つめることのできるある種の救いになっているんじゃないかというふうなことがでていたけれども、これはちょっと情緒過多な思い入れで、自分がそう思うから思えるだけのことで、自分自身の命は後にも先にも一代かぎり、泣いてもわめいても、命まで子どもに託せるわけはないのである。

個体はすべて死ぬ。だから自分の命を充実させて生きたい。それが大事なので、命がつかなくなるなどという幻想は捨てたほうがいい。

観念操作にあやつられていないか

さて、以上のように、女にとって子どもが現実にはどういう存在であるのか、情緒を排せば、非常に冷徹たる客観的事実が浮かびあがるわけだけれども、では、女にとって子どもというのが観念的にはどうかというところ、これが一番くせものだという気がする。

妊娠・出産あるいは子育てというのが、女という性をもっている自分を、なんかふくらませるんじゃないだろうか。逆に言えば、子生み、子育てというものをやらなければ、どっか女の生として欠けるんじゃないだろうか、みたいな、ばくぜんとした思い入れが一方にある。それを女自身が持っている。少なくともわたしにはそう思われる。

これはどこから来ているかというと、やっぱり、女とは子どもを生むものだという歴史的・社会的な決めつけが絶対影響している。

女が子どもを持たなくても（必ずしも自分が生むという意味ではない）、十分に自分のための人生を持てるような社会になっていないし、子どもを持たない生き方に確信をもちにくい、圧倒的な「思想攻撃」がある。また、これが一番大事なことだけれども、子どもを持たなくても十分に確信に満ちて生きた女の例が、ほとんど目に入つてこないということがある。そういう例が多く知られるようになるれば、それだけでもずいぶん違ってくると思うのだが、とにかく、この女の子どもに対するこだわりというのは、俗に言われる女の性（さが）などでは決してない。女の性Ⅱ生む機能というワクにとらえられた発想が問題なのだ。

Ⅱ生む機能に情緒過多にふりまわされるな

「女」という人間存在におしきせの論理をしいてくる側も、それに反発する側も、ともに、ちょっと女の性Ⅱ生む機能という発想にとらわれすぎているのではないか。

確かに生物学的にはそうだけれども、でも、女の性を言うとき、それしか言わない。それを言うなら、男だってⅡ生むことにかかわる機能Ⅱを持っている。でも男の性を言うのに、そこに限定した言わ

方はあまりされない。まして男の生がそこにふりま
れわたされることはない。

女も男も生物学的存在であると同時に、そこに限
定されない、もっと人間として全体的な、社会的な
生をもっているはずである。女はお腹に子どもを宿
す機能があるというだけで、どうして人生の中心を
そこにこだわらせすぎるのか。

正しく関係づけければ、生むことに関する機能人性
人生であり、また、育てる人生であり、これらは決
してイコールではない。そのところを冷静に見直
せば、生む機能について情緒過多にふりまわたされ
る必要などないのだ。

子どもを持たないことの積極的意味

そこから言えば、子どもを持たない人生の可能性
やあり方が、もっと考えられてよい。少なくとも、
あたりまえみたいに子どもを持つて、その結果、へ
たをして自分自身の人生を見失うようなことになる
よりは、もっと積極的に子どもを持たないで、自分
のために生きるということ、多くの女がちょっと
居直って追求してみてもいいんじゃないか。そのほ
うが、今の「子ども幻想」にしばりつけられている
状況の中では逆に、プラスの面があるんじゃないか。
もともと、子どもを持つも持たないも、それぞれ
別の多様な生き方、経験として、等価値にみなされ
るような社会づくりが先決なのだけれども、そのこ

とを、まず女自身が、口先ではなく心から認めざる
必要がある。

わたし自身は、子どもを持たないことを頭で選ん
でいるというより、それが自分にとって自然だから、
そのように生きているだけの話なのだが、客観的、
社会的存在としては、子どもにこだわることなく女
が十分に人生を作っていくことの好例になり得る
だろう。そのようになりたいと思う。

とにかく、子どもを持たない選択を人生に自信を
もってアタックする女に数多く出てほしいし、子ど
もを持つなら持つて、能動的な選択としてあつてほ
しい。

最後に、女とかかわる生き方というのは、困難は
多いけれども、いいもんだよ、という宣伝をしてお
きたい。

なお、この拙文は、あくまでわたし個人の私見で
あつて、レズビアンの代表的意見というわけではな
いので、一言お断りする。

子どもを生む前と後と

佐 原 啓 子

▽歯医者にて

「どうも甘えて泣くようだから、お母さん外へ出て下さい」そう言われて待合室のいすに腰を下ろした耳に、泣き叫ぶ息子の声が突き刺さる。治療の時期を逸した虫歯は深く進んで麻酔を打つての治療になってしまった。初めての歯科医にすっかり緊張してしまった息子に一本の麻酔では効かず二本の注射が打たれた。痛さよりは多分歯を削る音や震動に脅えてしまった子どもは、医者の手から逃れようともがいて治療が進まない。私が傍らを離れてからも、機械音の合い間に医師と看護婦になだめすかされながらも執拗に泣く。

時計はそろそろ十一時。「ああ今ごろ八あごろVの人に会うはずだったのに」。一つの出会いが、子どもの突然の歯痛にあえなく押し流されてしまった。はばたこうとするとその足をひっぱる意地の悪い力をまたもや感じてしまう。この口惜しさと、来年は学校だというのに意気地なく泣き続けている息子の不甲斐なさに、汗びっしょりになっている私に、追いうちをかけるように医者は言った。「ずいぶんお子さんを甘やかしているでしょう、あとが大変ですよ」。いまだに歯の治療の度に脳貧血を起こしては医者をあわてさせる身であってみれば「ハア、どうも一人っ子だもんですから」と弁解にもならない言葉をつぶやくのみである。

歯の治療への恐怖心に限らず、自分自身の弱点が生どもにひきつがれているのを見るのは切ない。例えば――。戦後直後の小学校には珍しくプールのある学校に通った私は水泳の時間がイヤでたまらなかった。体育の時間のある前日には、近くの小川に屋敷の花にツバをしていくつも流した。こうするとその翌日雨が降ると誰かに教わったのだ。そして必ず訪れる腹痛。実際に下痢までした。プールに入れないことが決まるといつの間にもやら消える痛み。プールのない中学に入学できたときは嬉しかった。その代わりに雨の降る日も体育の授業のできる体育館があったけれど。こんな少女期を送った人間を母にもつ息子もまた水嫌い。保育園のプールなんて全くの水遊びにすぎないのだが、それでもプールの時間を嫌って保育園自体を拒否するようになった子どもを目の前に、私と息子はビタリと重なってしまう。この難関を乗り切るのは子ども自身であって私は何もしてやることができないのだが、ここで子どもを突き放す勇気がなかなか出てこない。異性の子であるせい、何かそこにはお互いの傷をなめあっているいじましさがあって我ながら「イヤラシイなア」と思うのだが。

▽三十までの人生

機会あつてある女子高校生の身の上相談の手紙を読んだ。その中に「なぜ女の人みんな平気で子ど

もを生むのでしよう。そして、何の楽しいこともないこの世の中に新しい生を生み出すことをなんで大人は喜びお祝いするのでしょうか。現代に子どもを生むことはむしろ罪悪ではないでしようか」という一節があった。青春時代はモラトリウムだと誰かが言っているが、私も大人になることを恐れ、恥じた時期に、やはり子どもを生むことを罪悪と感じた。それはおそらく未知の世界である性に対するおのきからくる少女特有の潔癖感であつたらうし、また出産という肉体的苦痛への恐れでもあつたらう。そして、全く何の価値も認められない（というふうに私はいつも思ひこんでいた）自分と相似型の人間がこの世にあらわれることへの嫌悪、さらに公害に満ち、食料危機が予期されるこの危い時代に一人の人間を生むことに対する責任の重さにもうちひされる思いを抱いていた。加えて、自分の子どもを持つと男も女も急に下タリと安定しきつたように見える、その穏やかさを少女の私は憎んだのだ。『Don't just over think』、という言葉が大好きだった。

だから私は「絶対に子どもを生まない」と心に誓っていたし、私には三十歳以上の人生設計はなかった。「三十歳以上については判断停止よ」なんてニヒルに笑っていたのだ。

当然、結婚するときも「子どもを生まないこと」を条件にしていた。と少なくとも私のほうはそう信

じていたが、相手のほうは一時的な少女の感傷と思つて、一応承知しただけのことだったらしい。結婚後一年もすると、そのことが私たちの間の日常的なくすぶりの種となった。おまけに周囲からのさまざまな圧力。義妹は続けて三人子どもを生んだ。その都度、見ないわけにはいかない舅・姑のある表情。「作り方がわからなければ教えてあげましょうか」と義弟。実家へ行くごとに「あんたのところまだ？ 一人ぐらい子どもがいらないと老後がさびしいわよ」をくり返す母。友人の出産祝いをするたびに夫の顔に浮かぶ翳——。「絶対生まない」決意が「三十二歳までに考える」に変わった。三十二歳というのは私と同じ職場での一番高い初産年齢である。

結婚五年目にさしかかる頃、私はひどい角結膜炎にかかった。目から出血し半月ほど会社も休んだ。全快するのに結局半年を要したのだが、見ることを一切禁じられた生活は、ただただ心細かった。大病の経験のない私は、この思いがけぬ目の病気に明らかに自らの肉体の凋落の始まりを感じとった。このときはじめて「子どもを生まなければならないのではないか」と思った。

こんなふうに書きつないでいても、なぜ私が生むことを選択したのか、その最終的な決め手が何であつたのかよくわからない。

とにかく（なんと便利な言葉だろう）私は出産後

も働き続けることを前提に、子どもを生む決心をした。妊娠してからも迷いに迷い、産婦に必要な精神的安定を欠いて、私はしばしば心因性の腹痛に悩まされた。

私が辛かったのは当時持っていた仕事に非常に愛着があったからでもある。入社後十年、ようやく本を企画し、主体的に動ける可能性を手に入れたのである。新しい執筆者との出会い、編集会議における緊張、原稿を入手するまでの苦労などを経て、一冊の本を作りあげることにはたまらない魅力を感じそれに没頭していた頃だった。しかし出産は私にとってその仕事から降りることを意味していたのだ。仕事への未練は後々までわが子に対して「この子さえないなければ」といううらみと「あんなに大事にしていた仕事を捨てた代わりに得た子どもなのだ」という強い愛着とのアンビバレントな感情を生み出す。

こうして私の「三十以後」が始まる。私だけの人生設計はもはや不可能になったのだということを悟るのは、子どもが生まれてからのことである。

▽//鐘の鳴る丘//に思う

陣痛微弱で、まる二日苦しんでようやく子どもが生まれた。「男の子ですよ」と聞いて嬉しかった。この子はあの生みの苦しみを経験せずすむという安心感(このような感じ方はこのときすでにわが子との同一視が始まっていたことを示しているようだ)

と、どうしても男の子を欲しがった夫との間に「男の子が生まれれば一人でもいい」という約束があったので「もう生まなくてすむ」という解放感に私は身をひたした。

退院した日から私はこの小さな生き物にすっかりとからみつかれてしまった。産休期間の三か月は、ミルク作り、入浴、オムツ交換、洗たく、日光浴に追われて、新聞も読めなかった。無心に眠っているときは可愛かったが、その他のときは「しななければならないこと」ばかりがあって可愛いと思う余裕がなかった。保育園に子どもを託して産休後はじめて出社したとき、子どもへの思いは残ったけれども、二十四時間子どもにしばりつけられている生活から解き放たれた喜びは大きかった。だが翌々日から子どもは激しい下痢をして保育園を休まざるをえなかった。これを皮切りに次々と病気をした。母体の免疫が残っているはずの生後六か月以前からひっきりなしに病気をしたことは、母乳を与えられなかったせいではないかという苦い思いと、子どもを犠牲にして働いているのではないかという疑問を、私に常に抱かせることになる。

ミルクの飲みが落ち機嫌が悪くなると次の日は必ず発熱するのだった。子どもが病気になれば核家族のわが家ではどうしても私が欠勤して看護に当たる破目に陥る。それが重なると子どもの顔色に神経質

にならざるをえず、早く治したい一心で必要以上に医者に通った。そして医者に「母親が働いているから子どもの心身に悪い影響を与えるのだ。お子さんが病気をするのはお母さん、あなたのせいです」と怒られるのだった。

激しい嘔吐と下痢からくる脱水症状を防ぐために十五分ごとに一さじずつ白湯を飲ませる、泣く子を胸に一晚抱き続ける、そんな日々の中で私は、子どもを後手にかばって、さまざまな障害に抗してスツクと立っているただけだししい姿を自分の中に見い出した。

当時よく地震があった。地震のたびに私は職場にあって遠く離れた子どもに思いをはせ胸を痛めた。

「いくつになったら親がいなくなってもなんとか生きのびていけるだろうか？」そのときに思い浮かべるのは「鐘の鳴る丘」だった。戦災孤児が盗みをしてでも子ども同士グループをつくって生きていくそのたくましさが強く印象に残っているのだが、「あの子どもはいくつくらいだったのだろう。小さい子は五十六歳だっただろうか」などと考えるのだ。子どもがせめてその年齢になるまで私は何としてでも生きなければと思った。子どもへのそのような耽溺の仕方は「子ども嫌い」を公言していたかつての私を知る人々には驚きだったらしい。

けれども私はよく知っていた。小さいもの、幼い

ものを溺愛する自分の性を。実家で、何匹かの犬を飼っていたが、私はその中の一匹を特に愛して、その結果、その犬をわがままなどうしようもない犬にしてしまった。まして無責任な溺愛が人間をいかにダメにするかをわかっていたからこそ、私は子どもを生み育てることを恐れていたのだ。

私の子どもへの感情の中に愛執ともいふべきものがあることを否定できない。だが同時に既述のように、子どもは私自身の生を生きることを邪魔する存在でもあり、早く子どもから自由になりたいと強く願ってもいるのである。

▽真夜中の疾走

執筆者との打ち合わせのあとの知的興奮に身をゆだねて真夜中、疾走する車に乗る、そういう時間が私はとても好きだった。出産後、職種が変わって、今はまったくそんな時間を楽しむことはなくなった。しかし私の真夜中の疾走はわずかだが続いている。深更、子どもも夫も寝静まった後、私は別室で本を読み、久しく会わない友に手紙を書く。育児も家事も忘れて、過去に未来に、あらゆる場所に、そしていろいろな人の心の中に入りこんでいく。ほんの一时间か二時間の疾走。この私自身のための時間は、自分の睡眠時間を削ることによって辛うじて得られる。最近子どもに夜起こされることがなくなったのでこの時間はかなり保障されるようになった。だ

が昼間となるとなかなかそうはいかない。仕事にあってどうしても今週は休みたくないなと思つてゐるときに限つて子どもの具合が悪くなる。母親が子ども以外のものに心を奪われたとき、母親の側に生じる時間的・精神的余裕のなさが子どもへの目配りをどうしてもおろそかにしてしまうのだらうか、まるで子どもは病気をすることによって母親の心をつなぎとめてようとしているかのようだ。オペラ歌手の島田祐子氏も「年に数回のオペラ公演や緊張するコンサートの前に、必ず（双子の）どちらかが病気になる」悩みを書いて「オペラ歌手などという職業をもつてしまった自分をのろいました」と自らを責め、私が心に受けた打撃以上に、見も知らぬ人たちの手にボーンと渡されたときの彼ら（双子の子ども）の全神経で受けとめた「痛み」は治ることがないのかもしれません」と子どもたちの心の内奥を思いやつておられる（朝日新聞一九七八・八・一三）。

子どもの病氣やけがが親を手元にひきとめるために生じるとは思えないが、何とか母親を自分のそばにひきつけようと欲する子どもと、母親である私のしたいことの間で引き裂かれ、無念の思いをすることが何と多いことか。

仕事が忙しく一日でも休みたくないときに、いつまでも子どもの病状がぐずつくと私はいらいらしてしまふ。「どうしていつまで咳をしているの！」い

つになつたら治るの！ お母さんを困らせるのはいいかげんにしてよ」理不尽と思いつつ、私はヒステリックに叫んだり、寝ている子どもに手をあげたりしたことが何回あるだらう、子どもの泣き声は、私をますます凶暴にさせる。「子殺し」も決して無縁な事柄ではなかった。

「お母さん、ボクまた風邪ひいてごめんなさい」幼い子どもが、高熱に目を充血させながら言つたとき、さすがの私も胸をつかれた。「子どもの生命より大切なものが今の私にあるうか。これ以上何を私は望むのか」。けれども狭い部屋の中で、子どもと見つめ合つてゐる生活は、短い産休の間でこりごりだった。子どもの病氣に神経過敏になつてゐた私が重症の「育児ノイローゼ」に陥らずにすんだのは、私が働きに出ることによつて、子どもから離れた時間・空間を持ちえたせいである。もちろん社会的労働の場が、全面的に自分の空間だとは言ひ難い。だが少なくとも子どもとは隔絶した全く別の世界である。この異質の世界の空氣を吸うことで、私は新たな氣持ちで子どもとかかわれたのだと思う。特に私の場合、同じ職場に母親労働者が数人いて、子どもの病氣、離乳食の献立、衣服の交換、育児に関するさまざまな情報、知恵を交換しあうことができ、心配事や不安をひとり胸にかかえこまずにすんだのは大きな幸せだった。

▽純行に乗り換えて

私の勤務している会社では毎年春に賃金が改定されるが、その際に査定が行なわれる。すなわち、一年間の勤務態度に成績がつけられ、それに応じて賃金が定められるわけである。組合の方針で、全組合員の賃金が公開されているので、各自の査定幅は明白にわかる。この査定が会社側の一方的・恣意的なものであり、賃金差別によって労働者を相互に競争させ分断をはかるものだということを十分わきまえていても、査定が低いことは、全くのところ自分の全人格が否定されたような恐ろしく惨めな気持ちになるものである。小さな人参を鼻先にぶらさげて馬車馬のように走らせようとする会社側の目的はある程度成功しているが（「査定反対」は組合のほとんどお題目に終わっている理由と考えれば明らかだ）、一方でその狙いとは裏腹に、労働者の働く意欲を減退させ、精神の荒廃をもたらせている。

出産後、私は一貫して査定が低い。母親労働者はすべて低いランクに位置している。妊娠時短、産休、育児時短等、会社側が「世間並み以上」と自負する「母性保護」ではあるが、査定項目の「総実労働時間数」にひっかかって、マイナス査定になってしまふ。残業ができず、産休後も子どもの検診・病気の看護のために欠勤・休暇・遅刻・早退の絶えない母親労働者は「欠陥労働力」なのである。

「あの人は査定を良くするために子どもを生まないのよ」と同性の労働者から陰口をきかれていた私が、もし子どもを生まない道を選択し、エリート・コースを突っ走っていたら（それは無論、いつでも転落の可能性をはらむのだが）、かつての私がそうであったように、「母性」の保護のための十時以後の女子労働を禁止する労働基準法の規定をわずらわしく思いながら、深夜の疾走を続けただろうし、「生休」は男女平等に反する過保護規定だと考え、「男並み」に働くことに腐心したにちがいない。

しかし、妊娠・出産・育児という事態はそれを不可能にする。出産後の最初の査定を見たとき、私はにわかにつまずいたような気がした。つまずいて一度は虚空をつかんだ手が「女が働きながら子どもを育てることの意味」を必死に探し求めだした。真の男女平等と母性保護は相反する理念なのか。女性のみには育児責任を負わせるとすれば、婦人労働は少なくとも育児に携わる時期においては、必然的に男性の労働力より劣ることになるのではないか。もし劣等労働力たることに甘んじることをあくまでも拒否するとすれば、女性もまた、子産み・子育てを拒んで、男性並み、否、男性以上に働かねばならないのではないか。〃人類の生命を維持・継承するために、〃などという課題は別として、子どもを生むことは、個人の意思に任せられるべきなのに、その部分を切

り捨てることを余儀なくされたうえで男性と同等の地位を獲得した一握りの女性には、他の大多数の女性にとって、//仰ぎみる輝ける星//ではあっても、遠い手の届かない存在でしかない。そうではなくて、本人の意思に基づいて、結婚・出産・育児をしつつ男性と平等に伍していくためにはどういふ条件が必要なのか。その条件の一つとしての育児の社会化の内実は何なのか。そして女性が追いつこうとしている目標たる男性は、本当に人間らしい生活をしているのか。

この中でぶつかったのが「子育ては母親がすべきもの」という余りにも強い一般通念である。これは//三歳までは母親の手で//といういわゆるスキップ論に始まって、子どもの自殺、家庭内暴力、登校拒否の原因は、親（特に母親）の過保護にあるとする現代ジャーナリズムの論潮に至るまで一貫してある。私も医師に親の姿勢を再三問われたことは前述の通りである。確かに母親の過保護が問題の要因であるとしても、なぜ母親が子どもに対して過保護にせざるをえないのか（母親もまた子どもに依存していることは、母親が自分以外の人生に自分を賭けていることを示す）という社会的背景を無視して画一的に語られることは、全くの高みの見物の評論であり、その際に、往々にして父親の責任の問題が欠落しがちなことも大いに疑問がある。まして登校拒

否・非行・自殺の背後には、学校や彼らを取りまく社会状況など、複雑な要因がからまっているはずであるにもかかわらず、個別の家庭、しかも母親の責任に封じこめるのはなぜなのだろう。

十二歳で自殺した岡真史君の母親岡百合子氏がその遺稿詩集（『ほくは十二歳』）のあとがきに「息子が死んでから、私が一番たまらないのは、母親の抱きしめ方が足りなかったのではないか、と思うときです」と記されているのを読んで、人は「そうだ、母親のあんたが悪いのだ」となおも指弾するののだろうか。

すべての病根を母親に求める態度こそ、子どもを一人の独立した人間として認めず、母子関係のフタクターのみを重くみる母子一体論にほかならない。そしてこの母子一体論に科学的根拠を与えているのが心理学だと思われる。私がなぜそのような結論に至ったのかあえてここでは触れないが、目下の私の知的関心は専ら心理学に傾いている次第である。

新幹線に乗っていたつもりが、子どもが生まれて、重い荷物を背負って、鈍行に乗り換えたような気持ちが出てならない。はじめはまどろこしくて憂鬱だった。だがゆっくり走る汽車からは、景色の細部が見える。「いいさ、じっくり見て、よく考えるさ」と覚悟を決めて居直ることができたのはごく最近のことである。子どもの成長にともなって次々と新し

く展開される問題にふりまわされ傷ついても、それを立ち上るバネにしていきたい（子どもにもそれを切望する）。そうすることによってのみ、私は自分が子どもを生み育て、そして働き続けていることをプラスにカウントできると思うからである。

私に「未来」をプレゼント

としてくれる

幾代 昌子

私は結婚も出産も経験なく、長期にわたる育児の経験もない。だが子どもの存在はとても重要で、子どもたち抜きに自分の生き方を決めることは難しい。子どもたちがいるから、その子らがまた子どもたちを、彼らがまたその子らを―無限に繰り返かえず「生」と「死」の連続があるから私は「今を生きる」。その無限の連続を信じるから、信じていたいから、私は今を生きたいし生きることができると思っている。

*

私が子どもとの関係を問いつめるようになったのは、「あんふぁんて」というグループを作る言いだ

しっぺの一人になったこと、このグループに参加した子どもを持つ女たちとの出会いによる。このグループは三年前、子どものいる女ももっと自由にいきいきと生きられないものだろうか、出産・育児はこれでよいのだろうかということから、もつと女同士助け合ったらどうにかなるかもしれない、否どうかしなければ……というところからスタートした。「あんふぁんて」という名称は、フランス語で、子を産む、考える、創り出す、の意があり、妊娠・出産をキッカケに考える、育児中も自主的に行動する、出産・育児を日のあたる場所に、それらを社会的価値あるものとして認める方向をめざして活動する等、さまざまな意にふくらませ、「あんふぁんてしよう!」は、会員間の合言葉ともなっている。

現在会員は約七百名、良くも悪くも組織らしからぬ集まりで、構成会員次第で、いかようにも変化してしまうのが特徴。四十名―五十名の地域グループの活動を中心に、共同保育、ヘルパー制（子どもの預け合い）を実施しながら、情報誌の発行、学習、けいこごと、働くこと、各種催しを企画したりもする。それらを通して各々が女の自立をめざし試行錯誤してきた。今までは自分と家族、各グループのことで精いっぱいだったが、今年からやや余裕がでてきて、活動を広げよう、世の中に声を出して行こうという動きが強くなり、国立婦人教育会館への子連

れ宿泊の要望、国鉄新幹線へビーコーナー設置の要望と署名集め等、具体的に動き始めている。

*

私が「あんふぁんて」にかかわったのは、多分におせっかいな性格のせいだ。それに、いつものことながら、新しいこと未知なことへの好奇心、成るか成らないかわからない、いかにも確率の悪そうなものへの賭け。だが、そんな気持ちを駆り立てる情熱の地下も十分にあった。言葉にするには、かなり漠然としていたが。ともかく当時の私は男のつくる社会に疲れ始めていたし、いろいろ教えてくれたり、助けてくれる男たち、尊敬しうる男たちもいたが、全般には男たちにうんざりもしていた。直接男に食わせてもらったことはないにせよ、働くとか稼ぐことと自体男社会の基盤に成り立つ以上、そこで得ている「経済的自立」、それによって支えられる「私の自立」、これは一体本物なのだろうか、とも疑いだしていた。また、男からも女からもはみだした者として、生きにくさは十分承知していたものの、それにしても住みにくくなってきたという感もあった。なぜだろう？ あれこれ考えているうちに、これは世の全体が次の世代のことなど考えずに動いて行くのが原因なのではないかと思うようになった。しかも、その動きに私も荷担している、私の自立がグラグラする、手のひらからハラハラとこぼれて行

く、そんな思いで見回すと、いかにも子育てが大変な時代に思われた。「あんふぁんて」の仲間たちと出会ったのは、そういう時だった。

私の漠然と感じたこと、……ではないかと思ったことを、子どものいる女たちから、私は実感として受け止めるようになり、また想像以上であることも認識させられた。かつては私にとって全く関心のなかった女たち、まともに結婚し、まともに子ども産む女たち、そう、特に専業主婦と呼ばれる彼女たちの生き方に強くひかれるようになった。いま直接子育てにかかわっている彼女たちこそ、いちばん見えているに違いない、見えやすいはずだと。そのことも最近確認されることが多くなった。私が男の世界で働いている所から見えるものと、彼女たちが夫や子どもとの関係を通して見えるもの、つまり私たちの自立を阻むものは何かと——。いろいろあって、次の世代を考えて生きる、かわりあって生きることはすばらしいと確信するようになった。

私は子どものいる女を助けるとか子どもたちのためにではなく、私自身の生き方のために、私の自立を問い直し、確立するために「あんふぁんて」に夢中だった。現在もこれからも私自身のために参加し続けることだろう。

*

終末論に踊らされ、いつ死んでもいいわ、とうそ

ぶき、男社会のお余りの部分でチヨロチヨロとデカダンに生きることは、へそ曲がりの私にびつたり的美感覚もあつて、完全には否定しえない時期もあつた。しかし、私の無意識からめざめてくるものが、次第に、そういう生き方を許さなくなつてきている。

私の意識、無意識の中で「私」の占める部分なんて、ほんのわずかなんだと最近思うようになった。大部分は人の歴史、女の歴史で占められている。確かに血縁の血の流れは強いかもしれないが、その血も各時代の背景の影響なしには考えられない。私の意識は私だけが持つもの、創るものではないのだ。だから、私は私の意識を同じ世代の女たちと創つて行きたいと思うし、私が子どもを産まなくても、私と共に生きる世代を通じて、私の意識は人類の続くかぎり流れて行くにちがいないのだ。

人類最後の日までつき合おうなんて、私も相当の欲ばりなんだと思う。だが、子どもたちは黙々と「未来」をもつてやつて来る。「子どもたちに未来を」ではなく、私に「未来」をプレゼントしてくれるのだ、うれしくって年甲斐もなくワクワクしてしまう贈り物。

最後の日なんて絶対はないんだって、私の生き方を、私の意志を、この私の世代の意識の中にそっと紛れこませて欲ばり続けよう。それがすてきな贈り物への、せめてもの気持ち。

オンナコドモの荒野を行く

“熱い関係”

保 科 朋 子

「子ども」という言葉を意識するやいなや、言葉も意識もすつとんで、そんなものとははるかに次元を異にする、重い重い何かが、私自身をうずめつくす。そして、二人の、私自身が生んだコドモ、いま四歳と三歳のオトコノコが私自身に重なり、入り込み、まるで私の肉体は彼ら二人に自由に占拠されているようだ。

なぜか生もうと思っていた

いつのころからだろうか。私はきつと子どもを生むに違ひなかった。十七歳のころぶつかった、人間とは何なのか、人間はなぜ生きるか、の生きるか死ぬかの大命題から、楽観的虚無主義をもって卒業し、生きることに決めたときから、私の最大の興味は人間そのものとなったのと、私が、きつと生むだろうと思ひ始めたのとはどこかで通じているような気がする。

それと、私の家は、いわゆる城下町の旧家だった。やたら「やってはいけない」ことが多かった。「こうすべき」ことが多く、おのおのが自由に生きられる部分は少なかった。長男の兄は兄として決められていることがあり、兄二人、弟二人の間で女の子一人であった私には、女の子の不自由さを身をもって感じるが多かったし、何といつても、嫁である母は、嫁というすでに敷かれたレールの上を、一歩もふみはずすことなくひたすら歩まされているようであった。

私は、子どもたちが、母が父が、みんなが、自由におおらかに、個人を生ききるような生き方を夢みた。私が子どもをきつと生むだろうという予感、そのあたりにもあったような気がする。人間を知りたいという旺盛な好奇心と、子どもを自由に育ててみたいという欲求が、私の「子ども」を生みたい理由の柱だったと思う。

また、封建的な家風の中で、ことごとく反動的に、懷疑的に成長していた私は、物心ついたころから、今でいう女性解放の思想らしきものができていた。「職業婦人になること」が幼い頃の私には自明のことであり、「お嫁さん」にならないと思つてたわけではないが、「お嫁さん」になる、ならないより「職業婦人になること」のほうが、大人の私を描く、より実感的な夢だった。

小さいころからの夢「職業婦人になる」と、いつのころからかの「私は子どもをきつと生む」——それもとくさん子どもがほしかった——の二つの私自身の未来を予測しながら、その二つを同時に可能にする現実的な方法を見い出せないまま、高校・大学を卒業した。

この人の子どもを生もうと思った

子どもたちを生むきっかけとなったのは、彼、子どもたちの父親との出会いである。恋をしたことも何度かはあり、ボーイフレンドにも恋人にも、質・量ともに不足はなかったが、「この人の子どもを生もう」と思つたのは、現在まで、後にも先にも、彼が初めてであった。

本当にそう思つたのであった。それが何であるかはわからない。確実に私は、私が生む子どもの父親を選んでゐた。結婚の相手として選んだのではなかった。結婚について、それまで深く考えたことはなかったが、そのときも、//結婚//などは決して望みもしなかった。

かくて私は、お酒と煙草をきっぱりやめた。

こうして、子ども自身のことなどより、私の都合、私のエゴで、子どもの出生は決まつた。

大きいおなかで何でも見てもやろう

妊娠準備OKであつても、すぐに妊娠するものでもなかった。心に決めてから初めてやってきた生理にがっかりした自分に、我ながら驚いた。

間もなく妊娠した。

つい二か月前までは、私がはらみ、大きなおなかをかかえる体験が、こんなにもすぐやってこようとは、夢にも考えなかったことだ。にもかかわらず私は、すぐさま考えた。出産とはどんなことか。子をはらんでいるとき私はどうか、何かがどういふふうにか変化するのか。よく聞く「母性」なるものは、いつ何時、どんな顔で私自身に現われ出てるか。女・母性・母なるものを、わが身で探求する絶好のチャンスだと思った。私は意識的に、自分自身を客観視した。おなかに子どもがいるということは、かなり生物的に「生きている」という実感を伴うものであった。ましてそばに、恋する男がいてのことだから、心身の充実感は、言いようのないものだった。

気がついたことは、//自然におなかをかばっている//ことだった。ころびそうになったとき、気がつくどどちらかの手がおなかをかばい、全身がおなかをかばう姿勢をとっている。重い物を持っても、おなかに力がかからないような体勢をとっている。ひよんなことで体勢が変わるとき、体が、私の意志とは関係なく、勝手におなかをかばっているのに気づいたとき、//本能//とはコレかなと思った。

しかし、ツワリもほとんどなく、元気に飛び回っていた私は、臨月まで、いつでも走り出せそうな感じで、体は想像していたより身軽で自由だった。

ただ、これも自分の意志とは全く関係なく、確実に大きくなっていくおなかをかかえている自分が、いかに動物であり、動物の雌であるか、あのときほど実感させられたことはなかった。そうもしていられないから、出産まで外に出ていたけれど、本当は、人目につかないように、どこかで出産日までじっとしていたいというような気持ちだが、どこかにあった。

しかし、私の精神に、全く変化はなかった。そして、おなかの中の赤ん坊への気持ちはと言えば、すごく興味あるヤツだったけれど、私自身には関係なく、一人でニョキニョキ大きくなり、胎教などと、空をつかむような頼りどころのない方法でしか、私の意志や気持ちに、彼に近づけそうなことはなかったし、おなかにいるとき、すでに彼は他者であり、「腹は貸しモノ」であることを実感した。

こうして、妊娠期間中、私は自分の精神と肉体に耳をそばだてたが、自分が動物であること、その肉体の充実感を実感したが、//母//らしく私自身が変化する様子は、どこにも見られなかった。体勢が変わるとき、おなかを保護する自然は、母性本能というより種保存の本能と言ったほうが、びったりするものであった。私の精神は、限りなく自由だった。

生んでしまつて子どもにわびた

病院の分娩室で、想像を絶する生みの苦しみを体験しながら、一夜が明けた。私が苦しんでいる間に、何人かの赤ん坊が生まれた。産声を聞くたびホロホロと涙がこぼれた。あれは何だったのだらうと思う。時を切り、自分の痛みを一瞬忘れて、ひとりでに涙が流れおちた。

自分でやつと生んだときは、涙など出てはこなかつた。痛みから解放された肉体の落差に心がさまよつていた。助産婦さんが、すぐに赤ん坊を見せてくれた。はなはだしく距離があった。人に聞いたり読んだりするほど、感動的なものでは全然なかつた。「あなたの赤ちゃんですよ」と言われても「そうですか」としか答えようのない関係のような、おなかのなかであばれていた彼が、突然おなかの中からとび出して、私に存在証明をしたような、ひどく他人行儀な初対面であつた。

「お乳が出るように、ゆっくり休みなさい」と、看護婦さんに言われたが、午前十一時四十分に出産して、その夜一晚眠れなかつた。前の晩は分娩室で苦しんでいて一睡もしなかつたのだし、産後の疲れが出るはずだったのに、夜が明けるまで神経が冴えわたつていた。こんな社会に命を生み出してしまった恐れを、初めて実感した。小さい命のかたまりのよ

うな彼が、あわれにも思えた。彼の命を生み出してしまつてから、私は彼の命の重さに圧倒されそうだった。暗い病室でまんじりともせず、新生児室にいる彼を感じていた。

やがて、一夜明けて、彼がむかえる初めての夜明けの光のなかで、私は彼に詩を書いた。

二人目の子供を生んだのは

初めての子を生んで、私は初めての体験をした。主婦というものを、主婦の状況というのを、自分の生活サイクルで初めて知つたのだった。

主婦の状況——社会システムがあり、女の意識があり、男の意識がそれを作っているものと思うが、私はそんなものに落ちこめるわけがなかつた。「男は以前と変わらず、女ばかりが子どもに振りまわされて……」のあのケースで、私も何度も彼と論争し、ケンカし、憎しみ、いがみ合つた。子どもが生まれると間もなく、それとは別に新しい状況が出現したのだった。

私は、私自身を生きていく。やらなければならぬことをし、私自身が創りだす人生を生きていくと、あらためて彼と私自身に言い切つてみれば、私も彼もかなり自己主張の激しい人間だから、いつ何時、親一人子一人にならないとは限らない。母一人子一人になつたなら、私はその関係の重さに、からめと

られそうな気がするし、私が生きたいように生きられるよう、子どもの相棒として、どうしてももう一人だけ兄弟をつくっておきたかった。

これが二人目の子どもを生んだ本当の理由なのだ。

いつかは仲間になりたいけれど

下の子が一歳五か月、上の子が一歳九か月のとき、職場復帰した。どんなにその日を待ったことか。一日も早く、仕事をする自分を取り戻したかった。子どもたちが日々成長し、次々に新しい発見をさせてくれても、当然のことながら、その喜びと私の仕事は別のものだった。

私が子どもたちをかかえて走り、時に一緒に走れない子どもたちは、私にぶらさがりぶらさがり、どんな状況のなかでもけっこうひたすら生きてきた。

//子どもは、さまざまな社会状況・時代背景のなかで、与えられた環境のなかで、精いっぱい生きるしかない//のだとつくづく思う。できるかぎり、子にいい環境を作るのは、社会のつとめ、大人たちのつとめ、親のつとめだとは思いますが、今の社会で母と父と子がともに生きていくとき、一番いい子どもの環境は何なのか、決して断言はできなかったし、今もできないが、子どもも私も、多少つらい思いをしなからここまでできてしまった。

仕事のやむをえない事情で、子どもとの約束の時間に帰れなかったとき、子どもは預けられた私の友人宅で夜中になってもただ一人、居眠りしながら玄関先で、私が帰るまで待つと言って、指をしゃぶりながら腰かけていた。私の友人やら、子どもを預かってくれる人とはばかり口をきいて、私を避け初めた危険信号のときもあった。

そんなとき、私は友人たちの非難の的となった。子どもを犠牲にしての何が仕事かと。私は「誰が何と言っても、私は子どもに責任を取る覚悟がある」と、一種異常な精神状態で言ったことがある。――「子どもに責任を取る」などとは、いかにも子どもに対して不遜な言葉だ。いまはそう思う。

しかし、子どもは三歳と四歳になり、楽しい関係ができつつあるいまでも、そんな実感はある。何しろまだ三歳と四歳であることをいいことにして、私は彼らを溺愛しているのかもしれない。私の心の奥深くでは。

子どもは別の人格で、一個の人間で……、そんなことは百も承知だ。彼ら二人は、私とは別の人格を持つているばかりか、全く違った二つの個性の発展は、見るだけでおもしろい。

しかし、今はまだ私のモノ、なのだという実感がある。私の体は、あるとき彼ら二人でいっぱいになり、その実感は恋する充実感ともよく似ている。

日本の女性運動を どう展開するか (その2)



出席者

小沢 遼子

(浦和市議)

紀平 悌子

(婦人有権者同盟)

斎藤 千代

(あごら京王)

佐山 サチ

(新宿リブセンター)

高橋 ますみ

(あごら東海)

田中 寿美子

(婦人問題懇話会
参議院議員)

中島 通子

(国際婦人年をきつ
かけとして行動を
起こす女たちの会)

舟本 恵美

(政治を変える
女たちの会)

松井 やより

(アジアの
女たちの会)

水沢 耶奈

(婦人民主クラブ)

山田 朋子

(あごら北東京)

司会

連帯の共通項を
まず求めよう

司会 この間のティーチンは、最後に盛り上がったんですが、状況分析に終始し、方法論にいくところで終わってしまいい大変残念でした。しかし、第一回目でしたので、やむを得ないというか、あれも必要なプロセスだったのではないかと思います。

きょうは、前回ご欠席でした水沢さんにお考えをうかがいたいと思います。

水沢 十八号の記事は大変おもしろく拝見しました。婦人民主クラブVからでてくるのは「女たち」じゃなくて、「ご婦人たち」だ(笑)。団体が古いですからね。

私たちのところで「女たちの問題をもう少し本気になって捉えなければ……」と考えたのは、六〇年代の後半に学生運動が起こり、ウーマンリブの運動が起こった頃からです。それからは女の問題はずっと湧き出していましたね。組織の中でも「主婦とは何か」「性の解放とは何

か」とかが追求されるようになり、私たちともかく、改めて女のドロドロした問題の中に足を踏み込んで、そこから何かを掘りおこしていこうと模索をやつてきているのです。非常に古いかも知れないけど、それまでは階級解放と婦人の解放を重ねて考えてきた。これは今日でもやはり行動と闘いなしに女の解放はあり得ない、どうしてもこれが根っこにあると思います。いろいろな模索をやつてきて「原則的にはどうなのか。原則に迫っていこう」と婦人部ですつと討論しているのですが、なかなか運動という形にならないわけなの。ただ、基本的には女が自立して働ける労働権の確立——というか、それを目指して女が自由に働ける条件作りをするのだ、と考えて、母性の保障・性別役割分担の問題などを見直そうと考えているのですけどね。

七〇年頃に、△婦人民主クラブVの若い人たちは「私たちは男を愛したい。子どもも産みたい。お乳も飲ませたい。そして自分の能力をフルに發揮したい。そういう生き方をしたいけれど、欲張りだろうか、無理だろうか」としきりに言っ

ていた。私はそこに女の望みの原点があると思う。それにはやはり、それを満たすための条件作りが必要なのです。どこから手をつけるか、何を運動にしてゆくかがいまの問題なのです。

この前のを拝見して「ダイナミックな運動に」と、確かにそれを望むのだけれど、何か「これをやるうではないか」ということが共通にならないとダイナミックな運動にはならないのではないかと思いました。それと、中島さんと田中さんのおっしゃる「ダイナミックな運動」の内容が違うのではないか、具体的な運動にする場合、中島さんはどのように考えていられるのかと思つたのです。私どもは、オーソドックスかも知れないが、いろいろな人の共通点・共通項があれば一つの運動にできる。体制の中から何かを確得し、かち取つていく——たとえば、制度化していくことでもいいのではないかと思つています。田中さんのところで「男女雇用平等法」が一応用意されているけれど、あれをみなさんのところではどう見ていられるのですか？ あの方法でも、それぞれどう評価し、どう見るか、

共通のテーマになれば、そこからは何かが生かされてくるかも知れないと思うのですが。まだ何か湧き出る一つの項がないような気がします。

司会 大変に良いご指摘だと思います。ダイナミックな運動の内容の確認について中島さんいかがですか。

中島 ダイナミックな運動について、田中先生と私との間に認識の違いがあつたと思うのですが、「これからどうするか」という場合は、それを二つの異なつた方向としてとらえてはまずいと思うの。

戦前から、女性の地位の向上という言葉で受け継がれてきた運動が、必ずしも女性の全体的な在り方を変えるまでいていない原因は何であるかを考えると、「女性の地位の向上」という言葉が非常に形式的で、ひとりひとりの女性の生活からかけ離れた建て前だけで議論してきたためではないか、との問題意識が私にはあるのです。その建て前をほんとうに本音と一致させる運動がなければ、女性の在り方を変える力にはならないと思う。いろいろな運動をしている人たちが、「自分は違ふのだ」と言う。まず、違ひ

の意識から出発していろいろな人たちの違いを明確にしていくなかで、自分自身のアイデンティティを確立していく。そういう独自の運動を行なっていくことを前提にして、違いはあるけれど「じゃあ共通項は何だ」というところで連帯を始めるなければいけないのではないだろうか。これを抜きにして、言葉の上での女性の地位の向上と言ったところで、中味は必ずしもはつきりしない。

言葉の上で語られたものと、自分との違いをはつきりさせる必要があるのではないか。これなしにはほんとうにダイナミックな運動はないのではないか。これが、この前言いたかったことなのです。

「しかし、こういう点で共通なのだ」と共通項を見出し出していく運動をその次に行なわなければいけない。その第一歩として、この席上でやっていきたいし、来ていない人たちをも含めてやっていきたい。ですから、連帯の必要はないと言っているわけではないのです。

司会 よくわかりました。田中さんと対立的にとらえるということではないわけですね。では続いて、やはり前回ご欠席

の佐山さんに運動をどのように考えているか、これからどう連帯していけるか、また連帯していけないか、その辺をおうかがいしたい。自分たちの運動についても結構ですが……。

佐山 実は、今日ここに来るなんて思ってもいかなかったものですから……。中島さんに昼、偶然お会いしてぜひ来るようにと誘われまして、何も考えないで来てしまった状態なんです。それに、今後の運動や連帯についてどう考えるか、とたずねられましたも、どうも私にはただ漠然として、何をどう考えてよいやらわからなくなってしまうんですよ。

ただ、私が今考えられることと言いますと、私たちが昨年四月に休館した新宿センターのことですね。つまり、「なぜ私たちはリブセンを休館にしなければならなかったか」という、まあリブセンの総括とでもいうんでしょうか、その作業を一緒に作ってきたメンバーとする中からしか、今の私にとっては今後の運動についても考えられない、という感じ。

中島 なぜ八新宿リブセンターVを作ったのか。何年か経て、こういう結果にな

ったことについて、全部は無理としても、一部分でも話していたらけると、今の問題に繋がると思うんだけど。

佐山 当時は女のための情報センターらしきものはなかったですね。リブのグループといっても、事務所を持っているグループも少なかったように思います。でも、いろんなグループが続々と生まれつつあったわけで、それらのグループ同士を結んでいく情報センター、そして女にとって必要と思われる情報や知識を集めて、それらをセンターに来る女たちに提供してゆくような情報センターが必要じゃないか。センターを作ろうという呼びかけのもとにリブ大会を開いて、その結果として八リブ新宿センターVが生まれたわけですね。

センターでは情報誌「リブニュース」の発行や運営グループによる避妊・中絶・出産の相談や中島さんによる法律相談・ティーチインといろんなことをやっていました。リブセンとしては主に、当時国会に上程されていた優生保護法改悪案の阻止闘争を中心にやってきました。その中で、改悪阻止を訴える方法としてハド

テカボ一座Vが生まれて、ミューズカルを各地で打ってきたわけで、ほんとうに忙しかったですね。

運営方法は初め、六―七人がセンターに住み込んで事務を交替で行ない、運営グループは週に一―二回来てティーチンなどをやるという方法でしたが、専従に情報が集中しないようにと、昼夜二交替のローテーション方式に変え、専従もセンターから出たわけです。ところが、そのローテーションがだんだん難しくなってきたわけです。私は印刷屋を始めましたし、昼は当然ローテーションに入れない。夜も残業という按配でしてね。せめて夜だけでもセンターを開けようというわけで、しばらくはがんばってみたわけですが、唯一の収入源のリブニュースの発行も難しくなっていて、このままセンターを開けていても赤字がふえる一方だから、とりあえずセンターをお休みして、今後のことを考えてみようということになったわけです。

私個人が、休館にしたほうがいいと思ったきっかけは、まあ赤字のことは最大の要因でしたが、何か、知識としての女

性解放を求めてくる人と、利用してやろうという人とはつきりと二分してしまいい、私たち自身がふくらんでいくような出会いが持てなくなってきたということでした。ね。「大学の卒論で女性解放運動をやりたいので資料をください」とさんざん話をしたうえ、リブニュースを一つも買わずに帰って行くとか、夫の暴力から家出して来る人でも、「とにかく何とかしなくちゃ」と皆で話し合っても、洗たくを全部すませたら夫の家に帰ってしまった(笑)とか……。もちろん全部の人がそうだったわけではありませんけど。消耗することが多かったんです。でも、私はこれは来る人の問題というばかりじゃなくて、やっぱりセンター自身の性格の問題だろうと思っていますけど。

司会　で、今やっているのは、アドテカボVとAあいだ工房Vですね。

佐山　そうですね。女だけの印刷屋Aあいだ工房Vの維持とアドテカボVの公演ですね。

中島　アドテカボVの公演は、どれくらいやっているの？　この二年では。

佐山　昨年は、名古屋で一回、京都で一

回、今年の一月にA政治を変えたい女たちの会Vの集会で一回、それとフランス国営放送の出演。

内容まで含めた労働権の問題から

まず考えていきたい

司会　それでは、また後ほどちょっとおかけいすることにして……。

この間のティーチンのときにも、共通項を確認するのが大事ではないかとの話がありましたので、具体的にどの辺を共通項にできるかについて話を進めたいと思います。

松井　さっき、水沢さんから女が働く権利が提案されましたが、それが共通項の一つと考えられると思いますが、どうも難しいニュアンスの違いがあるのね。女が働く権利をどのように考えたらいかが。ディスカッションできないかな、という感じがするんですけどね。

中島　問題提起として、松井さんのに付け加えると、働くことに関して二つの考え方があってあります。ひとつは、働くこと自体に興味があるのではなく、もっ

と自由な生き方があるのではないか、働くことは自立の最低の前提条件として必要であるにすぎない。単純化すると、生活のために必要なお金を取ってくれば良いのだから必要悪であるという考え方。それに対して、働くことを自己実現と考え、労働の場に主体的に関わっていく、それなしにはほんとうの意味での女性の労働権は確立しないのだ、そのことを通じて職場自体を変えていかなければ世の中も変わらない、という考え方があるでしょう。このような考え方に対しては、

必要悪的な考え方の人から、いまの資本主義秩序の能率主義の中に自分自身を取り込まれ、昇進・昇格の体系の中に自分を追い込んでいくことになり、全然女性自身の解放にはならないと批判されています。大ざっぱに言う、この二とおり

の考え方があります。また、働く権利闘争の問題として考えると、今まで働き続ける権利として提起されていたわけです。だから、結婚退職制・若年退職制は無効であるなど、働き続ける権利の獲得が中心問題だった。まだ完全ではないけれど、裁判所の判例で

は基本的には働き続ける権利自体を否定してはいけない、というようになってきています。付け加えると、賃金差別も労働基準法第四条で禁止されているからいけない、と。

その中でどういうことが起きているかというと、仕事差別・昇進差別・身分差別の問題。女性を雇うがパートだったり嘱託だったり、差別された労働者として、あるいは仕事は差別された補助労働者なのですね。それがますます強く、固定化される傾向にある。その中で女性の働く権利を考えると、単に外形的な権利、首にならない権利だけを主張するのではほんとうの権利は守れない。仕事の中味、昇進・昇格の問題にまで踏み込まざるを得ないわけです。ところがそれを問題にすると資本主義秩序の中に取り込まれる。この対立する考え方がいま焦点になり始めていると思います。それをつめる必要があるのではないのでしょうか。

司会 大変大きな問題ですね。この問題を先ほどもでした多くの人たちがグループとの連帯の方法、方向と結びつけながら話を進めていきたいと思いますが。

中島 水沢さん・松井さんから働くことが一つの共通項ではないか、と提起がありました。働くことを単に抽象的に労働権と言ってすまされる状況ではないので、つっこんだ内容での合意が必要ではないでしょうか。

松井 私は「働く権利」なんて言う、イメージとしてもあまり固めかしくて、手垢に汚れた感じがするのね。なぜかと言うと、戦前の労働運動の中でもずっとやってきたことね。ところが日本の社会の中で、ちっとも確立しない。

七〇年代にウーマンリブという新しい女性解放運動が入ってきて、「なぜ女は働けないか」、もっと基本的な意識の面につっこんで「女とは何なのか」とまで考えるようになってきた。それがいま、もう一つ飛躍しなければいけない壁につきあたっている。だから「働く権利」という言葉の沈うつさ、しんどさ、魅力のなさに議論するのを避けてきたのでしょうけど……。ほんとうはこの働く権利がちっとも確立されていない状況から、もう一度考え直さなければいけないと非常に感じるのね。

結局、日本の女性の意識そのものが問われている。つまり、自分のパンは自分で稼ぐという基本的なことがなぜできないのか。それに疑問さえもっていない人がまだ非常に多いのね。なぜ、働かなければならないのかと。

司会 これは、かなり現実的な主婦論ともダブってくると思います。

水沢さんは、働く権利を運動の基本に考えているというお話でしたが、実際に運動をやっている、現実的にはどういう状況なのかをもう少し説明頂きたいと思います。

水沢 いま働くことは、資本主義社会の中で働いているわけで、資本に取り込まれる面もあるけれど、そういうことも含めて労働婦人が一番直接、資本との対決の場にあるわけですね。だから、その場での女のあり方は重要で、そこでの闘いは基本だと思う。働く権利を考えるときには、主婦と働いている人と二つあるとは考えないのよ。現在、主婦が自分の選択で主婦でいる事態が現状だから、それはそれとして、その主婦という女が働くこととすれば働けるという条件を作るべきだ

と思うの。だから主婦の問題はあると思うけど、やはり女が働ける条件を作ることであって、「主婦のためにどうする」とは考えてないのです。

司会 他のいろいろなグループ・団体と水沢さんたちがなさってきた運動との関係をどのようにとらえていますか。

水沢 まだあまり考えていないのです。組織の中でさえ、運動のかたちをどう作っていくかがまだできないので。しかし、あごろVでいろいろなグループの何が共通項になるか考えてみる、討論するという計画は良いと思います。意見をかわしていけば何かがでてくるのではないかという気はしています。

何かの法案がでも「あれは社会党がやっているのだから」とよそごとに見る傾向があるのね。社会党がやろうがどこがやろうが、共通の要求であるならばみんなんで取り組めば自分たちのものになるのに、という気がしているわけです。

労働権を

確立するためには

田中 働く権利というのは生存権を保障することで、人間が生きていくために絶対必要なものです。条件を整備して、だれもが働けるようにしなければいけないと思っています。男女雇用平等法案は国会の幕切れで廃案になりましたが、私はショックを受けなかったんです。出すときから、みんながイヤイヤ承認して出しているんです。男性だけでなく、女性の支持者も多くなかった。ですから、廃案になっても事情は少しも変わっていないのです。運動をもっと盛り上げて、次の国会に提出するよう努力したい。

ヨーロッパ諸国の雇用における男女平等の状態を調べに二、三か国に行きますので、必要な資料をいま読んでいるのですが、いかに日本が遅れきっているかを今さらのように再認識しました。英国の性差別禁止法は、単に雇用だけではないのです。教育・サービス・公共施設の使用、建物などについても差別してはいけないという法律なんです。男女同一賃金法とセットにして婦人二法として、男女一緒に何年間もの準備の後に作られているのです。EC閣僚会議では男女だけ

でなく、移民労働者・一般労働者の差別もしてはならないという指令が二年ぐらい前に出ているのです。EC加盟の九か国はどんな法律や制度を政府の責任で作리つつあるんですね。スウェーデンの男女とも取れる育児休暇は有名ですが、英国労働党・ドイツ社会民主党なども育児休暇は男女両方に与えるべきだと主張し、家庭生活と職場での責任を両方で分け合うために、労働時間の短縮を要求しています。一日六時間労働、週休二日、八歳以下の子どもがいる人は週休三日など、相当思い切った政策を社会主義政党で主張している。これらをみて、いかに日本がはるかに後方にいるか、と新たなショックを受けたわけです。

若年定年制・結婚退職制・共働きの肩たたきなどは、西欧で話をしてもうとうてい理解されないでしょう。私たちは働く権利の保障・生きる権利の保障を非常に日本的な特徴の中で進めなくてはならないわけですね。男女雇用平等法案のごときは、ほんの一点突破のための努力にすぎないけど、これをなんとかして運動の手がかりにしたい、と、いま私は思っ

ているのです。意外なことに、廃案にはしたけど、自民党も趣旨には反対ではないそうです。自民党の婦人政策は、労働省の婦人少年局の森山さんのところが知恵を授けている。国連婦人の十年のための準備会・打ち合わせ会に日本は頻繁に参加していて、優等生になっている。

ヨーロッパ諸国は、失業が大問題なのですね、いま。その中でも女性の若年の失業者が一番多い。不況になればなるほど、弱い差別された女性は搾取され、圧迫される。日本は、失業といえは中高年層。それも数に数えられないパートなど。大変特殊な状況の中で職場も得られず、生活権の保障もない。

全面的にいろいろなところからやらなければいけないけれど、とにかく私は雇用の問題と取り組み、女が働く権利を保障されるようにしたいと考えています。

中島 田中さんの話に関連しますが、そういう法律ができる背景には女性解放グループ、特に六〇年代に世界的に広がった女性解放グループが非常に大きな力を出していますね。イギリスの場合も三つの勢力の動きで性差別禁止法が実現したと

言われています。①女性解放グループ②伝統的な人権グループ・自由人権協会③労働組合の婦人部、この三つのグループがそれぞれ動き、要求して、それが一つにまとまって法律を作りあげた。イタリアでも、内容的におもしろく、法律としては一番進んでいる男女の雇用平等法が昨年の十二月にできましたが、父親の育児休業が明記されています。これも、最初に大きな力となったのは女性解放グループで、「全職場の五〇パーセントを女性に解放せよ。育児に関する父親の責任、育児休業を父親に認めよ」が主要な法案の内容となっているんです。

そのような動きが刺激となって、労働組合や政党が動き始める経過が各国にはあるわけだけど、日本ではなかなかそうならないのはなぜだろうか。少し話し合いをしたいんですが……。

働かない女も包み込んだ

雇用平等法の運動

水沢 ハ婦民Vで六一年頃に「出産費を国の手で」という運動を提起したことが

あるんですよ。反響がありましたね。何回も会合を重ね、社会党が取り上げて、法案に出すということになったのです。田中 出産費国庫負担法を出しましたけどね。

水沢 ええ、そこまで行っただんですね。自分たちの要求を法制化しよう、と法案作りの段階に入ると、二の足を踏んじゃうのね。「これが制度になると体制側に取り込まれてしまい、こっちはバカをみるのではないか」と尻込みする気がありました。社会党が一生懸命に「こういうのはどうですか。こういうのはどうですか」と呼びかけるんですが、参加しながら機構が複雑でよくわからないし、どこかで落とし穴があるのではないかと心配だったのです。それはあのととき廃案になりました。そうしたら民社党が取り上げ、婦人労働者の多い全職同盟がバックアップした。各工場の女工さんたちが街頭署名や戸別訪問など、大きな運動をなさったんです。出産費を健康保険でという形でしたけどね。田中 その後、出産費は母性保障全体のの中に入れるべきだということになって、

健康保険法の改正案と母子保健法の改正案との両方で出産費は国でみられるような法案を私たちも社会党から何回も続けて出していますけれど、健康保険で扱うことには医師会が反対しているのです。水沢 健康保険では出ないけど、共済組合とかは出ているんでしょう。

田中 それは出産手当です。

中島 健康保険からも少しは出ますよ。

田中 それは手当にすぎませんね。出産はすべて現物給付ですべきだという考えから、健康保険に繰り入れるべきだと、国際婦人年の年に、私も婦人議員懇談会はそれを一つの要求として国会ではげしく議論しました。母性保障がないと婦人が働けないから、婦人の労働権確保の一部分として考えなければいけないのではないかと。

水沢 私もそう思います。そしてこれは雇用労働婦人だけのことでなく、女すべての母性を保障することになる意味は大きい。

舟本 きょう、会社の女性が辞めたんです。「負けたくない。勝っているうちにやめたい」と。二十八歳なんです。二十

八が男女の差のつき始める頃で、いままではほとんど一緒なのに、昨年の十二月に昇格という形で年下の男性に抜かれてしまった。結婚しているからやめたんです。辞めた人たちはそういう形で大きな意味ではやめさせられているんです。

男女雇用平等法案ができればいいなと私が思うのは、権利そのものが変わるのとよりも、意識が変わるのではないかとと思うの。今は意識の中にも差があるのが当然になっているし、女の人もそれを認めている。「平等法があるのだ。男女は平等なのだ。自分の権利を主張して当然なのだ」と、意識的なバックアップができるのではないかと思うのです。

中島 現実には生かされていないけど、憲法にはあるのよね。なぜ生かされていないのかを問題にしないと、雇用平等法ができて同じことになってしまう。

田中 水沢さんが「体制内に取り込まれるのではないかと心配したのは、たとえば育児休業を最初に出したときは有給であったのに、政府提案したときには無給にしてしまった。保育所を作るより無給で休ませるほうが安上がりだというこ

となる。やはり要求活動は政治変革が伴わないと変質するおそれがある。

欧米諸国では、ポリウムのある婦人運動が、バックアップすることで政治も改革される。何とかして、私たちが自主的な婦人のプレッシャーが欲しいと思うのね。

司会 なぜそうならないのかに問題がいきつうようですが、どうしたら良いと思いますか。

斎藤 A婦民Vで議論を積み重ね、論議だけでは空論になった。そこで労働権に話をしぼったとき、少しずつ具体化しかけてきたというあたりにヒントがあるのではという気がします。ささいなことでも非常に具体的に、見えやすい、わかりやすい、必要だと思うことを出し合っていく。たとえば男女雇用平等法は具体的でわかりやすい。それを軸にするのも方法だと思います。「どこで一致できないか」ではなく、「どこで一致するか」という迫り方を重ねていけばよいと思うのです。

高橋 今まで、それぞれの組織の中でみんな一生懸命やってきましたが、女性共

通の視点が欠けていたのではないかと思います。何党というようにここにこだわらず、もう少し一般に女の連帯があってもよいのではないかと気がするのですけどね。

主婦を分断しない 運動にしたい

小沢 六〇年代後半から盛り上がった日本の女性解放運動は、諸外国との関連も考えて、一体反体制運動だったのかどうかを一度きちんと押さえる必要があると思うのね。反体制というより、はじき出され、体制の中にも入れないのに、結局、妻という形で最低の単位で社会を支えている点では、実に体制的だという二面性を女性にもっている。男性の場合はどちらが主導権を取るかという意味での反体制だと思うの。「自民党政府打倒。資本主義打倒」とか。社会の仕組みを変えなければいけないというとき、その社会の中にいないのだということがはっきりしていないから「体制に、いまの生産に組み込まれたくない」と言う。その辺の押

さえがたりないと思いますね。

先進諸国の例がいろいろ出てくるのは働いている女性の量が最終的には決め手だと思うの。日本でも労働者の三分の一は女性だけど、「女性の労働者を無視しては何も動かない」というところまでいっていない。体制に組み込まれるのではないかと、と見る人もいるけど、一歩も踏み出せないときに全部を言うのなら、すさまじい反体制運動として女性の運動を組織せざるを得ないわけです。

今までの婦人運動は革新というか、左翼というか、その一翼をになった形である。ただ、新しい女性解放は左翼にさえなり得ない問題意識が強かった。社会の一員であることは体制内にあることであるという押さえがきかなければ、女性解放運動は前進しないと思いますね。それでいて、なおかつ女性的で、女性の運動として特殊な方法であり得る道は何か、ということが問題だと思ふんです。

中島さんが「本音と建て前をわけない考え方」と言っただけ、個的な男と女の関係を引きずった形の局面だけだと思ふんです。母性の問題・性の問題は。私は

常識だと思ふの。最大の私たちの共通項は、働かなければ食べられない、食べることは働いてお金を得ること。そういう意味でしょう。

中島 だけど結婚すれば働かなくても食べられる。その大きな問題を抜きにしては語れないわ。

小沢 男の人と一緒にいれば食べられる。それはそれでいいと思う。いま家にいる人たちに「あなたはそこを出なければ女ではありません、人間ではありません」と言つたって……。

中島 それは極端すぎるわ。

小沢 極端すぎるかも知れないけど、共通項を探そうとするときには、「あなたは旦那が働いているから食べるけど、一人の女だったら食べるか」という問題。

基本的には働いてお金を得て、誰が得るかは別にして、自分の口に入るものを取つてしか私たちは生きられない。いつまでもそこでやりあっていると、女が分断されちゃうと思うのね。食えないとき、どうしようもないときには、男と一緒にいて食ふことだつてあります。だけど「これから先、それは可能でしょうか」

と問題をたてていくよりないし、それがいやだと思ふ女は一人で食うかてを保障するしかない。

話を飛ばすけど、この前、宝塚市に行つたんです。主婦が反対運動をやっている。市に橋をかけ、モニメントが建つというのね。男の手のひらの上で裸の女の人が踊っている（笑）。男の手にはぐくまれる若き女性。愛と平和を象徴する（笑）。これにものすごい反発をしたのが主婦層なのね。「宝塚は市になる前は村だった。私が住んでいた村の村長は女だった。市になつて選挙管理内閣をやつた。市長代理をやつたのは女だった。宝塚は少女歌劇の町だった。今だつて女の議員はたくさんいる。そういう中で、なんで裸で、私たちが男の手にはぐくまなければならないのか」（笑）。裸でいるのがみつともないとかを超えたところで本質的にこういうものを見て「市の半分が女性であるのにもかわらず、男の手の上に乗っていれば愛と平和に生きられるとは何事だ」と。それで、それを神の手・人類愛にすりかえたら、牧師さんが出てきて大反対したんですつて（爆笑）。

こういう状況の中で労働権とか、「あなたが主婦はそれを言う前に、まず自分で食つてからにしないさい」と言つたら分裂しちゃう。「平等だというのになぜ男の手で女は育てられなければならないのですか」と、国内行動計画や憲法が持ち出されている。ストレートに。そういうことの中で労働権の問題はでないけど「男の手で私たちは育てられているのではないわよ」という中から「実態はどうなのか。そう言われてもしようがないのか」と話が進んでいくのだと思う。

女性解放運動はどこから始まるのかという点は、多様性があると思うのね。いつも集まると、主婦の存在が重苦しいみたいに言うけど、それはそれで良いと思う。体制か、反体制か、体制内か、で足がらみになり、働いている女か、働いていない女か、で足がらみになる。私たちの側から狭めていることになる。

体制批判だけでは

前進しない

田中 体制に取り込まれる、込まれない

の問題なんですけど。社会教育にお金を出し、婦人指導者の養成を文部省がやっている。あんなものにつてはいけないと、以前私たちは言ってきた。英国の国内婦人委員会は、あらゆる婦人の代表者から成っていて、国内行動計画を推進しているのだけど、規約に書いてあるんです。「金は一切政府が持つ。しかし、ノ・イ・コントロール」だと。各国ともそうやっている。税金を自分たちの思うように使って、行政機関には手足のようにサービスさせ、仕事をさせる。これも力量の問題。婦人の運動量が多かつたら、体制を使つてする。それが私たちの方針にないから、なるたけ政府には近寄らないようにする。向こうはそれを良いことにしている。ほんとうに日本の仕組みはおかしいと思いますね。

斎藤 全く同感です。そのへんが日本の運動が進んでいかない一番の原因ではないかと思ひます。抽象的で現実的ではない。原則論をふりかざしている間に、体制はそれをよいことにして、どんなことをすすめているのですから。もう、原則論の時代は終わってもいいんじゃない

いか。——という以上に、私たちの闘い方について新しい視点で考え、新しい理論を確立し、積極的に現実を動かす努力をする必要があるのではないかと思ひます。

中島 さっきの小沢さんの出した問題、もう少し広げたら良いと思う。「今の主婦はだめな女で、働かに出なければ連帯できない」とは誰も言っていない。私たち女性が女性の働く権利の確立という、専業主婦は被害者のにとつて反発することが多分にある。働く権利の確立が主婦を敵にまわさない形で、主婦との共通項があるのだという形で問題にしたい。働く権利を認めることが、主婦にとつてどういう意味があるのか。主婦の権利は働く人の権利にどういう関連をもつてくるか。それを議論し、認識した上での共通項を認めなければいけないと思うのね。

具体的に言う、時々婦人学級に行くのだけど、専業主婦の人に女性の働く権利が必要だと話をする、職場で男女が平等でないのは当然です。私は主人に一切何の心配もかけないように家事・育児・身の周りの世話を全部やって送り出

しているのです」という人がいるのね。そういう自分の主人と、同性の女性が一緒であり得ない。同じであることは、自分の主婦としての存在そのものが全く否定されたことになる。

小沢 あるわね。

中島 これを煮詰めないで、「主婦は主婦で良いのです」と言う、共通項を見い出せないと思うの。

小沢 それはずいぶん繰り返してやる気がするのね。つきつめて、「だめです」と言つたつてどうにもならないでしょう。

松井 私はいま大新聞社で働いていますけど、自分の女房に身の周りの世話をしてもらっている男の社員が圧倒的に多いわけだけれど、彼らにはそもそも男の社員と女の社員が同じだという考え方がほとんど通用しない。たとえば賃金にしても、妻帯手当はあるけど夫帯手当はないのね。背景に旧民法の考え方があって、すべてがそれで行なわれているわけ。女性の社員は、自分の親が亡くなったとき社から弔慰金は出ません。夫の親が亡くなったときには出る。なぜなら、男の家

に嫁いだのだからという旧民法的な発想なんです。ほとんどの大手会社でもそれが当然のこととされている。それは、男は仕事・女は家庭の役割分業が今の世の中であたり前になっている。法律の問題でなく意識の問題ですよ。旧民法的な発想をどうやって改めさせるか、今やっているんですが、なかなか……。

小沢 舟本さんが言ったように、やめていくのが続く限りだめよね。男だって、

中学・高校しか出ていないとか、名門校でないとか、同年でもすさまじい勢いで追い越されるし、大学に一生懸命通ったって二部だったら大卒に切り替えてくれない。それでも頑張るわけですよ。女の人は旦那がいて食べられるから引き下がる。それを続ける限り良くならないと思うの。働き続けている人が頑張らない限りだめだと思う。それが続けば食べられるのがわかるもの。

松井 さっきの「主婦は主婦で良いじゃない」と、どうつながるの？ 外国では専業主婦であること、働いてないことは何となく具合が悪い。生き方として後ろめたさを感じる心理状態になっているけ

ど、日本ではまだ、いかに主婦になり、逃げ切るかが一つの理想にさえなっている状況でしょ。働いている女の側から主婦の生き方について敵しいことを言っても、別に敵対しているとは思わないけど。

主婦の後ろめたさを

どう考えるか

司会 高橋さんは長い間主婦と共に運動していらしたわけですが、その点について話してください。

高橋 テレビ・コマーシャルの世界では「早く可愛いお嫁さんになって」が一つの女のイメージとしてあるけど、最近私たちのグループでは、主婦であることの後ろめたさが話し合いの中心になっています。リブの運動がきっかけとなって、はっと気が付いたり、頭にきたり、後ろめたくなったりということから、中高年の主婦が発達できるのではないか。働こうと思っても現状はとて壁が厚いんです。だから運動して行く中で、個人の責任に返されると、それが非常にづらいわ

けです。「頑張りが足りない。玉の輿に乗りたくて乗ったのだ」という発言が、もし働き続けている人の中にあると、連帯を狭めるのだけだ。それを踏まえたうえで、経済的に自立しないことは人生を終局的に生ききれないのだと確認する。これは残酷でも言って良いと思う。

松井 特に日本の若い女性の結婚幻想の強さ、異常さ。世界で日本だけではないですか(笑)。婚姻率も日本は断然世界一とか……。基本的に自分のパンは自分で稼ぐのが当然ということが日本では社会通念になっていない。家庭にすることが、後ろめたい人が少しは増えてきたけど、労働の単純さから抜ける唯一の道を結婚に求める若い女性が多い。労働組合運動でオルグしてもスルスルと結婚に逃げ込んで行かざるを得ない状況がある。個人ではなく、仕組みの問題ね。働かなければ生きられない状況なのに「亭主の稼ぎが良ければ専業主婦になれるのに」と思っているが共働きしている。「母は家庭」ということが幻想としてまだあるのね。それをいかに打ち破って、女が働くことは当然ということにするか……。

高橋 結婚して子供を三人ぐらい生んでから社会復帰しようとして、はじめて独房のような主婦の壁に気付くのです。それを打ち破ろうとする専業主婦たちとは連帯できるのではないですか。

中島 「主婦は後ろめたい」と言うのが、主婦を敵対させると思うの。そう言う必要は全然ないですよ。

高橋 しかし現実はそのですよ。

中島 私が言っているのは、自分が不安かどうかの問題。主婦として夫に依存して生きる生き方で満足かどうかという。高橋 満足な人は後ろめたくないですよ。

中島 後ろめたいと言うのは自分が悪いことをしているという気持ちでしょう。

主婦として夫にすべてを依存し、家庭の中に閉じ込められている生活が、本当に充実した人生なのかどうかで不満が現にあるわけでしょう。不満を解消する手段として、「主婦はこんなにすばらしい。りっぱな仕事をしている。だから評価してほしい」と思う。

松井 今の経済の仕組みの中で、働かないで夫に食わせてもらえるのは特権階級

だと思うの。そういう意識を持たなければおかしい。

中島 それは違うわ。

松井 働いている女の人のほうが多いの。パートしたり、いろいろな形でね。

小沢 やめることは可能よ。

中島 この前言った啓蒙主義とはそういうことだと思うの。「主婦は良くないですよ、悪いことだから自覚しなさい」と言っただけは主婦と連帯できない。

松井 そう言う必要は全然ないのよ。「主婦とも連帯しましょう」と言うのが啓蒙主義だと思う。働きに出た、壁があつて働けない。働いても、女として差別される。それと闘っている人たちとまず連帯するしかないのよ。家庭でのうのうとして満足している人たちのことまでは……。

高橋 立場の違いというところかしけど、中島さんの場合は婦人学級に講師として来られる。私たちはそれを迎えるほうです。その他大勢の口だから、後ろめたいわとか、みんなと話しあえます。

小沢 後ろめたく思う人も、思わない人もいる。主婦はあまり良い状態ではないという認識だけはあるのだから、それを

どうするかは止めようよ(笑)。

中島 それが大事なんじゃないですか。

小沢 大事だけど、啓蒙の問題になっちゃうから。

司会 中島さん、啓蒙でなくて何がありますか。

中島 「自分たちを評価してもらいたい、認めてもらいたい」という声は、夫に依存して家庭にいることの不満のあらわれだと思う。だから、妻の座を強める方向ではなくて、働く人との連帯の方向に手をつないで行くにはどうしたらよいか、それを議論しなければいけない。そのために後ろめたいというのは大変な障害になると思う。

松井 ただ後ろめたさすら感じない主婦も多い。それが問題。

高橋 主婦は家庭内の地位しかないのだから「弁護士です。評論家です」とか名乗れない。主婦が名乗れるようにならない限り、主婦が変わらない限り、一緒に歩まない限り、婦人運動はダイナミックにならないと私は思う。

中島 「評価してほしい」と言うのは現状に対する不満の表現なのだから連帯で

きる可能性があると思うのよね、私は。高橋「今の主婦の状態を評価してほしい」という主張も一方にあるけど、「壁を破って経済的に自立したい」と必死にさがっているのも一方にある。

松井 だから、これが共通の論争で常に問題なのよ。

小沢 違うと思いますよ。女の問題で運動をしている人の中にだって、弁護士や評論家じゃない人はいらる。そういうことの中で私は最近女性解放はもうイヤになっているの(笑)。こんなにドロドロと憎み合っている運動はないよ。悪意を持ち合っていることに最近まで気が付かなかったの(笑)。みんなでとにかくやって行くのだと思ってたの。「仕組みが憎いのだ。働けない状態が憎いのだ」と。中島 悪意を持たされ合っているんじゃない。

小沢 持たされ合っているというよりも違いばかり探しているじゃない。たとえば朝日新聞にいらる。「何言ってるの、朝日にいて、えらそうに」(笑)。「東大出て弁護士になって、そういうのに私たち底辺の女の何がわかる」(笑)。そういう

のがたくさんある。ここでは関心のある人間が集まっているのだから、主婦の問題は置きたい。

松井 私はお節介だと思うのよ。働きたくない、働く必要がない、と言っている主婦に働くべきだなどというのは。

小沢 主婦の人たちは「後ろめたい、後ろめたくない」とかより、「自分たちがやっていないことをやるのだから大変だろう。旦那もいないし」(笑)と、優しいところもある。だけど運動をやっている人たちの中でこまごまとした分け方をするのね。何かすることは生き難いのか、生き方を引きずっていないではないか、というような糾弾が運動をやる人の側にあるのではないかと思う。

松井 悪意を持ち合うのは女の運動だけではなく、運動が守勢に立たされる状況になると必ず内ゲバの論理になるわけ。

小沢 「この問題が守勢なのか」という問題意識が守勢にさえなっていない。

松井 どれだけいま押されているのか。危機意識がとても薄いと感ずるの。だから小沢さんの言うことが良くわからないの。とりあえず「女が働く権利について

一つの共通項で何かやりましょう」と私が提案しなかったのは、いま働いていない主婦と敵対することではなくて、いま働いている女、働きたいと思っている女が、まず一緒に運動を強める出発点になると思ったからです。

小沢 運動の論として考えると、労働権の問題は主婦に反発されるというけど、反発されたら働くことをやめるのか。たくさん女のたちの恨みの目があるからやめる。そういう問題をいくら論議しても仕方がない。舟本さんの話のように、どうしてもやめて行く状況が本当なら、それをどうするかしかないと思う。やはり量だと思うの。

中島 主婦とも連帯できることを見つけて行かなくてはいけないのではないだろうかという議論から、無駄なことだとして切り捨ててはいけないと思うの。

小沢 それは完結していいんじゃない。司会 小沢さんがおっしゃったことも、高橋さんのおっしゃった「自分のできる所で、できることからやって行かなければいけないのではないか」になると思うんですが。

高度成長で墮落した

日本の婦人運動

(紀平さん出席)

司会 さっそくですが、前回のティーチインの記録を読まれて、紀平さんは日本の女性運動のことをどのようにお考えですか。

紀平 前回失礼していますので、話の脈絡がちぐはぐになるかもしれませんがね……。四月末に十日間韓国に行ってきた。一番近い外国に行き、初めて日本を見たような感じがします。例えば自由の問題です。日本にはある程度自由がありますよ。私を招いてくれたのは、民主回復運動をしている八韓国婦人有権者聯盟Vです。日本の有権者同盟と同じ議会制民主主義の確立を綱領に掲げているんですが、行動綱領は看板だけという実態なのです。あちらでは団体は登録制で、それを看板と言い、反朴政権の運動をすれば登録を取り消されてしまう。そこで婦人のための法律の学習会開催や、家族法の改正など、政治運動にわたらぬ範囲

で沈潜しています。韓国訪問でいろいろ実感しましたが、私の入国ビザは、まず拒否されました。私が属している八日本婦人有権者同盟Vは、韓国現体制にとって好ましくない。それに私個人の運動として八陳さん・崔さんVの人権回復のため、釈放運動をしています。この程度は日本では当然の運動ですが、韓国では許せないらしい。二十四日の大韓航空の第一便で行く予定でしたのに、前日になってもビザがおりないのです。出発日の朝「どうしておろさないのか」って大使館に行って強く交渉しました。大使館は本国のKCIAに問い合わせをし、「仕方ないからおろせ」ということになったらしいのです。「韓国婦人有権者聯盟」もあちらでKCIAに猛烈にかけ合ったそうです。日本じゃ考えられないでしょう。ビザなんか簡単にとれると思っていた。向こうへ行くと、税関では私だけ特別（まるでVIP?）扱い。持って行ったものを全部検査されました。字の書いてあるものは全部目を通されました。そのふんいきは話にきく戦前の日本の弾圧時代と同じですね。ガランとした金浦空港

に一人残され、一時間以上検査がつづきました。男のキーセン観光客はすつとバスして行くのにね。帰るまでKCIAがずっとついていました。電話も盗聴されているとのことで、「ありきたりのことしか話してはいけない」と友人から注意を受けましたしね。最初に出席した韓国の有権者聯盟のレセプションには、たくさんさんの婦人団体、キリスト教関係の拘束者救援団体、それから拘束者のご家族がズラッと来ておられたのです。

驚いたことは、大勢の人が不当逮捕といった異常な情況に慣れていることでした。自由のない国では婦人運動も大手をふってできないという悲哀をしみじみ感じました。そんな中でも拘束者を救う運動、家族法改正の運動など、精いっぱいがんばっています。韓国の女性運動をみて日本をよく考えてみると、自由のある日本の婦人運動は、解放されているから韓国的那样に勝っているかというところではなく、意識としても行動としても劣っているのではないかと思うんです。日本では本当にやろうと思えばやれないことはない。経済の高度成長の下での婦人

運動は墮落し、弛緩してしまっている。

婦人運動・住民運動・市民運動など、反体制的な運動は二十年前より下火じやないかという気がするんです。問題意識がなさすぎる。いま不景気だから仕方がない、不況で景気回復が先という社会風潮の中で、運動する側は活動しにくくなるというよくない条件を持っているんです、それにしても、それを突き抜けてやるというほど女性の意識が高まっている。婦人の地位の問題もそうだし、選挙や政治への参加の実態も、突き抜けてやる人が少ない。洗剤公害の問題なども地味に続けられていますが、一般的にはなかなか広がりず、韓国の庄政の中にある女性たちに話したほうがわかりがよい。ピンとくるんですね。日本では洗剤の問題が一番ピークだったのが昭和四十八年の石油ショックの前ごろで、いまはマスコミもあまり問題として取り上げない。PCB・水銀の海水汚染で魚が怖いという問題も忘れられてしまっています。企業や地方自治体の公害対策予算を五年前と比較すると大幅に落されていますが、このことも陰に隠れてしまっている。

婦人運動・市民運動・住民運動も、戦

後法律制度上の解放があつてから三十三年たっているのに、真の権利意識にめぐめておらず、被害者の抵抗といったネガティブなものも根底にあるんですね。石油ショックにあうと、洗剤が有毒だということも忘れて買いために走った主婦も多かったし、有害であるかないかという視点が、品物があるかないかの視点に変わってしまふ。基本的には日本の女の人たちの意識が明治以来あまり変わっていないのはなぜか。日本人全体の社会通念は変わってないんですね。日常の習慣が少しも変わってない。去年、父の三十年祭で熊本に行きましたが、費用は兄弟四人で分担、もちろん玉串料も平等負担しましたが、神主ののりとでます名を呼ばれるのが母、これはいいですよ。次が兄、そして弟なんです。兄も弟も、それぞれどんな仕事をしているか立場について紹介があったのですが、私と妹は最後にひとくくりにされて「姫みこら」でおしまいで名前も読み込んでくれない（笑）。もちろん紹介もない。戦後三十三年たつて、いまだに女は一人前でなく、女ども

と言われてしまふ。これが日本の風土ですね。

一人一人立場や価値観も少しずつ違うのは、どうしようもない。だけど先行きに何がゴールかを見て行くことが、いまでも必要ですね。住民運動も決してなくなつたわけではなく、マスコミの取り上げ方で下火に見えるということもあるのです。しぶとく続いているんですが、なぜ点から線にならないのか、価値観が違うとか、入り口がいろいろあるとか、プロセスが違うということがあまりにも前に出過ぎてしまつてゴールの見つめ方が不足しているのではないかと感じます。むりやりまとめることはできませんし、それぞれの持ち場で力をたくわえ、精いっぱいのことをやって行くことが積み上げになつて行くのではと考えています。その日の草を刈るという気持ちで持続をはかることです。

なぜ労働組合運動と

合流できないのか

中島 働く権利の問題で皆で大きく連帯

できるのかどうかにしばらく話を進めてはどうでしょうか。

小沢 前回集まったときは、日本の婦人解放運動は、いいにしろ悪いにしろ、アメリカのようにならないのはなぜかという問題があった。しかしそのことが話しつくされなかった。働くのは当たり前という論理がある労働権でさえ連帯が勝ちとれなかったのはなぜか。A行動を起こす会VとかA婦民Vなど、いろいろなことをやっている人たちが、常識的な線でもう一度「労働権とは何のことをいうのか」、つまり誰か一人の、鉄連なら鉄連の七人のことを全体で盛り上げて行きましょう、と具体的に出不さないと、「労働権で……」という常識と化してしまおうと思うのね。

中島 具体的な問題は出ています。

松井 労働権でどうかではなく、女性が働くことに關していろいろな言い方はできるけれど、とにかく働く権利を軸にした運動論だったわけよ。

中島 田中さんから紹介があったけど、欧米諸国では女性解放運動の要求の突き上げがあつて、どんどん新しい法がでて

きているでしょう。雇用を中心とした男女の平等を確保するための法律を要求する運動を、女性解放運動のグループ・労働組合など、いろいろな人たちがやってきた。それが一つにまとまることができるかという具体的な話につめて良いかといっているんです。抽象的な議論が背景にはあるけれどもね。

紀平 いま働く女性の問題として国民の医療問題としてILOで看護職員条約の批准と、そのための国内法等の制定の問題があるんですが、女性の多くは「看護職員」の問題というのは「働く婦人の労働条件の問題」としての側面しかとらえていないのです。ILO看護職員条約の批准、そのための国内法の整備を日本で早くすべきということについての問題の所在がつかめていない。「看護職という立場の人だけの問題ではないのだ。自分たちがいつ病気になるかかわからないのだ」と要のある状況になるかわからないのだ」と本当に納得した上で運動に協力、せめて署名し、国会に何千万の署名が集まるようにしなければならぬのですが。この件は当然のことで、早く解決されるべ

きなのですが、医師会の反対などあり、医師会のご都合で、政治的に取り上げられるということはむずかしくなっています。病気になるから薬を投じ、注射をし、または手術をするのがいまの日本の医療のあり方ですが、これではいけない。一人の人間の（健康な人も含め）健康というのが予防的に保全されるかという、看護の本質だと思います。医療というもののあり方、自分や家族や親しい人との関係がどうかみ合っているか、一般の主婦にはピンとこないんですね。そういうことを理解している女性が少ない。

田中 労働権の問題をいうとき、私いつも外国の例を引くけれど、西欧の婦人運動はみんな最低賃金・同一賃金など労働の問題を大きく取り上げています。日本では婦人運動と労働組合運動とが分けられている。地域婦人の運動は七百万人近い人がいるのに、婦人労働の問題には興味を湧かないという。どこかでそれをつなげなければ大きな運動にはならないわね。

小沢 亭主をつかまえない馬鹿な女

や貧しい亭主をつかまえた馬鹿な女がやっていると思っているのかしら(笑)。

人間のトータルな

解放を目指したい

司会 田中さんのまとめてくださったことがいま一番の問題となると思うんですが、それぞれの立場で一言ずつ問題提起をしていただいて、次につなげていきたいと思います。

水沢 「働く婦人の権利」というのは一つの目標であって、それ自体では具体的ではないから運動にはならない。そのための条件作りの何かが共通のものになれば、そこから運動の共通項ができてくるのではないかと思うんです。例えば母性の保障にしても、今まで労働組合で運動してきたのは、どうも母性保護になるのね。そうではなくて、男女を含めての人間の生存のための母性というように考えて男を含めた運動にして行かないと平等の問題にならない。イタリアで母性保障と新保育所法は十二年かかって運動して獲得していますが、婦人団体から提起し

たものが全労働組合の運動になって行っています。女だから保障するのではなく平等に働ける人間的な条件として、社会的な保障なのだというようにやって行けば、主婦も何もないと思うのね。そういう共通項を何か見出し出して行くのが良いのではないかと思うんです。

舟本 これからの女の人たちは専業主婦にならないことが大事だと思うのです。いままでなってきた人たちが変わることには難しいと思うから(あきらめないで、の声)女性を専業主婦にさせないためには、「結婚は就職ではないのだ」というキャンペーンをやらなければいけない。去年「行動を起こす会」がやったようにCMをたたいたり、マスコミに対してわれわれの意見をどんどん言っていきたい。それが労働権にもつながって行くわけですよ。

佐山 労働権という言葉は自分の中にないのははっきりしないのですが、最近、働くことが自分にとってすごく大事なことなのだと気づいたんです。いま印刷屋で文字拾いの仕事をしているんですが、自分で仕事を始めて、自分の手が物を産

み出すことを通じて初めて、「あ、働くってこういうことなんだ」ってよくわかったんです。「絶対これは手離しじゃないんだ」って感じたんです。いままでは、皿洗いとかマージャンのバイを洗うとかの仕事が主だったんですが、早く仕事が終わらないかという気持ちしかなかったですよ。職場に対する執着とか、条件を改善することより、労働力を売って、自分の時間にやりたいことをやるという形でした。しかしいまは働いている実感みたいなものがあるので、非常に執着心が出て、絶対に手離さないし、何かひどいことをされたら許さないという感じ。例えば、自分が作った物を自分が三万円と値段をつけてお客さんの所へ持って行く。「こんなのは一万五千円の仕事だ」と言われると、握って離さないという感じ。「何と言おうが絶対に三万円でしか売らないぞ」と思う。やっぱり特に女の仕事って「これは絶対に手離さないぞ」っていうものが味わるような労働ではないと思うんです。男でもそうでしょうが。とりわけ若い私たちの世代だと、五時になったらパッと帰って

ショッピングして、デートして、ボーナスをためて海外旅行に行くOLがたくさんいる。そのヒトたちと一体、どんなふうに結びあえるのかというのは大変な問題だと思ふんです。働くこと自体がおもしろくなくて当然な状態なんですから、職場に執着持てというほうが、ムリな気がするんです。

斎藤　すごくいい問題提起ですね。そのへんがまさにポイントだと思う。

中島　主婦だけでなく、現に働いている人たちとも、どう連帯するかというのは簡単なことじゃないのね。働くことの意義を、それぞれの立場にいる人たちと交換できる場を作って行かなければならぬのね。

高橋　人間らしく生きるためには、経済的自立が非常に大事なことでないかと思うのね。子育てを卒業しかけた主婦の立場から言うと、やっぱりいま働いている若い人たちには、負けないうちにやめるのではなく、負けてもいいから頑張っているのではないと思う。専業主婦が後ろめたさを感じたら、その壁を突き破る努力を私たちはすべきだと思う。社会的

には主婦の再就職とか、パートじゃない、もう少し社会的身分を保障された働く条件が整うように。多少くだらない仕事でもね。各個人が自慢して働いていかなければならないと思うのね。

中島　自立するための大前提ね。それがないと、生きがいのある労働というのは全く意味がない。何よりもまず生活するための労働。でもそれだけでよいのが問題提起されなければいけない段階にきていると思う。いま鉄鋼連盟の裁判をしているのですが、女性の弁護士が十七人集まって、頭をひねっているんです。人間らしく働く権利の保障という問題をどのように正面から提起していくか。「女だから補助労働・潤滑油で良いのだ。それしか働かせない」という連盟。日本の大多数の使用者の考え方だけど、それに対して「女性も人間らしく働く権利が保障されなければならないのだ」と、法律的にも主張していこうと思うんです。そこらへんに一歩進んで行く必要があるのではないか。そうでなければ、佐山さんが言ったような、早くやめたいと言う若い人たちに問いかけて行くことができない

いのではないかと思うのです。

松井　経済的自立は、あくまで必要条件にすぎないと思うの。例えば、昔の農村の女の人たちは実に労働して、大変な経済的力を持っていたのに、非常に女性としての抑圧が強かった。経済的自立イコール女性の解放ではないわけ。いつも精神的自立とからみ合わせていかなければいけないと思うの。人間らしくという言葉に含まれていると思うけど、人間はもっと精神的に豊かなものがあつて良いと思うの。今の男性社会は物中心の価値観が横行しているけど、それが女性側にも反映しているのね。本当に人間らしい優しさとか、連帯とか、思いやりとか、痛みなどが欠けている。精神的な深さが日本の女性解放運動に欠けているのではないかと。その点で、韓国の女性たちが迫害をうけながらも自分たちの人権を守るために闘っている。それこそ命がけで、「人間とは何なのか。人権とは何なのか。自由とは何なのか」を本当につきつめ、人間のトータルな解放を目指して頑張っている。主婦が後ろめたいと思うべきだと言ったのは、主婦に限らず、日本の女

性には、いまのこの生活が、だれを踏みつけにして成り立っているかということについての認識がないということ。だから心の底から魂をゆさぶられるような感動的なものを日本の女性解放運動家には感じないんです。東南アジア諸国に行くと、外から見たら大変な経済大国に見える日本の女として、後ろめたさを私は感じるんです。韓国の女の人たちの闘いを見て、自分たちの闘いに欠けているのは何だったのかってことを感じます。

紀平 いま円が高いでしょう。韓国へ行くと刺繍が非常に安く買えるので、良い買物ができたと素直に喜ぶの。日本が韓国を非常に搾取していることも忘れてる。労働運動すると人糞かけられ、低賃金で労働組合の運動もできず、外国企業・外国資本の企業に搾取されているから安い物ができるんですよ。それこそ後ろめたさを感じ、喜んではいけないということを知って大事じゃないですか。松井 人糞かけられたり、口の中に押し込められても、自分たちの職場を守るために闘い抜き、あげくのはてに二百七十六人の女性が首になり、再就職できない

ように全国指名手配されて、がんじがらめになって国際的にアピールしている。本当に正直なことという、アピールに答えることが先で、亭主に食わせてもらっている専業主婦のことをうんぬんしているヒマはないような気がします。別に彼女たちを敵視しているわけではないけど「人間らしく生きたい」という隣りの国の女たちの叫びに耳をふさいで手をこまねいてはいられない。いまの自分たちの生活が彼女たちを苦しめている責任の一端があるのを感じるから。それに何よりも彼女たちの生き方に感動してしまふ。だから私たちが働く権利のために闘うにしても、韓国の女たちをひどい目に合わせているいまの日本の経済や社会の仕組みにも鋭い目を向けないといけないと思う。日本の女の運動の視野の狭さを、この辺で考え直したい。

田中 確かに日本の資本が搾取しているのですからね。そういう問題についての連帯感とは女の労働権を求めるものにつながるはずだと思うの。自分の国の自分自身の解放運動と他の国の女の人たちの解放を連帯させて行かなければいけない。

その辺をもっと細かくやる必要があるのではないのでしょうか。アメリカで始まったリブ運動は、意識変革を女に求める運動だったわけですが、ああいう運動の網の目のようなものが日本にはなかったと思うんです。それをしながら、大きな目標に大同団結するような運動も一緒にやっていきたいものだと思いますね。

小沢 私なんか、自分が生きることについていっぱいな。政治的な立場でもう一度自分の仕事を続けられるかという、こういうふうな世の中がひどくなってくるとヒシヒシと感ずるの。男でも政治的発言をするのがやりにくくなっているときに、街の中に存在し、言い続けて行くことに対する圧迫。わずか七年前、議員に当選したときに言えたことが、いまは言えない。同じことを言ってもほとんど遠くへ行っちゃう。

ビラをまいたり、演説を街の中でするときに、成田の問題とか、赤軍裁判とかの大状況しか言わない。やっぱり生き難さみたいなものを感じますね。

女の人たちは本当に闘う気があるのかどうか。本当にいまの状況が悪いと思っ

ているのか。この間、久しぶりに女の人の集会に行ってみたけど、いかに男にひどい目にあっていのかを話しているの。

それをどのようにして、そうでない世の中を作るのかという話は絶対に出てこないんです。私に関係ない話をしている場に、「私もそうです」という顔をして

いること自体がきまんですよ。だから自分がこうしようと思うことをやって行くしかないと思う。今まで議会の中で役職を全部のがれて来たけど、今度はあらゆる役職につこうと。女性議員で連帯してね。今までやれなかったことをどんどんやる。委員長やりたいて言っているために委員会が流れているけど、しばらくは意地張って頑張ってみたい。夢としては、労働権なりなんなりやってきた女たちが、自分たちの運動を総括しつつ、皆で手をつなげたらどんなに良いだろう。

これだけは見たいし、やりたいと思っています。時間がかかるのなら、いま無理をしてやらなくてもよいですけどね。ただ、いまこの不況のときに、どんどん女はひっこめというようになって行くと思うの。二、三年も足踏みしていたら、女

の意志がますます後退してしまう。その点では、あせりではないけれど、何とかしなくてはと思いますよね。

田中 何かバラバラになった感じがありますよ。

司会 問題が具体的にたくさんでてきましたが、そろそろ時間がきたようです。まとまりませんでした。次回につなげてはどうでしょうか。

小沢 何度も何度も続けると、いろいろなことがでてくるんじゃないですか。

今日は紀平さん・佐山さん・水沢さんが見えたり、前より前進してきたと思うし、いままでこういうのがなかったから、ぜひこれが続けたいと思います。

司会 主婦の問題とか、労働権の問題一つについても、それぞれの立場で運動しているわけですが、もっと具体的に位置づけなり、方法論なりを出しあえば、より確かな共通項が見い出せるのではないのでしょうか。具体的な問題がでてきたところで、次回は、運動を進めていくとき、いつも必ず問題の一つになる「資本主義社会のなかでの労働と女性解放」を中心に話し合います。

隔月刊



フェミニスト

女性の創造

発売元 日本翻訳家養成センター
偶数月25日発売 550円

№7
(8月刊)

特集：女性のメディアは地球をおおう

各女性誌編集者座談会、日本及び世界各国の女性のメディア資料ほか
フェミニスト・インタビュー：富山妙子ー革命と芸術の接点を探る

次号予告 特集：①女と男のコミュニケーション②報告国際女性学会

発行 株式会社フェミニスト

〒150 東京都渋谷区渋谷2-2-4 青山アルコープ301 TEL.03(406)3012

窓

女の手に子宮を取り戻そう——試験官ベビーに思う

出現が近いと予測されていた試験官ベビーがついに誕生した。

それは、SF的な予測、すなわち試験管内の受精と育成による人造人間とは異なり、夫婦の精子と卵子を試験管内で結合させたのちに妻の子宮に送り込んだものであり、担当の医師は、「不妊治療の一種であって、いわゆる試験官ベビーではない」と言明している。

にもかかわらず、世界的に大きな話題を提供しているのは、単なる「不妊の治療」を超えた、人造人間の可能性を証明したからにはかならない。

今回は、受精した卵子は、その卵子の産出者のもとに送り込まれたが、すでに

牛馬で成功しているように、他者の子宮に送り込まれ、育成される可能性を、今度の成功は明らかに示唆した。精子および卵子提供者と、卵子育成者の役割分担の可能性を見事に示したものといえる。

さらに危惧されるのは、科学装置内での卵子の熟成である。これが可能になれば、ロボットに代わる人造人間の大量生産も決して夢ではなくなる。//生産人間//や//戦争用人間//が大量に生産され、少数のテクノクラートに支配されることは、想像するだけでも悪魔の所業というほかない。

そのゆえに私たちは、今回の成功を、//不妊症の治療//として手放して喜ぶわ

けにはいかない。科学の一つの成功が思いがけない波紋をひき起こしていった多くの事例を思い浮かべつつ、まず身の引きしまる思いに打たれる。

//不妊症の治療//という言葉は、みこもることのできない多くの女に希望を抱かせるが、不妊症の原因は多種多様であって、卵管閉塞はそのほんの一部に過ぎない。また卵管閉塞にしても、他に治療法はないものか、体外受精だけが唯一の方法とは思えない。

不妊に限らず、医学はこれまでその大部分を男性の手にゆだねてきており、生理痛・つわり・出産時の苦痛等、女性独自の苦しみに対しては、未開拓の分野が

多く残されている。科学のめざましい進歩を考えると、女独自の問題がいかに取り残されて来たかを思わざるを得ない。体外受精の前に果たしてほしい多くの問題を明らかにし、女自身も多く参加する中でそれらを解決していきたい。

試験管ベビーの実験は、世界各国で必死にすすめられており、どこがテープを切るか注目されていた。今回の成功に続く研究は、「大量生産」技術であろう。それは、「人造人間」の戦略的可能性を如実に示している。人知や科学の名のも

とに、われわれはすでに原水爆をゆるし、無数の産業廃棄物を生んできた。この人間のおごりに対し、私たち女は、今こそ子宮をわが手に取り戻し、自分の手で管理することを真剣に考えなければと思う。

一九八〇年に向ける期待と不安——女性団体大連合への動き

一九七五年、メキシコ市における国際婦人年世界会議によって、世界各国は世界行動計画の推進を義務づけられた。

国際婦人年(International Women's Year)は、その後、国際婦人の十年(International Women's Decade)と改称され、一九八五年までの十年間に、行動計画の理想を実現するよう、目標が掲げられている。

世界各国は、この目標に着々とこたえ、米国は二十六項目の革新的な行動計画を国会に提出、ヨーロッパ諸国では、すでに「性差別禁止法」を実現した英国に続き、各国とも八〇年までには性差別禁止法を実現させようとしている。

国連は、世界各国の実行の程度を二年ごとにモニタリングする責務を持ち、一九八〇年にはイランにおいて活動報告と軌道修正のための「テヘラン会議」を開くことが決定している。ひと口に世界と言っても、地域によって国情が著しく異なるため、西アジア、ラテン・アメリカ、アジア太平洋、アフリカ、ヨーロッパの五地域に分け、それぞれの地域会議を重ねて、その結果を世界会議に持ち寄ることになっている。

こうした動きは、別掲NGOセミナー報告でも明らかにされているように、「すべての個人・組織・団体に十分知らされること」が強く要望されているにも

かわらず、日本国内ではほとんどPRが行なわれていない状況である。驚くべきことに、別掲資料によれば、日本の代表は、一九七八年三月まではアジア太平洋会議に出席さえしていない。

一九七五年のメキシコ会議の際は、会議直前まで、代表団の氏名はおろか、日本から上程する行動計画の内容さえ明らかにされなかった。民間会議であるトリビュンでは、壇上の日本代表(?)の形式的説明に対し、会場内から空論ではないかとの声があがった。へあごらV有志も、この民間会議に参加して、日本の婦人運動がいかに官僚主導型であり、真の情報がいかに民間に伝わっていないか

をまざまざと見、非常な衝撃を受けた。

しかし、日本の婦人運動のこの体質はその後大きな変貌をとげたとは思われない。一九八〇年に、日本の代表は国連本会議において日本の女性の地位改善の状況を報告しなければならぬが、何を基に報告するのであるうか。よもや先日の婦人白書のような空疎な作文であつてはなるまい。

残念ながら一九七五年当時には、日本の婦人団体はそれぞれ孤立し、政府を追及し、女性の希望を政治に実現させる大きな力にはなっていない。しかし、国際婦人年を契機として、各種の横のつながりが生まれた。国際婦人年日本大会を成功させた全国組織を持つ大規模婦人団体（通称四十一団体）は、その後も、「国際婦人年の決議を実現するための連絡会」を持ち続けているし、「国際婦人年大阪連絡会」「国際婦人年あいちの会」のような地域的連絡会も生まれた。七〇年以降のリップ・グループを中心とする「女のグループ連絡会」は、その後活動を休止したが、国際婦人年での連帯を軸に、「政治を変える女たちの会」など、超グ

国連婦人の十年世界会議議事日程案

1. 開会
2. 議長及び役員を選出
3. 議事進行規則の採択
4. 議題の採択
5. 主要な委員会及び活動組織の設置
6. 代表団の資格の認定
 - (a) 資格認定委員会の指名
 - (b) 資格認定委員会の報告
7. 人種差別が南アフリカの女性に与える影響
 - (a) 状況
 - (b) 南アフリカの女性に対する助言のための特別の施策
8. 1975～80年に国内レベル、地域レベル、国際レベルで達成された国連婦人の10年の目的の進歩の状況の反省と評価
 - (a) 世界行動計画パラグラフ46に関するもの
 - (b) “10年”推進のための国連組織のプログラムに関するもの
9. “婦人の10年”の後半期（1981～85）のプログラム
 - (a) 雇用、健康、教育のサブテーマを強調しつつ経済と社会の開発への婦人の参加をすすめるための国内目標と戦略
 - (i) 企図と試行
 - (ii) 国内組織
 - (b) 地域的及び国際的目標と戦略
10. 会議報告書の採択

ループの横の組織が生まれている。とはいえ、これらの各組織が一本となつて力を集める大集会はまだ開かれていない。諸派乱立の陰には、それぞれの思想・戦術の違いがあるわけだが、群雄割拠では政治を変え、社会を変える力になり得ないことは明らかである。

とりあえず、共通する目的のために力を統合する動き、たとえば「私たちの雇用平等法をつくる会」の誕生などがみられる。従来、女は大きな組織をつくるのは下手とされてきたが、過去の行きがかりにとらわれず、小異を尊重しつつ大同

を認めて、団結することが今ほど問われている時はあるまい。それぞれのグループ、それぞれの組織が、自分の足もとを掘り下げ、世界行動計画をわがものとして消化するときに連帯は可能となるだろう。可能な部分からの連帯にスタートして、大きな輪を結ぶ日が来ることを信じてたい。八〇年まですでに一年余、残る時間をどれだけ有効に使うか、私たちに課されたものは大きい。

なお、あまりにも大きな日本の男女格差を是正するために、一九八五年の世界会議を日本で開催しようという動き、ま

た国情不安なイランで開催を危ぶまれて
いる民間会議（トリビューン）を日本で
開催する運動なども萌芽を見せ始めた。
一九七九年のアジア太平洋地域会議はイ

ンドのニューデリーで開かれるが、世界
会議の準備会議である地域会議にどのよ
うにのぞむか、民間の意見を反映させる
ために私たちの重ねなければならぬ努力

力が無限に要求されているいま、紛争を
避けて論争を重ね、私たち自身の手でビ
ジョンを作り出していきたいものである。

まず集うことに意味——初の国際女性学会東京会議

七月二四・二五・二六の三日間、国立
婦人教育会館で開かれた初の「国際女性
学会」は、さまざまな話題を提起して幕
を閉じた。

本ではすでに言い古されていることであ
って、目新しいものは少なかったが、そ
れにもかかわらず、新鮮な感動を受け
た。

が、停滞しがちな日本の研究に、一つの
活力を与える契機となったと考えられ
る。

「女性学」そのものが確立していないわ
が国で、多くの女性解放運動家を疎外し
て行なわれたこの学会は、運動家たちか
ら不信の目で迎えられたが、ことのいき
さつを抜きにして考えれば、やはり大き
な意義があったと言え得ると思う。

第一は、もしも国内の学者・研究者だ
けの発表であれば、「同感・同感」「正
にそのとおり」で終わる多くの研究が、
光のあて方の差異によって乱反射し、か
なりの反論をよんだことである。日本の
婦人問題研究は、「どこを切っても同じ
金太郎アメ」の定評のとおり、とかく画

第二は、これを契機に、日頃一堂には
会しにくい国内の研究者たちが交流の場
を持ち得たことである。夜の討論が終わ
ったのち、ロビーで、またそれぞれの個
室で、夜を徹して討論が重ねられた。と
かく孤立しがちな婦人問題研究家たち
にとって、得がたい機会であったと思わ
れる。

新聞で伝えられる華々しい報道と異な
り、「国際」と言っても、実際の主軸は
米国の若手日本女性研究家——大学院在
学中または卒院まもない人々であって、
その範囲は限られていたし、学問的研究
としては必ずしも十分な水準に達しない
ものも含まれていた。発表の多くは、日

一的に陥りがちだが、米国の若い研究者
たちの発表は、ライザ・クリフィールド
氏の「芸者」研究に象徴されるように、
時には大胆な仮説を提示し、反論を巻き
起こした。すべて論争は「正」に対する
「反」があつてこそ「合」に止揚し得る

第三に、国内各大学への女性学講座の
設置が一步進められる端緒となったこと
をあげることができよう。東京女子大、
お茶の水女子大ではすでに女性学講座の
開設がすすめられているが、女性学講座
開講を目的として地方の女子大から聴講

していた人もあり、今後の動きが期待される。全米ではすでに五千講座、二千三百人の講師を有すると聞くが、この会議が日本の女性学講座設置の契機となることを望みたい。

第四に、マスコミの連日の注目があつた。資金の一部を担った読売新聞はもとより、各紙とも、会議そのものはもとより、出席者の意見を大きく紹介した。女性学の存在そのものさえ知らなかった大多數の女性たちに啓蒙の役を果たした副次的効果は大きい。

しかし、活動家たちが一斉に非難したように、この会議に問題がなかったわけではない。

第一は、活動家たちとの遊離である。社会学が社会の進歩・発展に無縁な学問的追求のみに終わるなら無力なように、女性学も、女性の置かれている現況を変えるひき金となり得ないならば無意味である。願わくは、次の機会には、多くの活動家の参加する会議となることを期したい。

第二に、資金面の不明朗がある。中でも女性差別企業として非難を集めている

資生堂からの寄付金が大きなウェイトを占めるとすれば、問題ではあるまいか。

第三に、会場の選択の問題がある。国立婦人教育会館は、少数の研究者のためには快適な設備であり、同時通訳も成功したが、会場の交通の便が悪く、また入場者の数が制限されるという制約を持つ。次回には、より開かれた場で、より開かれた研究発表が行なわれることを要望したい。

従来、日本の婦人界では、あるグループがある企画に成功すると、とかく非難中傷がとびかいがちだったが、私たちはこの会議の成功の面は正しく評価し、運営の陰の力となった人々に謝意を惜しまない。一つの成功は次の成功を招来するであろう。失敗は次の成功へのエネルギーとして転化することを期し、失敗や非難を恐れることなく、第二、第三の企画が試みられることを期待したい。

この校正をしているとき、//冷凍試験管ベビー誕生//のニュースを得た。事の重大さをさらに痛感する。

ミズ 女性ジャーナル

〒150 東京都渋谷区神宮前3-28-13

< 発行所 >

電話 (03) 358-1354

振替 東京 0-130058

毎月 1 回 10日発行

女性ジャーナル社

1部100円年間1,500円(郵送料含む)

紹介

I 「八〇年国際婦人年会議にむけて」—NGOセミナー報告から—

紹介

「八〇年国際婦人年会議にむけて」というテーマのもとに、今年三月十七日から三十一日まで、ニューヨーク市で国際セミナーが開催された。同月二十日から国連で開かれた「婦人の地位委員会」に先立ってNGOが主催したもので、「八〇年会議」への提言が含まれている。初めの三日間は、各地域の情況報告・講演・国連諸機関の報告などに費やされたが、セミナーの後、「婦人の地位委員会」の委員も含めて、「地域行動計画」などが提言された。これについて国連から届いた議事録を簡単に紹介したい。

(抄訳・文責 あこら編集部)

●「八〇年国際婦人年会議にむけて」第三部会

同会は、三月二十一日から三十一日まで。参加者は、「婦人の地位」委員、ゲスト、NGO関係者など。参加者の最大の関心は、国際婦人の十年のためのプログラムに関連した「発展」をどうするか、一九八〇年の国際婦人会議、「国際行動計画」の実施についてのこれまでの反省と評価などであった。「婦人の地位委員会」に出席した人は、地域によって習慣などが非常に異なるが、国際婦人の十年に設けられた目標はすべての女性にとって意味あるものでなければならぬ、と言う。メキシコ会議以降、「世界行動計画」の実施にあたって、多くのものが実現化の方向に向かった。ただ地域によって、行動計画目標の実施をみていないところがあり、それらの地域での「地域行動計画」を推進していくための計画やプログラムは何をおいても考慮されなければならない。

したがって八〇年会議は、一九七五年メキシコ会議とは違つた、具体的提言や残された後の五年にはまず何が優先されなければならないかなどの「行動志向」会議にしてゆきたい、という理想が打ちだされた。テヘラン会議のテーマは「雇用・健康・教育」。また、会議のプログラムなどを決める二十三名構成の準備委員会が形成された。国連NGO課長・ヴァージニア・サワウエインは、個人や組織・団体が、国連で何が行なわれているかを十分知らされること、国連と組織団体、国連とそれらの団体の地方(国レベル)部会のコミュニケーションをはかつていくことが非常に大切と強調。参加者は、国際婦人の十年が世界中の女性のために利益となるよう女性同士が助け合い、力を合わせて連帯の輪を広げて行こうという気持ちを抱いて散会した。

●「地域行動計画」の提案

I 「西アジア地域行動計画」

一九七八年六月、ヨルダンのアンマンで採択。メンバーは、エジプト、イラク、ヨルダン、クエート、レバノン、サウジアラビア、南イエーメン、イスラエル、オーマン、クエート、シリヤアラブ共和国、バハレン、北イエーメン、アラブ首長国連合。

この地域は、富める国と貧乏国との差がはげしい。人々の生活に深く根をおろした歴史・文化の統合を通して、地域全体の発展と、男女平等実現のために、女性がいより活発な役割をこなえるよう努力が続けている。

地域の全人口のうち、三・八%から一八%の女性が経済生産に参与しているが、そのうちの六〇%から八〇%が農業従事者である。一九七五年に十五歳以上の女性の文盲率は七〇%であったが、男性にくらべて文盲率の解消はなかなかほかどっていない。女性の役割も、母親・妻に限られている。

「行動計画」は、次の十二の領域に重点を置いている。

- ① 計画と実施をどこでやるか
- ② 法律の分野
- ③ 教育訓練
- ④ 雇用・労働・経済活動
- ⑤ ファミリーサービス・社会福祉
- ⑥ 家族構成と構成員の地位
- ⑦ 農山漁村の生活条件の改善
- ⑧ パレスティナ女性
- ⑨ マス・メディアと文化の役割
- ⑩ 婦人団体・組織の役割

⑪ 調査研究と情報の役割 ⑫ 地域・国際協力

このような十二重点項目につき、国レベルでは、政府・団体施設・メディアなどすべてを動員して、建設的な女性の意見を取り上げ、それを統合していくためのプログラムや政策を推し進めていくべきである。また地域・国際レベルでは、まず、国レベルでの政策の推進をおし進めていく。それを援助するための基準やガイドラインを作る。地域に存在する国連や地域団体の名簿を活用する。地域団体を強化し、プログラムを推し進めていくために十七の小プログラムが提案されている。

前述の十二項目のうち、特に近い将来、実施していかなければならない八項目が選びだされた。

- ① 国は、利用しうる資源を全部活用して、社会状況・女性の熱意・優先政策などを考慮した「行動計画」を作っていくべきである。国は、婦人政策のための推進本部のようなものを設けるべきである。計画団体の職員も、社会・経済計画の重要な対象者として、女性を含みこんでいくべきである。
- ③ 男性・女性の職業・技術訓練のための施設が地域に作られるべきである。
- ④ 地域開発のためにどのような技術が必要とされるのか、調査に基づいた総合的な政策の実施。
- ⑤ ファミリーサービス分野における専門家や技術家のために国レベルでの研究会を持ち、家族のニードにこたえるための総合的社会福祉政策を推進。児童問題も考慮。
- ⑦ 農村開発従事者のトレーニングセンターを設け、状況改

善のためのセミナーを設ける。マスコミヤ視聴覚センターは農生産物・栄養・健康教育などの資料を作る。

⑧ パレスティナ女性問題は、地域的にも国際的にも紹介されるべきである。

⑪ アラブ諸国連盟のための情報・記録センターの設立。

⑫ 「西アジア地域経済委員会（ECWA）」は、提案された行動計画がどのように実施されているかをフォローし、一九七九年に予定されている西アジア地域会議の準備をする。

Ⅱ「ラテンアメリカ地域行動計画案」

「ラテンアメリカ経済委員会（ECLA）」は、一九七七年六月に「行動計画」を採択した。ラテンアメリカ諸国の女性の状況は国によって大きな違いがあるが、各国は、「地域行動計画」の中から自国にとって優先すべき政策を取り上げるべき。婦人の十年のための基金は、許可のでているプロジェクトを財政的に援助する。ECLAの提言は、「国連第二開発の十年のための国際開発戦略」の一部とみられている。

参加国は、アルゼンチン、バハマ、バルバドス、ボリビア、ブラジル、※カナダ、チリ、コロンビア、コスタリカ、キューバ、ドミニコ共和国、エクアドル、エルサルバドル、※フランス、グレナダ、グアテマラ、ハイチ、ホンデュラス、ジャマイカ、メキシコ、※オランダ、ニカラグア、パナマ、パラグアイ、ペルー、スリナム、トリニダード・トバゴ、※イギリス・北アイルランド、※アメリカ合衆国、ウルグアイ、ウエネズエラ（※の国はヨーロッパ経済委員会の主要メンバー）

次の九領域に重点がおかれている。

◎雇用 労働市場への女性の進出は非常に低いパーセンテージである。職種も非熟練・家内労働が多く、給料・労働条件・採用などで差別されている。（十五の具体的提案があった）

◎教育 教育を受けることは両性にとって権利である。女性の六〇%から三〇%が文盲である。（十九の具体的提案があった）

◎健康 高い死亡率、短い寿命は、他の発展国にくらべたら大きな差がある。六五年から七〇年にかけて五歳以下の子供の死亡は、百万名である。人口のほとんどが非衛生的な状況の下に住んでいる。

◎家族 女性が働いたり、教育を受けたり、管理したり、責任を持つことの基本的な限界は、家庭的な仕事に女性がかぶさってくるということである。かつ社会や家族内での女性の役割は低い。（十三の具体的提案があった）

◎保育所 働く女性のための保育所が作られるべきである。

（四つの具体的提案が行動計画の中に入れられた）

◎社会福祉 一九五九年から七五年にかけて生活基準は全く改善されていない。

◎住宅 一九七五年には、ラテンアメリカの住宅不足は、二千万戸である。

◎政治参加 女性は意思決定機関に参加してはず、彼女らの意見は無視されている。（六つの提案がなされた）

各国の推進本部

機能構成は最低次のようなものを含むべき

☆各国行動計画の策定参加

☆調査と問題認識

☆プログラミングと評価

☆記録と情報

☆宣伝広報

☆ガイダンスと助言サービス

☆地域・国際組織との連繋

☆次のような団体組織を含むべき

☆行政の省レベル

☆公私団体

☆女性団体

☆生活協同組合

☆自主的組織

☆農村女性

☆主婦

☆宗教・人種別グループ

☆被雇用者・労働者・労働組合など

☆専門的な知識を持った著名人

☆学生組織

Ⅲ「アジア太平洋地域行動計画」

「世界行動計画」の目標を達成するために、よりよい方法と推進本部を設定し、国連地域委員会は、世論を喚起すべきである。

アジア太平洋地域経済社会委員会（ESCAP）は一九七四年に、開発のための女性の統一をめざして計画案を採択した。地

域行動計画のどれを優先にするかは、各国にとって異なっている。

政府援助組織、NGOは、特に農村地域の女性に焦点をあてつつ、開発発達における女性の役割を強めるための政策・戦略を推進していくべき。各国の調査・データ・情報を交換し、女性の役割を強めるための教育・訓練を推進する。婦人問題プログラムを経済的に援助する。

参加国は、アフガニスタン、オーストラリア、バングラデッシュ、ブータン、ビルマ、中国、カンボジア共和国、※フランス、インド、インドネシア、イラン、イラク、パテト・ラオ人民共和国、マレーシア、モルジベ、モンゴリア、ナウル、ネパール、※オランダ、ニュージーランド、パキスタン、パプアニューギニア、フィリピン、韓国、シンガポール、ベトナム社会主義共和国、スリランカ、タイ、トンガ、ソ連、※イギリス、※北アイルランド、※アメリカ、西サモア

次の八つの領域に重点が置かれている。

☆教育訓練 女性の教育レベルと家族構成は緊密な関係を持っている。教育・訓練・雇用はきりはなして考えられない。

☆雇用 女性の役割をどのように評価するかは、積極的な経済参加のいかんにかかわっている。

☆健康・栄養・福祉 社会経済発展は、最優先目標だが、他の要因も、人口抑制あるいは人口増大にインパクトを持つ。

☆人口 開発プロセスに女性が十分参加していかれるために、女性が自分で妊娠・出産を決められることが大事。

☆調査・資料収集・分析 社会経済資料によって女性の置か

れている現状を分析し、これにもとづいてより現実的な計画を推進していくべき。

☆法律・行政 道徳・価値観は、長期的な見通しを持って変えていかなければならない。

☆NGO NGOは国連や国連機関、国際間相互団体にとつて大事な役割を持つ。

☆情報との交換 女性に対する根強い文化的伝統的偏見を取り除くため、すべてのプログラムは、交換されるべき。

各国政府に対する提案例として、文盲をなくするために、初等教育を義務にしていこう。学校のカリキュラムを変え、国の発展に結びついた教育・訓練内容を持つこと、これにより、古い男女別役割意識を打破していくこと、また、人口問題、家族生活問題をも含み、結婚・両親としての役割などに十分な知識を持つことができるようになること。女性のための雇用政策を推進し、保育所設立などの労働条件を整える。老齢年金、失業保険、社会福祉サービスを整備拡大。女性の最年少結婚年齢を上げて十八歳とすること。国際的比較を持った調査・データ収集などである。

IV「アフリカ地域行動計画案」

アフリカ大陸における女性の現状は異なっているため、諸国は、自国の優先政策を推進すべき。国連地域委員会は、「世界行動計画」への関心を喚起し、その目標達成のため努力すべきである。アフリカ社会経済委員会（ECA）は、一九七四年に開発・発展のための女性の統一プランを採択した。

参加国は、アルジェリア、アンゴラ、ベナン、ボスワナ、ブルンジ、カボベルデ、中央アフリカ、チャド、コンゴ、エジプト、赤道ギニア、エチオピア、ガボン、ガンビア、ガーナ、ギニア、ギニアビサウ、コートジボワール、ケニヤ、レソト、リベリア、リブヤアラブ共和国、マダガスカル、マラウイ、マリ、モウリタニヤ、モウリシャス、モロッコ、モザンビーク、ニジェール、ナイジェリア、ルアンダ、サントメ・プリンシペ、セネガル、セيشェル、シエラレオネ、ソマリア、※南アフリカ、スーダン、スワジランド、トーゴ、チュニジア、ウガンダ、カメルーン共和国、タンザニア共和国、オーストラリア、ザンビア（※はECAには入っていない）

次の六項目に重点が置かれている

☆教育訓練 教育訓練の欠如は、女性の参加を障害している。教育の効果は十分見かえりのある雇用に結びつかねばならない。

☆法律・行政 必要な法律の策定、行政指導は、女性の経済・社会・政治参加、文化的生活を営むための機会均等。

☆雇用 開発・発展のためには女性のあらゆる領域での雇用促進が必須。

☆健康・栄養・福祉 これらの推進は重要な要素を持つ。

☆マス・メディア 女性に対する偏見を打ち破り、男女平等のために女性の能力を引きだすよう協力すべき。

☆調査・データ・分析 女性の現状を伝えるために。

地域レベルならびに国レベルの推進本部が作られるべきである。地域レベルでは、ECAがその役割をになっはいるが、

これとは別に独自のものの設置が提案されている。「アフリカ地域設立委員会」は、国内委員会に協力し、「女性のための汎アフリカ調査訓練センター」は、各国諸機関を援助する。アフリカ女性発展活動部隊を作り一つの分野で力のある女性はその分野に彼女の持つ力を使っていく。

また国内レベルでは、各国に女性と発展委員会を作る。婦人省の設置。各分野から選ばれた専門家で作られた各省間を結ぶ組織の設定。NGO共働委員会の設置などがあげられる。

各国に対する提案例。女子・女性のための文盲をなくす義務教育。近代農業推進のためのプログラム。社会・職業ガイダンスを学校教育に取り入れる。経済活動参加のために、雇用政策、労働条件の改善、自営業女性との協力など。保育所の設置などによって女性が自分で選びたい多様な役割を創造する。特に農村における女性の状況を改善する。マスメディアが女性のイメージ作りにどの程度影響を与えているかを調べる。水道の設置。避妊知識を含んだ保健衛生の強化。栄養プログラムの推進。社会福祉サービス、老齢年金、雇用保険制度の整備拡充。女性の結婚最少年齢を所に応じて上げる。出産と子どもの養育についての情報が常に得られるようにしておくこと。母子保健衛生。都市・農村両地域での国勢調査をし、年齢、結婚、家族構成、教育程度、経済活動参加の有無などを調べる。労働省での女性のための予算を明確にする。一夫多婦制の現状調査。結婚するかしないかは男女ともに自由に決める。家庭生活における責任・権利と義務の平等。ILO国際会議の批准を支持する。

海外のフェミニストと楽しく 学ぶ△あこら▽英語教室

日本人は学校でたくさん時間をさいて英語を学びながら、会話がへたなのはなぜでしょう。できないとかへただ、とかいう思いこみがあるのではないでしょうか。すべての人は可能性を持っているはず——と、△あこら▽では週二回、楽しい会話教室を開いています。先生は、英語を母国語とするフェミニストたち。社会学などの学位を持つ、意欲的で優秀な女性ばかり。現在、A・B二クラスありますが、どちらも、入会隨時。途中からでも十分ついていきます。

●Aクラス 毎週月曜夜六時十五分—七時三十分
中学二年程度の基礎があれば十分。やさしい会話クラス。

●Bクラス 毎週水曜昼十時三十分—正午
ききとりも話すことも、比較的よくできる方のクラス。

●月謝は、A・Bとも五千元。△あこら▽会員は三千元
●場所は、A・Bとも△あこら読書室▽。地下鉄、丸の内線「新宿御苑前」四谷方面西口下車、左へ十メートルです。でんわ・03・354・9014

Ⅱ ニュー・フェミニズム宣言

一、もはやフェミニズムが、「女権拡張論」のみを意味する時代は終わった。私たちは、現在と将来のフェミニズムのあり方にふさわしい新しい定義を提案する。

二、フェミニズムの新しい定義は、//女性による人間解放主義//である。

三、女性が人間として、日常生活のあらゆる面で、平等に自由に生きていくという、ごくあたりまえのことが、自然にまんべんなく実現されていくことこそ、私たちの意図するところである。

四、フェミニズムは、女性による政治運動やサークル活動、女性学をはじめ、学問・政治・労働・芸術・くらしなどにおける、女性たちのあらゆる運動と幅広く手をたずさえ、たがいに栄養を与えあっていくものである。

五、女性があらゆる面で創造的に生きること。創造する女性の力で、社会の根底にあるかたよった価値観を直し、それを日本の土壌の中で、国際的視野をもって実践することをめざす。

六、フェミニズムは、効率と利潤追求のためにゆきづまった、現代の管理社会の問題をすべて関わりあるかたちでとらえ、その中で押しつぶされがちな人間を蘇生させる。つまり、男性の解放にも通じるものである。

七、フェミニズムは、男性や弱者も含めて、他者を差別したり、搾取したりせず、他者とともに人間として生き生きとのびやかに生きることが基本理念とする。

八、フェミニズムは、女性の側からさしたず、現状打開のための一つの方法論であるとともに、未来にむかって人類が共存し、てゆくための原理であると信じる。

九、この運動は、情報の中心である首都圏だけでなく、広く全国の人たちが参加し、行動できるよう、全国組織をつくって実践してゆく。

一九七八年九月

代表 渥美 育子

大橋 照枝 (コピーライター)

桑原 糸子 (中央大学学院、政治学)

しまようこ (大東文化大学助教授、心理学)

松原 純子 (東京大学助教授、疫学)

柿沼 美幸 (ジャーナリスト)

小林 富久子 (早稲田大学助教授、アメリカ文学)

棚沢 直子 (東洋大学助教授、フランス文学)

水田 宗子 (南カリフォルニア大学助教授、比較文学)

(五十音順)

「男と女のための子供講座」

「男と女のための子供講座」は、一九七七年五月にスタートした。子育てをめぐる現実的なテーマにそって、参加者のフリーディスカッションや、ゲストや記録映画をまじえての自主講座。月一回、約一年間の活動をスタッフの会話から振り返ってみよう。

第一・二回・子どもの育ち方と幼児教育の環境・ゲスト福地五瀬男・あの頃、子育てノイローゼや子どもの自殺が連日報道され始め、男は仕事、女は家事育児という形態の無理が、あたり前の人々の生活に噴き出していた。今の社会が子どもの生存を圧殺する状況は、女だけでなく、男の生き方とも無縁じゃないことを痛感し始めたんだ。

女・特に都会生活では、女だけが一人育児をひき受けてゆく疲労と孤独感、母性神話への疑いが、すでに個人的レベルを越えてたのよ。

第三回は「子どもとテレビ体験」と題し、東映アニメの伊藤英治さ

んを囲んで、制作の実情を聞いた。テレビに管理されない暮らし方、大人自身の生き方が話された。そしていよいよ第四回から連続三回、「男と子育て」が語られる。女・子育ての問題となると、まず女ばかり集まるし、男が自分の生き方として子どもをとらえることに絶望しかかってたから、参加者の半数が男だったのは驚いたね。男・ニューファミリー文化というのがマスコミででっち上げられた頃で、男の子育ても話題になった背景もあったけど、保夫経験者やいろいろな男の子育てを考えるグループなどで地道に実践しようとする人々が、ワッと集まった感じだった。男にとって、そういうことを正直に話せる場が、いかに少なかったかっていうことなんだ。

女・何しろ、男と女の偏った役割分担を変えてゆくことは、人間が男らしさ女らしさの演技を強制され苦しんでる以上、現実的なスタ

ートラインだというのはたしかね。ただ、女が経済的自立をめざしたり、男が生活面で自立してみせることだけが新しい生き方なんだっていう、単純な正当化は、個人をパターン化する落とし穴になりかねないっていうことは、気になるな。

人間としての一人一人の男や女が、表面の形式に仮託できないホッソネをじっくり見つめ、他人とは違う自己がリアルにこの世に存在している意味をもっと感じ考えるべきだと思うの。古い制度を新しい制度に置き換えれば解放され進歩する、という短絡的で安易なヒナ型の再生産をくり返さないためにもね。

第八回 サマーヒル学園の記録上映会・ゲスト得田壽之

女・自分の子を「教育」という名の収容所へ預けるしかないのか、という切実な不安が、ニイルの自由の学校への関心を高めているのね。狭い所に八十人も集まって。

連絡先 杉並区西荻南3の15の3 ほぼひとと村内

電話 (03) 332-1187

問合せ 電話 (0424) 63-2425 (末永)

男・まず大人たちが互いに抑圧しないで生きられる人間の新しい現実を社会的に作り出せていない状況に比例して、学校も子どもたちの生命力に追いつけない貧しさ不自由さのままにあるんじゃないか。どうしたらこの厚い壁に穴をあけられるのか、という真剣さや熱気を参加者の表情や議論に感じた。女・サマーヒル学園を卒業した人々が、支配や競争・対立関係の中に存在証明を得るのではなく、協調的でありながら、しかも自発的な生を切り開いていくというタイプに育つてるといふことに、個人と集団の関係の新しいラジカルな「現実」を感じ取れたね。男・その「新しい現実」、つまり自由を知った人間が開かれた関係をどう社会に生み出していくのかという原理を、サマーヒル学園という神話に封じ込めて共感したり反発したりするだけでは仕方ないよね。自分たちのあたり前な日々の中で、自分独自の目で、この原

理を発見し続けるしかないと思うよ。

女・幸福の尺度を地位・物・性的満足だけでしか感じられなくなってる自分たちは、子ども時代に禁止された「正当な欲求」や「自由」のすりかえをやり続けてるのかもしれないね。自分の中にそんな混乱や消極性が、秩序や管理的生活のパターンを本気で変えていくうえで意識されない障害になつてきたってことは確かにあると思う。

第九回 大人の性と子どもの育

ち方・ゲスト村瀬ゆみこ

女・これまでの男女関係が、結婚という性の契約、保証に依存して営まれてきたという大きな要素はあるね。幸福の保証もそこだけに幻想されてきた神話が、たとえば初潮に始まる性を平均的に物質化し、逆に一人一人の性のホンネを闇の中に葬り、コンプレックスの大量生産を続けてきたんだね。男・それこそ、子ども時代に心も体も一〇〇%自分の欲求に忠実に

生き、表現するという体験が乏しいと、ある程度の制限や契約によって自分の人生の喜びを評価してくれる象徴を求めるようにすらなってしまうらしい。

女・もう一度、自分の心がそうであるように、性も自分の手にとり戻して、正直に体験していく関係性を女も男も作り直していくことに真剣になるべきじゃないかしら。男・でも結局、それは性だけのことじゃなくて、生きることすべてにいえるんだと思うよ。

女・女と男・子どもの間に起きている混乱を、これまで正当とされてきた社会思想やモラル・理論で解釈するのではなく、そこからこぼれ落ちて、人々の中で確かに今、実感され、直面している未分化な問題にできるだけ身を寄せていきたいし、そこから個人のことでばさぐり合い、考え、生きてみようという姿勢を、これからもこの講座で試みていきたいね。

(文責・川内・石田・末永)

ひまわりぶんこ

女も子どもも生かしたい

子どもを産んで子育てに専念して数年、夫や子どもに気がつかない、近所づきあいに、親戚づきあいに気をつかう毎日の中で、しだいに言葉を失い、手紙を書くとうすれば、子どもの成長ぶり以外に書くことが何もなくついているおのれを発見し、ああこれが主婦というものなのかと気がつく。

子持ちの主婦、それも手の掛る子どもをかかえた主婦の状況は哀れだ。ただひたすら子どもが巣立つ日を待ちわび、巣立った後で何ができるという期待にとりすがらない。それは幻想としか呼びようがない。私たちの母親も、その母親もそうして年老いていったのに、何に期待を寄せているのか。なにをしたい……。

そしてさらに、女が子育てに専念している状態が子どもにとっていいことかといえ、決してそうではない。子どもは子どもの集団を求めている。

それでは子どもを施設に預けて働きに出ることで問題は解決するのだろうか。

おのれの活動を容易にするため、「手のかかる」子ども・老人・障害者を施設に預けるというのではどこかおかし、間違っている。私たちにとって大切な関係は、断つことなく伸ばしていきたい。共に育ち合う中から私たちはどうしたいのか、どう生きたいのかを考えていきたい。こんな思いの中で昨年十一月ひまわりぶんこが誕生しました。

現在の状況

何かしたいという熱意だけをたよりに、ビルの一隅を借り、図書、おもちゃを持ち寄り、数人で始めたひまわりぶんこも、現在会員二十三人、子どもたち三十三人、会報購読者四十八人になり、少しづつ形もできてきました。

共同保育(週三回)

保育責任者二人(交替制)が零歳から六歳までの子ども十

二(三人と共に遊ぶ。男(父親)が参加することもあり。託児(月一土まで毎日)

病氣・出産・職業等の理由で共同保育に参加できない人・共同保育の日以外に急用のできた人の子どもが対象(有料読書会(週一回))

現代子育て考(Ⅱ)に取り組む。子どもから離れ、語り合う楽しさにいつも時間超過。会報発行(月一回)

図書貸出

現在三百冊近くあり利用は多く、希望図書の購入もする。

共同購入

粉石鹸・よつば牛乳・無公害食品等、「徳島くらしをよくする会」の共同購入に参加。

専従二人(六人で交替)をおき、掃除、おむつ洗、炊事、おもちゃ・図書の整理をする方法をとっています。

この間、私たちはどう育つてきたのでしょうか。会報への投稿文

連絡先 徳島市佐古七番町7-8-403
ひまわりぶんこ
問合せ 電話 (0886) 26-0757



や、反省会の声から、

―生き生きした同性との出会い

―十か月の子が二・三歳児にはいい
はいてでもついでにいつて遊ぼうとする

―わが子から他人の子ども、子ども
の集団へ目が向き始めた

など、積極的に評価できる点に反
してまた、問題も山積みです。

専門職の目をもたぬ私たちは、
子ども集団の動き、彼らの世界に
ひとつひとつぶつかります。彼ら
との関係も決して明るく楽しいばかり
ではありません。現代の公保
育に疑問を感じ、その限界を越え
ようとの試みですが、共同保育反
省会では毎回「どうしよう……」
ばかりです。

新しく出会った私たちも、「何か
やりたい」と話し合う次の段階
にきています。共同保育をステッ
プに、踏み出さねばなりません。
初期の願いであった「障害者」「老
人」へ輪を広げることも、男たち
との関係変革も、いまはまだ、遠

くむなしい感じです。

今後の発展に向けて

現実の問題としてビルの四階を
借りていることから、子どもたち
の遊び場は限られ、狭い空間の中
で子どもたちが欲求不満をおこさ
ないようにしようとするれば、身体
がずたずたになるほどつきあわね
ばならない。ちよつと手を抜けば
子どもたち同士のかみつきあい、
なぐりあいが始まり、窓からおも
ちゃをなげる、窓ガラスを割る、家
具をこわす。子どもたちのバイタ
リティはすさまじい。ひまわりぶ
んこ全体に子どもたちが広がり、
のつとられた感があります。会報
の印刷の時など大変、やつと書いた
原紙を破られたり、刷り上がって
たばかりの紙の上を歩いて足型に
二重に印刷してしまったりで、て
んやわんやです。子どもたち同士
ののびのびとした遊びなど夢のま
た夢といったところです。毎日遠
くの公園まで出かけていたり、
夏の間は近所の駐車場までプール

を持っていつて水遊びをしたり、
専従・保育責任者は重労働です。
広い家が欲しい、既製の家にな
く、子どもたちや車椅子の人たち
のために設計された家が欲しい。
会員全員の切実な願いから、ひま
わりぶんこを新しく大地の上に建
設する計画を進めています。

老人、障害者、障害児、健常児、
学生、働く女、主婦、……とさま
ざまな言葉で区別され分断されて
いるすべての人たちに開かれたひ
まわりぶんこにしていきたい。そ
して共に、性差別、障害者差別、
老人差別など、いろいろな問題に
ついて考えていきたい。

資力も経済力も何も持たない私
たちが今の場所です。やっていくだけ
でも大変なことなのに家を建てる
など、とんでもないことかもしれ
ませんが、小さな力を寄せ集め、
大胆不敵にやり遂げていきたい。
カンパ、基金貸付、会報の購読、
投稿、ご意見、ご批判、etc、
ご支援をお願いします。

国際婦人年大阪連絡会

国際婦人年を契機に発足

出産ほど女に共通の問題はないのに、なぜか女自身による出産の究明はされていない。

昨秋、日本で初めて実施され、

中間報告が発表された「妊娠・出産アンケート」は、女にとって生命にかかわるほど重要な「出産」が、医師や病院の都合によって管理されている状況を浮き彫りにし地もと大阪ばかりでなく、全国に大きな波紋をひき起こした。

この実施母体、国際婦人年大阪連絡会とは、その名のとおり、国際婦人年の一九七五年一月に発足した大阪府下の婦人団体・労働団体・市民団体の連絡組織である。

発足したのは国際婦人年からだが、どこかの大組織が呼びかけて国際婦人年をきっかけに作られたというわけではなく、十年近く前から、府政や市政を学んだり、外国の婦人代表を迎えたり、中国展に民間サイドでの協力を行なった

り、折あることに多様な共同行動を積み重ねてきた婦人団体・労働団体・市民団体が連絡会をつくったもので、いわば生まれるべくして生まれた連絡会といえる。

代表者も事務局もなく

参加は四十四団体。加盟団体名をあげると――

あけぼの会・エプロン会・大阪あゆみ会・大阪市母と子の共励会・大阪市婦人団体協議会・大阪市婦人有権者連盟・大阪主婦の会・大阪総評主婦の会・大阪友の会・大阪府家庭人バレーボール連盟・大阪女子薬剤師会・大阪府女医会・大阪府生活学校・大阪府地域婦人団体協議会・大阪婦人クラブ・大阪府母子福祉連合会・大阪母性クラブ・大阪民主婦人同盟・大阪主婦同盟・関西消費研究会・関西働く婦人の会・くらしを守る会・国際婦人年連帯委員会・堺市婦人団体連絡協議会・助産婦会天王寺支部・吹田市地域婦人団体協議・会

世界平和母性協会・全大阪主婦連盟・総評大阪地方評議会・退職婦人教職員大阪連絡協議会・高槻西部婦人連合会・土曜会・日本看護協会看護婦会大阪支部・日本キリスト教婦人矯風会・日中友好協会（正統）・大阪府本部婦人部・日本婦人会議大阪府本部・日本民主主義婦人同盟・枚方消費問題研究会・婦人民主クラブ大阪府支部協議会・日本婦人人権協会・部落解放同盟大阪府連婦人部・ミッド社会館・YMCA

この団体名からだけでも、実に多様な団体が参加していることがわかって頂けると思う。これだけの多様な団体が、「国際婦人年」というきっかけはあったにせよ、連絡会をつくれたのは、大阪ならではの現実感覚が根にあったからかもしれない。

しかしこの多様な団体をまとめていく代表者はいない。事務局もない。事務局団体として、大阪総評主婦の会・日本婦人会議大阪府

連絡先 大阪市天王寺区上汐町六丁目 大阪市立婦人会館内
婦人団体連絡室気付
問合せ 電話 (06) 772-0061

本部・婦人民主クラブ大阪府支部協議会が事務を分担しているにすぎない。このことは大きな特長であると同時に、寄り合い世帯でリーダーシップが不明という短所にもなっている。

「離婚による復氏」改正に成功

しかし、この寄り合い世帯は、一九七五年以来、着実な活動を重ねてきた。

まず最初に手がけたのは、民法改正問題。婦人の地位向上のための幾つかの要求内容について国会請願署名を集め、法務大臣交渉を行ない、ついに、その一部である「離婚による復氏」を改めさせることができた。結婚によって女の九五％は姓を変えるが、離婚によってふたたび生家の姓に復さなければならぬと民法で定められていたのを、結婚後三十日以内に届け出れば、従来の姓をそのまま名乗ることもできるように改めたものである。

三千人をアンケート調査

この成功に力を得て、第二弾として、妊娠・出産の状況を調査し、女の手による「出産白書」をつくることを計画、大規模なアンケート調査を始めた。

現在までに三千人を上回るアンケートが寄せられているが、今春、第一回中間報告会を開催、現在、その約三分の一について「陣痛誘発剤使用の再調査」を実施中である。中間報告でも明らかにになったように、土・日・祝祭日の出産を回避するための陣痛誘発剤の使用は目を見はるばかりであり、出産者の約三分の一が陣痛誘発剤を使用させられているが、その実態がさらに明らかになれば、大きな政治問題として追求し、女の中から女のいのちを女自身の手に取り戻していこうと張り切っている。

(伍賀偕子)

(妊娠・出産アンケート中間報告)は、本誌21ページに掲載しました)

日弁連女性の権利に関する特別委員会編
憲法30年と男女平等
—その回顧と展望—
盛況をはくした憲法施行30周年記念パネルディスカッションの内容と討論を収録
1部200円 送料140円
申し込み 千100 東京都千代田区霞ヶ関1-1-1
日本弁護士連合会・女性の権利に関する特別委事務局
Tel. (03) 580-9841

◆訂正とおわび

『あごろ』18号の記事の一部を下記のとおり訂正し、おわびします。

●一〇ページ上段終わりから三行目以下を「労組とは共闘でできていますが、『原稿料雇』は小学館で働いている人ばかりでなく、組合の力量としてもきちんと取り組めていない現状です」に訂正。

●一〇六ページ上段三行目「期限切れ」の次に「でたかっているのは」を追加。

●「一三ページ下段八行目「途中で」以降を「幼稚園側が廃園を決めたので譲歩し、この闘争に関しては全面的に園側に責任があったことを公表・揭示させ、闘争を終結させました」に変更。

会員紹介

したい・・・

＜あこら武蔵野＞世話人

丹羽雅代さん

昨年十月のあこら全国大会。丹羽さんとの出会いは、沈うつ気味だった私の心に、勇気と励ましを与えてくれた。
一見学生風、気やすく語り合っていくうちに、彼女のバイタリテイのすごさに圧倒され、「なんとエネルギッシュな女なのだろう」と思わずにはいられなかった。
昨年四月に大阪の枚方市から転居。枚

方では、中学の教師を五年半経験しながら、共同保育運動のなから生まれたサークル「かたる会」で活動が続けてきた。

転居のため、一年間は専業主婦を経験、その間、公民館の講座、学習会、鍼、朝鮮語の学習会、あこらの編集会議、三里塚を考える会、学校の父母会……へと、足を運んだ。昼間は子どもをつれて、夜は「ワ親その二」におしつけて。

この九月から、都立高校で数学を教えることになった。

小学三年生と五歳の二児の母。夫君は大学の数学の研究職。

三里塚の無農薬野菜を共同購入するワッパツの会、小平の民族教育と手をつなぐ市民の会……と、多方面で動き回っている。

気さくで天真爛漫な人となり。自称、「おっちょこちょいでうれしがり屋」。人との出会いで人間関係をつくっていくのが楽しいという。気負いなく、楽天的に運動を持続させているところがとても魅力的だ。

あるとき、「丹羽さんの活動力の源泉

各地のあこら連絡先

あこら旭川

- 旭川市神楽岡1条5丁目3番地
- 〒078-11 田代 慶子
- ☎0166-65116237

あこら札幌

- 岩見沢市9条西3丁目
- 〒068 山口 里子
- ☎0126-246772

あこら北東京

- 川口市芝北町3413
- 〒332 宗久知恵子
- ☎0482-6510241

あこら武蔵野

- 小平市小川町1-763-86
- 〒187 丹羽 雅代
- ☎0423-436749

あこら京王

- 府中市晴見町3-21
- 〒183 関 和子
- ☎0423-624705

自由に呼吸



会 員 紹 介

「何なのかしら」と尋ねると、「自由に呼吸したいから」と、即座にこの一言が返ってきた。

「自由に呼吸する」、あたりまえのこと
があたりまえでなくなっている。私たちは、なんと自由に呼吸しにくい状況にあることだろう。

自分のできることで、自分のまわりで自由に呼吸しようと、たえずがんばっている彼女が、とても大きくみえた。そして、彼女のような人が、さまざまな運動

をがっしりと支えていくのではないかと
思う。

・ ・ ・ ・ ・
△あごろVの誌友から△あごろVを知り
会員歴三年。

現在、△あごろ武蔵野Vの世話人として活躍中。「一人一人の関心が相互に影響しあい、拡大していくような、みんなが広がって深めあうような、そんな会にしたい」と抱負を語る。

「何の因果でこんな所へ来てしまったのか」と悔やむことの多かった彼女も、今では、枚方でのサークル活動の「武蔵野版」ともいうべき△あごろ武蔵野Vで、「こつちも結構面白いよ」といえるようにがんばりたいと意欲満々である。

交友関係の広さから、毎回というほど知人をひっぱってきて、会員拡大に努めている。

・ ・ ・ ・ ・
母として、女として、教師として、市民として、人間として……。充実の三十代を^{30代}に生きている、陽気で、頼もしい、我らが丹羽さんである。

あごろ武蔵野(K)

あごろ神奈川

- ・ 厚木市厚木801-1
- ・ 〒243 沼田千恵子
- ・ 電話0462-2116516

あごろ東海

- ・ 名古屋市緑区大高町伊賀殿107
- ・ 〒459 高橋ますみ
- ・ 電話052-6224926

あごろ京都

- ・ 京都市左京区北白川久保田36-4
- ・ 〒606 塚崎美和子
- ・ 電話075-7914623

あごろ阪神

- ・ 尼崎市武庫之荘3-6-6
- ・ 〒661 木沢みずず
- ・ 電話06-43111022

あごろ九州

- ・ 福岡市西区笹丘2-4-6
- ・ 〒810 小島 豊子
- ・ 電話092-5217624

あごら読書室

ドキュメント女の百年 1

—女の一生—

もろさわようこ編
平 凡 社

連れ合いの仕事の関係等で、我が家では若い女子学生と接する機会が多い。私を含めて周囲の女たちの状況に想いを寄せるとき、湧いてくるその苦いものの根っこが多くが、青春時代に始まっていることに気付かされたときから、私は、大人の女から、大人になろうとしている女へのメッセージを届ける役のはんの端っこでも担いたい、と思つて、もぞもぞとかつこ悪く話をしたりしてきた。けれどもこれは大層くたびれるし、彼女たちに愛想をつかす（あるいはつかされる?）ときの方がずっと多いのだけれど、これからは、この本を、まず彼女たちに読む

ように勧めてみようか、と思つている。

——差別をもたらず政治経済的構造がある限り、女たちが社会的・政治的に進出して、明るい解放像がないことは、資本主義、社会主義を問わず、既に証明されつくしている。ならば、わが生きざまと関わらせて、この状況を切り開くにはどうしたらよいのか。その答えを求めて女の近代をかえり見ることにした。

閉ざされた場で、重く害されながらも生産の基底部をよく担い、上部構造的な世界とはるかにへだたる場で生きてきた女たちの生き方と、証言を主軸に編集したのは、よくもあしくも天の半分を支えたのは彼女たちであり、彼女たちこそ女性史の主流を占める人たちであると考えたからである。——本書解説より。そんな想いを、二十余名の人々の、以前に発表された文や、語りによって、多面的に描き出そうとしている。それは、この三十

年ほどの間に急速にみられなくなつていった女の生まれてから死に至るまでのあたりまえの民俗であり、あるいは日本の中において第三世界的状況を生きさせられている女たち（被差別部落の、アイヌの、沖縄の、在日朝鮮人の障害者の、女たち）からの淡々としたすさまじい証言であり、「家」制度と共に生き、或いは「家」に従属し、或いは抗がう女の生き方であり、また家・権力との闘いの中で培われてゆく女の自立の有様である。そのどれもが一つ一つの重味で読む私を打つ。この本に渦まき想いを、どう受けとめどう自分の内部へ取り込み、転化させてゆけるのか、手探りながらも、やっぱりやらなくっちゃあ、という気持ちをもたらしにくれる本ではあつた。

シリーズ女の百年は、あと五冊続刊とか。それぞれの側面からの掘り起こしが楽しみです。

(M・N)

暴力なき出産

F・ルボワイエール 著

村松 博雄 訳
KKベストセラーズ 社

なぞ、赤ちゃんは誕生の瞬間、激しく泣き叫ぶのだろうか？あの泣き声は元氣な証拠なのだろうか？と聞かれたら、私は戸惑ってしまう。あたりまえと思っていることを、あらたまつて聞かれると、動揺してしまう。著者はここで、「赤ちゃんは苦しくて泣いているのだ！」と言い切っている。そして、この苦痛を和らげるためにはまず理解することだという。赤ちゃんがどうして、何が原因でそんなに苦しむのかを理解することから始めるのだ。赤ちゃんを一人の人間として胎内から外界へやさしく迎える方法を、説得力のある文章で紹介してくれる。著者の独断ではないかしらん、と思われる箇所もあるが、従来の方法で生まれた赤ちゃんの泣き叫ぶ表情と、著者の勧める方法で生まれた赤ちゃんのやさらかな表

情を見比べると、私もこの方法で赤ちゃんの声なき声に耳を傾け、理解し、やさしく迎えたいと思う。この方法の一部を取り入れ、出産直後は臍帯を切らず臍帯が脈打っているあいだ母親の腹の上に寝かせておく、という産院もできた。出産での主役ともいえる母と子、これを助ける第三者とのより良い関係を探していきたいと思った。また、これから出産をしようという人たちのためにも、経産婦の感想文等も集めていきたいと思っている。(高橋芳恵)

(A12 載 一一九頁 一、〇〇〇円)

子どもの自殺

稲村 博著

東京大学出版会

わが子が自殺をはかったとき、親は一樣に、「なぜ？」という疑問に苦しむ。「あんなに明るい子」が、あるいは「あんなに成績のよい子」が、ある日突然、自分の手で命を絶つという現実に直面して、家族は茫然自失の態となるのである。

近年はとくに、子どもの自殺が急増しているという悲しい傾向が出ている。

子どもの自殺は唐突で、原因もたいたいと思われがちだが、実際にはそこに至るまでの十分な原因と動機があることを、著者は多くの事例をもとに解明している。

筑波大学社会医学系助教授であり、精神医学・精神衛生学・自殺学などの専門家である著者は、冷静だが温かさを失わない目でこの困難な問題をみつめ、多角的な視点を読者に与えてくれる。

悩み多き年頃の子どもをもつ親にとつてはもちろん、非常に学ぶことの多い本だが、むしろ人間はいかに生きるべきかという点で示唆に富んでいる。

ここでは、子どもを高校生以下つまり十八歳以下に限定している。

六、七歳の自殺例もまれにはあるが、年齢は高くなるほど増加し、十五歳から十八歳がもっとも多い。

著者は、子どもの五大自然動機として、家庭問題、学業問題、交友問題、精神障害、病苦を挙げている。

こうした原因が一つあるいはいくつか

からみあい、相互に深く関連しあつて、子どもを心で触れてゆく。それが潜在的な準備状態となり、そこに直接的な動機が加わったとき、子どもは自殺へと走ることになる。

たとえば、ある日突然駅のホームから通過列車にとびこんだ高校三年の男子は経済的にも恵まれ、小学校の時から成績優秀で、家族に期待される存在だった。

両親にも自殺の動機はまったく不可解であつたが、結局次の状況が判明した。高校入学後健康を害した本人は勉学に身が入らなくなり、受験が近づくにつれ、志望大学に合格できるだろうかという不安で、不眠症などに陥っていた。そんなとき、たまたま居あわせたホームで列車飛び込みがあり、それを目撃した高校生がその直後と同じ駅で飛び込んでいた。

結局、彼は自殺の準備状態ができていたところに、直前の自殺に強い暗示をうけ、衝動にかられたというのである。

現代の子どもがおかれている状況は、ゆがんだ教育の過激な競争と親の過大な期待、その結果からくる孤独と疎外感など、問題の根は非常に深い。

その対策として著者は、もっと多様な価値感をもたせ、命の大切さを認識させることなどのほかに、父親の家庭での復権や母親の視野を拡大することなども挙げている。子どもの自殺は大人の社会の反映であり、根本的な問題はむしろ、親の側にあることを痛感させる本である。

(四六判 二五二頁 九〇〇円)

(友)

エヴァの日記

エヴァ・フォレスト著

小中陽太郎訳

時事通信社

スペイン・バスク地方の独立運動に参加して逮捕・投獄された一精神科医の日記・手紙を集めたこの本を良くない、と言う人はおそらくいないだろう。著者は確固とした思想、広く深い知識を持つのみならず、自己に対する信頼に満ち、他人に対する理解・愛情にあふれ、そのうえにユーモアのセンスは冴えている。生き生きと、のびのびと、豊かで強い「大地の母」のようなものが伝わってくる。人間

としての善き資質のすべてをエヴァ・フォレストは持つているようにみえる。すばらしい、の一言に尽きる人なのである。エヴァの精神的支柱の一つに反権力があり、そこから「反精神医学」にまで彼女の思想がのびていることは実に興味深い。マルキストとしてのエヴァに加えられたアナキストとしての資質がうかがえる。

エヴァの思想や人柄がまことに生き生きと伝わってくるのに、いま一つ心から湧きあがるような感動がない。なぜだろうかと考え続けているがまだ答えがでない。一つには、ますます生き難くなっているにもかかわらず、それがどこからどのように生みだされているのか、ますますわかりにくくなっているという日本の現状との違いもあるだろう。もう一つは、著者も何度か弁解しているが、いささか修身用教科書の感がぬぐえないのだ。「おばあさまと一緒のときは、よくくご様子をこらんなさい。お話を聞けるように心がけるのです。お口を閉じていらしたら、それはそれなりにその隠れた意味を考えなさい……」こんな人

に育てられた子どもはどんな成人に成長するのか、と思つてみたりする。

もちろん、エヴァにはげまされることは多い。「麻薬」に対して、私はこの世界の具体的な現実に残まり、これを観察し、情報を収集し、その上で考え、そしてわたしの『天国』を見つけたしたいのです。(レーニンの言うように夢見る、と言つてもいい)そこも困難は多く、つらい仕事待ちかまえているかもしれないけれど、正確によりよい何かがあるでしょう」

(貴)
(B6判 三一九頁 一、四〇〇円)

ストッキングで歩くとき

―戦後の青春4―

堀場 清子編

たいまつ社

もんぺをぬいで素足に風をあてた青春……敗戦時に満でいえはティーン・エイジャーだった日本の十一人の女たち(主に文筆を職業としている人たち)の個人史をまとめたもの。(戦時下の窮乏生活、突然の敗戦、そしてさまざまな形でやっ

てきた戦後。否応なしに時代の大きな渦の中に一枚の木の葉としてまきこまれてゆく少女たちの姿は、人間存在の危うさをも、すばらしさをも読む者に自覚させずにはおかぬ迫真力のあるドラマである。自由への展望をはらみながら、そうである故にこの価値転換の時代は少女たちにいっそうの内的な苦しみを与える。たえず自問自答をくりかえしながら彼らは息苦しいほどの誠実さで自立した女への脱皮の軌跡をえがいてみせてくれる。原爆、沖縄戦の地獄図絵そのものの中を通ってきた人たち。空襲・疎開・餓え・肉親との葛藤など、多くの女たちと共通の経験をもつ人たち。彼らがたくましく成長してゆく過程には生身の人間の告白があつて、それぞれがかけがえのない人生の記録である。

だが、それほどにも個性的、具体的な女たちの手記の底を一貫して流れているあるやさしさと、がむしゃらなバイタリティともいえるものには心打たれる。

あの激しい受難の時代を共に生きながら、ついに時代の波に呑みこまれていった多数の人々への思いが、この人々のき

っぱりとしたエネルギーを裏面から暗いネガのように浮き上がらせる。故なく生きのこつたことへの消しがたい自責の念に、ある人の心は深く傷つき、その思いは今も内へ向かつていく。

七か月生活しただけの広島、そこで会い、おそらく二度とは会えないクラスメイトたちや町の人たちに向かって、「ごめんね」とひそかに叫びつづけ、それ以来「しあわせはもういらない!」と思いつづけて生きてきた人。PXのセールスガール時代に知り合った二世を夫として、ハワイで苦難の時期をこえ、家庭をきずき、人間としての充実の仕事と結婚の両立にこそあつたと、いま自信をもつて言い切る自称がむしゃら派の人。

戦争という原体験を経たこの女たちのエネルギーと真のやさしさの波の中で、あらためて「女の歴史」としての敗戦は男の歴史にとっての明治維新に相当する」という堀場さんのあとがきの言葉が力をもつ。あの消しがたい負の経験を、真の意味で人間にとってのプラスの価値へとおきかえるためには、まだ日本の女は、力を出し切っていないのだと思う。

これは「山の動く日」を待つ、日本のふつうの女たちが、すべての同時代の人々のためにたてた小さい十一の碑であり、貴重な戦後の青春の記録である。(る)

(新書判 一六八頁 六八〇円)

のびやかな女たち

松本 路子著

話の特集社

この写真集はまずそのタイトルが示すように力強いメッセージを感じさせる。社会の枠の中に押えこまれた女たちが、それをはねのけて立ち上がったときの、自由な人間であることの美しさが、一人一人の顔にあらわれている。そしてそこには未来に続く、女の持っている大きな可能性を見る者に思っておこさせる。

リップの合宿で、衣服を脱ぎ捨て、自然の中に裸体を晒すことによって、殻にはまっていた自分たちを解放することから始まって、女であるゆえに受ける抑圧を跳ね返そうとする女たちの、真剣で生き生きとした集いに見いだす姿に励まされ、

連帯を感じさせられる。さらに、各分野で活躍している自信に溢れた女の姿は心にせまってくる。そして海外でも同じく女たちが楽しそうに、力強く連帯している有様を伝えてくれる。

自分たちが少しでも自由になりたいと思っている女たちにとって、心がくじける時、この写真集を見ることによって、励まされ、次のステップを踏み出す勇気を与えられそうである。これはそんな思いを伝えてくれる写真集である。(平)

(A4判 一九六ページ 一、七〇〇円)

砂色の小さい蛇

山下 智恵子著

BOC出版部

またあった、と思う。これだこれだ、と思う。「砂色の小さい蛇」八篇に登場する女たちに、わたしは必ず自分を見いだしてしまおう。

「犬」の加那子、「砂色の小さい蛇」の多恵、「埋める」の「女」。みんな、自分の力ではどうにもならない不条理なマイ

ナスを背負って生きる女である。たった一度、命の輝きを見せたのに惨めに死んだ犬に自分を見いだす加那子。醜い人間関係から逃げて生きるある日のできごと「凌辱」さえも「やがて過ぎてゆくだろう」と諦める多恵。男に捨てられ、堕ちてゆくとき、動きまわれる他の女の靴を埋める「女」。これらの女たちのもつ後向きの心情の幾分かはおたしも分け持っている。

「メデューサの首」「掌の息」「逃げ水」「墓標の海」にはより直接的な作者の分身を感じる。二度目の妊娠でやむなく教師をやめた亜沙子。「現代」に絶望的な反抗を試みて死んだ少年に「生まなかつた私の子」をみる紀恵。「点のような一日」の脱出を試みて何もつかめなかつた市子。いつも「仮定形」に行きつくために生き、離婚し、墓地の代金を最後の目標として生きる峯子。ひと口にいって、主婦的状况にある女のいたみが、切り取られ、さし出される。「何を待っているのか定かではないのに、心がひりひりするほど何かを持っている自分がみえるのだ。閉じこめられた息苦しさの中で、足踏み

したいほど焦れて待っている。……今の自分はほんとうの自分ではないとかぶりを振り続ける——これはかつてのわたしそのものではないか。

これらの地を這いまわる女たちの中で「走って飛んだ」の志奈子は、文字どおり「翔ぶ女」になろうとした。そして翔んだことへの罰であるかのように、子連れで地獄の底へ落ちてしまった。

地を這いまわる女を書くとき、作者の筆があるときは望遠レンズとなり、あるときは拡大レンズとなつて生き生きと働くのは、作者の心情がこれらの女たちにふかくなずんでいるからであらう。

しかし作者山下智恵子は女を書くことによつて翔んだ。書くことを知らない女はどのようにして翔ぶのだらう。地を這いまわる女たちも、翔ぶ願望をもっているはずである。わたしたちの周りに、少数ながら一所懸命に翔んでいる女もふえてきた。

あとがきの中で、作者は「いつの日か太陽の匂いがするような誇らかな女が描いてみたい」と述べている。それを心から期待したい。

(美)

(B6判 三〇二頁 一、五〇〇円)

婦人のあゆみ百年

日本婦人団体連合会編

大月書店

初めからくさして申し訳ないが、おもしろくないのである。何年に何があつたか、そのときどんな人が何をしたか、というようなことが羅列されているだけだからである。これであれば年表だけで十分まにあふ。表現も事態のとらえ方も、ステレオタイプ——何々に苦しんだ婦人の力が、何々のたたかいたとして結集した——というふうだ。

常々婦人運動史を読んで不満に思うのは、一九七〇年代に起こったウーマンズリブ、それをどうとらえるのか、という視点があまりないことである。無視しえない、かといつてどう評価していいのかとまどつているというふうの著者・編者にであう。この本でも、リブの運動は全く無視されている。日本の女性解放運動が、特に意識の面において遅々として進

まないのは、こういう類の本を書く人たちのリブ評価がないことだと評者は思っている。女性の意識や感性に迫っていくものとして、リブを最大に評価しない限り、運動は今後も停滯したものになるだらう。なぜなら「婦人のあゆみ百年」となつてはいるが、「何々に苦しんだ婦人で、何々のたたかいたをしなかった」女性は、した女性より多いからである。彼女らは「婦人」の中に入っていないのだからか。

(B6判 三一八頁 一三、〇〇円)

(K)

あなたも『ノー』を

いいなさい

ベーン・ペイアー著

深尾 凱子訳

実業之日本社

昨年、BOC出版からだされた「自分を変える本」とほとんど同じ内容を持つアサーティブ・トレーニングについての翻訳である。

なぜ女性が「ノー」と言えないか、実際に日常生活のいろいろな場面を例にとりあげて懇切にいねいに実証している。あ

まりに手とり足とりので、女性はいかにいい方をしないとわからない、という想いが著者の中にあるのだろうか、という感じもする。

アメリカでは、女性解放運動の広がりと共に、女性の意識や行動様式に光があられて来、それがより運動をおしすすめてきたという良循環がある、ときいてゐるが、日本でも、このような本がより多く出、より多く読まれ、アメリカの例にならないものだ。(T)

(新書判 二四九頁 六三〇円)

動物の親は

子をどう育てるか

増井 光子著

どうぶつ社

鳥の卵の中の胎児は、抱卵されている間、殻を通して母鳥の声を聞き、胎児も母に通信を送る。だから、たとえばマナヅルに抱卵されてかえった丹頂ヅルの子は、丹頂ヅルの社会に入ることができない。ヒトの胎児も同様、胎内で母の心音以外にも外界の音を聞いているのではな

いか、など、筆者が二十年かかわってきた動物の育子を通じて、子育てとは何か母性とは何かを問い直した本である。

文章は至って平明、淡々とした叙述だが、次々に示される動物の世界の事実は強い説得力を持つ。母性は動物が生得的に持っているものと解釈されがちだが、群れから離れ、育子の状況を見なかったメスは育子を知らなかったり、育子に失敗する。たとえば多摩動物園のオランウータンは、高い知能を持っているにもかかわらず、赤ん坊を抱いても乳をふくませることができないなど、興味ある事実が次々に紹介されている。

生まれた子が親を確認し、親が子を確認することから生命の安全が保証されていくこと、大声で鳴く子ほどしっかり育っていくこと、タッチングの大切さ、子の成長にとつてのオス親の役割など、どれも考えさせられることが多く、巻を置いて何度も考え込んだ。一定の地域に一定数を保つための自然淘汰、子捨て・子殺しの状況などにも話は及んでおり、子を取り巻くよい社会と両親のいい性関係が、子どもの自立と成長のポイントにな

ることも自然に納得される。筆者はあとがきで、さまざまな事例があり、定説化できなかったところも、調べれば調べるほど例外が出て、すっきりしない本になったと遠慮がちに述べているが、独断と類推を極力避けて、確認された事実だけを述べた科学者らしい筆致が貴重である。

動物は、子生み・子育てのために巢を作るが、人間は老年になってマイホームを築くという記述一つにも、考えさせられることは多い。妊娠中の人、育児中の人とはもとより、結婚を考える人、子を持つことに迷っている人も、一度読んでよい本、尽きぬ興味を抱かせる本である。科学のいろいろな分野に女性が進出し、その情報を伝えることが望まれるが、これは動物学の研究と実践に女性が参加した一つの貴重な成果といえるだろう。(R)

(B6判 二四三頁 九八〇円)

書くこと生きること

半田たつ子著

家政教育社

「家庭科の男女共修を考える会」の半田さんが、月刊『家庭科教育』の編集者として十年間折々に書かれたものである。

自伝的な「ある自分史」を序章として「家庭科教育をめぐる」。「家庭科男女共修運動の中から」「私と婦人問題」が中心になっており、家庭科の共修をとおして男女差別を撤廃していこうという意気込みがあふれている。同時に共働き二十五年の一人の女の生きざまも浮かび上がっていて興味深い。(S)

(A5判 三四五頁 一、八〇〇円)

生きる原点を求めて

―主婦の体験した昭和史―

私たちの歴史を綴る会編

あけぼの出版

『あごろ十七号・女と生涯教育・生涯学習』を編集するに当たって、いくつかの婦人学級のレポートを読み、その真摯さと水準の高さに一驚した。そうしたすぐれたレポートが人目につかぬところに埋もれているのを惜しんだが、りっぱな単行本にまとめられたものが出た。

筆者である十二人の主婦たちは、一人の明治生まれを除いて全員大正後期の出生、戦争被害を最も強く受けた人々である。なまなましい戦争の記録から書き起こし、戦後の飢え、そして高度工業化社会への変貌までを、常民の立場から克明にえがいている。「当初はかっこよく書こうとしたが、自分を見つめ正直に書くことに変わった」と、筆者代表はあとがきで述べているが、書く作業は自分を突き放す作業であり、個人としての戦争被害者意識が、やがて戦争被害者の側面も持っていたことに気づく過程が貴重だ。

そこに気がついたとき、公害を生む高度成長の正体に鋭い視点を向けている。そして、最終章、差別はいまもなお――として、男女差別ばかりでなく、身分・職業・部落・人種・身体障害者への差別に目を見開いてく。さて、ここまで学び得たエネルギーが行動としてどのように開花していくのだろうか。全国何万もの学習グループの高い水準と潜在的なエネルギーの大きさを思いながら、その続章にこそ期待したい思いを深めた。(さ)

(B6判 二二〇頁 一、二〇〇円)

軽く軽く舞え

べっしょちえ子著

日本看護協会出版会

看護婦十年、その後家庭に入っても看護の世界を見守り続けてきた詩人の随筆集である。一見軽く見えてしたたかに重たい。市井にこのようなヒトがいたのかと感嘆しつつ読みすすむと「人と人とは深淵を隔てた虚空の中の孤独な存在にすぎないことのきっぱりした存念は、看護の側にだけ求められるのではなく、病者の側にも求められる態度だ。その存念を胸に秘め、互いの孤独をなぐさめ合うところに人愛Vが生まれるのだろう。やさしさと、存在への石のような存念と……考えれば看護というものは、宇宙感と地上感を同時に持て、と言われるような仕事だという言葉にぶつかり、なるほどとなつく。したたかな存在感を持つ人があそこにもここにも人知れず生き、働いているという思いを得てうれしい。(R)

(B6判 一九三頁 九〇〇円)

あごろのあごろ

言いたいことは何でも言おう。
感想、反論、情報、思ったこと
を率直に言う読者の広場です。

18号

めて感じました。△あごろV
の皆さんも、三十九人の方
ちも、がんばってノ

(千葉県 高川ひろみ)

*

たたかう三十九人の女、ひ
とつひとつ胸にこたえ、身
つまされました。足もとか
固めなくてはと思いつつ、つ
い挫折しがちな私ですが、も
う一度がんばろうと勇気がわ
きました。こんな記事は、商
業誌には絶対にのせられない
ものですね。女たちの手でつ
くるミニコミの貴重さを、改

本誌の発行回数が減り、実
質的な会費値上げではないか
と気になっていたのですが、
充実した18号を受け取って、
すごうれしかったです。私
の大好きな「新聞切抜き帖」
もボリュームがあって二重に
うれしく思いました。切抜き
帖は、一時内容が簡単になっ

あごろのあごろのあごろのあごろのあ

たときがありました。今度
の号程度の紹介がいいと思
います。現代女性史の貴重な資
料です。さぞ大変と思います
が、どうか続けてください。
私はいま乳児がいてお手伝
できないのが残念ですが、子
どもの手が離れるようにな
りましたら、できるだけ協力
します。

(東京都 太田則子)

*

18号、たっぷり読みではあ
るのだけど、さて、主婦に
は、値段といい、内容といい、
ますますすすめにくくなって
ため息をついています。か
といって、ミニでは軽すぎるし。
バックナンバーを読み返
してみると、ページ数は少ない
けれども主婦にジーンとくる
号がありますね。あのへん、
考えていただけませんか。

(兵庫県 安川喜美子)

*

いつも読みこたえのある
『あごろ』ですが、18号は特
にずつしりと、胸に來ました。
ヒューストンの報告も、ティ
ーチ・インも、たたかう三十九
人の女も、みんなよかった。あ
んまり厚いので、お金のこと
がすぐ心配になりましたが、
これぐらい内容がよければ売
れ行きがいいのではと期待
しています。

(大宮市 岩間ふさえ)

*

手元に届いて、ずいぶん厚
い本になっているのに驚きま
した。

深尾凱子さん・下村満子さ
ん・河野貴代美さんのアメリ
カ女性運動のレポート、大変
おもしろく読ませていただき
ました。さらにティーチ・イ

あーちのあーちのあーちのあーちのあーちのあーちのあーちのあーちのあーちのあーちの

たとえ、そのことが、あまりに直截でありすぎる雰囲気であったなら、天野さんの話に対する感想と抱き合わせに参加の動機とその充足度なりを話してもらおう、といった形なりと、引き出し方はいろいろあつただろうと思います。

引き出し方はともかくとし

て、母親在宅論を持つ女が、若い母親の生活・学習を支えるボランティアを、これまた人のお話を聞いて学ぶという不思議な場にあつて、ただ話をしてしまひてしまふのは、天野さんとしても気持ちが悪ち着かなかつたであらうし、たとえ、例の質問が出なくとも、余り後味はよくなかつたのではないでしようか？ 残念なのは、わかりすぎてしまつた天野さんの賢明さでした。

（東京 K・K）

(東京 K・K)

あごら北海道
あての

たよりから

いつも葉書やあごらミニ等を送っていたきありがとうございます。一筆をと思いな
がら失礼してしまいました。

から失礼してしましまして。

私事ですが、一昨年結婚し、昨年女子を出産いたしました。結婚後も働いておりましたが、今は子どももおりますので一年間休職するという形をとり家におります。休職したくなかったのですが、保育所も六か月以後でないと預かってもらえませんし、それまで子どもを見てもらう人もいないので、結局今のようにしたわけです。都会にいますとお金を出せばみてもらう所もあるでしょうが……。

が……。

職場を離れますとなんとな
く緊張感も失われ、頭のほう
もボケッとしてしまいそう
で、そうならないようにと思

っているのですが、子どもが小さいと身動きがとれず、どうしても行動範囲も狭まれてしまいます。日常生活に埋没せず、常に前向きな姿勢で過ごしたいと思っています。

一度は集まりに出席したい
 と思つていますが、遠いもので
 なかなか。機会に恵まれたら
 その時は行きたいものです。
 少しですがカンパさせていた
 だきます。

(上磯郡・小川純子)

あごら九州

あての

たよりから

私は、六月二十四日付の毎

日新聞「家庭欄」にて、人あ
ごら九州Vのご活躍ぶりを興
味深く拝見させて頂いた者で
ございます。

私も働く者の一人として、仕事と家庭の両立の難しさ、母として妻としての至らなさを常に反省し、考えさせられる日々を送っておりますが、その、いつも心にくすぶり続けているもやもやを、的確にしかも見事に表現し、解決して行こうと努力していられっしやるお姿に、拍手を送りたいほどの感動を覚えました。早速この記事を職場の仲間にも読んでもらいました。皆それぞれに深く感じたところがあるとみえて、「一人の力は本当に小さいけれど、お互いに話し合い、励まし合い、学ぶことで道は開けるのね」と語り合いました。

(鹿児島市 今市真知子)

私まだやつと高一になったばかりの無知な者ですが、女性解放や男女平等について同感し、男女の役割分担意識について、疑問を抱いています。

കുറിപ്പ്

「女の子がそれくらいしない
でどうするの！」

私は改めて自分の周囲を見まわすと、「女だから」という理由で義務づけられたり、制限されたりしていることがあまりにたくさんあることを知りました。

躍したイギリスの女権運動家です。まだあいまいで、かわいそうです。いそうなほど遠回しの表現で書いた遠慮がちな文章ですが、私は彼女に心酔し、秘かに「師」とあがめていました。

私は、送っていただいた『あらミニ』を読みまして、私の未熟な頭では、まだ考えつかないような男女差別があるのを知りました。私たちの家の

庭科では、一応の建て前は、「主婦だけに仕事を押しつけず家族全員が協力すべきだ」となっています。しかし、実際はそんなことはほとんど行なわれていないのだと思いき

す。第一、男には家庭科という科目がないのですから、家事はみんなでするということとさえ教わらないわけですから……。家事仕事に限らず、男性は女性に対して優越感を持

私は、将来一人でも十分食べていけるだけの能力を身につけたいと思っています。男の人に食べさせてもらっていると思う生活は、いやだからです。

*

毎日新聞で「へあごら」のグループを知りました。私も女の自立について八幡地区において月一回例会を行なっております。その参考としてあなたちの例会の内容・機関誌等について教えていただければによりと便りました。

私たちの集りは昨年十月
魅力ある女性になるため
に”という講演会を開き、そ
の後”みちしるべ”という名

“人間としての自立と向上を”

求めて⁴⁾、という大きなタイトルをかかえ、右往左往していますが、約半年間、理想論に終わり、具体的にどうすればよいか、ということになるとなかなか案がでず、模索中で

す。今は自らの自立してない部分を出し合い、みつめ直そうということで、各自レポートを書いて発表し、意見交換を行なっております。

女の自立についてが大きなテーマですが、いったい何にどう取り組んでいくのかというところが、一番大きな問題のように思えます。

へあごろ」どの共通点がみつかり、励みとなるものと思ひ、便りましたので、よろしくお願ひします。

(遠賀郡 山本聖子)

ア
ピ
ー
ル

ある八月一日、広島に
Hiroshima Feminists' Li-
brary (広島・おんなの図書
室)がオープンしたことはご
存じでしょうか？

広島在住の女九人が中心となつて、女性問題關係の本を一般の人々に貸し出しする図書室（正しくは貸本屋でしようか）を作つたのです。お金と本を持ちよつて、手狭ながら図書室としての体裁は何とか整つてきたようです。

私たちは、自らの自立を確
固としたものにすると同時に
女は家庭・男は職業というあ

まりにもくだらない社会通念を打破するため、女性解放思想を世に広めていこうではな
いかと考えています。

開室以来、地方紙・テレビ・ラジオ等でHFLのことがとりあげられてきましたが、「のれんに腕押し」の感を持たざるを得ません。

地方都市、広島においては女性のグループはほとんどなごなごな、一人でウツウツとしている女性もいると思うのです。広島での女たちの輪が東京にまで広がっていくことを願っています。

- ・火一土 午後一時—八時
 ・東千田町 1—8—78
 ・針森方 HFL
 ・電車バス………字品行
 広島大学前下車
 問い合わせ
 4911662 土橋
 (広島 HFL)

あじちのあじちのあじちのあじちのあじちのあじちのあじちのあじちのあじちのあじち

あごらのバックナンバーをどうぞ

1号 <女が働くこと> ￥200 円200

- 意見 女が働くこと 松谷みよ子ほか
- 資料 働く女は過保護か
- 面接調査、共働きを調査して

2号 <女性と能力> ￥200 円200

- 調査 働く女性の地位向上をめぐる
- ティーチイン 女性と能力
- 研究 女性はなぜ管理職になれないか

3号 <主婦の解放> ￥200 円200

- 調査 団地の主婦の解放意識
- ティーチイン 主婦の解放をめぐる
- 解説 二分二乘法 伊東すみ子

4/5号 <何かしたい主婦のために> ￥300 円200

- 記録 何かしたい主婦のためのセミナー
- インタビュー 壁を破った人々
- 資料 2つの差別裁判を考える

6/7号 <運動をすすめよう> ￥350 円200

- 報告 解放への道—海外の婦人たち
- 資料 各国の母性保護
- ティーチイン 婦人運動をすすめるために

8号 <子殺しを考える> ￥380 円200

- 論文 既婚の母の子殺し考 武田京子
- 資料 世界各国の妊娠中絶立法例
- ティーチイン 性の二重性をめぐって

9号 <働く女と主婦の接点> ￥430 円200

- 意見 働く女から主婦へ 主婦から働く女へ
- 調査 相手の立場をどう思っているか
- ティーチイン 人口抑制と産む性

10号 <女と法> ￥700 円200

- 記録 名古屋放送女子若年定年制
- 資料 法律の中の女性
- ティーチイン 産む性と法律

11号 <女と教育> ￥750 円200

- 論文 主婦が学ぶということ
- 調査 教科書の中の女性差別
- ティーチイン <女と教育>を考える

12号 <国際婦人年世界会議> ￥750 円200

- 記録 世界会議とトリビュン
- 感想 メキシコ、キューバ=私たちの旅
- 資料 世界行動計画、ILO 活動計画ほか

13号 <国際婦人年を考える> ￥750 円200

- 記録 国際婦人年国内集会
- 調査 ちまたから見た国際婦人年
- ティーチイン 国際婦人年とメキシコ集会

14号 <女の記録入選作発表> ￥750 円200

- わたくしが見たアメリカ 水田珠枝
- 新女大学研究 エリザベス・マウア
- 隣りがこわい 佐多稲子

15号 <職場の中の女性差別> ￥750 円200

- 調査 日本の著名企業100社にみる男女差別
- 概説 女子労働市場の現状 正木直子
- 論文 女性と半専門職 天野正子

16号 <女と結婚> ￥750 円200

- 文化人類学から見た日本の結婚・祖父江孝男
- 「しあわせな結婚」の実態 J・バーナード
- ティーチイン「結婚の幻実」●随想 私と結婚

17号 <女と生涯学習> ￥780 円200

- 女性の生涯学習への一提言 高野フミ
- 女子成人教育の問題点 中山宣子・野々村恵子
- 調査 婦人学習グループ ●ルボ 女が学ぶ所

18号 <いま女性解放は> ￥1300 円200

- 日本の女性運動をどう展開するか 田中・小沢
- ルボ・いま職業でたたかう39人の女たち
- 資料 女性差別に関する国連条約案など

新聞 切抜帖

1978年4月1日から
1978年8月31日まで

法・制度

不合理な老齢年金と遺族年金

厚生年金の老齢年金をもらっていた夫の死後、遺族年金を自分の老齢年金と共に受けることはできないが、国家公務員共済組合から夫婦で受けていた場合は両方とももらえる。もともと厚生年金には併給調整があり、妻の老齢年金額が夫の生前の年金額より少ないときは遺族年金のほかに夫の遺族年金の同額分がもらえる。とはいえ、同じ年金に完全併給と併給調整がある不公平は厳存するが、共済年金には各種あり、一本化は当分むずかしい。(4・5読売)

新日本女性党誕生?

一日、ホテルオークラで「弱い女性を泣き寝入りさせない」と旗揚げ会見。党首の中島久美子さん(三三)は六本木のクラブのママ。昨年の参院選で女性党から立ち、三万五千票を獲得、「票の重みに応えるため」結党にふみきったという。党員八名、背後に総会屋のウワサも。

(4・14毎日)

弁護士抜き裁判に市民反対

「弁護士抜き裁判法案」に対して、婦人や消費者などの市民団体の間でも反対運動。活発なスケジュールが各所で組まれている。(5・22朝日)

差別判決に女性弁護士結束

昨年十一月八日、佐賀地裁唐津支部が「女性の五五歳の体力は七〇歳の男性と同じで

あり、女性の解雇は正当」と、性別による雇用差別を認めた判決を不服として佐賀県唐津市の中島つよしさん(六五)福岡市の倉光アサ子さん(六五)の二女性が日本赤十字社を相手に控訴中。「裁判所が女性差別を認めるのは、差別の増大につながる」と福岡市在住の七人の女性弁護士のうち六人が、思想や政治的立場を超えて西日本では初めて女性ばかりの弁護士団を結成した。(5・31西日本)

知る権利事件に有罪決着

事件から六年、最高裁は六月二日、西山記者に有罪判決。報道の自由は条件付きのタガをはめたこの決定に学者などから懸念の声も。一方「片手落ちだ」と嘆いていた蓮見さんはこの判決に「裁判は公正、胸が晴れた」と喜ぶ。(6・2朝日)

人形ではないと言ったなら

外務省公電漏えい事件では、取材源を秘匿できなかったことが致命的だが、男女間のモラルを裁くのは世間の良識で、裁判所ではない。「情を通じ」という形で本筋がすりかえられてしまった。女性事務官がもし「私は男にそのかかれて依頼を拒めなくなるような、そんな人形のような女ではない。自分の責任で文書を渡した」と叫び続けたらどうだっただろう。

(6・3朝日「天声人語」)

娘の損害賠償五八〇〇万円

警官に女子大生の娘を殺された両親が警視庁に賠償を要求。一〇〇〇万以上の支出は都議会の承認が必要で警視庁は苦慮。(6・7朝日)

えい児殺しの母に猶予刑

産んだばかりの子を殺した母(三四)に対し東京地裁八王子支部は懲役三年執行猶予四年の判決を言い渡した。四人の子の母のため情状酌量されたもの。(6・10毎日)

この苦しみ証言台で

二三七人の生命を一瞬に奪った福岡県山の鉱のガス爆発事故から一三年、遺族たちは一〇日、ついに民事訴訟にこぎつけた。遺族のだれもが「これっきり死ぬのも、くやしいねエ」(足立サカエ遺族会会長)という思いを抱き、三井資本と国を相手に、夫と息子の「とむらい合戦」に立ち上がったもの。

(6・10西日本)

トルコぶろ側にへんな軍配

トルコぶろつぶしの目的で近くに児童遊園を急造されたため営業でなくなった山形

県のトルコぶろ経営者が同県を相手取った損害賠償請求訴訟で最高裁の勝訴判決を得たが、この会社が風俗営業取締法違反に問われ、一、二審で罰金七千円の判決を受けていた刑事裁判の上告審でも最高裁はまたもや無罪判決。

(6・16朝日)

看護婦条約の批准めざして

ILOの「看護職員の雇用と労働条件に関する条約」と「勧告」の採択以来一年になるが、日本は実情に合わずと棄権のまま。日本看護協会は批准実現をめざして運動を開始。日本では社会保険審議会や老人医療審議会など看護が主となる政府の審議会にすら看護職員は参加できない。看護職への不当な評価は、女性の職業であることから来ていると協会側。

(6・17朝日)

慰謝料を払い切れない夫に
税金免除を

離婚の際の財産分与の場合、不動産を分与した者に譲渡所得税をかけることになっているが、このような制度では夫がこの税金を払い切れず離婚成立が困難になり、ひいては妻が不利、と日弁連は大蔵省に「財産分与には課税しないよう所得税法を改正してほしい」と意見書を提出。

(6・24朝日)

「日米養育争い」母に軍配

国際結婚に破れた米国女性と大阪の会社員が、長女の養育を争っていた人身保護請求訴訟は、最高裁が「子は妻に返せ」とする一審判決を支持して決着。父親の主張するママ代わりの「おばあちゃん」より、やはり「ママ」と。

(6・30朝日)

愛のコリーダ裁判に女証人

この裁判の唯一人の女性証人（弁護側）として小沢遼子さんが出廷。ポルノ論争でも見る側の男の立場からだけ議論されていると男性中心社会を批判。「初めて見たときは感動で泣きつ放しだった」と。

(7・18毎日)

予告なき解雇は無効

北九州市の保母、三宅ときわさん(四二)が園児の定員減を理由に解雇され、「事前に説明もなく解雇したのはおかしい」と保育園を相手取り訴えていたが、福岡地裁小倉支部は二〇日「人員整理の必要性は認められるものの、従業員になんの予告もない解雇は解雇権の乱用」として解雇無効と解雇日からの未払い賃金の支払いを命じた。

(7・21西日本)

降車時のけが

老女の訴え再審でも却下

四一年九月、中区栄のバス停での事故で百万円の損害賠償を名古屋市に求めていた老女(七四)の訴えが名古屋高裁でも却下された。「起訴理由なし」と。(8・31朝日)

政治

従軍看護婦にやつと補償

総理府はトップ会議を開き戦後三〇余年も放置されてきた補償問題にやつと決着、三年以上の勤務者に特別給付を決定。大戦中の外地従軍看護婦は約一三、五〇〇人で、三年勤続者はうち三〇%。

(4・1読売)

国連婦人の十年推進を

山ロシヅエ・田中寿美子氏ら両院の婦人議員二二人を中心に超党派の「国連婦人の十年推進議員連盟」が設立されることになり、一日設立総会が開かれる。当面国内行動計画の具体化を推進する。

(4・3毎日)

都民参加で行動計画案

都の行動計画に都民の声をと「婦人問題を考える」対話集会シリーズが始まった。三日の信濃町の集会には約一〇〇人が参加、中間報告をたたき台に「差別救済制度を盛り込んだ立法措置が必要」「行動計画に具体的な日程を織り込むべき」など熱心に討議。

(4・4毎日)

婦人週間スタート

第三〇回婦人週間が一〇日

から一六日まで労働省主催で実施される。テーマは昨年に引き続き「男女の平等と婦人の社会参加をすすめる」で、各地で会議や集会が開かれる。行政面では若年定年制や結婚退職制の解消・母性健康管理などの指導・育休制の普及促進・寡婦の就業援助などが本年度の目標。

(4・10毎日)

施設規模全国一の婦人会館

徳島県藍住町に「女性の城」が建つ。工費二億五一〇万円、鉄筋コンクリート二階建て、延べ一九五〇平方メートル。町総合計画「情緒豊かな人づくり」の施設として具体化。労働省の「働く婦人」の狭い定義を乗り越え、「すべての婦人」が利用でき、対話交流のできる場を目指す。

(4・28徳島)

女子競輪の復活論議

人氣が頭打ちの競輪の振興策に「女子で人氣を呼びもとせば」という復活論が通産省で持ち上がった。女子プロレスが大当たりだからか。

(5・5朝日)

少女締め出し、国技館土俵

「わんぱく相撲」で、予選を勝ち進んだ小学五年生の少女が女人禁制を理由に、国技館の土俵に出場できなくなった。労働省婦人少年局の森山局長は、日本相撲協会の代表を呼んで真意をただす。

(5・23朝日)

「女性を不浄だと思つていらつしやるのかしら」との森山局長に協会側はタジタジ。

(5・24朝日)

満十歳—転機の消費者保護

消費者保護基本法が施行さ

れて一〇年、消費者行政は世界の最高水準に達し、消費者団体は二九四八、生協を加えると五千に及び、メーカーだけでなく行政にも圧力を加える実力になった。が、サラ

金・マルチ商法などの問題も多発、モノからサービスへ移行しつつある。米国では消費者保護庁新設法案が二月僅差で否決され、ネーダーに代表される戦闘的運動が壁に突き当たった。これはね返りも無視できない。低成長下の対応の必要とともに物価・金融・産業立地・環境政策への食い込み不足をどうしていくか問題だ。

(5・25朝日)

都の婦人行動計画最終答申

都婦人問題会議は三一日、最終報告書を都知事に答申、労働権の確立、審議会・委員会への女性の登用、家庭科の男女共修、乳がんの無料検

診、年金制度の改善等を提言。政府の行動計画より一歩進んだ内容。(6・1各紙)

婦人の日賛成世論は四七%

総理府の調査では賛成四七%、反対わずか一四%。「婦人の地位向上に役立つから」が賛成派の四一%、「男女差別につながらる」が反対派の三一%。

(6・6朝日)

従軍看護婦に恩給案すむ

戦時中赤紙で召集された日赤看護婦二六、五三五人に対する恩給請願運動は五〇年ごろから活発になっていくが、政府・自民党は前向きな姿勢で対処、五年償還の記名国債を発行、旧軍人恩給基準に準じ給付する方針を決め、来年度予算概算要求に盛り込む。

(6・7朝日)

婦人関係行政推進会議

福岡県は二七日「婦人関係行政推進会議」(会長・亀井知事)を設置、婦人の地位向上を基本に総合的に婦人行政を推進していくことになった。

同会議は「国内行動計画」を県政に取り入れるため設置したもの。さらに、知事への助言機関として「婦人問題懇話会」を近く設置する。

(6・28西日本)

世界婦人会議準備会議

八〇年に開かれるテヘランの「世界婦人会議」の準備会議が六月一九日から三〇日までウィーンで開催、総理府の赤松良子さんが出席。「女性の労働・雇用の問題が次回会議では先進国諸国間の最大焦点になりそう」と赤松さん。

(7・12読売)

名古屋婦人会館オープン

市で初の女性専門の施設が

一九日開館する。地上三階、地下一階、三四三三平方メートル、工費六億九百万円、資料室・相談室・研修室・会議室・託児室・ボランティアルーム・屋上プールが設けられ、趣味・実技の講座から婦人問題のゼミなどまで幅広く行なわれるほか電話相談も開設。託児室と電話相談には一〇〇人近いボランティアが担当する。(7・13中日)

寝たきり老人預ります

徳島県は予算七万六千円で「寝たきり老人短期保護事業」を八月一日から開始。委託先は市内の特別養護老人ホーム。寝たきり老人の介護者がやむを得ない理由で介護が困難なとき一時的に預かる。六五歳以上の寝たきり老人年間四〇人の入所を予定。原則として七日以内。一日当たり必要経費三五〇〇円中、飲食

(7・13徳島)

従軍看護婦へ特別給付を

旧従軍看護婦恩給請願の会は二六日、代表ら一九名が総理府を訪れ①恩給法の軍人なみ適用②遺族への手当支給を陳情、稲村長官は恩給法の適用は不可能としながらも「来年度予算で支給されるようにしたい」と約束。

(7・27毎日)

「働く婦人の家」建設

福岡県は「働く婦人の家」二か所を来年度に建設すると発表。談話室・娯楽室のほか、料理教室や洋裁教室の設備もつくる方針。

(8・5西日本)

保育所二五か所を新增設

福岡市は、同市東区小寺安さんら二六七三人から提出された保育所の新增設と保育内容の改善についての請願をうけ、年度内に二五か所の新增設を急ぎ一三〇〇人を入園させる。人口急増に伴い、同市は毎年保育所の新增設にとりくんでいるが、未措置児は毎年三〇〇〇人台を数えている。

(8・8西日本)

女ひとりの日に福祉

戦争の頃「適齢期」、相手を戦争で失い未婚のまま過した女性には五〇年度の国勢調査で四一万五千人。家を支え親や弟妹の世話をし、いま向老期にさしかかった。長野県では五〇歳以上、前年分所得税非課税の一人暮らしの未婚女性に対する医療費の無料化をすすめる、県下一二二市町村中九四市町村が実施。

(8・10—8・15信毎)

従軍看護婦の救済予算化

かけがえのない青春を犠牲にしながら全く報われず、赤十字看護婦も恩給法の対象外、「侵略戦争志願」とさえ非難される。「せめてご苦労さんのひと声を聞かせてほしい」との叫びに答え、総理府や国会はようやく検討を開始、今月初め与野党合意で来年度予算にのせる要求を出す。

(8・15読売)

充足した婦人問題県民会議

長野県婦人問題県民会議が二〇日、長野婦人問題研究会など四〇団体でスタートした。「教育・労働」「健康・福祉」「家庭・社会参加」の三部会を持ち社会参加を進めつつ県や市町村の婦人問題対策に協力する。初代会長は元長野婦人少年室長の金川文子さん。職能・労働者・婦人・経

営者など四〇団体のまとめ役をする。
(8・22 信毎)

労働

製造業女子は月収八万六千

労働省の昨年六月分賃金調査(製造業)では平均賃金男子一六二・五〇〇円、女子八六・八〇〇円で男子九・〇%女子八・二%アップ。平均年齢は男子三六・八歳、女子三五・六歳で共に〇・四歳増。
(4・2 毎日・読売)

女医さんの半数は中高年

日本女医学会の女子医学部卒業生一五、一六八人を対象とした調査によると、総医師数一二万八千中、女医は一万二千人で九・七%。年齢は四五―四九が二〇・三%、五〇

―五四が一六・三%で、四五―五九歳で四六・六%を占め、科目は内・眼・小児科の順。
(4・9 読売)

大きく前進、婦人労働対策

ILO本部で婦人労働対策を担当した前局長補・高橋辰子さんが二年の任期を終えて帰国、「散発的だった婦人労働対策を一つにまとめて推進する組織を設け、各国の婦人労働に関する法制・統計・対策などを世界に知らせる定期刊行物『ウイメン・アット・ワーク』の発行を実現させた。また昨秋ブリュッセルで世界婦人局長会議を開いたほか、ILO105号・111号条約のほかにもっと強力な条約の草案づくりに着手、123号勧告の「家庭責任を持つ婦人」の「婦人」を削り、勧告をもっと強制力あるものに改正する努力も始めた」と

報告。(4・10 毎日)

女工哀史を韓国に輸出

阪本紡績が倒産前に韓国に作った子会社「邦林紡績」は巨額の親会社への送金を強いられ、韓国での「女工哀史」が問題になっている。
(4・10 朝日)

ふえる主婦パート

産業界の減量経営が進むなかで、西日本地区の流通業界でも社員の採用を極力抑えて主婦のパートタイマーに置き換える傾向が目立ってきた。

スーパー業界の中には社員より主婦パートの数がはるかに多い小売店も出てきた。一人当たりの人件費は社員の三分の一ですむためパート化はさらに高まりそう。

(4・14 西日本)

女子のパート労働が急増

総理府統計局が発表した五二年度就業構造基本調査では女子有業者二〇一〇万中、家事のかたわら就労する者が六六七万で一七・九%も増加。就業希望の女子の八三・二%がパート仕事を探している。
(4・16 毎日)

内職希望は激増しているが

内職相談が激増の江東内職公共職業補導所。一〇人中九人以上が初心者でやさしい仕事を希望する。買手相場に昨年より工賃を下げる業者も。
(4・18 朝日)

切実、主婦の内職探し

小諸市が開いた内職あつせん講習会で五―六人の求人に百数十人が殺到。長野市の県内職援助センターでも、連日仕事を求める電話が鳴りつ放しの状態。パート先で解雇され内職志願の主婦は増えてい

るのに、内職求人は減る一方。
(4・28 信毎)

長く苦しい保母さんの春闘

福岡県内の私立幼稚園と保育所に勤める教職員や保母さんで結成した県幼児教育労働組合は、公立に比べ初任給で三万六千—二万三千円も安い実態の中で、二年同じ要求額で闘っている。しかし園理事者側との交渉を実現できたのは一園だけ。組織率が一割未満と聞いて要求を頭からはねつける理事者も。一方、組合加入が園側に知れて退職を余儀なくされた職員は三七年の組合結成以来三〇人を下らない。
(5・10 西日本)

一万人も増えた内職希望者

都の五二年度の内職相談状況調査によれば内職を求めて補導所を訪れた人は三九、七八一人。前年比一万人増。過

去三年は横ばいだったのに、不況の影が明確。
(5・13 朝日)

円高不況で内職激減

徳島県下の内職希望者は増える一方だが円高不況で求人は激減。県内職相談所がまとめた五二年度内職相談業務概要では求職者四人に三人分の内職しかない。内職理由は「小遣いが欲しい」がトップで三八・八%。「世帯主の収入が少ない」も増加し生活苦を反映。賃金は横バイ。
(5・16 徳島)

統計に現われぬ女子失業者

パートの主婦が失業しても必ずしも失業者の数に数えられない場合がある。女子学生者が就職口がなくて家にいても「家事手伝い」で片づけられる。女の労働権の立ち遅れは、失業権(?)すら差別線

上に置く。

(5・16 信毎「女の机」)

内職工賃の不払い増加

昨年三月末現在で不払い額は計三〇〇〇万円(七七〇人)だったが、同九月末には八〇〇〇万円(二〇〇〇人)に急増。トラブル防止のための「家内労働手帳」の普及もまだ五割。技術を修得すれば高収入になると、高い教授料や高額を保証金を取ったりするものも横行。
(5・20 読売)

内職は一時間二四〇円

内職希望者は多いが、実際の内職人口は一〇年前と同じぐらいに減少。時間当たり工賃は女性で二四二円(パートタイマー三七〇円)。一〇〇円から三〇〇円未満の層に女性の六五・二%が集中。倒産による工賃不払いも深刻。

「内職者自身からの不払い申告が実態をつかむ一番の早道。気軽に申し出て」と労働省。今日から労働旬間。
(5・21 朝日)

家内労働に産業政策を

家内労働手帳の普及は必要だが、家内労働法だけでは手の打ちようがない。政府も家内労働を労働省まかせでなく産業政策として考えねばならぬ時期にきている。必要なものは援助し、転換すべき分野では思い切って職業訓練などの手を打つべきだ。

(5・24 朝日・社説)

初任給は低成長だが

日本リクルートセンターが四五〇〇社を対象とした調査では大卒男子は一〇七、六五八円で前年比四・一%増、高卒男子八九、一四三円、四・〇%増と一二年間の最低。女

子は大卒一〇〇、八〇六円、高卒八七、〇五七円と共に四・七％増で女子大卒が初めて一〇万円台になった。

(5・25朝日)

まだ多い結婚退職制

結婚・妊娠・出産退職制をとる企業は一二〇〇社。パスガイド二八歳定年、スチュワート三三歳定年の例もある。労働省調査のこの数字、制度的に差別を明示している企業だけに限られており、不文律は統計外。労働省は改善勧告の方針。(6・23読売)

男女区分廃止の市職員募集

一〇日、名古屋市が職員採用候補者試験要項を発表。消防関係を除いて採用の男女区分がなくなった。

(7・11中日)

増えた都内の女子パート

五年七月一日現在の都民の就業構造調査報告では労働人口は九〇三万、就業者は五四〇万。四九年に比べ男子就業者二万九千人増に対し女子は一四万二千人増、四〇歳代の就業率は五割を超えた。パート・日雇いは一八万二千人増、家事従事の女子の四四％が就業を希望しているが、短時間労働か内職希望が多い。

(7・14朝日)

普通勤務で雇われない

都民の就業構造基本調査では「普通勤務で雇われない」と安定雇用を求める女性は、三四・四％も。

(7・14読売)

パート雇用の改善を提言

労相は一四日の閣議で「五年労働経済の分析」(労働白書)を報告、了承された。失業者増加の中で三次産業の

雇用は伸びているが女子のパート・日雇いが中心で、一般女子被雇用に比しても著しく劣悪な待遇と報告、パート増加は一時的現象とはいえないので今後近代的パートタイム雇用の確立をはかり労働条件の改善と労務管理の適正化を推進すべきと六〇歳定年実施の必要と共に提言。

(7・14毎日・読売)

東陶陶器男女差別撤廃

雇用合理化が顕著な中で東陶陶器(北九州市、八二〇〇人)は男五五歳女五〇歳だった定年を男女とも六〇歳に延長、これを機会に男女差別も撤廃すると発表。

(7・15朝日)

女は課長相当までが二七％

婦人少年局の「女子労働者の雇用管理に関する調査」によると、男女とも採用する方

針の企業は高卒六二％、大卒二二％。採用条件男女差なしは高卒七一％、大卒六五％。教育訓練男女一律は一九％、女子は受けさせない一三％。管理職に昇進の機会がある企業は四八％、内わけは係長まで四一％、課長まで二七％。結婚退職制七％、妊娠・出産退職三％、職場結婚一％。活用方針は補助的分野で四〇％、特定の範囲のみ三六％、区別なし二六％、積極的に活用一六％。民間企業五千という初の大規模調査で。

(7・21毎日、7・28日経、8・11読売)

零細企業的女子就労増える

六月の労働力調査では就業者五五五〇万人で前年同月比二％増。前月に比し男子は〇・一％減、女子は〇・八％増。増加した女子の多くは零細企業。完全失業者は男八一

万、女四六万。

(7・28 毎日)

女子の雇用を考える

女子の就業者は二〇〇〇万強、雇用労働者は一二〇〇万、毎年着実に伸びている。二五〇〇万で足ぶみしている男子雇用者と好対照だがふえている中身はほとんどパート、平均月収五万四千円で企業には好都合だ。フルタイムでも九九%が補助業務。問題はまだ山積。

(7・28—8・4 毎日)

男女平等まだまだ

徳島婦人少年室は県下約二万四千事業所の就業規則に基づき若年定年制・結婚退職制の実態調査を行なったが、七〇企業が男女別定年制で、女性の定年五五歳未満とし、うち二企業は四〇歳未満。が、結婚退社を制度化している企

業はなかった。

(8・9 徳島)

増えた女性の活動の場

ヤマハ発動機では女性だけの工場を昨年一月七〇人でスタート、好調のため一五〇人に増員した。四六年から女性の海外駐在員制度を始めた三井物産は今年は二〇人に増やす。東京電力では副社長に定期的に進言する女性お目付け役四人を採用するなど働く女性には好評。しかしその裏には人件費の安い女性で減速経済を乗り切ろうという計算も。

(8・17 読売)

夫の出産休暇要求

三菱電機労組に非専従ながら婦人問題担当の中執が生まれ産前産後に夫の有給休暇を要求、二年後には婦人も充足させる。同社では石油ショック後女子の採用を中止、一

万二千人が七千人にまで減少したが来年からは五百人採用が再開される。

(8・21 朝日)

女子大生に狭い就職の門

日経が一七七社を調査した本年度の大卒採用は四社に一社がゼロ。特に女子にしわよせが目立つ。不況で女子社員の定着率が高まり職場があなくなつたことも一因。

(8・24 日経)

厳しさを増す労働市場

六月の失業者は男女とも増加、一三三万人になった。女子労働者の求人倍率は〇・

六、パートは一・〇でパート

への切り換えが目立つ。中高年者と女子の転職条件は悪化、特に女子は同一規模の同年齢労働者の四六%の賃金。

(8・26—27 日経)

活動

男女共学を考える本を複製

「男女平等の教育を考えるシリーズ」、男女共学をすすめるために「行動を起こす女たちの会」教育分科会の手で。共学に関する一問一答式解説、公立高校男女別学状況基礎調査や共学の歴史、その根拠となる関連法を収録。

(4・6 朝日)

「主婦の失業者宣言」

「行動を起こす女たちの会」例会で採択。無職の女性のうち三五〇万人が就業希望。保育所の不備・病人老人の介護などでやむを得ず離職のケースも。就業していても解雇対象とされ、さまざまな形で働

く権利を奪われていると、四つの行動目標も添えて。

(4・6 信毎)

母親が主体的に保育に参加

小金井市の回帰船保育所は保育を専門の保育者にまかせるのでなくすべての母親が参加することが原則。週一回保育し、よその子とのかかわりの中でわが子への偏見を除いている。「自立した子に育ってほしいという親は果たして生き生きと自立しているだろうか」と、子どもに迫られた感じ」とある母は語る。が問題は保育に参加できないフルタイムの母とどう共同性を確立していくか、子を持ちながら働くことをどう保障しあっているのかなど。専業主婦も含めて協力する契機を見つけないという。

(4・10 毎日)

お母さん新聞一年で八〇号

四日に一回の割で母親たちが発行し続けた高槻市北清水小の学級新聞が公約どおり八〇号を出した。「子どもを人質にとられている」とギクシヤクシヤした間柄になりがちなのが親近感が高まったと先生も母親も驚いている。子どもたちのドシドシ新聞(百号発行)、先生のヨミヨミ新聞(百号発行)と三紙が相互批判しながら成長したもの。

(4・13 朝日)

リコール運動に成功

福岡県小郡市で収入役選出をめぐる贈収賄事件から市議会解散要求が出、ついにリコールに成功したが、この推進役は松永ツヤ子さん(五三)ら無名の主婦たち。勝ちめのない闘いと男たちが尻ごみするなか昼も夜も署名を集めた。「女の論理を政治の場に生かさなきゃ」と。

(4・18 西日本) 一〇年迎えた親子読書会

「世田谷親子読書会」は親子だけの運営で一〇年。悩みは劇画時代の活字離れによる読書力の低下と受験のための脱会者。それでも野菜作りやドンド焼きなどの実体験を積み理解力を補い、一〇年目の記念誌発行の準備も。

(4・22 朝日)

『女エロス』が一〇号に

「何ものにも規定されない女である」との創刊宣言以来、「女権拡張」を越えた根源的な生の解放を求めつづけた本誌は、原稿料も写真掲載料もタダという原則を貫いて。

(4・28 信毎)

大学に次々婦人問題研究会

女性問題を目指して新しく生まれた早大の両性問題研究会、

会、社研から分派した筑波大。東外大では性社会学研究会。他には津田塾にも。「女のからだ」のスライド作製(東外大)や、賃金差別問題、女性解放と性の解放などの勉強会(早大)の開催など。共通の悩みは新入生との接点。

(5・2 朝日)

“大食い”もうごめん

経済性一本やりだった学校給食の象徴、先割れスプーン廃止へと新宿区の母親・栄養士・調理師などの「学校給食を考える会」と、民族学研究家本田総一郎氏らの「学校給食から先割れスプーンを追放する会」が立ち上がった。

(5・13 朝日)

婦人会機関紙一五周年

徳島県石井町高川原婦人会(上田竜子会長、七〇〇人)は、一三日、県下一長く続い

ている機関紙「あゆみ」一五周年記念式を。三九年四月ガリ刷B4判で発行以来、毎月欠かさず発行してきたもの。

(5・14徳島)

五年がかりで風土記を翻刻

「幻の風土記」として埋もれていた筑前国統風土記の付録編が、福岡県文化会館図書部司書・北村慶子さんから「福岡古文書を読む会」の一四人の女性司書の手でみごと活字に翻刻され、上・中・下三巻の絵図入りの本として出版された。

(5・17西日本)

平均五六歳、孫連れバレー

五周年を迎える杉並区の「撫菜(ナズナ)」サークル。全員ママさんバレー経験者。中高年齢層になると公式戦でプレーができないのでと始めた。孫を持たぬ人は一人か二人、生涯スポーツの好例との

声も。

(5・20読売)

主婦が作る「買物天気図」

神戸市消費者協会の主婦たちが毎月一回、一七七か所を調査して作る「主婦のお買物天気図」。小売り市場・スーパーなどの売り値を安い順に並べ、上位四分の一が○(晴れ)、下位四分の一が●(雨)、中間が曇りとし、各地の掲示板で一斉に知らせる。あい店で買えば一年で八万円の節約に。消費者運動の盛んな神戸で一〇万人の会員と市の協力で続けて三年。

(5・24朝日)

世界のママと「ノーマア広島」

軍縮と平和を目指す国際婦人対話集会がニューヨークの公園で開かれ四〇〇人が参加、日本からも地婦連大友会長ら約一〇〇人が参加。二〇

〇〇万人の署名を持参してアピール。

(5・29読売)

軍縮を女性の手で

国連軍縮総会で活躍する緒方貞子さん(国連代表部特命全権公使)と田中里子さん(全地婦連事務局長)。一五年間におよぶ原水爆禁止運動の立場から「核」禁止の祈りを世界へ訴える。

(5・30読売)

カナダでも原爆展

国連本部で開催中の広島・長崎の原爆写真展がニューヨークでの日程終了後、バンクーバーでの開催が内定。当地在住・長崎県出身の女性の尽力で早ければ八月中旬に。

(6・3朝日)

主婦が自費で石碑を建立

荒廃著しい国の指定史跡、三河国分寺(愛知県豊川市八

幡町)の塔跡の保護を訴え一二年。ついに自費で「建立・豊川市」と刻んだ石碑を注文した杉並区の主婦岩永蓮代さん(五五)。一人で全国の国分寺・国分尼寺遺跡の保護活動が続けた。速達返信料付きで五回、口頭で七回の訴えに一度も応答しなかった市が最初によこした手紙が石碑除幕式への招待状とは。

(6・4朝日)

名大ミスコンテスト延期に

大学祭に新風をと会計学ゼミの有志により企画されたが同学女性問題研究会のメンバーが抗議。「女は見せ物ではない」「差別などと難しく考えるな」と話は平行線だが結局、開催は無期延期に。

(6・7朝日)

「母子家庭のつらい」

別れて泣いた女、喜んだ

女。三くだり半をつきつけた女。まだ一緒にいる女。要は本音が否か。問題から逃げるのか否か。結婚でも離婚でもない、無理があつてはならないと団地の一室で明け方まで本音を出し合うつどい。

(6・8朝日)

戦争独身五〇万女性の碑

反戦のあかしとして、結婚だけがすべてではない女の生き方の証明として、戦中戦後を一人生きぬいた女たちの共同のお墓をと呼びかけるのは独婦連大阪支部長の谷嘉代子さん。家族主義の根強い日本で戦争独身五〇万人は定年を迎えはじめている。施設収容主義から、コミュニティケア(地域介護)へと、有料ホーム(ヘルパー)の検討も。

(6・24読売)

才女五人初の伝統工芸展

染・織・漆・陶の五人展が名鉄百貨店で開かれた。共に東京芸大出身、伝統をふまえた使いやすい品を、と。

(6・25中日)

「女人禁制けしからん」

西日本一の霊山・石鎚山の「山開き大会」の开会一、二日が女人禁制とは時代錯誤もはなはだしい、と女性自然保護グループ・石鎚女子森林警備隊が抗議、「石鎚山は国定公園内にあり、広く国民に開放されているはず。人間の生命を産みはぐくむ婦人の尊厳を歪める男尊女卑思想で許せぬ」と意見書を送った。石鎚神社側は「荒っぽい危険な二日間、女性を守る意味もある」と強調。(7・1徳島)

独婦連が老後行政改善要求

戦争のために独身生活をよぎなくさせられた女たちも向

老期に。冷たい国に団結して立ち向かうと独婦連が税制・住宅対策などの改善要求。「主婦とも無縁ではない。未亡人の老後不安は目にみえている」と大久保さわ子会長。(7・3毎日)

「主婦の場」を持とう

主婦の平日の在宅時間は一三時間余(除睡眠時間)だが、手を休めたときの場はどこか。「自分の部屋が持ちたいと切実に思う」という声を反映、徳島友の会会員は主婦コーナーに取り組み中。「落ち着いた勉強には絶対必要。場があったから通信教育で資格が取れた」との声も。(7・3徳島)

(7・3徳島)

地婦連などで「第四原水禁」

原水協・原水禁に分裂した原水爆反対運動を一本化し、

国民的広がりを持った世界大会を、と地婦連・生協連など五団体がアピール。

(7・6読売)

沖縄女性への偏見に抗議

沖縄の交通方法変更事業で応援のため全国から沖縄入りする警察官向けの資料に「南国女性にははれっぽい。不用意に誘いに乗るな」などの項があることがわかり、県内の婦人団体などから強い抗議が県警に。沖縄入りした山本警察庁長官は平謝り。廃棄を約束。(7・7朝日)

お母さん人形劇大人気

愛知県半田市の「岩滑座」は、同市岩滑保育園のお母さんたちの人形劇団。脚本・舞台装置・大道具・小道具・人形すべてお母さんたちの手づくり。

(7・11朝日)

主婦グループ老人施設作り

主婦中心のグループ「杉並老後を良くする会」(東京)

は、女を老人問題の犠牲にしないですむように、自分たちの手で地域老人のための小規模多目的施設作りをと会員中の専門家中心にプロジェクトチームを作り病院や託老所つきの模型を完成。学習塾やそうざい販売で資金作りを始めた。(7・24毎日)

母と子のあいさつ運動

子どもの非行防止のため、「母と子のあいさつ運動」を進めている愛知主婦同盟では、二八日昭和区役所ホールでこの運動の推進大会を開く。(7・28朝日)

女の意地で「統一原水禁」

危ぶまれていた統一原水禁世界大会が、地婦連田中里子

さんの奔走でやっと開催にこぎつける。全国の婦人会六五〇万人を持つ地婦連の強さ。(8・1毎日)

新日本婦人の会が映画支援

ガンと闘う少女の記録「翼は心につけて」の映画化に新日本婦人の会が全面支援、普及活動開始。(8・1読売)

テレビよりも「話」を

「テレビの前にくぎづけされている子どもをテレビから引き離しお話のおもしろさをわかってもらおう」と福岡市の主婦のボランティアグループ「お話会」(会員一八人)は「戦争を語り継ぐお話会」などを開き活動中。(8・10西日本)

夏休み学童保育所開設

徳島県鳴島町飯尾敷地区の働く婦人たちが自主運営の臨

時学童保育所「学童保育ひまわりクラブ」を開設した。休み中の子供の事故を心配して看護婦野口和美さん(三九)

が、同地区内の働く婦人一人一人に呼びかけたもの。現在園児一人、小1生九人。日曜以外八時三〇分―午後五時まで保育。希望があれば、学校開始後も続ける。(8・12徳島)

伝承文化に女の生き方を学ぶ

民話や民具など民間伝承文化を、単に知識として学ぶだけでなく、女性がどのように生き、文化を支えてきたかを学び、自らの「生きざま」を問い直そうと、福岡市東区地域婦人会連絡協議会と東市民センターは「ふるさとの伝承文化とおんなの生活」をテーマに、九月五日から「東区婦人の社会科教室」を開く。(8・12西日本)

西鉄値上げに反対する会

「バスや北九州市電運賃の値上げは家計に痛手。バス部門は黒字というのに」と一九日、福岡市で、反対する婦人の会が結成された。六五団体の関係者で構成、街頭署名や運輸当局に対する陳情など運動の輪を広げていく。(8・20西日本)

シンガポールで援助活動

シンガポールの身体障害児の施設、精神薄弱児ホーム、老人ホームなどで、毎週六〇人ほどの日本婦人がボランティア活動を続けている。商社銀行の駐在員や地元企業団体に勤める人の奥さんが主体。現地の人々となんらかのつながりをもとうと始めてからすでに一〇年、強い反日感情を地道に変えている。(8・23西日本)

盲人の母親に声の奉仕を

愛知県大府のボランティアグループ「野ばら」が、新聞の家庭欄などをテロップに吹き込む声の奉仕者を募集。盲人の母親たちに生活につながる楽しみをと。(8・25朝日)

集会

「女性と文学」シンポジウム

ニューヨーク大前教授エレン・モアーズさんが一八世紀以降の女性文学の「ヒロインイズム」について講演、困難な状態に置かれている女性のためにペンをとることが課題と述べた。日本側の渥美育子さんが創造性は子宮から生まれると主張すると、モアーズさんは頭脳からのみ出ると反

論、日本と欧米の解放運動の違いを示した。

(4・11信毎)

付きそい看護を考える集い

東京看護学セミナー主催で家族・看護婦・付き添い婦それぞれ立場から問題提起。

(4・13朝日)

第三回働く婦人の中央集会

五月一三、一四日、二〇〇〇

人が「教育」をテーマに集まった。働く母親と子どもの非行化が一つながりで考えられ、教科書には結婚・出産・退職という女のライフサイクルが記され、卒業するまで出席簿その他のすべて男子が先。低賃金でヘトヘトの母親に「私は子どもができたなら働かない」と娘は言うが、働くことこそ生きていること、と誇りと自信を持つて主張できる世の中をとの

発言も。

(5・15朝日・読売)

胸を張って働こう

第一九回全国婦人のつどい

中央集会は自立・連帯・行動をテーマに品川文化会館で開かれ八百人が参加。分科会「仕事と家庭」ではお金のためではないのに子どもを預けて働くのは母性愛が薄いのでは、とか、子が病気で休むのは気がねなどという出席者に「働くことは自立の喜び、平等実現には堂々と働き続けて」と助言者がハッパをかけた。

(5・27読売)

男にとって家事とは何か

日本有職婦人大阪クラブが公開討論会。男の家事は当然という大学助教授。できるけれどしないという技師などが意見を発表。

大阪社会事業短大教授服部

氏は「女の自立のために男もという対症療法やニューファミリーの風俗としての男の料理教室は危険」と警告。

(6・9・読売)

四国保育団体合同研究集会

保育にかかわるさまざまな問題を出しあい、交流を深めようと、第一回研究集会が徳島市内で二日間わたって開かれた。四国四県から保護者・保母・研究者など六〇〇人が参加。保育問題の深刻さ・難しさを浮き彫りに。

(6・12徳島)

未来の家族を考える集会

「将来の社会で家族はどう変動するか」をテーマにした公開シンポジウムが日本社会心理学会主催で開かれ「核家族化にともなう新しい価値観をつくる必要がある」と提言。

(6・21朝日)

性を考える会

長野市若槻団地では団地独自で家庭での性教育を取り上げ講演会を開く。団地が誕生して一〇年、思春期の子がふえたので、これを契機に子どもと話し合おうと。

(7・2 信毎)

女性のためのミニバイク講習

三加茂町と同町交通安全を進める会が二日三加茂中学グラウンドで、女性だけのバイク安全運転競技会を開催。町内一九地区から家庭の主婦ら三九人が参加。

(7・24 徳島)

初の国際女性学会

二四、二五、二六の三日間、国立婦人教育会館で開催する。

(7・21 読売)

学問的な立場から女性のあり方を討論、約一〇〇人の参

加者は若い女性学者が中心。「主婦の歴史、国境や文化の違いを豊かにイメージしながら語り合いたい」と米国側の学者たちも期待。

(7・26 読売)

一日目、瀬川清子さんは、「かつての主婦は重要な労働のにな手だった。労働から解放されたいまの専業主婦は民俗史の事実から見てもおかしい」と記念講演。

二日目、キャサリン・モロニーさんは、平塚らいてう・山川菊栄・市川房枝の三人を例に、日本の女性運動は戦前戦後と分断されず脈々と続いていると強調。

二日目、ライザ・クリフフィールドさんは自らの芸者体験を通し、日本の妻が家事育児専従でホステスの役割は芸者にゆだねている状況を指摘、すべての妻がホステスになれば芸者は消滅するとバラドク

シカルに主張、論議をよんだ。

三日目、キャサリン・ルイスさんは日本の消費者運動を

分析、特に草の根型運動の根本的な生命重視を評価。スザンナ・ボーゲルさんは「日本の主婦は専門家。稼ぎ手専従の男にとってなくてはならない存在」と分析、日米主婦論争に花が咲いた。

(7・27—31 読売)

女性学会の討論は五部会で行なわれ、海外参加者の研究発表は必ずしも正確といえない部分もあったが日本人の意表をつく問題提起もされた。

日本の女性解放運動家の参加がなかったという惜しまれる一面もあったが、まずは成功といえよう。米国では女性学講座は五〇〇〇講座、講師数は二三〇〇人、一〇億ドルの研究費がつぎこまれていますが、日本でも来春から東女

大・お茶大・京都橘女大で女性学が開講される予定。

(7・31 毎日)

第二十四回日本母親大会

二九、三〇日、東京で開かれ一万人が参加。四五の分科会で熱のこもった討論を。「どんな子どもに育てたいか」分科会では基本的なしつけができていない子どもたちの状態が嘆かれ、「むしろどんな母親

になるべきかを問うべき」「母が悩んでいるとき父は何をしているのか」と疑問が投げられ、「共働きと育児」では子どもへの悪影響はない、自身の努力と夫の協力が必要と確認された。

(7・31 読売)

社会党が都民婦人との懇談会

都知事選について婦人の声を聞き、①政策づくりをしつかり②候補者選考では発想の

転換を③社会党は主体性をも
って選考にあたるべき等の意
見が出された。

(8・22毎日)

調査・統計

切り抜き運動を する方、ご連絡を

女が生き生きと活動する日、子殺しや心中がなくなる日を目指して、新聞切り抜きを続けています。しんどい仕事ですが女の情報収集活動の一つとして参加する方、また切り抜いた新聞を要約する仕事をする方、ぜひご連絡ください。実費程度ですが、薄謝が出ます。

〔申し込み先〕

〒160 東京都新宿区
新宿1の9の6 あごら
編集部・新聞切り抜き係

男は進学、女はファッション

東京・大阪の中・高生男女二百人ずつを対象とした電電公社の中・高校生の生活調査で高校生の就学希望は男八一%女五五%、関心事のトップは男Ⅱ進学三四%、女Ⅱ流行三六%。運動部は男Ⅱ柔剣道・サッカー・バレー、女Ⅱテニス・バスケット・バレー。

(4・5読売)

職場結婚がトップ

結婚問題研究所の今年結婚する二六〇組のアンケート調査では、知り合った場所は職場がトップで三七・六%、以下友人・知人の紹介・学校の順。女性はやさしさ・誠実さ

に、男性は明朗・やさしさに
ひかれてゴールイン。

(4・13朝日)

家事労働費月額六万円

余暇センター発表「レジャー白書」によると、主婦の家事労働は一時間四二七円、年齢別家事賃金は一〇代で月二万二千元、二〇代七万円、三〇代七万五千元、四〇代七万二千元、五〇代七万円、六〇代以上五万六千元、平均六万三千元で三〇代が一番家事に追われている。

(4・29朝日)

三人に一人の主婦が勉強中

文部省の「生涯教育の実施状況等に関する実態調査」によると、この一年に指導者について勉強した人は女二六・一%男一四・五%、中でも主婦が最高だった。内容は①芸術・芸能・趣味五五・一%②

家庭・日常生活五一・八%に集中、教養やスポーツは二六・八%、一二・六%と人気が①職業に関する②趣味③教養に対し、女は①家庭②趣味③教養の順。

(5・3朝日・読売)

「婦人の日」に婦人は戸惑い

読売新聞社が実施した全国世論調査によると、「新設賛成」五五%「反対」一五%「わからない・無答」三〇%。賛成の内わけは「桃の節句の三月三日」四一%「婦人参政の日」四月十日「二四%」国際婦人デーの三月八日「一八%」その他「一七%」。「三月三日」は女性より男性に多く、女性の支持は四割を割り、「四月十日」は逆に女性

が多い。(5・4読売)

母の悩みは「しつけ」

母親の六割が子供の「しつけ」に自信がなく、家庭教育の一番の悩みもしつけ。徳島市小学校PTA連合会婦人部が、同市三〇校、佐那河内村一校の小学生の母親一五、四八五人を対象に実施した「家庭教育に対する母親の意識と実態調査」で。

(5・4 徳島)

子どもが作る料理

M電機がまとめた「チビっ子料理作り実態調査」で料理を作ったことがあるのは、女子九四・三%、男子八六・八%。主な料理は男子ラーメン、女子ホットケーキ。好きなものはカレーライス・ハンバーグ・スパゲッティ・ラーメンの順。「作る動機」は男女とも「自分の好きなものが

作れるから」で母親は手放しで喜べない。都内小学五、六年生二〇〇人のアンケートで。(5・8朝日)

乳幼児を持つ母職場に定着

職業研究所が川崎市の保育園児世帯九八二を調査した結果では乳幼児を持つ母の職場定着が労働史上かつてなかった規模で拡大、かつては教員程度だったのが、看護婦・保母など専門職のほか大企業の事務員にまで広がった。ただし定着型は二割で、八割はパートに代表される非定着型。

(5・9読売)

奥さんが頼み、わが家計

総理府統計局の家計調査では全国世帯の一月消費支出は一九万三四三一円で前年度に比べ、実質一・二%増。勤労者世帯の支出は実質二・二%増。ただし妻の収入が実質

一四・八%増えたため。世帯主の収入は定期収入で多少増えているものの臨時・ボーナスなど実質減。

(5・20朝日)

母ちゃんが支える農業

全国農業会議所が昨年八月一日、全国の専業農家、作目部門別四六二八人の既婚婦人対象に行なった農家婦人動向調査では、農家婦人の年間農業従事日数一五〇日以上が七五%、五三%が農業機械を操作。農業機械が原因の労働災害三%、農繁期睡眠時間平均六時間二二分。四時間以下三・二%。年中無休の婦人二四%強。

(5・20徳島)

六一%の女性が飲酒

サントリーの調査では「過去一年間に飲酒経験あり」の女性は六一・四%、年代別には二〇代七〇・一%、三〇

代六四・六%、四〇代五四・四%、五〇代四八・八%。既婚女性五七・七%、未婚女性七九%で男性の飲酒率七一・一%より多い。

(6・19読売)

離婚急増、結婚激減

二六日、徳島県医師課がまとめた昨年一年間の県下人口動態調査概況では結婚五三七件(一時間三九分毎に一件)、前年比二四五件減。離婚九五〇件、前年比一〇一件増。出生児数一〇七五八人、戦後では「ひのえうま」の四年に次いで最低。

(6・27徳島)

長生きして晴れ姿を見て

万年筆メーカーの「娘から父への願いごと」募集に四五九人が応募。「酒・タバコを節制して長生きして」(成人した娘と小学生に多い)、「私

の晴れ姿をみて」(二〇歳以上の娘に多い)。中には「私たちの目の前で、母に『愛している』とか言って」という東京の二三の注文も。

(7・1 徳島)

夫は手助けよりいたわりを

妊娠中、第一子は夫の八〇%が協力姿勢だが第二子は三六%に激減。一番うれしかった夫の態度は「妊娠を喜んでくれた」「いたわってくれた」で、家事の手伝い等はほとんどゼロ。育児中の夫の協力は①おフロ入れ六六%②ミルク飲ませ四六%③おむつ替え③子守り三四%、妻が夫に望むのは①精神的はげまし四〇%②おフロ三八%③早く帰って二四%④いたわって一八%⑤やさしいことばをかけて一〇%で、ミルク飲ませやおむつ替えを望むのは五〇人に一人だけ。和光堂の五〇組の夫婦

の調査で。(7・6 読売)

主婦の昼食アラカルト

テレビ料理教室の「昼食アランケート」の結果、回答者の主婦五〇一人中、お茶漬派は二・八%と少数。一、二位は焼き飯三八・五%、うどん三一・五%でサンドイッチ類・ラーメン・焼きそばが続く。六割近くが月に一回以上外食。(7・6 徳島)

掃除や炊事の手間省きたい

主婦が最も手間を省きたい家事は、掃除三〇・五%、炊事二八%、買物一八%、洗たく一三・五%。夕食の後片付け時間は三〇分前後。家電メーカーT社の首都圏主婦二〇〇人の調査結果。

(7・8 読売)

普通家庭でも四割が働く母

厚生省の「五二年厚生行政

基礎調査」(対象三〇万人)

によると、核家族は五九・四%で前年比四%増、老人世帯は一九二万(一・四%増)で昭和三五年の四・五倍。働く母は母子世帯の八四%、夫婦だけの世帯で四四・七%、夫婦と子の世帯でも三九%、だ

夫の物は二人の物

(7・9 日経)

夫婦で働いた所得は多少にかかわらず共有財産とすべき。専業主婦七七%、有職婦人七四%、未婚六三%が賛成。夫の借金は妻も債務を負うべき。半数が賛成。否定が専業四一%、有職三五%、未婚三三%。夫名義の所得は妻の協力が含まれているから離婚の際には妻は財産分割請求ができる。専業九一%、有職八八%、未婚八八%がイエス。特に専業主婦が家

事労働に価値を見出している。(関東人権擁護委員連合会婦人部会の夫婦の財産について二八四〇人の女性意識調査で)

(7・13 読売)

VTRは夫と息子用

ビデオ所有者の家族数平均は三・六人、年収三九〇万、カラーTVは二・三台。主な利用者は①夫五四%②息子二七%、妻と娘はほんのわずかで四六%は夫が独占。息子の八割は個室で利用し親も手を出せない。女たちは当然おもしろくないが、機械操作に弱いのが泣きどころ。日本ビクターの二二七世帯の調査で。

(7・14 日経)

女性の生涯教育受講熱

「女性のための生涯教育に関する意識調査」(生涯教育を考える会)によると、婦人・家庭学級参加者計三〇八人の

うち、八三%が既婚者。無職五六%・有職一三%で三分の一が大卒以上。「自分自身をみつめ直し、今後の生き方を考える糸口がほしい」がその主な動機で四人に一人の割合。主婦の暇つぶしではなく、暇がなくても勉強したいという熱心な声が少なくない。

(7・14日経)

タテマエは地位向上に賛成

読売新聞社が全国三〇〇〇

人を対象に行なった「婦人問題調査」によると「女性の社会進出」に賛成は大都市で六四%に対し町村部は五八%、二〇代六四%に対し六〇代四三%。高学歴と革新政党支持者に賛成が多かった。しかしタテマエとホンネには差があり「女性の地位向上運動に賛成」の女性は六一%もいるのに「男は仕事女は家庭」を否定する人は二七%、男性も

「女性の地位向上」を五六%が歓迎しながら「妻は仕事を待つより夫を助けるほうが大切」は八〇%もいる。米国の同じ調査では婦人運動に賛成の女性は五〇%で日本より少なく、反対は二九%で日本の一四%の倍以上だが、これは逆に婦人運動が直ちに社会に実効をもたらしている事情を反映している。

(7・24読売)

奥さんアルバイト急増

都が発表した「五二年の都民のくらしむぎ」によると世帯収入は前年比九・九%増、中で妻の収入は一八・一%増、一六、一二二円となり、生活防衛が顕著。

(7・25読売)

化粧代は月一万三千元

毎朝化粧をし日に四回鏡を見る主婦は五六%、月平均一

三、六〇〇円(家計費の六・七%)のおしゃれ代。夫に対しファッションや化粧をはめられたいと六三%が願っているのに実際にはめられたのは三六%。「世の亭主族はテレ屋なのでしよう」とは調査マンの主観含みの分析。第一勧銀の調査で。(8・26朝日)

男は職場、妻は子を夫を

三―四時間後に大地震という警戒宣言が出勤三〇分前に出たら、管理職の三〇%がすぐ職場に向かうと回答。一方夫や子を送り出した後の妻は①使用中の火を消す②夫と連絡③子と連絡④避難袋の点検⑤避難⑥近所の人と相談の順。警視庁の八〇〇〇人調査で。(8・26朝日)

結婚費用も「高さがや」

新郎二六・七歳新婦二四・一歳、結婚費用は三二四万

円。うち両親負担一四四万円。二人の貯金は三七九万円、結納は見合い五〇万、恋愛三〇万が相場。三和銀行の新婚一年家庭六〇〇組の調査で。(8・27朝日)

浮気できる亭主関白が願望

東京の大手電気メーカーが三五―四九歳の中年男性とその妻三三〇〇人を対象にした調査では、妻からみた理想の男性のトップは「妻の具合が悪いとき料理を作ってくれる夫(八八%)」。中年男性自身の理想は「たまには浮気の一とつもできる(五四%)」。

(8・30日経)

変化・風潮

ふえた男女平等の意見

第三〇回婦人週間の長野県

下の応募論文数は六八編、うち男性から九編。①四〇代②六〇以上③五〇代の順に多く、総数では昨年の二倍。具体的提案もふえた。

(4・5信毎)

増えた男のエプロン姿

男子専科の料理書・テレビ番組・マンガ、さらに男子専科の料理教育もふえ、各種同好会もさかん。が主に趣味で「遊びより家事分担としての料理」は少なそう。

(4・9朝日)

女性ばかりのマラソン

一五歳から五〇歳までの女性一〇七人が九日「皇居一周毎日レディーズマラソン」(四・八キロ)に挑戦。タイム競争ではなく、健康増進と親ばくを図るのが目的。主婦と会社員が圧倒的多数で全員

完走。(4・10朝日)

婦人のあゆみ着実に

参政権を得て三二年、三〇回目の婦人週間。「封建性をなくし婦人の自主性」が言われた昭和二〇年代、「婦人の力を役立たせる」の三〇年代。四〇年代は「能力を生かす」が中心。そして五〇年代は「平等・発展・平和」にそつた目標が。二一回目の婦選会議での報告によれば、婦人議員が多いか着実な活動をしている自治体では、各種審議会委員なども多いと。しかし末端へゆけばゆくほど問題が。

(4・13朝日)

菊田医院の赤ちゃん養子に

石巻市の菊田医師がかけ込み出産した母親から頼まれて養ひ親を探していたが、内定した。新聞に記事が出たところその日のうちに希望者から

の電話が約四〇件も殺到。実親は「赤ちゃんのためによかった」と喜んでおり、家庭裁判所で養子縁組が認められれば正式に決定する。

(4・17朝日)

初の女性マラソン

一六日、日本で初の女性マラソン(四二・一九五キロ)が東京・多摩湖畔コースで行なわれた。二〇代から七〇歳までの四九人が出場、四六人が完走。(4・17朝日)

離婚を考える

離婚後の問題点と離婚に至るまでの経過を離婚した人の告白をもとに報告、離婚の正体を追求。(4・17・5・4・6・12・6・22・8・11・8・26朝日)

少年同士の愛がブームに

ここ二、三年、少年同士の

くりひろげる愛の葛藤が少女マンガブームに。「少年同士の愛は家族という単位をつくるという点では、はじめから不毛。最も不毛な愛の中に突破口をみつけようとする作者の姿勢が共感を呼ぶのでしょう」と中島梓さん。

(4・19朝日)

一年たった都のかけこみ寺

開設以来電話相談六〇八八件、かけこんだ人五九二人、子も加えると九一九人。開設当初は夫の暴力から逃げ出した人が多く、腰をメッタ打ちされて歩くこともできない人やタバコを体中に押しつけられた人などあきれるほどのケガが多かった。入所原因の四割は夫の暴力・酒乱。しかし二週間の保護期間後就職できたのは一割に満たず、二割は自宅にUターン。

(4・20毎日)

少女暴力

少女による「粗暴犯」は四七年から四年間に二・二倍と著しく増加、その後はやや減る傾向に。簡単な動機でひたくりや強盗を。スケバングループによるリンチなども犯罪白書に報告されている。

(4・26読売)

企業グループの結婚相談所

三井グループ(三井物産・三井銀行)は「三井グループ結婚相談所」を新宿三井ビル四九階に開設。独身社員の結婚相談とお見合いが主な活動だが、女子社員の結婚退職を促す目的もあるのでは?

(4・28朝日)

女ひとり南海の楽園

ニュージーランド南端にある小島スチュワート島の山中で半年以上もたった一人で生

活していた吾妻恵子さん(四〇)が強制送還されることになった。「こんなきれいな国で好きなように生活をしていただけ。なぜ警察に捕まったのかわからない」

(4・29朝日)

サラ金被害者がかけ込み寺に

各地の母子寮や福祉施設にかけ込んでくるサラ金被害者が、最近ふえている。夫の暴力や離婚で行くあてのない女性の一時保護が目的で、昨年四月オープンした東京・新宿の都婦人相談センターも、これまでに三人を収容。

(5・2朝日)

六・五人に一人が喫煙

女性の喫煙者率は一五・一%(五二年度全国たばこ喫煙者率調査)、その中で二〇代の喫煙率は急上昇。女子大のキャンパスにも灰ザラを置く

のが常識化している。動機には自己回復型・抑圧回避型・自己顕示型などがあり、単なるアクセサリではなく自己主張のための小道具として定着してきている。

(5・3—8読売)

Tシャツは同権のシンボル

本来、肌着、人前では見せてはいけないとされたTシャツが一五年前から上着・外着として定着。男女同権・女性の地位向上運動が起こった四〇年に、気軽に開放的なTシャツが見直され、男ものを女が着るようになったもの。

(5・5読売)

当世乳児院風景

石油ショック以降、捨て子が年々減り、捨て子収容所とみられていた乳児院も、今では未婚の母や別居ママの子を預かっている。

(5・5読売)
メロウという言葉が流行

「女の美しさイコール若さ」という考え方は過去の物語。メロウ(円熟した・熟れきった)な女性の株が急上昇。あらゆる年齢・階級の女性たちに自立心が育ち、女性の美しさの大きな要素となっているのがその原因。

(5・5読売)

当世母親像

核家族時代の不安な母親。「全体に未成熟で、実家の親、ことに父親にべったりの若い母親が目立つ」「夫とうまくいかない」と、子供の世話をやたらにやく。それで自分の気持ちちを安定させようとする」と東京家裁の調査官は指摘。

(5・13読売)

母の日が定着

八七%の母親が母の日を祝ってもらったことがあり、祭りとして家庭に定着した。祝われ方は——贈り物をもらった(三六%) カーネーションをもらった(二五%) お祝いをいわれた(二〇%)。

(5・14朝日)

女性のみこしかつぎ手急増

浅草三社祭では女性のかつぎ手が増えたことが今年の特徴。五人に一人近くは女性という町内も。(5・21朝日)

今や男女同帽時代

昨年から男女そろいの帽子をかぶる傾向が。背景には女性の男性化、男性の女性化があり、洋服や頭髮に進んだ男女同権も頭の上まで届いた。

(5・24朝日)

子供の声は騒音?

目黒区鷹番地区に建設予定

の区立保育園は、騒音公害で住民同士が対立し、足かけ五年たつが、いまだに建設のメドが立っていない。

(5・25読売)

水着審査廃止

「八王子まつり・ミス八王子コンテスト」は今年で十五年目。応募希望者の中に水着姿に抵抗を感じる人が多く、今年から水着姿による審査をやめることになった。

(5・25朝日)

娘囃子七人娘

小学五年生六人、中学一年生一人の七人の少女が囃子方を結成、大田区西嶺町の観蔵院で練習を続けている。浅草三社祭では猛練習のかいあって、宮神輿の先導役をみごとに果たした。(5・27読売)

なつかしの少女雑誌復活

昭和一〇年代、女の子たちの夢や感傷をかきたてた「少女雑誌」のイメージを受け継ぎ再現しようとした女性向け叙情誌「薔薇の小部屋」が三日創刊される。

(5・28朝日)

“ミズ”ついに公認

ウーマンリブ運動から生まれた女性第三敬称の“MS”が、アメリカ・カナダ・オーストラリアなどの在日大使館で市民権を得て公用文に使われている。わが日本では「公的機関での使用率は未知」とお堅い見解。(6・2読売)

発掘は女の適職

メソポタミアの厳しい自然の中で発掘作業に追われる各国とも女性隊員が多い。「女性がいけない隊はソ連と日本」といわれて長い、日本隊は二か月前から一人加わった。

(6・6朝日)

女性歯科医官防衛庁に登場

慢性的医師不足に悩む男世帯の防衛庁が五日付で女性歯科医三人を制服自衛官として初採用。一か月幹部自衛官基礎課程で教育後、歯科医師官として正式にスタートする。

(6・8徳島)

俵朋子さん否決さる

空席となっていた中野区監査委員に区側が俵朋子さんを起用しようとしたが、区議会の共産党を除く与野党各会派の反対でつぶれた。「専門的な行政知識もなく、多忙な俵さんには無理」が理由。

(6・8朝日)

行進曲入選はほとんど主婦

朝日新聞社が募集した「行進曲」の歌詞の入選・佳作五編のうち四人までが家庭の主

婦。入選の足立百合子さん（五五）は二人の孫のおばあちゃん。詩作歴は四〇年。

（6・10朝日）

乱れる男ことば・女ことば

男が一人占めしていた「ボク」「オレ」「キミ」が、二三年前から女の子の間で流行。若者の心を映すフロックの世界でも、男・女ことばは入り乱れ、男は男らしく……は、実に難しい時代になった。

（6・14朝日）

母子家庭の周辺

若い世代が多く苦しい生活。根強く残る「家」意識の中で、不安定な立場。中には寮でたくましく自立を模索する姿もみられるが。

（6・14・7・4信毎）

女性のお酒、急速に進歩

現在日常生活の中でお酒を

飲んでいる主婦は四六・六%、OLは勤め帰りにジョッキを傾けるなど飲みっぷりはどんどん進歩。ボトル・キープする女性も増え、業者もインテリアなどを女性好みに合わせている。女性のフトコロが豊かになったのがその理由。

（6・20・27読売）

リブ二世号日本一周に挑戦

五〇年に単独太平洋横断した小林則子さんがヨット仲間の女性二人と三年がかりで日本一周に挑戦する。「女性クルー」による模範航海を実行し、海から歴史を学びたい」と。

（6・27朝日）

増えたべったリママ

「私に五、六年おひまをください」と夫の世話を長女にまかせ大学生の長男のアパートに転がりこんだ母がいる。「息子を恋人以上に思う母親

が最近特に多い。子離れできず夫婦の仲をさく例も。一日も早く親の自立を」と弁護士の佐藤典子さんは助言。

（6・28中日）

ママさん生徒急増

繊維工場に働く女子従業員 の定着策として十数年前愛知県各地に設けられた勤労学院は、繊維産業の衰退で生徒が激減、代わってママさん生徒が急増。青年学校振興法で設立されているため二六歳以上は対象外だが、別科生として黙認、県教委も見て見ぬふり。

（6・30中日）

日本人の寿命世界一に

厚生省発表「五二年簡易生命表」で男性七二・六九歳、女性七七・九五歳に。男性は長寿世界一、女性はスウェーデンなどと世界一、二を争う長寿国になった。

（7・2各紙）

既婚女性は新劇・音楽会離れ

コンサートや観劇に通うのは独身のうちだけ。結婚して子供ができたりますと女性は姿を見せなくなる。核家族で留守番がいけない、ベビーシッター制度が整っていない、料金が高いがその主な原因。「結婚すると気取らなくなるため」（木村尚三郎）「欧米は一家揃って教会に出かける」「外出文化」、日本はお坊さんが家庭に出張する「おこもり文化」（山本七平・深田祐介）という意見も。

（7・3日経）

ねらいは花嫁募集か

信州の自然の中、農村での生活を体験してみませんかーと、長野県の八町村が「農村と都市を結ぶ若人のつどい」を催す。日ごろ土に親しむこ

との少ない都会の女性に農作業の体験をしてもらうとともに、農村青年との交歓交流がねらい。
(7・4朝日)

電話相談四〇〇〇件

愛知県婦人相談所の「婦人悩みごと電話相談」の昨年度利用は四〇〇〇余件。家庭内の問題が五八％とトップで、夫とのトラブル、子どものこと、嫁・しゅうとめ問題など。サラ金にからむ悩みごとが初登場。
(7・6朝日)

「小6」が出産

福岡県八女郡で小学校六年生の女の子(一一)が四月下旬に男児を出産していたことがわかった。久留米市内でバ―勤めをしている姉のもとに出入りしているうちに姉の愛人の子を身ごもったもので、両親や教師も出産直前まで全く気付かなかった。

(7・6西日本) 変わらぬ女の業

名古屋市中村区大門通、旧赤緑の素顔は、今も昔も変わらず「女のなみだ町」。酒場・トルコの建ち並ぶ小路にある中村観音にはアルコール漬けの小指の供養をと小さなびんをかかえた女性、男の「浮気封じ」を祈る女、ひっそりと遊女の位はいを拜む老女の姿が。
(7・11朝日)

試験管ベビー近く誕生

英国で世界で初めての試験管ベビーが誕生する予定。
(7・11読売)

主婦の大学進学熱

五月から毎週水曜日の夜、三鷹で明星自由大学が開講。中・高校生から七〇歳をこえる老人が受講しているが、女性が過半数を占めその半数が

主婦。動機は「子どもへの手をはぶけるようになったので」「むなしく年をとってゆく自分の身が悲しくて」など。
(7・11読売)

父子家庭に福祉の手を

国勢調査(五〇年)によると、全国の父子家庭は二七万世帯。その実態すらわかっておらず、救済策は皆無に近い。税制の優遇措置などせめて母子家庭並みにと望んでいる人は多く、父子家庭問題はすでに放置できない状況。
(7・11読売)

野球に燃える少女たち

名古屋市の中橋晴美さん(一六)が、男の子だけにやらせておくのはおもしろくないと中学・高校生で野球チームを結成。親には内証の人もある中で自主訓練。
(7・12中日)

「リブ二世号」無事横浜へ

一四日に北海道・函館を出港、約八百キロの荒波を乗り切った女性四人のヨット「リブ二世号」。リーダーの小林さんは「昔栄えた港に入った日本中を調べたい」と意気さかん。
(7・21毎日)

増え続ける女子太

女だけ集めて教育することにはどんな意味があるか。女子太の存在そのものが問われている。

「共学では女性はいつも補助的役割。女子太は何から何まで私たち女性の手でできる」

「今の社会は、仕事も家庭も女性には不利。それを改善する使命が女子太にある」

戦後三〇年、女子太は増え続け、四年制は八四校で二割を占め、学生数一〇万八千人、三人に一人は女子大生。

が、国としては女子大について特に「理念」を持っていない。(7・24—8・17毎日)

子供野球に女子選手初登場

第一九回子供野球の集い(県軟式野球連盟他主催・参加一四〇チーム)に徳島市勝占Bチームは女子選手三人を登録。(7・25徳島)

ボランティア婦人、高齢化

ボランティア組織は二、三人で作っている小さなサークルまで入れると全国で約二万団体、一二〇万人余り。五〇歳前後の主婦の参加がふえない。「老後は子供に依存したくない。金銭より精神的な豊かさが欲しい。地域社会とのつながりのなかに新しい生きがい」という意識が中高齢主婦の社会参加を促している。(7・26日経)

世界初の試験管ベビー誕生

七月二十六日、英国で、体重

二六〇〇グラムの女兒を帝王切開で出産。母親はイングランドン西部プリストル市に住む鉄道運転士ジョン・ブラウン氏(三八)の妻レズリーさん。母子とも正常。「生みの親はオールダム総合病院産婦人科医バトリック・ステプトー(六五)とケンブリッジ大学のロバート・エドワーズ(五三)の両博士、一〇年を超えた「執念の産物」。

(7・26各紙)

てんやわんやの英国

オールダムは、試験管ベビーを取材しようとする報道陣でこった返し。ブラウン一家は記事・写真独占掲載をロンドンの大衆紙デイリー・メールに一億円で売った。ローマ・カトリック教会は子宝は

神からの授け物「人倫にもとる」と厳しく実験を非難。

(7・27読売)

BBCのインタビュアーで両医師は「胎児を育てるには母胎にまざるものはない。ベビー・ファクトリーなどという考えは、SFしかない」「ブラウン夫人が選ばれたのは実験に最も適当な年齢にあったし、受精卵を体内に移入しても妊娠に耐えられる体と判断したからだ」「今度の一連の手術で得られたノウハウを広く世界に伝えるつもりだ。今回の成功は他の原因で不妊症に悩む女性にとっても役立つものと思う」と答えた。

(7・27読売)

キャリア・ウーマンが進出

BGやOLよりも積極的に働くキャリア・ウーマンが増えた。出産や家事とのかねあいのほか、相変わらず女を装

飾品とみる企業の変勢に苦悶。とはいえ、企業の中の男の城は徐々に切り崩されつつある。かつてあれほど男がどっかと座っていた家庭の主導権が女に移ったように。

(7・31毎日)

あしたの主婦

女性の九八％が結婚する現在、主婦であるということは一体どう生きることなのか。「日本の夫婦は九〇％精神的に分離。かせぐ人と家を守る人の組みあわせにすぎない」「日本では生き方がまわりから決められてしまう。社会全体のあり方を含めて、主婦の生き方を問い直すとき」国際女性学会に出席した米国の社会学者たちは言う。しかし親友家族で二軒長屋を建てた主婦、手作りケーキを喫茶店に卸すようになった人、そぞい屋を開いた人、特技交換

の場を設けた人など新しい動きも目立つ。

(8・1—25読売)

少女キッカー活躍

第二回全日本少年サッカー大会に和歌山代表で小学五年生の西由起子ちゃんが出場する。「遊びじゃ面白くない。男の子に負けないワ」と五一年にサッカースポーツ少年団に入団。女子選手の出場は今回が初めてだが、場合によっては最初で最後になるかも知れない。

(7・8読売)

巴御前といわれる西由紀子さんが注目を浴びた。この大会の参加規定には男女の区別がない。将来ウーマンパワーが脅威になるかも。

(8・2読売)

女子大生を観光資源に

造船不況の長崎県にとって手っ取り早く日銭がかせげる

のは観光。その主流が、OLと女子学生というわけで、同県が「花の女子学生・一日課長」を企画。東京・大阪の女子大生を県内主要観光地に無料招待などPR作戦を展開中。

(8・2西日本)

第九回全国家庭婦人

バレーボール大会

一日、四八代表チームで開幕。うち一七チームが六三人の子を連れて入場行進。四日、優勝は熊本・砂取(平均三九・四歳)滋賀・晴嵐(三九・二)岐阜・神戸(三三・四・二)山形・余目(二九・五)の四チームに。「お母さんの取った金メダルよ。努力したら何でもできるのよ」と誇らしげに見せる姿も見られた。

(8・2—5朝日)

女だけの手でショー

七八年秋冬東京ファッション

ンウィークのショーは構成から演出まですべて女性の手で行なわれた。テーマは「出逢いの瞬間、女は光る」

(8・3日経)

「耐えない」若い女たち

愛知県婦人相談所に最近もちこまれる悩みごとは、週刊誌的。若い女性は家庭に入ってから夫に尽くし、家族と協力して家庭を作るといった心構えが皆無。私は目覚めた女、自由に生きたいと主張。相談員がさす「耐える」には、激しい拒絶反応を示す。

(8・9中日)

OLなみ——集団漁の海女

海女の本場能登でも海女独特のまげは姿を消しTシャツにヨットウエア。勤務時間は八時から三時まで、昼休み一時間。七人でアワビ六キロ・サザエ八〇キロ・モズク一六

〇キロの収穫、手取り五、六千円。服装も心もOLふう。

(8・11朝日)

女子野球日本選手権大会

第一回大会が、一二日から川崎球場を中心に四会場で開幕。日本女子野球協会主催で、少女の部(小・中学生)二四、一般の部(高校生以上)五チームが参加。

(8・12読売)

子どもの行儀作法教室

おじぎの仕方・電話の応答・和洋食のマナーを教える「子ども作法教室」が大阪に誕生、人気をよんでいる。家や学校でしつけを受けないので、子どもたちには新鮮。「おまかせします」という若いママたちを六か月で追い越す。受講はほとんど女の子。

(8・13朝日)

「家」を引きずる主婦の旅

しゅうとめや亭主への気かね、留守家族への食事の準備などで気疲れが多く、心底から解放感にひたりきれないのが現状。亭主も安心のグループ旅行が中心。

(8・15日経)

美容と体力を婦人会館で

徳島県市場町大俣農協が農林省の農山漁家生活改善施設設置事業指定下で県下初の婦人会館を建設。鉄骨平屋建六八六平方メートル。トレーニング室には二〇〇万円余で三種のトレーニング器具を設備、同農協婦人部八五〇人を中心に使用、ぜい肉取りや筋肉を鍛える。(8・18徳島)

女子走り幅七メートル台に

陸上の女子走り幅跳びで、ビルマ・バルダウスケネ選手

(二五・ソ連)は七メートル〇七の世界新記録を出した。

(8・19読売)

家事志向が強い余暇利用

三四年の労働省調査では、主婦の余暇は①読書・新聞読み②教養・勉強③収入のある仕事④子どもの相手⑤裁縫・編み物⑥趣味⑦家政技術研究⑧社会的活動だったが、五三年六月の奈良女大深谷教授の調査では①趣味を深める②一泊旅行③手作り料理④小説を読む⑤技術を身につける⑥婦人学級や教室に通う⑦衣類を自分で縫う⑧仕事⑨子のしつけ⑩夫の世話。共に家事志向が顕著で社会的活動が不人気なのが共通している。パン焼きなどの講習会を開いているベターホーム協会は三八年三千人でスタート、今は三万三千人に。「何かしなければ」と思いつつ結局は家事志向に

なるようだ。(8・21日経)

いまも嫁が支える商家

大阪の商内(あきない)の中心、船場で、旦那(だんな)さんの妻はご寮人(ごりょん)さんと呼ばれ、家を支え、店を支えた。極道は男の甲斐性と蔭で泣きつつ商内を守った時代は去ったが、夫が遊んでも妻ががんばって店を守るならわしは一緒。母親が店にいるという理由で保育所からははずされ、嫁の給料は計上されていて実際は生活費にすぎない。

(8・21毎日)

男は平凡女は非凡?

「平凡な主婦なんていや。勉強したい」という女性が増え、各地の市民大学や教養講座は女性でいっぱい。受講者の中心は四、五〇代の主婦、二〇代の独身女性。生き方や

心の糧を得ようとするテーマに人氣が集中。しかし市民大学や婦人学級の講師を務める岩男寿美子慶応大学教授は「講座で得たものをどう自分の人生に生かしていくつもりか、そのためにどう理解したのか、首をひねりたくなるときがある」と批評。

(8・21日経)

企業内ホーム・エコノミスト

企業と消費者の間をつなぐパイプ役として消費者部門や広報部門に女性を採用する企業がふえてきた。消費者サービスや消費者教育などを通して自社の製品を消費者に紹介する一方、消費者の苦情や意見を企業に伝え、新製品の開発や改良に助言を与える仕事。女性の新しい職場進出として注目されている。

(8・21毎日)

育児のA—Z教えます

徳島県下唯一の乳児施設徳島乳児院（小松島市）が創立二五周年記念に一〇月から電話育児相談開設を計画。宮城婦長ら保育経験一〇年以上の保母・看護婦・栄養士らが担当。（8・22徳島）

タンクトップ大流行

ランニングみたいなシャツがこの夏、数十億円売れ大流行。学生・OLから中年女性まで飛びついた。今や「よくぞ女に生まれける」の時代。（8・22日経）

女の午後はゲンと伸びたが

昭和一〇年の日本女性の平均寿命は四九・六歳、末子出産が三五・五歳で、子が就学してからの余命は七年しかなかった。いまは末子出産が二八・一歳、平均寿命七八歳で

「女の午後」は三五年も伸びた。東京で開催された国際老年学会で日本の長寿が大きな話題になり、公開講座「日本人のライフサイクル」でも、

「女性も社会進出を」の声も出たが、「終身雇用制は遠からず崩壊し、男も六〇歳以上の就労はますますむずかしくなる」との発言もあり、経済的裏付けがなければバラ色の老後はむずかしそうだ。（8・24中日）

働く母にも「非行防げ」

小松島署は「防ごう少年非行」県民総ぐるみ運動期間中、婦人補導員が管内の職場を訪問。昼休みに働く母たちに非行の実態、母親の役割を話した。この職場訪問は歓迎され、九月以降も続行の予定。（8・26徳島）

病院に目立つ高齢女性患者

以前はよほどのことがないかぎり主婦が診察を受けることはなかったし、それが不幸のもとになった。大きく前進した医療の無料化。が、病院に来るのがせめてもの楽しみという人も多い。（8・26朝日）

農家の主婦に新しい苦労

嫁と姑の問題はほとんどなくなつたが経営の負担がずつしりと。機械化で流産や身体障害の危険もふえた。農業人口は七二二万、うち女は六二％の四四八万、疲れをいやす機会もない。（8・28毎日）

教育

「手伝い」と「分担」の差

ヨーロッパの親は、子の保

護者というより指導者。子供に家事の「手伝い」をさせるのではなく「分担」させる。スリッパ整理一つでも責任感とプライドを持って自分の役割りをこなす幼児に感心。（高橋喬・教育評論家）（4・4読売）

夏休みの補習授業廃止

徳島県中学校長会は夏休み中の補習授業は全廃と決定。戦後まもなくから続けられた受験生の夏休み補習はこれで姿を消す。（5・30徳島）

女の先生は増える一方

徳島県下小中学校で依然として女子教員が増加。五月一日現在の県下教員数調査では、小学校男一四三二人（四三％）女一八八四人（五七％）、前年比男三人増、女四人増。中学校男一二八四人（六九％）女五八三人（三一

%、前年比男七人減・女四人増。一般教員比率、小学校男三一%女六九%。中学校男六四%女三六%。今春新規採用者、小学校八三人中、女六四人(七七%)、中学校三九人中、女二四人(六二%)。

(6・3 徳島)

女子大不可思議論

男女共学の学制改革から三年。男子大は存在しないのに女子大は四年制では二割、短大では六割を占めている。女子大は存在価値があるのか——連載の「女子大不可思議論」への反論は肯定二、否定一。昔ながらの良妻賢母教育、生ぬるい、束縛が多いという否定論に対し、「一流大学の男と交際できる、二流の共学校よりずっとトク」「女ばかりだから授業中にセックスの討論もできる、進んで他大学の聴講にもいく」など肯

定論は多彩。「学べば学ぶほど女子学生は自己矛盾に陥らざるを得ない状況にある。女性差別の延長線上に女子大のイメージを築く社会のあり方こそ問題、女子大不可思議論こそ不毛の論」という鋭い指摘もあった。(6・13 朝日)

授業に活気、男女共修

大阪教育大助教授の新福さんと大学院生沢田さんの三年間の訪問調査によれば、大阪府の公立中学校八六校のうち六五校が何らかの形で技術科・家庭科を男女共修させている。女子が工具を使ったり、男子がミシンを扱う際のもたつきや遅れはあるものの、テスト正答率はほとんど差がない。教材づくりの難しさなど問題点もあるが、当の中学生は共修を積極的に評価。(6・28 朝日)

通知表で大もめ

長崎市の西町小では到達度評価が相対評価かで校長と一部父母の意見が対立、一七日夜、父母・教師など約一二〇人が学校に集まり大討論集会。父兄の到達度評価支持に対し、校長は相対評価を譲らず平行線。終業式では、半数に通知表なしの事態になった。(7・20 西日本)

父兄向けテレホンサービス

徳島商業高校は留守番電話利用の父兄向けテレホンサービスを七月中旬から開始。学校情報を一通話分に集約、一日四〇回を上回る利用率。

(8・2 徳島)

ふえ続ける女の先生

愛知県統計課がまとめた五三年度の学校基本調査によると、幼稚園よりも保育園に行

く幼児が増え、小・中学校の女の先生も、昨年よりさらに増えている。(8・3 朝日)

“戦争体験”児童が聞き書き

大分県教組は児童生徒が父母・祖父母などの大人から聞き書きで集めた戦争の記録を『大分の平和教育・戦争体験記集』として一冊の本にまとめた。「戦争体験をこのまま風化させてはいけない」と二年がかりで完成させた体験集は同県下の小中学校で六日行なわれる平和授業で副読本として使われる。(8・4 西日本)

健康

誘発剤でまた四つ子

五つ子誕生で話題になった

鹿児島市立病院で、三二歳が七か月の四つ子を早産。母体は健康だが四つ子は人工呼吸装置で呼吸中。

(4・18朝日)

リユーマチ患者の性生活

我が国のリユーマチ患者の八割は女性。二〇代から三〇代に発病のピークがあり主婦の病氣とも言われる。都立墨東病院・リユーマチ科吉野院長のアンケート調査によれば、膝や股関節障害のために夫婦生活が一年以上もない患者が一割を超す。従来、人工関節の手術は五〇歳以上とされて来たが、手術を早めて「花」のうちに性の障害を解消することも適応の一つと考えたいと吉野医長。

(6・11読売)

医者の都合で人工陣痛出産

産科医の「お産お断り」が

大都市圏で広がっているが、医師や患者の都合に合わせて陣痛誘発剤で人工的に産む「計画分べん」も、もはや常識化している。人手不足や救急医療体制の不備が理由だが「医学的に必要でないことは医療ではない」と国立医療センターの我妻堯産婦人科部長は批判的。こうした中で準備出産協会のように出産の本来の姿をとりもどそうという自宅分べんグループも芽生えているが、一般にはまだ、あなただまかせの出産が多い。

(6・12—6・16読売)

主婦の健康調査

主婦は夫よりも健康診断を受けていないし、ほとんど運動もしていない——国民生活センターの調査結果がまとまった。過去一年に一週間以上寝込んだ人は一六%以上もあり、その結果人手に困った人

が四人に一人。

(6・13読売)

助産婦不足

我が国の妊産婦死亡率はスウェーデンの二・七%よりはるかに高く三八・三%、医療後進国といわれるイタリア並み。助産婦の少ないことが悲劇を生んでいる。産科救急医療のスタッフ確保が急務、と救急シンポジウムで日本看護協会の山西みなさんが提言。

(7・2読売)

女性の二割は貧血

献血の採血基準合格率は男九五・三%女七五・四%で女的不合格が多く、特に血液比重不足は一七・四%(男〇・七%)にものぼり、都市部では二七%にさえ及ぶ。厚生省の調査でも一八—五九歳の女性の二—二九%は貧血だ。生理・出産などの影響を受け

る女性は鉄分をとるだけでなく鉄分の吸収をよくするたん白質やビタミンCを十分とることが必要。(7・17読売)

早まる初潮年齢

戦前の平均は一四歳。以後年間一二日ずつ早まって五二年度は一二歳六か月。市部郡部の差はほとんどない。男子の精通年齢も、今まで女子より二年遅いと言われていたが一年差。大阪大学人間科学部沢田助教の「全国初潮調査」(二〇三〇校、一〇万五五〇〇人)で。

(7・18日経)

本

中年の危機を考える本

『パッセージ』が米国でベス

トセラーを続け、日本でも訳

本が出た。人生の節（ふし）をいかに乗り切るか、特に女性には三五歳を締め切りとして自分のほんとうにしたいことを正直に自問すべきだと、事例を紹介している。プレジデント社刊Ⅰ・Ⅱ巻。

（4・4読売）

『交通遺母』の細腕奮闘記

交通遺母の会（坂本みゆき会長、会員三五〇〇）が事故防止の願いをこめ、生活の苦しみをつづった文集『赤いシグナル』を初めて発行した。

（4・5読売）

主婦の投稿誌『わいふ』

随筆・手紙・テーマ原稿と月に四〇通ぐらいが寄せられ原則的に没原稿なし。疑問の中で閉ざされ孤立している主婦が、書き、討論することで出口が見い出せればという。

隔月刊。（4・6朝日）

女性の戦争記録

女性ばかりの戦争体験手記『怒濤の母』が刊行された。京都の旅館主、笠原政江さん（六五）が全国に呼びかけて募った手記の第一巻。記述は実に克明でしかも鮮烈。

（4・10朝日）

繰り返すな、この苦しみ

スモン被害者の苦しみと被害の怖さをつづった本『ひとりで歩きたい』（福岡県スモンの会編、西日本新聞者刊）が出版された。憤りや悲しみを淡々と語っているだけに被害者の悔しさ悲しさが強く伝わる。

（4・16西日本）

『日本語の裏方』

寿岳章子著。著者は男たちが特権的な団結の核としてか

たことを発見し、ことわざがときに生む差別の残酷さに対して警告し、抗議する。講談社、一一〇〇円。

（4・17読売）

危うい生活に耐える女たち

津島佑子著『歎びの島』。

一〇編のうち大半が、夫と別れたかあるいは別れようとしている女たちの、独立して生きようとし、だがどこかうろで寒々とした日常を描く。中央公論社、九五〇円。

（4・24読売、5・8朝日）

心のふるさとを見事に描く

『不思議な釣鐘』には著者が幼いころ母から聞いた語り口そのままを再録した民話一五話が収められている。いずれも土着性の強い民話で墨一色のさし絵がイメージを誘う不思議な魅力を持つ。構成は演劇的要素に富み、ゆたかな語

り口調が見事。茶の間に備えて親と子が表現読みして楽しみのひとときを持ってみたいかどうか。BOC出版、一八〇〇円。

（4・29毎日、5・7読売）

『なはをんな一代記』

沖繩に生まれ、強い意志で自己形成してきた著者の、波乱の過去をいきいきとした自伝。金城芳子著、沖繩タイムス社、一八五〇円。

（5・8朝日）

『あめゆきさんの歌』

『青轡』の異色評論家、山田わかの前半生の謎を全面的に解き明かし、底辺女性史のなかに位置づけたもの。山崎朋子著、文芸春秋、八五〇円。

（5・15読売）

『杉田久女ノート』

大正から昭和にかけて活躍

した九州・小倉の女流俳人杉田久女の「伝説」にゆがめられた生涯を実証的に追求しようとした試み。増田連著、裏山書房、三〇〇〇円。

(5・22朝日)

女が撮った七〇年代の女

ほんとうに美しい女とは強くのびやかな女。写真家の松本路子が七〇年代に出会った女たちの写真集『のびやかな女たち』をまとめた。話の特集、一七〇〇円。

(5・29朝日、6・20読売)

『マザー・ゲースと

三匹の子豚たち』

桐島洋子が三人の子を伴って米国東部のいなか町に一年間滞在した風変わりな「教育通信」。文芸春秋、八八〇円。

(6・5朝日)

敗戦体験の記録出版

敗戦期、学生だった旧東京

女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の卒業生が七月に「女学生たちの敗戦」を京都の出版社から刊行する。戦時中に故郷へ送った手紙・日記など記録を持ち寄り、やっと出版にこぎつけた。

(6・7朝日)

『すぐ役立つ女性の年金』

国井国長著。著者は年金の相談を業としている人。「女性を守る年金」という趣旨で書いたという。青年書館、八八〇円。

(6・9朝日)

『オトコの家庭経営』

ヨメとシュウトメの対立は現実にもドラマにも必ず登場する。それはみんな男のせいさ、と割り切る本。悩める亭主は傾聴して男性の權威を確立されよ。秋田誠一郎著、文化放送出版部、八八〇円。

(6・10読売)

『律令制女性史研究』

律令制下における女性を研究したもの。女性には男性に対するものとしてでなく女性自身の活動と歴史への貢献があることを立証した前人未到の書。須田春子著、千代田書房、六〇〇〇円。

(6・12朝日)

『花蔭の人』

太平洋戦争前のある時期、文壇随一の美貌をうたわれ、はなやかな人気作家の一人だった矢田津世子の評伝が出た。著者の近藤富枝さんは『本郷菊富士ホテル』に始まる「文壇資料もの」の筆者。

(6・12朝日)

女の差別、警鐘のレポート

丸岡秀子著『生ま身の論理』は、戦前の名著『日本農

村婦人問題』の現代版ともいうべき綿密な警鐘のレポートである。「一つ一つ身体の骨のふしぶしにたまっていく疑い」を、ひたむきに長い年月かけて確実に解こうとした所産が静かな説得となってひびいている。未来社、一八〇〇円。

(6・12読売)

『ドキュメント

女の百年―女の一生』

女にとって、この近代百年はどのような年月だったのか——編者もろさわようこは、この歴史を「閉ざされた女たち」の目でふりかえる。平凡社、一〇〇〇円。

(6・12読売ほか各紙)

『ある愛の旅路』

神戸在住の白系ロシア人、ポーラ・ネニスキスさんの、一行一行が涙にぬれ、血を吐く思いの自伝。筑摩書房、七

五〇円。(6・26読売)

残された者の手記——

『戦禍の語部』

戦争で無念の死をとげた死者たちを生き残った私たちの日常生活によりみがえらす書。時事通信社、一二〇〇円。

(6・27読売)

『婦人のあゆみ百年』

革新系の婦人団体や労組婦人部の連合体である日本婦人団体連合会が、ことし創立二五周年を迎えた記念事業の一つとして、編集・出版。

(6・27読売)

主婦の心境など本音つづる

女たちに「互いに気になることを書こう」と呼びかけた小冊子『このさい』二号が出た。長野市の二、三〇代の女性たちが中心になって作製。

(7・5信毎)

『子どもの自殺』『子殺し』

精神病理学者の稲村博氏が

『子どもの自殺』『子殺し』を同時に刊行した。子を殺す親の特徴として「一般に考えられるような非情で残酷なタイプではない。むしろ弱々しくよるべないような場合が多い」など、読み過ごせない事実や指摘を共に多く含んでいる。東京大学出版会、九〇〇円、と誠信書房、二〇〇〇円。(7・31毎日)

自由な女の生体の悲鳴

津島佑子の新作『寵児』

は、拘束をきらって孤独に生きる女」をテーマにしているが、女主人公の生体の挙げる悲鳴のような響きが全編にこだましている。河出書房新社、九八〇円。

(8・14読売ほか各紙)

『絹ひとすじの青春』

富岡日記にみる日本の近代』

「富岡日記」をもとに、富岡

に集まってきた若い模範工女たちの生態をあとろかぎり追った、女性史を考えるうえで見逃せない書。上條宏之著、日本放送出版協会、六五〇円。(8・21毎日)

人

第五二回オール読物新人賞

五二歳のコピーライター黒沢いづ子氏が『かべちょう』で受賞。(4・1読売)

第二一回群像新人賞

小説部門で一八歳の中沢けいさんが受賞。受賞作は『海を感じる時』——高校生男女

の恋愛を描いた作品。

(4・4、5・16読売)

カエルを変える研究

広島大学教授西岡みどりさんは、カエルを使って「発生学と遺伝学の境界を埋める」研究に従事。アメリカ・ミシガン大が「追いつけ追い越せ」の目標にしているほどの学者。(4・5読売)

哲学で博士号を受けた

「スピノザ研究」二〇年の清水礼子さん(四二)。青学大助教授。「哲学は古くて実用的な学問です。本来、むづかしいくあつてはならない」

(4・8朝日)

女性で初の安井賞受賞

上條陽子さん(四一)。一七歳で絵描きを志して以来、他人の評価はどうであれプロを自認、同業の夫が描きかけ

の絵に手を入れたとき激しく抗議、以来夫も一人前に扱ってくれるようになった。多年

追い続けて来たテーマは、「生と死」。「形だけという絵はない。自分の感情が表現されていなければ」と語る。

(4・8 毎日)

『水戸天狗党』を書いた

田中真理子・松本直子さん。慶大文学部史学科でともに日本史を専攻。半年間、天狗党の長い彷徨の跡を取材旅行、「処刑された三五三人の無名の群像を歴史の舞台に登場させてみせたかった」

(4・10 読売)

婦人問題担当室新室長

赤松良子さん。二八年、女で二人だけ上級職試験に合格労働省入り。「日本の女はおとなしい。ワイワイさわがなければ」——二年後の世界婦

人会議に日本の婦人問題への取り組みを報告する。

(4・14 朝日)

吉川英治賞初めて女性に

吉川氏の唯一の弟子、杉本苑子さんが『滝沢馬琴』で受賞。

(4・14 各紙)

日本初のシュバイツァー賞

日本動物福祉協会職員の武藤洋子さん(三五)。アメリカ動物福祉協会から日本初の「シュバイツァー・メダル」を贈られた。東大病院で犬を相手に実験研究を続けて八年、その慈悲心を評価されて。

(4・15 読売)

婦人問題に取り組み

河野貴代美さん(三九)。カウンセラーとしてのアメリカでの体験から「アメリカには女性のためのカウンセリングセンターがかなりある。彼

らが個としての生き方に迷い、根本的問い直しをしようとしているのを感じる。日本の女性は性別役割を演じ分けるより、殻から出て自立し、もっと不変でトータルなつぎあいを持つべき」と語る。

(4・29 徳島)

女ひとり寮の火守る

小石原高取焼一二代陶工、福島コマキさん(七〇)は戦前戦後を通じて消えかけた小石原皿山の窯の火を守り続けた、たった一人の女陶工。「陶工の鬼」といわれた父、佐七さんの遺志をついで一人息子の一三代高取陶工の作陶にきびしい目を光らせている。

(5・4 西日本)

動物に学ぶ子育て

獣医学博士で東京都多摩動物園勤務の増井光子さんは、動物界の子育て論『動物の親

は子をどう育てるか』を著わした。「動物の例をただちにヒトにあてはめるのは危険ですが、動物たちから教ええられることはたくさんあります」

(5・8 朝日)

第四回東京市政調査会藤田賞

『公害・労災・職業病年表』で東大助手飯島伸子さんが受賞。

(5・16 朝日)

山岳パトロール隊の紅一点

自然公園保護管理員の白沢千鶴子さん(二四)。山が大好きで、精薄児施設の保母さんから転身。国立公園・八幡平で、山小屋の掃除や重労働に励む。

(5・22 読売)

出羽三山の紅一点

羽黒三山神社で神主修行に励む伊藤允子さん(一八)。午前五時半起床、白衣をきち

つと着て社殿の掃除、七時間の授業。(5・28読売)

世界一の力持ちママさん

六井春子さん(二九)と吉田寿子さん(二六)。全日本パワーリフティング選手権大会で世界最高記録をマーク。(5・29、6・25読売)

『ほつまつたへ』を研究

桑原ゆき子さん(四一)は国鉄・伊万里駅売店に勤務のかたわら、中国から漢字が入ってくる以前の神代文字の一つ「ほつま文字」で書かれた神代から日本武尊の崩御までの五七調の長歌形式、約一万行に及ぶ叙事詩『ほつまつたへ』を研究、伊万里市内の神社で「ほつま文字」も発見。(5・31西日本)

蛇笏賞受賞の九一歳

句集『月下美人』で受賞し

た阿部みどり女さん。父母・夫・子に先立たれ自身は大病、深い悲しみを秘めた人生だ。が、「病気さえも喜びに変える、これが俳句です」と静か。(6・7、30読売)

第八回赤い鳥文学賞

『夜のかげぼうし』で宮川ひろ子さんが受賞。(6・13朝日)

主婦の仕事とドラマ作り

「夫婦」を書いたシナリオ・ライターの橋田寿賀子さん(四九)。台所のテーブルを書斎代わりに人気番組を書き続けている。(6・15読売)

栄養学研究ひとすじ

医学博士の香川綾さん。病気の予防は栄養にあることを発見、昭和八年、夫君とともに「家庭食栄養研究会」を設立、料理カードやカップ・ス

プーンを使う料理計量化の路線を確立した。女子栄養大などの女子教育にも貢献。「やる気さえあれば道は開けます」(6・17読売)

さわやかスポーツウイメン

パワーリフティングで世界最高記録を出した六井春子さん、「なぐるのが魅力」という日本初の女性プロボクサー高築正子さん、サーキット全日本選手権で四八人の男を尻目に優勝の小沼賀代子さん、女子柔道日本一を争う永井多恵子さん、平均年齢二〇歳のサッカーチーム、平均三五歳のママさんラグビーチーム等、胸のすくようなスポーツウイメンたち。(6・21・7・8朝日)

昭和のアナキスト

昭和初期に農村コミュニティの理想をにかけて活動した八木

秋子さん(八三)。著作集『近代のへ負』を背負う女』を出版。周囲のすべてより反逆者と罵られつつもなおかつ人類としての正しき意志に生きた鮮烈な魂の軌跡を書いた。(6・26朝日)

日本女医会会長

三神美和さん(七四)。東京女子医大卒業後、大学に残って研究生活。今も週一回一〇〇人の外来を治療する。医学と「結婚」した一生だが、おだやかそのものの人。(6・26読売)

会議通訳歴二〇年

佐野王知子さん(三五)。ニューヨークで開かれた国連軍縮総会で田中里子さんの演説を同時通訳。「米ソが第三

世界から追いつめられ、世界は変わりつつある」

(6・27朝日)

野球にとりつかれた青春

飯村もと子さん (三〇)。

女子マナのハシリとして三九—四〇年、学芸大付属で活躍、東大医学部在学中は六大学野球の場内アナウンスのアルバイト。ついに大学を中退、今やこの道でひっぱりだこ。(6・29読売)

江戸川乱歩賞

栗本薫さん (二五) の『はくらの時代』に。栗本さんは中島梓の名で「群像・評論部門 新人文文学賞」を去年受賞した人。(6・30各紙)

この道一筋八三歳の女医

名古屋市内で小児科耳鼻科を開業しているおばあちゃん先生、田辺かすみさんは、患者さんのいるかぎり体が動かなくなるまで診療を続けると張り切っている。

(6・30中日)

『奄美女性誌』を書く

昭和三〇年から約二〇年にわたる「遙かなる奄美」の記録を出版した長田須磨さん (七六)。柳田国男氏の「女性民俗学研究会」に参加、学問の世界とは縁のなかった一主婦が、自分自身のうちに息づく奄美の民俗と方言の探究にうちこんで行った。(7・3朝日)

平和と相互理解賞

大ぜいのブルガリア青年の親がわりをつとめブルガリア政府から受賞した宮古みどりさん (五五)。一五歳で女学校を中退、新聞記者・ラジオのレポーター・テレビの司会者をつとめた。(7・4朝日)

長谷川伸賞を受賞

松竹大谷図書館(演劇・映画専門) 主事の小河明子さん (四四)。開館して二〇年、

「珍しい資料や本が増えるたびに、かわいいこともを預かったような気がするんです」(7・13読売)

子連れで女性学会に出席

国際女性学会・米側リーダーのメリー・ホワイトさん (三七)。学会に三か月の坊やを連れて来日。「心理学者の夫は私にもっとプロになればと励ます。私は彼にもっと家事を励しめと励ます」「男も男の論理を捨てて人間らしく生き、労働も女とわちあいなさい。女性学、即ち、男性学」(7・22読売)

アルゼンチンの助産婦

半年前、東京から一人でやってきた藤原美幸さん (三〇)。午前八時、アパートを

出て健診センターへ出勤、日系社会になくってはならない存在に。(7・23読売)

「岩波ホール」の総支配人

高野悦子さん (四九)。「岩波ホール」を一〇年間でサロンの文化の拠点に作り上げた。「のめり込んじやうタチだから二つのことはできない」と恋を捨てて仕事一筋。(8・2読売)

女性向けコンピュータ読本

をまとめた伊勢谷かよ子さん (二七)。「コンピュータは人間が動かすもの」という基本を知り、主婦も抵抗力を持ってもらおうと、富士通勤務の女性社員三〇人のチームで編集、九月に刊行する。(8・4朝日)

バレエ大会で総理杯

熊本砂取クラブ主将竹原敦

子さん(四一)。長女を生んでからバレエを始め、全参加チームで最高年齢のチームをまとめて優勝。「特別な練習はしませんし、できません。週二回それも夜一時間半ぐらい」という共働きママ。

(8・5朝日)

異国暮らしの手引書作り

ノイローゼになりがちな在外主婦のために『マニラ生活案内』を作った吉田よし子さん(四五)。「流産!」というつもりが「中絶してくれ」と受け取られたりする言葉の不自由に加え、現地食品の選び方も知らない。これではストレスもたまると手引書を作ったところ大好評、たちまち三刷を重ねた。「いろんな国に行ってる主婦たちが、それぞれの生活の知恵を少しずつでもためていけば、後から来る人に役立つ」と吉田さん。

(8・6朝日)

金芝河の上映活動を進める

画家、富山妙子さん(五六)。鉾山を画き続けていたが、不況で移民する人々を追って南米へ、以後第三世界に関心を持ち、人種差別・貧困・軍市政権からの解放、女性解放に熱中。

(8・8朝日)

女子柔道界の実力者

全日本女子柔道六五キロ以下級に優勝の笹原美智子さん。「少々男っぽくなっても強くなりたい」

(8・9毎日)

失われる村を撮影

「全村水没」の岐阜県・徳山村で村民の写真を撮り続ける増山たづ子さん(六一)。「御国のために」と出征した夫は終戦直前ビルマで行方不明。

一男一女を育て上げ、いま公共のためという「大義」に消滅させられつつある村で記録をとり続けている。「ダムは自然を壊してしまえばかりか人の心もだめにしてしまう」と。

(8・10朝日)

第八回モービル音楽賞

長唄の歌方、杵屋佐登代さん(六七)が受賞。本賞と副賞八五万円を受けた。「長唄界で女性の地位を拡大向上させた」が授賞理由。「長唄は『男の三味線に男の唄』だったが女も唄うようになり、私がそのさきがけ」。独身、十は若く見える人。

(8・12朝日)

大臣賞よりも法律がほしい

心身障害児福祉への貢献で厚生大臣賞を受けた宮城まり子さん。「以前受賞したときは賞よりお金がほしいと思っ

たけど、いまは障害児を守る法律がほしい」

(8・12朝日)

森村桂さんが雑誌発刊

「もうひとつの学校」の雑誌版『スंक・チェビ』。大野晋氏の巻頭激励文、倉橋由美子さんとの編集長対談、ケイキ作り教室など内容は盛りだくさん。「スंक・チェビ」とはラテン語で「今はじまる」という意味。「この雑誌は私自身にとっても、今後の生き方を探すうえでの最初のきっかけだと考えています」

(8・19毎日)

漢字読み書き大会に優勝

高校国語教師の飯田多美さん。写植機メーカー主催のこの大会で、女性の優勝者は初めて。出場目的は「趣味と老化防止」

(8・25朝日)

女性神職、修業中

全寮制で入学金・授業料なし。ただし「神職になるのが前提」の「熱田神宮学院」。この四月入学した二八期生一人中紅一点の青木由記子さん(二〇)。巫子ならともかく女の神主とは、といぶかる向きもあるが、神主の息子も後を継がなくなった昨今、「男子に限る」は過去のこと。青木さんは十数社の宮司を兼任する昭三さんの一人娘。「わりあい素直に受け止めて」この道へ。(8・26朝日)

九州女流画家展の推進力

福岡市で第五回女流画家展が開かれる。この推進力となったのは田部光子さん(四五)。芸術に性差はないとしても女性でなければ理解しにくい感覚もあるはず。女性同士が自由に創造し、作品を競

い、女の美術を盛り上げた。結婚や育児のため制作から遠ざかっても、再び開始するときお互い励ましあいたい、と二人の女流画家を結集。(8・28西日本)

五年ぶりの復職

アナウンサーに復帰の黒川千鶴さん。出産を理由に仕事をやめた申し開きを自分にしていたりしろめたさをふっ切った。「日だまりで寝そべっているネコはイヤ。どんなに愛し合っている女だからという理由だけで女の側が仕事を捨てることはない」という彼女は「同居人」黒井千次氏が作家を目指し会社を辞めると申し出たとき積極的のOKした人。(8・29毎日)

「生活に生きる」歌作りを

労組の集会でよく歌われる「がんばろう」を作詞した森

田ヤエ子さん(五一)。「あの歌は三池闘争のただ中で作詞した。日本の歌謡曲じゃ、女はたいてい泣くか甘えるか男にこびるかで、私は好かん。あの歌の本意は「女のこぶし」にあるとです」「女が生活の中から切実な声をあげてほしい。女が変われば世の中が変わる、という意味を考え直してみにゃ」(8・30西日本)

「逝去」

野宮初枝さん 元日本キリスト教婦人矯風会理事。二日、脳出血のため。八〇歳。

(4・3読売)

五島美代子さん 一五日、胃カイヨウと肝硬変で。七九歳。母心を歌った歌人。

(4・15各紙)

網野菊さん 十五日、東京の病院で、じん不全のため。一貫して私小説を書き一人暮ら

し三五年、自分で生きようという気迫を保ち続けた作家。(5・16、5・20、5・30朝日)

杉野芳子さん 日本洋裁界の草分け。二四日、老衰のため。(7・24各紙)

塩谷アイさん 北区選出の共産党前都議。新日本婦人の会東京都本部会長。一日、脳出血のため。六六歳。(8・2読売)

意見・投書

女性教頭もっと増えて

長野県五人目の女性教頭誕生に拍手。ただ五人のうち既婚者は一人だけと聞いて驚く。家庭を持つ女性をまだまだ差別しているのではないか。

(松本みどり・主婦・五〇歳)

(4・5 信毎)

女子中・高生の外泊

〔賛成派〕好奇心がさかんなこの年ごろにダメだと言われればますますしたくなる(女高生・一七歳)。

〔反対派〕子が口実を設けて外泊しようとするとは、すでに親子間の信頼が崩れかかっている(主婦・六五歳)。

(4・6 朝日)

なぜ「婦人の日」反対か

婦人議員が「婦人の日」に反対している理由は、第一に裏で人形業界が動いていること。第二に男の子と女の子を分けることになって本来の趣旨に逆行する。第三に私たちは「婦人の日」の要求を全然していない。かつて「国民の祝日」制定論議の折に四月一日婦人参政権の日を「婦人の日」という主張があった

ことは事実だが、今は否定している。

(田中寿美子・参議院議員)

(4・8 朝日)

多様な女性の社会参加

職業に就くことだけが女性の自立や社会参加ではない。各地にできている女性史研究会や、「女性学」研究は、社会の仕組みと関連づけながら、女性の置かれていいる立場を明確にしてゆこうとしている。女性の自立と社会参加の道をさぐる動きとして注目したい。(4・10 朝日・社説)

婦人の社会参加を阻むもの

婦人週間が発足してから三〇年、日本の社会は大きく変容したが、これに比べて婦人の歩みはまだまだとどしい。婦人少年局の『男女平等と社会慣習』を見ても古い慣習がいかにびこっているか、改

めて驚かされる。ただ女性自身も、差別改善の意志や社会参加に積極的な姿勢を持ち、連帯して現状を打開する団結力を示さない限り前進は容易ではない。実り豊かな運動を展開するよう期待したい。

(4・10 毎日・社説)

差別の「抜け道」をふさげ

労基法三条に「性別」を加える積極策があってもよからう。それにしても、労組は男女差別に鈍感過ぎはしないか。男女同一賃金が男子の賃金水準を低め、女子の職場の進出は男子の就職機会を狭めるなどという観念があるとするれば、恥すべきことでは。

(4・10 読売・社説)

「人間の尊厳」こそ女性解放

「男の立身出世主義のようなかたちの平等とか向上は目指してほしくない」「女のくさ

ったのか、女のでる幕じやないとかいう天の半分を汚す言葉も追放したい」と山川菊栄さんは語る。

(4・10 信毎)

逆方向で安定

「今日の女子学生の多くは停滯あるいは後退しているというか、甘えと化粧に精を出し女の特権を利用することで安住の地を得ようとしている。二〇年前に比べて、逆方向に向かって安定しているのではないだろうか」「私の声」のついでで助言者の信大助教授・北原龍二氏。

(4・10 信毎)

女高生のお化粧

〔賛成派〕規則規則でしばられた学校への反発が、早くお化粧をはじめた原因でした(学生・一九歳)。
お化粧は非行につながると

か、大人たちがさも大問題と
ささやきあうところ困った
ことです（女高生・一八
歳）。

〔反対派〕ティーンエージャ
ーのお化粧に反対。化粧しな
い方が美しいから（教員・五
九歳）。

高校って勉強する所ではない
かしら（女高生・一五歳）。

（4・13朝日）
女のグチを政治に

あきらめとグチばかりの生
活から脱却して、どんなこと
でも近隣の人と話し合い政治
に結びつけていこう。

（進藤ふじ・主婦・四八歳）
（4・15読売）

共学に「女の青春」なし

「女のくせに」と束縛ばかり
される男女共学の中の女生
徒。女子がソフトボール部を
つくりたいと言えは、男子の

野球部の使用のため場所がな
いと言われ、はやばやと花嫁
修業を強いられる。私は男女
別学で「女の青春」を模索し
てみたい。（山中美和子・高
校生・一六歳）

（4・15朝日）

共学にも青春あり

抑圧をはね返す努力をして
みるのも「女の青春」。男女
別学に逃避したところで「女
の青春」は見い出せぬ。

（原純子・高校生・一六歳）
（4・23朝日）

中高年者採用、大成功

ストロボメーカーの佐藤光
機の発展は中高年者の積極活
用にある。六〇歳以上の中途
採用者もすべて正社員扱い。
高度成長時代の人手不足が発
端だったが、予想以上の働き
に、いまは六〇歳の人やめ
たら六〇歳の人を補充と積極

的。高齢者雇用奨励金の年齢
制限（上限六五歳）の撤廃や
年金の拡充を政府に望む。
（佐藤美代・佐藤光機取締役）

（4・16朝日）

彼が希望した現代妻の条件

一に家事万端怠りなく。
二に毎朝「ぼくが起きる前
に化粧していてほしい」

三に夫を助けるために内職
し、ただし、外働きして夫よ

り優位にたつことは禁ず。

四に出産にいつでも応じら
れるように体を鍛えておく。

五に人間関係のいざこざを
起こさないように特に気をつか
う。

彼が求める家事ロボットに
なりたくなかったので、結納
まですませた婚約を解消しま
した。

（平坂郁子・学生・二五歳）

（4・19朝日）

現代妻の条件に拍手

婚約解消したお嬢さん、年
こそ違え、同性としてびっく
りました。私は当たり前の
ことだと思うのです。

男性の方へ。近ごろ珍しい
と申しては失礼ですが、この
くらい筋の通ったことをはっ
きりおっしゃる勇氣をおもち
のあなたに敬服しました。

（古賀君江・主婦・五三歳）
（4・28朝日）

現代妻の条件に反対

男性が望む現代妻の要求を
当然とする女性の意見に恐
怖。なぜ女性の心と人生を無
視した意見をいなければならないのか。

（山本明子・学生・二一歳）

（5・5朝日）

私たちは、男性と同様さま
ざまな人間的欲求を持った存
在ですから、一個人の人間と

して認められて生きたほうが
ずつといひ。

(斎藤敏子・学生・二二歳)

(5・5朝日)

若い女から「現代夫」の条
件を言えば、

一、身長一七〇センチ以上。

二、一流大学卒。

三、一流企業勤務。

四、家事を分担する人。

五、親とは別居。

になる。自分に都合のいいこ
とのみを主張している点では
「現代妻の条件」と同じでナ
ンセンス。条件をあげるのは
無意味だが、しいて言え、
「自分の意見を持ち、相手の
意見も尊重する人」がよい。

(橋美江・学生・二〇歳)

(5・16朝日)

家計簿で春闘を

夫は職場だけで家庭や地域
の問題は知ろうともせず、妻
は夫の会社の春闘に無関心。

だから本当に生活に根ざした
要求がなかなか出てこない。

労組は妻の家計簿を武器に春
闘の団交をしては。(清水鳩
子・主婦連事務局長)

(4・20朝日)

もっと婦人の声聞いて

福岡市郊外のある町の婦人
週間のつどいに参加した。会
は女性のみの実行委によるプ
ログラムで進み、各層からの

婦人が意見を述べた。どの人
も「初めてのことで」と言い
つつも、生半可な選挙演説な
ど足元にも及ばぬ内容と熱気
であった。ある代表は「日本
は黒字だと世界中からたたか
れているのに、どうして私た
ち日本人の生活がこんなに苦
しいのか」と顔をまっかにし
て叫んだ。為政者は、この婦
人の声を受けてほしい。

(古賀幸吉・公務員・五六歳)

(4・24西日本)

浮気幫助する男の連帯

妻もつ男性の浮気・姦通・
恋愛沙汰について、男たちは
連帯しているように思える。

企業のトップの人間の情事に
秘書課が一枚かんでいたとい
う話もあるが、どうしてもし
たいなら、個人的にやっても
らいたい。

(4・28信毎「女の机」)

ストに泣く時給生活者

やっと復帰した職場にスト
で行けず。老父母をかかえて
その日暮しの身にとって、日
給の二一〇〇円がもらえず途
方に暮れる。この責任は誰が
もつてくれるのか。(山地の
ぶ子・未亡人・六〇歳)

(4・28朝日)

P T A 役員、男ばかり

P T A の九九%は女性なの
に、長と名の付くのはほとん

ど男性。会則に会長は男性と
定めているものもある。P T
A の会合ぐらいいは自分たちの
手でやってみよう。

(玉本尚子・農業・三〇歳)

(4・28信毎)

子のためにも主婦は家庭に

チャネル争いで妹を刺殺
した事件の家は共稼ぎだった
という。近頃、子供に手がか
からなくなると勤めに出る主
婦が増えているが、失うもの
のいかに大であるかをこの際
考える必要がある。

(関川栄子・主婦・四二歳)

(4・28朝日)

同情よぶ姑殺し

病人ではあるが少し歩けた
り看護する家族がいたりすれ
ばホームヘルパーの派遣や手
当金にあずかれないケースが
予想外に多い。名古屋で起き
た評判の孝行嫁による姑殺し

もこうした行政の谷間で起きた。谷間を埋める努力を行政に望むが、悩める家庭側も一人で苦勞を背負わずに、もっと率直に周囲に援助を求めてもいいのではないか。

(5・1朝日「今日の問題」)

羨ましい外国の看護婦

米国の看護婦には佐官やジエネラルの位の人もあるし、ロンドン市内にはりっぱなナースの銅像が建っている。我が国のように看護婦の地位を正しく評価できない社会は、文明国にはほど遠い。(太田成美・団体職員・五七歳)

(5・9朝日)

息子の家庭科

風呂たぎ、給食のフキンの洗たく、朝刊とり、掃除とはりきる息子に、我が子の運針の様ばかり想像していた私は、裁縫ばかりが家庭科でない

ことを知らされた。長続きするようにと祖母と楽しく話した。

(山田伊都子・主婦・三八歳)

(5・9朝日)

家事労働の経済的評価は主婦の復権になるか

一九六〇年代に論争的であった家事労働の経済的評価が、最近主婦の側から求められている。

家事や育児を社会的に評価することは必要だが、それを金銭に置き換えることにどれほどの意味や効果があるだろうか。「夫が毎日元気で働けるのは私が家庭を守っているからだ。だから月給の半分は私のものだ」という主婦の誇りと満足感は、いくつかの仮定の上に組み立てられた虚構にすぎない。主婦の存在価値を家事労働でしか評価できないとしたら、病気などのため

家事のできない妻は全く無価値ということになる。家事労働の経済的評価は、一見主婦の復権のようにみえるが、「こんなに価値ある仕事をしているなら、わざわざ外に働きに出なくても」という気分を生み出す恐れがある。人間にとって働くことは権利であるとともに義務でもある。

(柚井孝子・お茶大助教授)

(5・10西日本)

働く母を悪者にするな

「チャネル争い事件」を例に、主婦が勤めに出るのを非難する声は問題のすりかえ。子ども同士の残虐な事件は大人たちの文化の貧困さの縮図であり、その親だけの影響ではない。共働きや母子家庭の保育園育ちにたくましい思いやりのある子どもが多いことは統計でも明らか。

(飯田啓子・塾講師・四二歳)

(5・11朝日)
たたえられる母性とは

かつて母親はわが子の男児にさえかしくものとされてきた。こうした風土を改め、行動や言葉で母に「ありがとう」と言える今は良き時代だ。「母の日」が今年で三〇回を数えるまでに根をはったのも、決して意味がないわけではない。

(5・14読売・社説)

女が理数系でなぜ悪い

「君は女の子なのになぜ理数系を専攻するの? おかしいな」と男子同級生。女性蔑視の発言は教室に満ち満ちているが、今度のは同じコースを目指す「仲間」からの発言であるだけに、がく然。

(高校生・一七歳)

(5・23朝日)

女子大新設提言に疑問

長野県下には四年制女子大がない。他県に娘をやる親は経済的負担が多いため女子大新設の提言が出されたが、なぜあえて女子大をつくらねばならないのか。女子大の今日的使命は終わっている。

(高松一夫・教員・五〇歳)

(5・27信毎)

男性族の不浄消毒こそ必要

“女は不浄”とは、女性か男性をマヒさす魔力を秘めているから男たちはそれを避け、不浄だなどと言ったこと。それに由来するに違いない。そんなバカげたことを言っているより、政界や財界、あらゆる男性族の不浄を大消毒したほうがよい。

(三谷宏道・元教員・七二歳)

(5・28朝日)

NHKの「夫婦」大反響

夫婦・親子の人間関係は、日に日に新しいものにしてゆかないと、とんだところにはまりこむことを示した。

(5・28信毎「女の机」)

老後の夫婦のあり方を考えるには絶好の材料。「趣味もあるし友達もいっぱいいるから、あの子供べつたりにはならないわよ」と言いつつ、内心ギクリ。

(江川洋子・主婦)

(6・5読売)

会社大事に勤めた夫、子のために自分を殺して生きた私。共通の話題があるはずがない。

(狩野雪江・主婦・六〇歳)

(6・15朝日)

「夫婦」は日本家族の深層をいろいろな角度から見事に掘り起こした。

第一に子育てを終わった夫

婦の結びつきの弱さ。日本の夫婦は子供と戸籍でしかつながっていないという外人の悪口が証明された。

第二は母親の男子執着。

第三は結婚した子供は夫方より妻方に近づくというこ

と、つまり直系制親子同居論への痛撃である。六五歳以上の老人の七六%が子と同居し、この傾向は一〇年たっても変わらないと予測していた私は、にわかに自信をなくした。

(湯沢雅彦・家族関係学)

(7・2朝日、7・4中日)

“お転婆”の変遷

かつて日本では女の子はしとやかに育てられ、映画や芝居で言いたいことをボンボン言うのは水商売の女にきまっていたが、共に悲しい運命に泣きくれるのだった。

大正初期はイタリア映画の

全盛期だったがヒロインたちは男たちの前にすくくと立つて威厳とやさしさを示した。

第一次大戦後は米映画の時代になるが、ハッラツとしたお転婆ぶりで人気をよんだのがメリー・ピックフォードである。お転婆という言葉が嫁のもらい手がなくなるといいう意味からチャールミングで好ましいイメージに変わるために彼女が与えた影響は大きい。

(佐藤忠男・評論家)

(6・6朝日)

女子高“甘ちゃん集団”論

私の高校は県下一、二の名門女子高だが“甘ちゃん集団”にすぎず、男子校と同レベルで入学した生徒も卒業時には格段の差がつく。就職でも進学でも女の人生は手抜きしても通用するからだ。ストの日、本校の欠席者は八八人、男子校では七人、「長男

を学校に送るので娘は休ませる」という電話もあったという。社会の仕組みそのものの女の子の手抜き人生に力を貸している。

(山縣昌世・高校生・一六歳)

(6・6朝日)

時代錯誤の父権待望論

離婚・嫁姑問題は婦人誌の格好な話題だが、面白おかしくの編集態度が目立つ。評論すべきは、記事内容よりも編集態度。父権待望論も盛んだが、固定的な役割分担の発想から抜け切らない。父権復活をはやしたてるマスコミ群に、せっかく育ちかけた男女平等を封殺しようとする意図を感じられてならない。

(鈴木三郎・評論家)

(6・6、7・6社会新報)

正しい離婚率統計を

「六夫婦に一夫婦が離婚す

る」という統計は、全人口をそのまま母集団として算出する普通離婚率で、我が国のように人口構成の変動が著しい時代に適用するのは正しくない。夫婦総数あたりで算出した訂正離婚率をこそ採用すべき。昨年でも実際には、二三〇組の夫婦のうち離婚は一年に一組しかないのだから。

(湯沢雅彦・お茶大教授)

(6・8朝日)

農家の嫁にも変化

近所の若嫁さんが焼きまんにじゅう屋を開店するという。自分一人で計画し、親と亭主を説得し、借金・宅地変更手続き・大工の手配までした。決断と実行に拍手を送る。

(塚越アサ子・主婦・五三歳)

(6・8朝日)

婦人議員さんもっと発言を

婦人議員の声が全くなりこえ

ない。軍縮特別総会に対して、婦人議員たちは両院超党派で平和へのアピールをしてよかったのでは。

(丹治和子・助産婦・三三歳)

(6・9朝日)

結婚披露宴にくふうを

祝辞を従来の半分にとどめ、新郎と新婦が、同僚・友人・親類たちの中に五分ずつでも入って親しく歓談することとに当てるという改革はどうか。

(湯沢雅彦・お茶大教授)

(6・16読売)

型としての「女人禁制」

国技館の土俵に女が登場できないしきたりは、女性差別ということでなく、一つの型として守りつづけられてゆくことだろう。能楽の世界でも女を忌むしきたりが敵にあるがこの「女人禁制」はま

だほかの世界にもあるだろう。

(6・18信毎「女の机」)

なんじの価値に目ざむべし

趣味の手仕事作品を他人にゆずる場合、創った本人も、ゆずってもらう人も安くて当たり前という気持ちだ。内職といい、趣味の手仕事といい、パートといい、みな低賃金の、主婦的感覚だ。

(6・20信毎「女の机」)

婦人誌投稿詩の嘆き節

『婦人公論』の詩の選を八年続けているが、投稿の束からは孤独の響きばかりが聴える。新居に住んでも心の中に吹き抜けるすきま風こそ結婚の正体なのではあるまいか。高学歴社会だというのに、自我の形成はどうなっているのか。

(関根弘・詩人)

(6・22社会新報)

名前を呼んで

「おくさん」「お母さん」「おい」としか呼ばれぬ寂しさ。たまには私の名を呼んで。

(森岡美紀・主婦・三一歳)

(6・22朝日)

四通の手紙で社会が変わる

米大統領消費者問題特別補佐官エスター・ビーターソンさん(七二)は労働運動・市民権運動・女性運動と幅広い人だが「消費者の最も有力な武器の一つは手紙。四通まともれば変わりますよ」と講演。

(6・22読売)

わが身を守る防波堤を

人生相談に多いのは「だまされた」という相談。「結婚を前提としたのにしてくれない」「妻子と別れない」等。「つきあいのきつかけは」と相談員が聞くと、きまっ

「やさしくしてくれたから」とくる。「これと目をつけた女には男はやさしくするもんです。あなたはだまされたんです」こんな話を聞くと、学歴よりも教養をこそ身につけてほしいと思う。

(会社役員・男性・五九歳)

(6・25中日)

まかり通る女性差別定年制

雇用での男女差別が顕著だが、代表的なのが男女別定年制と女子のみの若年定年制、結婚・妊娠・出産退職制。労働省の調査でも、男女別定年制は一三、三〇〇社、うち四〇歳未満は一二〇〇社、結婚・妊娠・出産退職も一二〇〇社に達している。家計維持の責任者は男という社会通念が根強いめだが、女性の生活権をおびやかすものだ。女性や労組からの不満の声が少な

る。また職種別定年に対しては労働省は十分究明し、行政指導すべきだ。

(6・26毎日・社説)

男女差別は正に組合努力を

露骨な男女差別を制度化している企業がまだ多い。差別はもちろん許せないが、法的に争う余地もなく「無効」とされる差別制度が現実にかかり通ることが問題。それにしても労使が結ぶ労働協約で女子の若年定年制の二割近くが定められているのは理解できない。労働組合はもっと積極的に是正に取り組むべき。

(6・27朝日・社説)

小郡リコールその後

主婦が中心になった汚職議会のリコール成立は、出直し選挙におけるリコール派の落選のため、ムダなことだったと批判する人がある。しかし

全市民が政治にめざめ、その後も主婦たちは政治学級で勉強会を続けている。四年後には婦人議員も誕生してほしい。

(上滝照子・事務員・四八歳)

(6・27西日本)

つらい父親参観日

父親とともに物を作るような授業も組まれた父親参観日に身を切られる思いをしているのは自分だけだろうか。父親のいない子供、別居している子供は、どんな気持ちで過ごすのか、母親参観日はなくて、なぜ、父親参観日があるのか。

(松本紀子・銀行員・三七歳)

(6・28中日)

“人間”が欠落した家庭科

新高校学習指導要領案は女子のみ必修は現行通りで、しかも学習範囲は家庭生活に限

定され、消費者教育など社会に向かつて開かれていたはずの窓は、すっぽり閉ざされてしまった。美しい言葉を前面に立てて、身をかわしてしまつた要領案作成者たちを卑怯だと思う。

(半田たつ子・立教大講師)

(6・30読売)

女がボクではおかしいか

アタイやワチキなど特殊なものを除けば、私の一人称はワタシ一色だ。女だけ一つの一人称にとじこめられては息苦しくてかなわぬから、気分によつてボクと言うことにしたら、四歳の男の子が必死で抗議、今から「ねばならぬ」を詰め込まれているんだからつまらぬ男になるのは必定。

(中山千夏・タレント)

(7・1毎日)

中年は化粧より姿勢が大事

化粧品のセールの攻勢に

私は動けない。中年女性でも背すじをピンと伸ばして颯爽と歩く人を見ると、本当に美しいと思う。

(鈴木妙子・主婦・四一歳)

(7・3朝日)

主婦が書くということ

短篇小説をひたすら書き続けていた友の初作品集がやっと出来上がった。四人の子を持ち、こま切れの主婦の時間をつづり合わせて書き続けた彼女の作品を通して、小説という虚構の世界だからこそ女の本音に向きあえることを知った。同時に主婦が書くことは決して生やさしいものではないことも。彼女の四人の子は母である前に一人の人間として生きようとする彼女を通して、確かな個性を確立している。

(高橋ますみ・主婦)

(7・6中日)

変革を恐れない保育所教育

東京都足立区の「うめだ子供の家」という保育所を見学して驚嘆した。徹底したひとり立ちをしつけ、一斉教育をしないのがこの特徴だ。二歳児が自分でミルクをポットから注ぐ。四歳児が自発的に包丁でウサギに葉をきざんでやる。こういう個性的な教育環境からは、号令一下しり馬に乗る、という大勢順応型は育ちにくいのではないかと思う。

(7・7朝日・天声人語)

女の夢

結婚する男に結婚したら仕事をやめるかと問うと、たいていげんな顔をする。

女というだけで才能を生かすこととはばまれるという抗議や聞いを知られるたびに

男というだけで家庭に入ることとを許されないひともいるだろうと思ひめぐらす。

金持ちが樹下で昼寝している乞食に寝ていないで働け、そうすれば別荘で一日中昼寝ができるというところ、乞食は、別に働かなくてももう昼寝していますといったという話があるが、これからのフェミニズムについて考えさせる問題を提供していないだろうか。フェミニズム運動が先進国の歴史に対する見方に影響を与えるような新しい人間の哲学を示すかどうかは女でなくとも興味があわくはずである。

(富岡多恵子・作家)

(7・8中日)

里帰りと長男の嫁の立場論争

「同じ主婦である兄嫁の犠牲で、主婦業の骨休めをはかるといふ里帰りについての伝統。両親が年とるにつれ同居

している兄嫁さんの世話も増える。兄嫁さんの代わりに働いては？」

「田舎の土地や財産は兄が全部相続するのよ。どのみち私は放棄させられるんだから宿泊料をたっぷりと前払いしているつもりになってせいぜい利用しとかなくちや！」

(7・16 毎日)

老人の世話、なぜ女だけ

一人暮らしの実母が寝たきりになったが、やっと社会復帰して得た仕事を捨てての氣になれず、土・日に泊まりがけで看病に行き「働いている場合じゃないだろう」と周囲の非難を浴びた。週二日看護に通う兄嫁も、「世話が足りない」と皆から批判される。責められるのはいつも女だけだ。(設計技師・五二歳)

(7・17 毎日)

低い母子家庭の女子進学率

国立教育研究所では中学三年の対象者六千人を、同一人について三年おきに継続調査しているが、母子家庭の進学率はかなり低く、特に女子生徒に顕著である。奨学資金などの対策を期待したい。

(田村鍾次郎・教育心理学)

(7・18 読売)

試験管ベビーに思う

試験管ベビーの問題点として医学・倫理・未来の三つの側面が考えられる。

奇形児が生まれる可能性は当然ある。技術の適用基準が今後検討されなければならぬ。

夫婦間以外で使われたら：親子の法律問題に新しい課題が生まれた。社会的な対応を誤らないことが望まれる。

(7・26 毎日)

受精の操作を外でやり本当のお母さんのハラに戻して育てるから変な現象は起こるはずがない。日本でも試みられるであろう。(飯塚理八・慶大医学部教授)

技術が完全に開発されれば自然性交で生まれようと、試験管で生まれようとかわない。

(渡辺格・慶大医学部教授)

他人に頼まれ「子産み屋」をつくる可能性も。化け物人間がたくさんできてしまう。

(菊田昇・医師)

神の領域に人間が入り込むことに強い疑問を感じる。女性解放につながると思わぬ。

(青木やよひ・評論家)

人体実験とか、本来の人間関係を逸脱するものとか、不安がないわけではないが、そのへんは人間の本能が許さないのである。そこまで母性失格

はしないんじゃない。

(遠藤周作・作家)

(7・26 毎日)

そうまでして「わが子」を産まなければならぬものか。卵管閉そくは不妊の割たらず、大部分の不妊は原因不明。養子制度など、社会的な解決策を入れるべき。

(愛育病院院長・松山栄吉)

福音とばかりはいえない。医学がやらねばならぬことはほかにもたくさんある。

(医事評論家・水野肇)

自分の子の血に固執しても仕方がない。子供を育てることとで初めて親になるのでは。

(評論家・桐島洋子)

希望が出てきました。人工授精児に比べれば、ずっと合理的だと思えます。

(不妊治療中の女性(三三))

(7・26 朝日)

新しい生命に祝福を送る反面、医学はここまで来たかと

いう驚きと未来への不安を感じる。人類はいま避妊・中絶を当然のこととして怪しまない。そういう世相の中に出現した技術が社会をさらにかく乱する恐れがないとは誰も思えない。陪審員制度のような歯止め役が科学の進歩にも開かれてよい。

(7・27朝日・社説)

成功のかげに、人類の未来を脅かす落とし穴があるように思えてならない。人間にとって、生命の本質とは、科学的に分解され、説明される現象ではなく、科学的な手法での追求を許さない動かしがたい存在内容を持つものではないかと思う。

(7・27読売・社説)

試験管ベビー以前の重大事

英国の高校で起きた未婚の女性校長の妊娠事件は、生徒の熱烈な支持により寛大な措

置がとられたという。英国では、性差別を追放しようという気運が裁判官からハイティーンにまで強まっている。これは、試験管ベビー問題以前の大事なことかも知れない。

(7・31日経「春秋」)

嫁に付き添い料払いたい

もし、ある期間、嫁に看病してもらうようになれば、私は嫁に対して世間相場の半額でもいいから付き添い料を払いたい。嫁に話したら一笑に付されたが、決心は変えぬ。

(清瀬町子・七一歳)

(7・31毎日)

主婦の推せん入学に一考

立教・大阪外大に次ぎ福島大も三〇人の推せん入学を認めるというが、私のように二〇年前高卒の主婦の入学はむずかしい。在米五年間に二つの大学に籍を置いたが、これ

は大学で特に便宜をはかってくれたからだ。大学で準備クラスを設け、卒業した人は無条件に入れてくれるとよい。(ワット・隆子・主婦・三八歳)

(8・6朝日)

文化革命目指す「女性学」

女性学は単に女性の実態調査にとどまるものではない。女性が自らの手で差別をなくし自己を解放していく手段としての学問・教育であり、女性による社会改良・文化革命を目指すもので、特定の社会・文化のわくを越え比較的視点と各分野間をつなぐ視点

を必要とする新しい方法を用いる場合が多い。カリキュラムのたて方も各大学により多様、試験の廃止や自己表現を中心としたレポートなど、教える側と学ぶ側の差を極力なくしている。私の大学の聴講生は二〇〇名を超え、三、四

〇%が男性。職員は一週三時間、受講のための休暇がとれ、受講は勤務評定のプラスになる。(水田宗子・南カリフォルニア大・助教授)

(8・11朝日)

燃えろ！中年女性たち

女の一生で子育て後の人生のほうが長くなったのは歴史始まって以来のこと。いかに過ごすか、いまの中年女性にはお手本がないわけだ。もっと中年論が盛んになり中年を鼓舞するといいたいと思う。

(赤塚行雄・評論家)

(8・17)

子どものいない夫婦

夫いわく「お前は女ではなくカナダ」実母も「お前だけカタワに産んだ覚えはない」と責める。

(川崎・主婦・三二歳)

無事妊娠したという人には

しつととせん望の思い。悲喜劇は言いつくせません。体外授精に心が乱れます。

(東久留米・編集者・三七歳)

生後まもなく養子にされた。子のない悲しみを私で埋めようとしたエゴイズムに怒る。(横浜・主婦・二三歳)

産まない合意で結婚した。子にかかる費用と時間を互いの人生の充実に使いたい。

(東久留米・主婦・二六歳)

手術をしたがアウト。年とつたら寂しくなるか? そのときはケ・セラ・セラ。(古河・主婦・三五歳)(8・17朝日)

主婦代行役の制度化を

一家の主婦が病氣などで倒れた場合、家政婦を頼むのは家庭では無理である。世に役立ちたいと思いつながら機会のない主婦や家事体験者がだれでも登録できるボランティアのヘルパー制度を、ぜひ全

国的に誕生させてほしい。

(豊原恰子・主婦)

(8・24西日本)

ズバリ口にする今の女性

知人が若い女性の出産祝にかけつけタバコを吸おうとしたら「赤ちゃんに代わって嫌煙権を行使します」と言われた。目下からこんな言い方をされたことがなかったのでギョッとしたが、考えてみると

心中いまいまいしく思われながら黙っていられるよりもどれほどあと味がよいかわからないと思ひ返してペランダに出て喫煙したと語った。こんなふうにもを言い、それを素直に受け入れる女たちが生まれていることは、やはり女の成長を物語っていると思う。

(8・24信毎「女の机」)

家庭不在をついた経済学者

六〇年代初頭、家事労働は

価値を生むかという論争があった。マルクス経済学・近代経済学とも家事労働を経済学の外におき、今日もGNPには家事労働は計算されない。しかし夫婦が家庭で家事労働にはげればGNPは下がる。

高原須美子「主婦からみた日本経済論・殿方の日本経済論に挑戦する」(『週刊東洋経済』臨時増刊八月二五号)

はこれに切り込む。家事労働の総計は三五兆、男性のそれも含めると四四兆でGNPの四分の一に当たる。景気見通しが失敗を続けるのはここが原因と盲点を指摘している。

(8・29朝日「論壇時評」)

マイホーム主義のもろさ

親子心中があとを絶たない。最近の特徴は親が三、四〇代の若さであること、子を無理に道連れにしていることだ。彼らにはマイホームの幸

せが生きがいで、それは一見美しいが、構成分子の一つが何かで傷つくと核全体が生きる力を失う。個としての強さを欠いてはマイホームの幸福と安全は獲得されまい。

(8・31朝日「今日の問題」)

相談

妻ある男に言い寄られた

私は二五歳の独身女性。最近、既婚の中年男性に言い寄られ断わりました。中年の奥さん方よ、あなたの方の夫は性生活に不満なのです。今こそ目覚めるときです。セクシーにふるまうのに年齢制限はないのですから。

〔答〕彼が言い寄ってきたからと、なぜ彼の奥さんを責めるのでしょいか? 奥さんの

ほうも、もう夫に魅力を感じないので、気をひくつもりがないのかも知れませんよ。

(レン・ポッテル)

(4・2 読売)

兄が妻子置いて蒸発

三三歳、二子を持つ兄が浮気が発覚し蒸発、サラ金の領収書など出て心痛しています。きつい兄嫁との生活、さぞつらかったらうと同情はしますが。

「答」三三にもなる男のしりぬぐいは本人のすべきこと。兄嫁のために兄が不幸とあなただけが思っていることが事態を複雑にしませんか。兄嫁さんと女同士でじっくり話合ってください。

(沢地久枝)

(4・3 読売)

ギャンブル狂の夫に苦しむ

結婚以来一年、夫のギヤ

ンブル狂いに苦しめられております。二児を道連れに毎日死ぬことばかり考えております。

「答」あなたの苦勞は察するに余りありますが、そんな男のために一生を葬るなんてバカらしい、子供を道連れになどとは、親のエゴに過ぎない。警察の家事相談係か家裁の家事相談係に相談なさってみたら。

(小糸のぶ)

(4・5 読売)

いびり出されて離婚したが

姑にいびりだされ一項の要求も入れられぬまま強制離婚。せめて二児のうち一人でも取り戻せぬものか。

「答」離婚後二年以内であれば財産分与の請求が認められていますので、あわせて慰謝料請求の調停を家裁に申し立ててみては。親権者について

も知れないが、監護者を母親にとの申し立てをしてみることに。

(鍛冶千鶴子)
(4・7 読売)

公務員採用試験に差別?

大学の就職指導で人事院の人の公務員試験の話を聞いたところ「実際は女子にはあまり来て頂きたくない」と言われショックを受けました。国家公務員試験まで差別があるのですか(女子大生)。

「答」その話のタイプを聞いたところ「大卒女子は合格しても採用に結びつかない」「論文は女子が合格しないように課している。論文は思想が必要で女子は弱い」とあり、あなたが怒るのも無理はない。当の講師にただしたところ「女性に発奮してもらいたくて言った」とのことだが「女性を採用したくないのはどこでも本音」と某官庁本部

は語る。しかも以前に比べ試験はむずかしくなり、五二年度の競争率は上級職四〇倍、中級四四倍に對し女子は双方六二倍。合格しても敬遠され、高卒・大卒男子・大卒女子の順に採用されるが、文部省初の女性課長遠山敦子さんは「受験をあきらめるなら結局は人事院氏の見方を認めることになる」と警告している。

(神田俊甫記者)
(6・14 読売)

看護夫・保健夫は無理か

看護職や保健婦に男性は進出できませんか。

「答」医療チームは専門分化の傾向にあり、男性が特性を発揮する場も拡大されつつあります。男も看護士・準看護士への道が開かれています。が、五一年末の就業者四二万人中男は七六〇〇人、一・八%です。従来は精神科領域が

主でしたが、近年では手術室・人工透析室・救出部門等で活躍、今後も進出が期待されています。

保健婦・助産婦は現在には女性のみですが、今後検討したいと考えています。(都築公・厚生省医務局看護課長)
(6・18朝日)

CMの女性像に怒り心頭

女はすべて「主婦」ときめつけて、食事を作ったりシャツの漂白をするイメージでしか女を描いていないテレビCMを見ると、怒りで頭の中が燃えてしまいそう。

〔答〕世の中は変わりつつあります。黙ってないで事あるごとにあなたの言い分を主張することが世の中を変える第一歩。もっと良い方法は、女性を見下すような広告を出している製品は買わないこと。そしてポイコット運動の輪を

広げることです。

(レン・ポッテル)

(8・6読売)

夜の生活ができない

八か月の子を持つ二十九歳。やさしい夫ですが、産後、そばに来るだけで鳥ハダが立ちます。八年も愛しあった男の記憶のせいでしょうか。

〔答〕妊娠中夫婦生活をき

うのはまず一般的で、出産後もそれが残ることもありますし、それに該当すると考えられます。が同時に前の男の子を始末した罪悪感が男への憎しみと嫌悪になっているのでしょう。心のしこりをほぐしてください。
(平井富雄)

(8・10読売)

父子家庭で娘を育てたのに

五四歳、一一年前妻が家を出、二人の娘を育ててきましたが最近娘たちが母の家に

入りびたり、つらい思いです。

〔答〕離婚した妻はあなたには他人でもお子さんたちには母です。希望どおりにさせ、「再婚したら」という娘さんの意見を悪意にとらず考えては。
(小糸のぶ)

(8・12読売)

二七の娘が勝手に婚約

相手はスタイルの良い話上手、が定職がなく心配です。
〔答〕二七にもなった娘さんが「どうしても」と思いこんでいるのですから責任をとらせなさい。失敗は成功の母。

(小山いと子)

(8・15読売)

子を思い浮気妻に耐えるか

四一歳、結婚二年の男、妻の浮気を知り問いつめると「子どもを殺す」と口走る始末に悩んでいます。

〔答〕子のために耐えるという考え方はいつか不満をつのらせます。また浮気をするのではと不安なら別れるほかないでしょう。別れないのなら二度と口に出したり責めたりしないこと、それができないのなら別れるのが筋です。

(鍛冶千鶴子)

(8・16読売)

無精子症だった夫

見合い結婚三年目の妻。不妊の原因が夫の側にあると判明してから、ひそかに離婚を考えています。あと何年かで子供が産めなくなると思うと、いてもたってもいられぬ。

〔答〕かりに再婚したとして、子供に恵まれるかどうか、子供のいる家庭があなたに充足を与えてくれるかどうか。夫への愛情が消え、別れてやり直す勇氣があるのな

ら、子供の有無とは切り離して考えるべきです。

(沢地久枝)

(8・18読売)

妻子の虐待に悩む七〇歳

四年前身障者になって以来妻子に「働け、寝るのは許さない」と虐待されています。市の福祉課では「離婚せず老人ホームに入れ」と言いますが、それでは保険金は妻のもの、と思うと死にきれません。

〔答〕人間は自分のことはたなにあげ相手の欠点をあげつらうものです。まず、あなたの代わりに働いている奥さんに感謝して接してみたら。それでもだめなら福祉事務所でもう一度相談を。

(戸川エマ)

(8・21読売)

定年前に技術講習受けたい

第二の人生に備えて定年前に資格なり技術を身につけておきたいのですが。

〔答〕定年退職予定者に受講手当などが出る定年退職前職業講習という制度があります。事業主を通じて管轄の職安に申し込めば様々な職種が無料で受講できます。

(8・21読売)

事件

息子と遊ぼうと無理して急死

心臓病の持病がある母親(三〇)が長男(六)と夜の公園でなわ跳びをしているうち急死した。数年前に離婚、昼間勤めに出ているため息子と遊んでやれないのを悩んでいた。二三日、佐世保で。

(6・25西日本)

万引きなんと三割もが主婦

名古屋市昭和署の一―六月万引き数は一一九名、うち三四％が一四―二〇代の女性。職業は主婦が最多で三一％。

(7・14中日)

急増する女子非行

愛知県高教組が出した教育白書によると、この四年間、男子の非行が横ばいなのに比べ、女子は二・八倍も増加。内容は万引が多く、異性交遊・エスケープと続く。

(7・25中日)

ふえた“覚せい剤主婦”

警察庁発表によると上半期の覚せい剤の検挙者八六六三人中主婦は三〇九人で昨年の四五％増。動機はセックスが六〇％。

(7・30毎日・読売・日経)

〔女の犯罪〕

二〇日、八戸市で小六の少女が級友の祖母を襲い一万円を強奪。

(4・23朝日)

大牟田市の主婦の間に大がかりな頼母子講を無許可で開いていた主婦ら女性四人(五〇、四三、四二、三九)が逮捕された。被害者一三四人、被害総額二億七千万円。動かした金は約一〇億。

(5・5西日本)

親しくなった社長から交際料五億円を恐かつして取った女子大生(二〇)が逮捕された。暴力団と組んだ犯行。

(5・7読売)

めぐりでサラ金営業、借金返済に困る主婦らに「体で払え」と売春を勧めていた女(四九)が、二二日逮捕された。五一年春頃から六人に延べ三〇回の売春を強要、貸金を取り立てていた。

(5・22徳島)

子連れで三七件、六〇万円のスリを続けていた熊本市の主婦(三五)が福岡署に逮捕された。「子供を連れておればあやしまれないし、犯行がバレても謝まれば許してもらえ」と犯行のときはいつも長女(五)を連れ歩いていた。

(5・31西日本)

京都府の御牧農協貯金係S(二八)が一億円の使い込みで逮捕された。夫の事業資金に頼まれ、六年がかりで。

(6・3各紙)

町田市のM女子高で自習時間に集団リンチしていたことが判明。私立女子高の荒廃は最近目立っている。

(6・16読売)

情報紙に中傷記事を書き五千万円で買えと脅していた女出版社長(四四)が逮捕された。女性初のブラック・ジャーナリスト。

(6・23朝日、7・17読売)

住友銀行十三支店長代理(四八)が一億円(毎日)——二億円(読売)の横領をしていたことが発覚。夫がいるが、男との遊興費か?

(7・1毎日・読売)

夫(五二)の「娘」に化けて愛人に三千万円を貢がせていた名古屋市の女(二九)が逮捕された。(7・8中日)

浅草ロッ座の女社長(五一・前科三犯)が家出少女(二五)をストリップバーに働かせていたことが発覚、逮捕された。(7・15毎日)

「女の殺人」

二三日、都城市で主婦(三六)が勤め先の社長(二九)を絞殺。深い仲になった後、別れようとしたが離さないの

で。(4・24西日本)

二四日、名古屋市北区の主婦(四〇)が義母(七九)を絞殺したと自首。義母は昨春から脳軟化症で一切の世話をしていたが、気の強い義母は口は達者で看病に疲れはてていた模様。(4・24中日)

義母殺しは評判の孝行嫁、同情すべき点が多いと、情状を認めてもらうよう付近の住民は署名を集める。加害者は極度のノイローゼ状態のため入院させられた。(4・25中日)

二五日、江東区の埋め立て地で発見された中年男の被害者は内妻(三〇)、バーのママ(四六)らと判明、逮捕。逮捕されたバーのママは四年前に夫殺しもしていたことが発覚。息子の医科大入学金のため夫の退職金をねらったと自供。(4・27各紙、5・26読売)

「子殺し」

三一日、横浜で母(四六)が育児に疲れ自閉症児を殺し、七日後自首。(4・8毎日)

九日、福生市で母(三六)が六か月を。ハイハイしないのは小児マヒと思い込み。(4・10朝日・毎日)

東京の家出少女施設を逃げ出し鹿児島に来ていた一五歳の少女が昨年一月に産んだ子を殺し死体を埋めていたことが発覚、逮捕された。(4・14朝日)

一九日、大宮市で父(四八)が小児マヒの子(二七)を。面倒みきれぬと。(4・19各紙)

二一日福岡市で母(二七)が長男を絞殺、二男は重体。精神異常で発作的にか?

(4・21西日本)

六日、高知市で母(四一)が身障の子(八)を絞殺。つききりで世話し、夫と別居してまで盲学校に入学させた

末。(5・7朝日)

二五日、札幌市で母(三
四)が九、四歳を絞殺。いう
ことをきかないので子育ての
自信がないと。

(6・26朝日・毎日)

二四日、横浜市で父(五
七)が子(一〇)を。八年前
妻が家出、二児を施設に預け
ていたのを連れ出したが、貧
乏でも父さんと一緒に暮らし
たいと泣きつかれ、ふびんに
なつて。(7・25各紙)

四年前と七月末、えい児を
殺していた夫婦(三七、三
〇)が逮捕された。八歳を頭
に三児があり、車やクーラー
の返済に追われて。

(8・18朝日)

二三日、世田谷で知恵遅れ
の子(七)を父(四二)が母
(三六)と相談のうえ絞殺。
ふびん、悩みに悩んで、と。

(8・23毎日)

二二日、福岡で元ホステス

(二三)を死体遺棄の疑いで
逮捕。この一年間に生んだ赤
ん坊二人を育てる自信がない
と放置、遺体を持ち歩いてい
た。(8・23西日本)

〔心中〕

一日、三郷市で母(三四)
が六歳と一か月の二児を。母
は生命をとりとめた。出産後
ノイローゼ気味だった。

(4・2各紙)

六日、川崎で母(一九)が
一年九か月を道連れに。夫
(二二)が大学で二年連続落
第、退学になるのを悲観し
て。(4・7毎日)

七日、広島市で母(二八)
が六、三歳と。出生届を出し
そびれ長女に入学通知がこな
いのを悲観して。

(4・9朝日)

一〇日、神奈川県伊勢原市
で母(三六)が八、四歳と。
夫は行方不明中。

(4・10毎日・読売)

一〇日、秩父で東京の母子
(三二、六)が焼身。台湾人
の夫と渡米したが英語がわか
らず帰国、子の小学校入学も
父が外人のため可能かどうか
わからず心配して。

(4・11毎日)

一二日、東京で母(三五)
が六、一歳と灯油をかぶつて
焼死。交通事故で足を切断し
た六歳がふびんだと。

(4・12各紙・4・14朝日)

一二日、大阪で父子四人
(四二、小三、小二、四)が。
母が出産のため入院中に。

(4・13毎日)

一五日、熊本県下で宮崎の
四兄妹(三〇、二五、二三、
一八)が。血族結婚で兄妹が
知恵遅れなのを悲観して。

(4・16毎日・読売)

一九日、座間市で母(三
二)が十か月児を殺し、自分
は未遂。夫のノイローゼを苦

に。(4・19朝日)

一九日、愛知県下で夫(三
〇)が母(五四)妻(三二)
子(八)に灯油をかけ焼身。
浮気が原因のけんかから。

(4・20毎日)

二一日、福岡市で母(三
六)が子(九、五)とガス自
殺を図ったが助かる。夫が働
かず生活苦で。

(4・21西日本)

二三日、北海道の山中で函
館の一家(三五、三五、一
二、九)が。よその子に交通
事故させたのを苦に。

(4・24毎日)

二六日、東京で夫(四三)
が妻(三七)と子(九)を刺
して飛び込み自殺。夫婦げん
かの末。(4・27朝日)

三日、船橋市で父(四九)
が五歳を追つれ。妻(二八)
が家出、子育てに疲れて。

(5・4読売)

五日、神戸港で夫(四三)

が妻(三八)と一六、一三、六歳と共に車ごと海へ。一六歳だけは助かった。妻ががんの疑いで入院するのを悲観。

(5・6各紙)

一〇日、香川県で東京の一家四人(四五、四一、一四、一一)が列車に飛び込み。事業不振で。

(5・10各紙)

九日、町田市で母(三九)が一一、八歳と。乳がんを悲観して。

(5・10読売)

一日、所沢市で母(三四)が入院中の子(一か月)を殺し飛び降り。子の水頭症を悲観して。

(5・11朝日)

一五日、焼津市で夫(三七)が妻(三四)と子(八)を絞殺、自殺を図ったが長女に泣かれ中止。妻と子も生命をとりとめた。経営難で。

(5・15読売)

二三日、戸田市で母子(三四、四、一)が焼死。日頃から夫婦仲が悪かった。

(5・23読売)

二六日、子(五)を負った母(三四)の死体が横浜の岸壁に漂着。子の登園拒否を心配して。

(5・26朝日・毎日)

二六日、多摩市で子(二)を負った母(二八)が飛び降り即死。

(5・26朝日)

三〇日、江東区で一家四人(三八、三四、八、三)が。三歳の子の骨の病気を骨がんと勘違いして。

(5・31朝日)

三一日、府中市で母(三一)が子(九、五)と。近所づきあいが下手なのを悲観。

三一日、横浜市で母(三〇)が四、二歳と焼死。家庭不和で。

(6・1各紙)

二日、京都市で四、一歳をくくった母(三二)の水死体が。サラ金苦。

(6・2朝日)

二日、三鷹市で母(三六)

が子(五)を刺し飛び込み自殺。

(6・3朝日・毎日)

三日、山梨県下で母子三人(二八、二、一)が焼

身心中。子の大やけどを悲観して。

(6・3朝日)

三日、門司で一家(六四、三九、一一、九、八)が車で海中へ。父は前妻殺しで服役、出所したばかりだった。

(6・4毎日)

一八日、熊谷の母(二七)が生後二七日を抱いて新中川に入水。実家を訪ねたが不在で。

(6・22毎日)

二二日、愛知県下で母(二八)が二児(二、六)を絞殺後自殺を図り未遂。病気の遺伝を恐れて。

(6・23毎日)

二三日、埼玉で母(三二)が二児(六、二)と。一〇年間ありがとう、幸せでしたの遺書を残して。

(6・23毎日)

二三日、足利市で母(三〇)が子(三)とマンホールに入って。

(6・23読売・毎日)

二四日、飯山市で母(二四)が五か月児を負って入水。離婚問題を苦に。

(6・25中日)

二五日、北海道千歳市外の湖に母子三人(二八、七、四)が入水。

(6・26毎日)

二六日、蒲郡の夜の海に赤ん坊の泣き声。入水寸前の母子(二二、一)が救出された。夫との不和を悲観したものの。

(6・28中日)

三日、北九州市で母子三人(二七、五、三)が入水。しゅうとめとの不和を苦に。

(7・3西日本)

五日、東京で母(五一)が一、八歳と焼死。夫は失職して失せう中。

(7・5朝日・読売)

九日、名古屋で母子(三

一、四、四か月)が。長子の発育が遅れていると思ひ込み。(7・10中目)

二一日、大分県で内縁の夫(七三)を殺し妻(六三)も服毒。寝たきりを苦に。(7・12読売)

二二日、名古屋市中で妻(四五)が夫(五九)と。夫の看病に疲れて。(7・13中目)

一七日、江の島で母子三人(二八、四、二)が入水。やさしくしてくれてありがとうと遺書して。(7・18毎日)

一九日、国分寺で母子(三五、七)が焼身。出産後のノイローゼ。(7・19毎日)

三二日、横浜市中で母(三三)が一〇、八歳を強打して投身。(7・31毎日・読売)

四日、岡山のラーメン屋一家五人(三二、三五、一〇、八、五)が広島県下で。サラ金に追われて。(8・5朝日)

六日、茨城県下で夫(三

一)が離婚した妻の家から二児(六、四)を連れ出し焼身。(8・7読売)

八日、久喜市中で母(三三)と子(四、二)が庭先で焼身。暑さと育児疲れで。(8・9朝日)

二二日、病苦で家出した島根県の母(二九)が八歳、八か月の二児と東京で。(8・12各紙)

一四日、横浜市中で母(三四)が一〇、八歳と。交通事故の後遺症を苦に。(8・14朝日・読売)

一五日、大磯で母(三七)が一か月の子を殺し未遂。三児を育てる自信がないと。(8・16読売)

一七日、佐賀で母(四二)が言語障害の長女(一一)の将来を悲観して、入水。子はこわがって帰り助かった。(8・18西日本)

二二日、岐阜県下で父(三五)がダイナマイト心中。五歳児のみ死に、三児(二三、一〇、九)は助かった。夫に

無断でサラ金を借りた妻(三三)がいたたまれず蒸発したため。(8・21各紙)

二二日、宮崎県で父(四三)が妻の父母(七七、七五)の家に放火、子(二八)と焼死。妻(四二)はサラ金を苦に離婚・蒸発中。(8・22各紙)

二二日、大阪で一家四人(四一、三八、一一、五)が排ガス心中。(8・23朝日)

二三日、福井県下で母(三〇)が子(六、一、三か月)を道連れに放火、一歳児だけ助かった。夫はサラ金を苦に家出、田を売っても借金を返せず。(8・24各紙)

二四日、佐世保市中、六月に病死した夫のあとを受け農業をしていた母(三五)が三

児(一一、九、六)を道連れに、軽トラックごと海中に。夫の後を追うと。(8・25西日本)

二四日、大山市で父子三人(三八、七、四)が入水。倒産、取り立てを苦に。(8・25大分合同)

二四日、秋田市で父(三八)が子(二〇、七)と車で入水。夫婦げんかのはて。(8・25各紙)

二八日、茨城県下で父(四三)が娘(高校生)を切り母(四二)と焼身、重体。妻がある男とつき合うのを怒って。(8・27毎日)

二八日、那須町で一家四人(三三、三三、七、五)が排ガス心中。妻の乳ガンの経過が悪いのを悲しんで。(8・29毎日・朝日)

〔女の自殺〕

二日、東京で三六歳が電車

に飛び込み。病苦。

(4・3 毎日)

一七日、神戸で中二の少女

(二三) が、母の自殺後、八歳と七歳の妹二人の母代わり

に疲れて。(4・18 毎日)

一八日、品川で主婦(四

〇) が焼身。ノイローゼ。

(4・18 毎日)

一七日、酒田市で女高生

(二六) が飛び降り。前日のテレビ番組「死に急ぐ十代」に刺激されて?

(4・19 毎日)

二一日、北九州市で共働きの主婦(二六) が焼身。夫の両親との折り合いが悪いのを

苦に。(4・21 西日本)

二〇日、三浦市で女教師

(二二) の入水死体が発見された。大学で学んだことと現実の差に悩んでいたという。

(4・22 毎日)

二一日、埼玉県で東京の主婦(三五) が飛び込み。ガン

と思いこんで。

(4・22 毎日)

二六日、川崎市で会社員

(一九) が焼身未遂。初給料が契約より五千円安いので上司に言ったところ退職を申し渡されたため。

(4・26 読売)

二六日、板橋で老女(六

四) が自宅に放火自殺。

(4・27 毎日)

六日、臼杵市で六六歳が。

小児マヒで独身を続け、五二万円を葬式費用に残して。

(5・7 読売)

一六日、横浜市で女高生

が。五日前投身自殺した学友を追って。

(5・17 朝日・読売)

二五日、東京で母(三〇)

が一四階から飛び降り。脳性マヒの子(七)の看護に疲れて。

(6・26 朝日・毎日)

二六日、三鷹市で六七歳が焼身。老人ホームに入居、生

活には困っていなかったが、

マイの世話になるのを心配。

(6・29、7・7 読売)

二日、東京で主婦(四五)

が。夫に殺された開成高校生の長男を追って。

(7・3 朝日・毎日)

二〇日、愛知県衣浦港付近

に女の死体。大府市の主婦(三四)と判明。夫が女性関係で三月に家出したのを悲観して。

(7・21 朝日)

八日、東京で三八歳が三児

を残し。三千万円の借金の方策がつかぬと夫から連絡を受けて。

(8・9 読売)

一六日、福岡市で車イスの

婦人(六〇)が海中に。病苦を悲観。(8・16 西日本)

「女を売る」

東京・大崎署は「フロのな

いトルコ」をキャッチフレーズに一億余円をかせいでいた

業者を摘発。(4・17 読売)

暴力団に覚えい剤中毒にさ

れ働かされていた女子中学生

ら(一四、一七、一九)が東

京中野署に保護された。

(7・19 毎日)

ビストル密輸の疑いで暴力

団員(三一)を調べていた愛

知県警は約三〇人のタイ女性

を密輸入した疑いを深めた。

(8・27 読売)

「女性の敵」

相模原南署は二日、一人住

まいの女性を暴行した自衛官

を逮捕。(4・14 朝日)

鶴見署は女高生らにシンナ

ーを吸わせ暴行していた自衛

官らを逮捕。神奈川県だけで

も三月一二日のOL暴行殺

し、四月二日のウェイトレス

暴行と、自衛官の犯行が目立

つ。(4・19 読売)

独り暮らしの婦人(六一)

が暴力団に殺され、土地家屋

を売り飛ばされた。良家に生

まれたが母亡き後、父の世話で婚期を逸し、父の死後その友人の世話になる日かげの生活を送っていた人。近所の人も犯行に気づかなかった。

(5・24朝日)

甘い言葉で近づき、純情な

女(二六)から八百万円をおどしとっていた男を神奈川署が逮捕。(6・7朝日)

泥酔した東調布署員(二三)が主婦(四四)に抱きつき乱暴。警官の婦女暴行はことして三件目。女子大生殺し以来、警視庁は若い警官の管理に特に注意を払ってきたが「性」に妙案はなく、ガックリ。

(7・25各紙)

一部上場会社重役と称し主婦ら一二人から七五〇〇万円詐取していた男を西新井署が逮捕。(8・14毎日・読売)

海外

男女平等を憲法条文に

米国では男女同権が憲法に明記されていず、これを求めるERA運動が広がっている。国会を通過したもの、州議会の批准が必要だが、反対勢力の強い地方ではできない。このため婦人運動団体では批准しない州への旅行ボイコット、反対派の宣伝に対抗するための教宣活動などに力を注いでいる。

(4・4朝日)

女性議員は七人増えたが

フランスの総選挙に六〇〇人の女性候補が立ち当選は一七人で七人増。うち一人が共産党、一人社会党、五人が

与党だった。女性運動グループ「ジョワジュール」は一〇〇人立てたが、それぞれの選挙区で四・四％以上得票した人はなかった。(4・4読売)

仏内閣のナンバースリー

シモーヌ・ベユ厚相(五〇)。七四年以来、妊娠中絶の合法化実現・家族手当の増額など実績は十分。初の女性首相という呼び声さえも。

(4・8朝日)

婦人部がない米国の労組

米国教員組合の副会長のサンドラ・フェルドマンさんは滞日中、米国の労組に婦人部がない理由をきかれ「男女平等が実現されたから必要ない」と答えた。現在の米国女性運動の最大テーマは男女平等憲法修正案を可決させること、という。(4・8朝日)

米海兵隊に初の女性将官

マーガレット・ブルーラさん(四七)。一九七五年、予備役少尉として入隊以来、海兵隊婦人局長・司令部情報局次長を歴任。海兵隊史上初の女性情報局長就任も間近。

(4・9朝日)

中絶法で大揺れのイタリア

前首相の誘拐・殺人やあいかわらずの左右対立で揺れるイタリアでは難航する中絶法も政局混迷の一因となったようだ。四月に少数野党の急進黨は中絶法賛成派の共産・社会両党から裏切り議員が出たことに激怒、これを国民投票に持ち込む運動を始めた。国民投票で敗れて面目を失うことを恐れる政府与党は、逆に同法案の通過を急ぐという失態を演じた。(4・15読売)

西独離婚新法の効果

近代的な新離婚法が昨年七月成立した西独、当初予想と逆に離婚は激減。女性に有利とみられたこの法だが手続きが複雑との批判も。

(4・17朝日)

ノーベル平和賞がアダ

新旧両教徒の対立で流血のつづく北アイルランドで長く非暴力運動にたずさわってきた二女性が昨年ノーベル平和賞を受賞したが、このほど二人は運動リーダーの地位を引退と表明。非暴力運動の限界論争とともに賞金の使途についてのいざこざも一因？

(4・17読売)

ケンカしても男に負けない

国

エジプトは完全な男女平等と能力主義であり、性の違い

による差別はないと小池百合子さんは語る。

(4・20読売)

男子野球チームに女子選手

女子の野球熱は最近米国でも高まっているが、ついに男子野球チームへの正選手に女子選手が登場。ヒューストンの高校での話。

(4・24朝日)

女兒がほしい米女性

ある主婦向け雑誌で今度子供を作るとしたら男女どちらがいいかという問をだしたところ、女兒を望む回答が男児を上回った。理由は「女性の地位向上で職業機会がふえ、それが駄目でも主婦業という結構な仕事にありつける」

(4・27朝日)

中絶認可を望むトルコ

トルコでは産後の母子の死

亡率が異常に高い。貧困がその背景にあるが、現在中絶が禁止され、ヤミで行なわれていることも問題。国家による無料の中絶認可を求める論調が新聞にみえる。

(4・28朝日)

離婚後の育児ババ

離婚した後の育児は頭の痛い問題だが、最近米国では週末は月のある期間だけ育児の面倒をみる離婚後のバートタイム・パパがふえる傾向にある。子供への影響については、識者の間でも意見が分れるが、ともかく離婚後も子供に責任をもとうという良心のあらわれかも。

(5・5朝日)

「妻を捜して」が増加

米国の行方不明者捜査専門会社の統計では、一九六〇年には、「夫を」に比べ「妻を

捜して」の依頼はずつと少なかったが、七四年以降は子を残して家出する妻がふえたため逆転しているという。

(5・8朝日)

対等支える女性の経済力

「おむつの取替えなんか平気ですよ」とスウェーデンの若い父親。この国では父親にも育児休暇が規定されているのだから「ますらお派出夫」もあたりまえだが、それも職業の平等からくる女性の経済的地位の向上があればこそ。

(5・8読売)

平等意識強いカナダ女性

カナダも米国と同様婦人の地位向上運動が活発だが最近同国に派遣された総理府の菅原真理子さんは、オタワでの生活から、男女平等の羨ましい実例を書き送っている。同国でも特に男性の間で男女の

役割分担意識は強いが、それでも夫の家事協力の度合は驚くべきほどで、職場の上司が男女いずれでもよいと考える男性も多いという。

(5・9 読売)

ふえた飲酒女性

フランス女性で最もよくアルコールを飲むのは職業婦人。一人あたりの平均酒量は男性に比べ半分以下。アルコールを飲む女性を罪悪視するタブーは消えつつある。

(5・12 朝日)

黒人の未婚の母は半数以上

七六年に生まれた米国の黒人の半数以上が未婚もしくは離婚後の女性を母としているという事実がわかり関係者を驚かせている。白人女性の間でも未婚の母はふえているが、同年の白人の赤ん坊のうち独身者を母とするのは八%

足らずで、人種間に大きな開きがある。原因は不明。

(5・12 読売)

ソ連女性の反乱?

男女平等が制度の上では完全に実現されているはずの社会主義国ソ連でも、家庭生活では男性の横暴が今なお残るためか、近年離婚件数が増え続けている。これとともに同国では珍しい女性権利論争が新聞紙上でたたかわされている。一方、男女間人口の不均衡と出生率低下を恐れる声が政府内にも高まり、ある教育学者は未婚の母を奨励する論説を発表。この傾向をソ連社会変動の兆しとみる学者もいる。

(5・15 読売)

中国の女たち

四人組追放後明るさを取り戻した中国の女性たちの男女平等の状況を五回にわたり紹

介。(5・16—6・2 読売)

女性政治家の母は偉大

インディラ・ガンジーなど世界の著名な女性指導者の多くは、その政治への出発を母の生活態度から学んだという内容の本が最近米国で出版された。『婦人政治家の誕生と背景』、著者は二人の女性大学教授。(5・21 朝日)

ボストンの駆け込み寺

ボストンの下町にアル中などの暴力亭主から女性を避難させる施設がある。昨年二月にスタートして一年余で三五〇人の母子を保護。運営はスタッフと避難者の両者で自主的に行ない、被害女性の立ち直りをはかる明るい雰囲気だ。男性の暴力による離婚問題の多い米国には、他の都市にもこうした緊急避難所がある。(5・22 東京)

中絶は妻の一存で

妊娠中絶に夫の同意は必要かに対して英国リパブル地裁は不要との判決を示し、英国紳士にショックを与えている。(5・25 朝日)

やっと父権凋落の兆し

イスラム法の下で父権と男性優位が徹底していたエジプトの生活も、ようやく変化がめだち、結婚に対する娘の発言権が強まった。職を求める若い女性がふえたのが一因。

(6・1 読売)

保育園論争

スウェーデンの新聞紙上で保育園の意義が論議のヤマとなる。個性的な子供をという家庭派に対し、集団への適応をと説く保育園派の勢いが強いが、保育園の設備が少ないのがこの国の悩みで、入園で

きるのはたった一〇%。

(6・5朝日)

伊の妊娠中絶法について成立

イタリア上院は、五月一日、賛成一六〇、反対一四八で妊娠中絶法案を可決、七六年以来国を二分した問題に終止符を打った。墮胎罪は廃止され、中絶は無料に。離婚法につぐバチカンに対する女性の勝利だが、中絶は、一八歳以上・妊娠九〇日以内に限り、一八歳未満の場合は親か家裁の同意が必要。

(6・9社会新報)

急増している英国の離婚

イギリスで離婚が五〇〇組に一組の割合だったのは一〇年前。三組に一組が昨今。平均結婚期間は約一三年で、離婚率が低いのは再婚夫婦、と週刊誌『ウーマンズ・オウ』は伝える。

(6・12朝日)

要職への進出は日本以上

北アフリカのチュニジア共

和国から経済使節団の一員として来日したスアド・ディマスイさん(三六)は約半月の滞在後「先進国のイメージを持つ日本で要職についている女性があまりに少ない。その点でチュニジアの方が進んでいるのでは」と言う。「女性よべールを脱げ、学校へ行け、学校は無料だ」「国を発展させるにはまず女性の参加を」と女性解放を進めたブルギバ大統領のキャンペーンの中で育ち教育を受けた彼女は、独立後二二年の若い国で政府の要職にある。

(6・12朝日)

民間パイロットとして活躍

世界各国の民間航空会社で女性パイロットが誕生してい

る。全世界のパイロット数三万三千人に対し五〇人という小さな比率ではあるが。

(6・24読売)

働く母奨励を方向転換

東独では子を託児所に預け母が労働参加することを勧めていたが、出産奨励に方針を転換、四一六か月の有給休暇を保障、希望ならさらに一年延長することにした。

(6・24朝日)

自立した女の映画が急増

アメリカの女性映画評論家パトリシア・エレンズさん(四〇)が「映画と女性」について語るため、女性たちにより作られた記録映画一〇本を持って来日。「七〇年代に入ると自分で人生を切り開いていく女性たちを描く作品が次々に生まれ、男性たちは女たちがどう考え感じているか

について敏感になってきている」と。

(7・3朝日)

女性には後進国のフランス

自由と平等の国フランスでも実際の職業生活では差別意識が根強い。離婚法、中絶法と、制度面の革新ぶりはめざましいが、女性の職種はお茶くみ程度、給料も低い。

(7・7読売)

夫の暴力に警察が介入

米国では妻に暴力をふるう夫がふえているが、ニューヨーク警察では暴力的な夫婦げんかに一般の暴力犯罪と同じ姿勢でのぞむことを決定。

(7・13読売)

きびしくなった中絶

一八九三年、世界で初めて婦人参政権を実現させたニュージーランドでは妊娠中絶法の改悪が目下の大問題。一六

歳以下の性教育は禁止され、中絶は三人の医師の承認が必要となった。(7・19毎日)

美女一位は二五人の母

アフリカ、マリの「全アフリカ女性運動」創設一五年記念美人コンテスト一位は四五歳の主婦、双子五組を含む二五人の母。出場資格は六回以上出産した経験のある女性だけだった。(8・1朝日)

婦人問題補佐官が辞任

カーター政権発足当初から婦人問題担当補佐官として重要な地位を占めてきたミッシェル・コスタンザ女史は、一日、政治姿勢の相違を理由に辞表を提出、受理された。(8・2日経)

捨てられた試験管ベビー

ニューヨーク連邦地裁は試験管ベビーの実験を中断され

た母親の打撃に対し、医師と病院に五万ドルの慰謝料を払うよう決定。(8・19読売)

イスラム世界の女性の悲劇

アルジェリアの若い女性が異教徒のフランス青年と結婚しカナダで暮らしていたところ家長の兄により「誘かい」され連れ戻された。民族解放戦争であれだけ女性を使いながら女性解放を実現しようとしていないアルジェリアにフランスのマスコミ界は怒りの声。(8・19毎日)

米国の働く女性五六%に

七七年度の米国女性の就業率は五六%で新記録と米労働統計局が発表。前年比一%、一六〇万の増加。男の就業率は八〇%。(8・20朝日)

夫が財布を握る米国

一家の予算書は夫が作り細

かく監視、妻の口出しを許さぬ米国。したがって結婚は永久就職にならない。主婦が働くのは自立のためだけではなく、夫だけに家庭の経営権を握らせたくないからでもある。(8・22日経)

五年後には軍の一割は女性

いま米国の婦人将校・兵卒は約一二万人、全体の六・五%だが五年後には二〇万人に増す予定。七三年に徴兵を志願制にして以来、募集難と質の低下が問題になり、質のよい女性の大量採用にふみきつたもの。折から女性の側から職業の機会均等・同一賃金の要求が高まり、この要求を積極的に満たす軍隊が歓迎されている。(8・23毎日)

増えた不妊手術

アメリカ全米健康統計センターが公表した調査では一五

歳から四四歳までのカップル三組に一組が人工不妊状態。三〇歳から四四歳までの夫婦の約半分が不妊手術を受けているという。特に白人夫婦に多いがビルよりも手軽で効果的という理由らしい。(8・23読売)

選択の機会の多いカナダ

育児を終えてから大学に入ることも、再婚や再々婚も自由で、機会も多い。職業選択のコンピュータ・プログラムもあるが男女差なし。楽をしたい女性にはしんどいが、能力ある女にはおもしろい国だ。(8・25読売)

英海軍の女艦長

伝統ある英国海軍にも女艦長。五一歳のハバード夫人は「最も優れた船乗り」と評価されている。(8・25毎日)



世界各地の女たちと手をむすび
呼びあつめよう女の映画
女の心を女が語り
女の姿を女が描く
そこから生まれる女の文化
これをつのきつかけに
一人でも多くの女たちに、見せたい
一人でも多くの女たちと、会いたい

11月10日 (金)

〔A プログラム〕

- ・オレンジ
- ・ほほえむブーデ夫人
- ・猫のえがき方
- ・Take it like a man, ma'm

1:00, 3:45, 6:30
の3回上映

11月11日 (土)

〔B プログラム〕

- ・アントニア
- ・Never give up
- ・Home movie
- ・Roll over
- ・なりたいものなんでも

1:00, 3:45, 6:30
の3回上映

11月12日 (日)

〔1. 短篇特集〕

10:00~

- ・午後の網目
- ・メンセス
- ・ヘルガール・ハウス

〔2. 特別プログラム〕

1:00~

- ・お吟さま

〔3. アンコールアワー〕

3:45~

- ・Take it like a man, ma'm
- ・そのあと話し合い

会場 四谷公会堂 (03-341-2991)

(プログラムは一部変更の場合もあります)

資料1 妊娠・出産に関するアンケート調査中間集約

「出産白書」をめざして

国際婦人年大阪連絡会

はじめに

(1) アンケート回収数(三月一日現在) 二、〇一〇枚

(2) 苦情、被害の訴え、意見、提言、激励に関する手紙 七五通

" " ハガキ 四一通

合計 一一六通

(3) 対象地域を近畿圏としたが下記の県から反響があった。

青森、秋田、山形、福島、群馬、茨城、千葉、埼玉、東京、神奈川、静岡、岐阜、福井、愛知、三重、滋賀、奈良、兵庫、大阪、和歌山、京都、広島、福岡、愛媛 以上三四都府県

(4) 中間集約は下記の点のみにしぼった。

アンケート設問

問3、出産した施設別

問4、出産状態

問5、計画分娩か否か

問6、妊娠から出産までの費用

問8、母子保健の指導を受けたか否か

問10、産婦人科への苦情、疑問等、妊娠・出産に関して困った例について

妊娠・出産等に関するアンケート

1. 出産されたのはいつですか。

昭和 年 月 日

2 第何子ですか。 第 子

3 出産した施設はどのようなところですか。○をつけて下さい。

- ①公立病院 ②私立病院 ③個人病院
④診療所 ⑤助産所 ⑥自宅
⑦その他 ()

4 出産時の状態はいかがでしたか。

①正常分娩

②異常分娩

(出来るだけ詳しく書いて下さい。)

5 分娩時、陣痛誘発剤をするなど、計画分娩でしたか。

①いいえ

②はい

③①-②の場合

イ 理由は

ロ それはどのようにしましたか。
何か不満がありましたか。

10 今までかかった産婦人科で、疑問に思ったこと、妊娠・出産に関して困ったことなどありましたらなんでも書いて下さい。

6 妊娠から出産までの費用はいくらかかりましたか。

①妊娠中の診察、検査等の料金
回数 回 (おおよそでも結構です)
合計 円

②出産の費用はいくらかかりましたか。
入院、分娩料、その他内訳がわかりましたら出来るだけ詳しく書いて下さい。

合 計 円

入院料 日間 円

分娩料

7 あなたの健康保険の種類は

①

② イ 本人 ロ 扶養家族

8 妊娠中、医師、助産婦、保健所等の指示通り、保健指導 (例・母親学級) を受けましたか。

①はい ②いいえ
どこで受けましたか。

()

受けられなかった理由は

()

9 現在、国、地方自治体で母子のために、下記の事業を行なっていますが、知っておりますか。知っているものに○をつけて下さい。

①妊産婦、未熟児訪問指導、②未熟児医療給付 ③母子栄養強化 ④妊娠中毒症等療養援護

11 妊娠当時の状態 (いずれかに○をつけて下さい)

①就労していた
仕事の内容

()

②専業主婦だった

(氏 名)

(住 所)

TEL

とりあつかい団体名 ()

※ ご協力ありがとうございました。

① 出産した施設

施設別	人数
公立病院	529人
私立病院	455
個人病院	615
診療所	86
助産所	69
自宅	3
その他	253
合計	1,725

② 出産の状態

施設	正常分娩	異常分娩
公立病院	447人	82人
私立病院	391	64
個人病院	531	84
診療所	72	14
助産所	64	5
自宅	3	0
その他	217	36
合計	1,725	285

※その他＝法人・企業の病院など。

③ 陣痛誘発剤の使用、帝王切開など計画分娩をしたか、否か。

(1)

施設別	自然分娩		計画分娩		合計
公立病院	353人	66%	176人	34%	529人
私立病院	295	65	160	35	455
個人病院	388	63	227	37	615
診療所	56	65	30	35	86
助産所	57	82	12	18	69
自宅	3	100	0	0	3
その他	184	73	69	27	253
合計	1,336	66	674	34	2,010

(2) 計画分娩の主な理由

- ① 翌日が日曜日または祭日になるため
- ② 予定日より遅れている（1週間～2週間）のため
- ③ 微弱陣痛のため
- ④ 前早期破水のため
- ⑤ 妊娠中毒症のため
- ⑥ 逆児のため

④ 母子保健の指導を受けたか否か。

施設別	受 け た		受けなかった		合 計
公立病院	326人	61%	203人	39%	529人
私立病院	273	60	182	40	455
個人病院	249	40	366	60	615
診療所	40	47	46	53	86
助産所	28	40	41	60	69
自宅	2	67	1	33	3
その他	171	68	82	32	253
合 計	1,089	54	921	46	2,010

(1) 受けた場合、どこで受けたか。

保健所	415人	38%
病院	598	55
その他 (助産婦、デパート等の母子教育、保健センター、 母子衛生研究会など)	76	7
合 計	1,089	100

(2) 受けなかった場合の主な理由（多い順から）

- ① 仕事が休めなかった
- ② 忙しくて行けなかった
- ③ このような指導があることは全く知らなかった
- ④ 必要と感じなかった
- ⑤ 経産婦なので必要なかった

⑤ 妊娠から出産までの経費

(1) 妊娠中の経費

	公 立	私 立	個 人	診療所	助産婦	その他	自宅	合 計
5,000円以下	人 6	5	9	1	7	38		66
5,000～10,000円未	22	14	11	6	13	76		142
10,000～15,000円未	79	33	48	9	19	16		205
15,000～20,000円未	84	43	89	11	12	13	3	255
20,000～25,000円未	102	72	125	11	3	13		326
25,000～30,000円未	61	52	75	9	5	18		220
30,000～40,000円未	131	181	199	25	8	24		568
50,000～100,000円未	2	4	5	6		3		20
10万～20万	4	18	11	2				35
20万～30万	1	1	8	2				12
不 明	37	32	35	4	2	52		162
合 計	529	455	615	86	69	253	3	2,010

(2) 出産の費用（入院料・分娩料・その他経費含む）

① ただし、入院日数7日間の人のみを比較

公 立	10,000円 ～ 200,000円	90%
私 立	140,000 ～ 240,000	71%
個 人	150,000 ～ 250,000	70%
診 療 所	100,000 ～ 190,000	89%
助 産 所	70,000 ～ 135,000	71%
自 宅	70,000円、 100,000円、 150,000円	
(助産婦さんへの謝礼 3件のみ)		
そ の 他	50,000円 ～ 65,000円	89%

② 出産費の内訳中、分娩料については

- 最低1万円から最高13万円のひらきがあった。
- 最も多いのは、4万円～6万円であった。
- 次に多いのは、7万円～9万円であった。

⑥ 産婦人科への苦情、疑問等、妊娠、出産に関して困った例

○ただし、手紙で寄せられた中から選んでおり、アンケート用紙に記載されている分は未整理である。

1 人工分娩のケース

△例1V 第二子（死産） 昭和四十五年十月 大阪市内総合病院（私立）にて

○状況……予定日より一日前日、陣痛促進剤を使用、普通分娩中、子宮破裂、帝王切開、死産。破裂後の子宮不調のため四十六年三月再度開腹、子宮摘出。授乳制限による一期乳ガン手術、以上のように第二子死産より一か年足らずの間に、三回の手術を受け、子供と子宮と乳房と、女性のすべての部分を失う。

○感想……総合病院産婦人科に列記された医師名はすべて非常勤で、専任医師は一名、それが午前中外来患者を、午後入院患者を診ている。帰宅を急ぐ故か、勤務時間内にお産をすませようとして、産気づいた妊婦は片はしから陣痛促進剤を使用している。また休日にお産がないよう、予定日近い妊婦は休日前に促進剤を使用され、正月や連休のある前は特にそれがひどいようである。私個人については、促進剤使用について事前の説明も相談もなかった。また第一子のときも、今回も、陣痛や分娩時についての指導も全くなく、死産後の乳房の手入れの方法についても何の注意もなかった。

外来受診中に過去の出産歴などについて十分に報告していたにもかかわらず、入院してから、看護婦が変わるたびに再度説明せねばならず、全く病院内の連絡がとれていないのに驚いた。

分娩室、陣痛室、手術室などの整備については、私の入院した当病院は、陣痛室はなく、同室の妊産婦に気がねしながら陣痛に耐えていなければならなかった。また分娩室は二階、手術室は四階と離れていて異常時にはすぐ間に合う状況ではなかった。

医師の態度は、くわえたばこのままで分娩室に出入したり、内診したりすることもあり、恥ずかしさが先に立って話や相談のしにくい患者を鼻であしらったり小ばかりにする様子がみえ、夫や父親など男性同伴で受診すると、とたんに態度や応対が変わった。

第一子よりも、二子、三子は安心しがちだが、出産はその都度状況が異なることを頭において、自分の出産であるから照れず無駄な辛抱や遠慮はせず夫とよく相談し、医師にも会ってもらうことが大切であると思う。今なお再発の不安にかられる乳ガンとお産による後遺症になやまされる毎日、陣痛促進剤のために大幅の黒字を出している製薬会社の営利のため利用された思いが一段と深まる一方、男性が決して味わうことのない出産に於てそれが大い男性の医師の手によって使用されていることに心を留めて、今後の若い母親となる人への助言としたい。

（神戸市）

△例2V 第一子 昭和五十一年 前橋市N総合病院にて

○状況……予定より十一日おくれて入院、翌日から三日間陣痛誘発剤の点滴を受け、四日目に帝王切開で出産。当院は母乳で育てることに力を入れていたから、母乳を出すべく三回もの注射をされたが効果はなく、十日間の入院中ミルクを出してもらえなかった。糖水ばかりを飲まされ、空腹で泣く子を手術後の母体で抱いて病院をまわり母乳をもらってまわった。

○感想……十一日もおくれて入院したにかかわらず、入院が早すぎたと言われ、誘発剤の点滴後陣痛が起きていても階段を昇り降りさせられ、四日目に主治医の診断の末、即手術となった。生まれた子は頭血腫で強い黄疸であった。手術中立ち合った医師から、私が狭骨盤の上に、せん骨が内側に曲がっているため、児の頭がひっかかって出てこなかったと説明されたが、主治医からは一言の説明もなかった。立ちあった医師が、もう少しおくれればアウトだったと言っているのに、主治医はそんなことはないでしようという極めてのんびりしていたことに對する私の不信任は拭い去ることができない。

また、母乳で育てる運動については十分認識しているが、点滴でむくんだようになった手首、手術後の痛みのとれない精神的にも肉体的にも弱っている母体に母乳が十分出る状況にはなっていないときは、ミルクを提供してほしい。

入院中多くの注射と点滴をうけ、薬をのまされたことが、母体に影響を与えていないだろうかという不安、母乳がよいとわかっていても体質的に母乳に恵まれないものへの配慮、妊婦への細かい診断への期待など、弱い立場の母性へのいたわりを希ってやまないものである。

(前橋市)

△例3V 第一子(死産) 昭和五十二年十月 宗教団体総合病院

○状況……予定日を七日過ぎた日、突然大出血をして入院、陣痛は全くなかったが胎児の心音はすでにきこえていなかったとのこと。陣痛誘発剤の点滴をうけ、陣痛が始まっているのに、助産婦は昼食をとりに出かけ、その間、看護婦が「いきまないように」と注意するのみで何の処置もなく放っておかれた。その後医師により会陰切開して三六八〇グラムの男児を死産、原因不明の常位早期胎盤剝離ということであった。

○感想……夫も私も健康体。妊娠を知り、毎月の定期検診を欠かさず、母親学級にも参加していた。八か月の頃貧血といわれ指定の増血剤を飲んでおった。その後順調にすすみ出産予定日もすぎた十月六日の定期検診でも異常はないといわれた。出血後入院したとき、陣痛に苦しむ当人や生まれ出ようとする胎児のことより、助産婦や看護婦の昼食が優先されて、その間無為にすごされ苦痛に耐えている間に愛児は息絶えてしまったのではなからうかという、不信任は今なおつのるばかりである。

また出血によって病室を汚したとき、当人にとっては不可抗力のいたしかたない事柄であるのに、きつく苦情を言われたことなど、病院側の勝手ばかりがとおるのも不快なことであった。

なぜあの一番大切な危機に何の処置もなされなかったか、病院の手不足、不備を責めたい。また原因不明の早期胎盤剝離という不幸が訪れることの予測できない定期検診についてもなっとくがいかない。形式だけの検診でなく、もっと実体をよく把握できるように、死産という事故が未然に防げるように綿密な診察や指導をしてほしかったと痛感している。

△例4V 第二子（死産） 昭和五十二年九月

（埼玉県）

○状況……予定日を九日すぎて入院、一時間おきにカプセル錠の薬を一つずつ飲み続け、同時に「ふうせん」を入れられた。あまりの苦しさに看護婦をよんでもまだまだというだけ。夕方四時頃になってやっと診察室と呼ばれる。ふうせんはずしたとたん、今までの苦しみがスーと消えて、胎児の心音は急に弱くなった。その後痛みは殆どなく、先ほどの苦しみがウソのようになった。それから薬は飲まされつづけ、七時頃分娩室に入ってから胎児の心音は全くとだえてしまった。すでに死亡していた。お産は非常に苦しかった。原因は不明とのこと。

○感想……昨日まで元気でお腹の中で動いていた胎児が医者の手でだめにされてしまったとは、くやしさと悲しみで一杯である。医者は「薬は最高のものを使ったのに、おかしい」とくり返すのみ。私はどうしても納得がいかない。私たちに不満・不安があっても医学上のはわからず、結局は泣き寝入りするのみである。原因不明と片付けられては全くなかない。このようなことが早く解明されてほしい。陣痛誘発剤の服用についても疑問が残る。出産費用が高すぎることも問題としてとりあげてほしい。

（東京都）

△例5V 第二子（死産）

○状況……出産予定日を十一日すぎ破水したのではないかと思われたので病院へいったが、そうではないといわれ帰宅。予定日から十八日目入院。外来では診察した医師が予定日を大分すぎていることに對し特別の注意をはらっていなかった。分娩室に入ると助産婦は予定日を大幅に過ぎているからこわいという。午後四時頃陣痛誘発剤の点滴。九時頃体ふるえが来る。八時すぎ医師が様子をみて、二人の助産婦に上から手で押すよう命じる。とても痛い。様子がおかしいので手術を求めたが、医師はとり合ってくれない。十一時すぎ、ようやく手術室に運ばれたが結局子宮破裂で死産、四三〇〇グラムもある男児であった。異状を訴えてから四時間もたってからのことであった。

○感想……当時手術のスタッフの一員であった看護婦からきいたことであるが、医師は、下からの出血がなかったから子宮破裂とは思えなかったとのこと。なぜ異状を訴える産婦のことをばを無視したのか、声を大にして訴えたい。

医師に望むことは、失敗を率直にみつめ反省してほしい。子供を失った母親の心にもっと細かい配慮がほしい。子供を亡くしたばかりでなく、左卵巢と子宮をも失ったのだから。

当日係だった助産婦は、自分の手落ちだったとあやまつたが、病院としてはひとりの助産婦に責任をおしつけて、それで事故が防げるだろうか。医師はもっと患者の訴えに耳をかし、もっとよく勉強し、もっと謙虚であってほしいと切望する。（静岡市）

△例 6 V

○状況……四十九年一月豊中市の病院で受診、七月二十五日出産予定。予定日を一週間すぎた八月二日早朝破水、十時に診察を受ける。「胎児がえらい上の方」といわれ、陣痛誘発剤を注射される。液が三分の一位のところで陣痛が起きすぐ分娩室へ送られたが、胎児が下がって来ないからと若い先生が私の大きなお腹の上にまたがり力一ぱい押した。「痛くて気分が悪いからやめて」と訴えたが「赤ちゃんが死んでしまう、それでもいいか」とどなられた。結局吸引器でひっぱり出して男子出生。頑張ったかいたと涙ぐんでいるうちに、どつと大出血、子宮破裂、下から縫えないので開腹手術をするにあわただしく動きまわる看護婦さんの姿を意識が薄れる中を追う。愛する夫や子供を残して死ねるものと全身麻酔のエーテルのおいをかきながら意識が消える。

二時間半の手術で子宮切除、二度と子供が産めない体となる。

どうして破裂したのかたずねたが、医者は「どうしてなったかわからない、皆にすること（お腹の上に乗って押すこと）無理があったとは思わない」と言う。子供は三歳頃まで病気をしなかったが、三歳を過ぎてから風邪を引くと右耳下腺が腫れ、熱も七度台でひきつけるようになり、一月末に精密検査に行く予定。（豊中市）

2 妊産婦死亡のケース

△例 1 V

○状況……昭和四十七年十一月分娩に伴う出血があったので、かねて申し込んであった奈良県の私立産婦人科へ入院。三十分おきに陣痛誘発剤の注射がされた、産婦はアレルギー体質で特にひどいシッシンが出るのでベニシリンなども余りうたなかつたほどである。苦しみなながらも二八八〇グラムの小さな女児を出産。その後母体が弱って来たままの状態になり、心臓病によく似た発作を何度もくり返した。五十二年再度妊娠したが、母体がそういう状態なので大阪のNやK医大へ入院させたが、結局何もわからないままに八月九日突然死亡。今にして思えば陣痛誘発剤の副作用がもたらした結果にちがいないと思う。

○感想……娘が死んで十日ほどたった日同じ奈良県の町でこの薬を使用して母子共亡くなった事件をきいた。これから先も続くであろう陣痛誘発剤の副作用から産婦をまもって頂きたいとのねがい切なるものである。（東大阪市 産婦の母）

△例 2 V

○状況……第二子の出産、奈良県桜井市の病院。妊娠後、月例の検診には何の異常もなく、十月十三日の予定日より十日早い昭和

五十二年十月三日、風邪気味で少々熱があったらしいが夜中から陣痛が始まり、午前一時半入院。すぐ看護婦が注射。検温もなし。第一子の出産のときより苦しいといつて分娩室に入る。出産は五時すぎ、男児だったが二重にヨナをまいていてすぐ死亡。産婦は血圧七十に降りている。七時四十分頃救急車で奈良のT病院に移され輸血。昏睡状態のまま十一時三十五分死亡。T病院の医師は急性心不全と羊水栓塞と病名をつけられた。羊水が血管に入り血液にまわってしまふ突発的な病気で一万人に一人ぐらいしかない、どんな手当もできないとのこと。胎児はヨナをまいていたが正常分娩で、直前まで心音があった由。桜井市の病院で當時のことを説明してもらおうとしたが、医学的なことばかりで因果関係について何の解明もない。

○感想……なぜ始めから苦しいと訴えているのに帝王切開をしてくれなかったのか、出産後安静が必要なのに救急車で長い道のりを他の病院に移したのか、心残りや疑問が山ほどある。お産に限らず何の病気で医師まかせではおろそかにされ、人命を失うことになりかねない。今後の産婦の方々への少しでもお産の知識の一部にでもと思ひ筆をとったのである。(奈良市 産婦の夫)

3 出産による母体損傷のケース

△例1▽

○状況……昭和五十年五月初産で無事女児を分娩、安産であった。その後日がたつにつれて体の調子が悪くなり、医師に診察をこうと腎炎とのこと、その治療を受けた。ますます悪くなり遂に呼吸困難となつて救急車でK病院(公立)に移る。既にチアノーゼ出現、顔面蒼白、溢血斑を認め意識不明。すぐレントゲンをとつたが肺が真白で、呼吸する所が全くなく治療法もなく病名すらわからなかった。産後病院で強い菌が下から入り、それが肺に入りかび状になつてゐるため劇薬を打つしかないとのこと。その劇薬も体に合えばいいが合わねば打ちながら死ぬと家族に言つたそうである。たまたまその劇薬が体に合つたので、奇蹟的にたすかつた。その間危篤状態が一週間ぐらい続き、さまざまな手当をうけた。一命をとりとめたものの、現在でも疲れやすく風邪は年中ひいてゐるありさま。一応病名は肺を主病変更した敗血症による急性呼吸不全とついた。

○感想……K(公立)病院に移されたとき、莫大の金がかかるがよいかと言われた。さいわい原爆手帖があつたので完全に産科のみの費用ですんだ。しかしこのようなことがいつ起こるともわからないのだからお産を軽くみないでほしいと思う。(広島市)

△例2▽

○状況……五十年三月に長女を出産、五十二年四月普通分娩で長男を出産。慣れた病院の方がよいだろうと長女の時と同じ大阪市のI産婦人科に入院。出産後、子宮復古を早めるため、傷口を早く治すため、母乳の出を良くするためなど、諸々の薬を一回七錠、一日に二十一錠を一週間ぐらい飲む。また、化膿止めのため「セファゾリン」を一度注射、その直後非常な寒さを感じ、震えがき

て、歯もガチガチと音のするほどひどく、次に足にじんましの様な発しんができ、かゆみがしばらく止まらずおどろいた。医師に告げると「そうですか」のみ。一週間で退院したが、四月末頃から腕や足に赤くアメーバーの様な形のもの多数できる。気持ちが悪く近くの薬局に相談、三千円払って塗り薬を買いつけたが治らず、他の薬局に相談。そこでは「それを治す様な薬はない」と言われ、半ばあきらめかけていたら今度は体中に「シミ」の様な斑点が無数になり、毛髪、眉、まつ毛など、一部色素がぬけて「白毛」になる。入院した病院へ見てもらいに行くと、S総合病院を紹介してくれ七月六日から通院する。ここでは「後天性色素異常」と診断され、薬を飲み始めるがよくならず二か月すぎる。そうしているうちに新聞でK病院を知り、九月二日から通院、K病院の医師はI産婦人科での薬・注射を検査して、反応テストをし「セファゾリン」注射が原因であることをつきとめ、「よくショック死しなかったものだ」と言われてビックリ。I産婦人科にこのことを言うと「気をつけなければ」と言うのみ。

○感想質問……後で「セファゾリン」のカタログを見ると、赤くはれたり、じんましができたりショック死することがあると書いている。この薬に対して弱い体質があるということは医師も知っていたはず、注意義務を怠ったと思う。現在、少しよくなっているが、まだ二週間に一度の割で通院する必要があり、実家に子供を預けて朝早くから午後三時すぎまでかかって治療している。今まで病院への支払いに二万八千九百十二円、交通費に四千九百八十円かかっている。完治するまで一年ぐらいいはかかるのと、精神的・経済的・時間的な補償をI産婦人科と薬品メーカーに請求ができないものか、また、公的機関でなんらかの処置をしてもらえないものか教えてほしい。

(大阪市旭区)

△例3V

○状況……五十年、予定日二日前に破水し、病院(池田市A産婦人科)へ行くが子供が降りていないので陣痛誘発剤を二回注射して帰る。四日間毎日注射しても陣痛が起こらず、仕方なく帝王切開をする。切開して子宮が変形していると聞いたが、事前にわからなかったのかと腹立たしい。

手術をして十日目頃ぼつぼつ歩くように言われたので歩こうと思ったら足が痛くて痛くて歩かれず、はって診察室へ行く。

その時になって、右と左の足の太さが違うことを発見する。病院始まって以来と医者はびっくりして冷やすよう診断。

三週間入院したが、一進一退のまま、知り合いのB外科にまわされ薬を飲むが、かんばしくなく別の大きなC外科病院へ行く。しかしここではこんなひどくなってから診られないと言われ結局産院を退院してから二週間後頃にD病院(公立)へ行くと、「もつと早く来たら良かったのになぜこちらに回されなかったのでしょうね」と言われる。さらに二人目の子供はあきらめた方が良いといわれくやしき思う。なぜ早く大きな病院に回してくれなかったのか。

今になっても冬台所に立つと足がいたむ、二度とA病院へは行きたくない。

(箕面市)

資料2 優生保護法の一部を「改正」する

法律案提案理由説明

昭和四十七年第六十八回国会提出 厚生 省

ただいま議題となりました優生保護法の一部を改正する法律案について、その提案の理由をご説明申し上げます。

優生保護法は、優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護するという目的のもとに、優生手術、人工妊娠中絶、優生保護相談所等に関し、必要な事項を定めているものでございますが、最近の国民保健の実態の変化にかんがみて、今回、人工妊娠中絶の要件及び優生保護相談所の業務内容をこれに適合するよう改める措置を講じ、もって、優生保護対策の適切な実施を図ることいたしました。

改正の内容といたしましては、まず人工妊娠中絶の要件に関する改正でございますが、その第一点といたしまして、現行法では妊娠の継続又は分娩が身体的理由又は経済的理由により母体の健康を著しく害するおそれがある場合は母体の保護のため人工妊娠中絶を行なうことを認めているところがありますが、このうち、経済的理由という要件につきましては国民の生活水準の向上をみた今日におきましては、そのままにしておくことに問題があり、この際、これは取り除き、妊娠の継続又は分娩が医学的にみて母体の精神又は身体の健康を著しく害するおそれがあるものというように改めたのでございます。

人工妊娠中絶の要件に関する改正の第二点は、優生上の見地からの人工妊娠中絶に関するものでございますが、現行法では、不良な子孫の出生を防止するという見地から、妊娠又はその配偶者が精神病又は遺伝性奇型をもつ場合等には人工妊娠中絶を認めているところがありますが、近年における、診断技術の向上等によりまして、胎児が心身に重度の障害をもって出生してくることをあらかじめ出生前に診断することが可能となつてまいりました。

このため胎児がこのような重度の精神又は身体の障害となる疾病又は欠陥を有しているおそれが著しいと認められる場合にも、人工妊娠中絶を認めることとしたのが改正の第二点でございます。

次に、優生保護相談所の業務に関する改正でございますが現行法のもとでは、優生保護相談所は優生保護の見地から、結婚の相

談、遺伝その他優生保護上必要な知識の普及向上、受胎調節の普及指導等を行なっておりますが、最近、高年齢初産が問題となっておりまして特に、初回分娩が適正な年齢において行なわれるように助言及び指導する等、その業務の充実を図ってまいりたいという改正でございます。

以上が、この法律案の提案理由であります。なにとぞ慎重にご審議のうえ、すみやかにご可決あらんことをお願い申し上げます。

資料3 優生保護法改訂案と条文対照表

(一九七二年十一月 「リブ新宿センター」作成資料にあたら編集部が若干追加したもの)

現 行 条 文 (昭和二十三年施行)	改 訂 案
--------------------	-------

第一章 総則

(この法律の目的)

第一条 この法律は、優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とする。

(定義)

第二条① この法律で優生手法とは、生殖腺を除去することなしに、生殖を不能にする手術で命令をもって定めるものをいう。

② この法律で人工妊娠中絶とは、胎児が、母体外において、生命を保持することのできない時期に、人工的に、胎児及びその附属物を母体外に排出することをいう。

第三章 母性保護

(医師の認定による人工妊娠中絶)

第十四条 都道府県の区域を単位として設立された社団法人たる医師会の指定する医師(以下指定医師という)は、左の各号の一に該当する者に対して、本人及び配偶者の同意を得て、人工妊娠中絶を行うことができる。

一、本人又は配偶者が精神病、精神薄弱、精神病質、遺伝性身体疾患又は遺伝性奇型を有しているもの

二、本人又は配偶者の四親等以内の血族関係にある者が遺伝性精神病、遺伝性精神薄弱、遺伝性精神病質、遺伝性身体疾患又は遺伝性奇型を有しているもの

三、本人又は配偶者が癲疾患に罹っているもの

四、妊娠の継続又は分娩が身体的又は経済的理由により母体の健康を著しく害するおそれがあるもの

五、暴行若しくは脅迫によって又は抵抗若しくは拒絶することができない間に姦淫されて妊娠したもの

② 前項の同意は、配偶者が知れないとき若しくはその意思を表示することができないとき又は妊娠後に配偶者がなくなつたときには本人の同意だけで足りる。

③ 人工妊娠中絶の手術を受ける本人が精神病又は精神薄弱者であるときは、精神衛生法第二十条（後見人、配偶者、親権を行う者又は扶養義務者が保護義務者となる場合）又は同法第二十一条（市町村長が保護義務者となる場合）に規定する保護義務者の同意をもって本人の同意とみなすことができる。

第五章 優生保護相談所

（優生保護相談所）

第二十条 優生保護の見地から結婚の相談に応じ遺伝その他優生保護上必要な知識の普及向上を図るとともに、受胎調節に関する適正な方法の普及指導をするため、優生保護相談所を設置する。

四、その胎児が重度の精神又は身体障害の原因となる疾病又は欠陥を有しているおそれが著しいと認められるもの

五、妊娠の継続又は分娩が母体の精神又は身体を健康を著しく害するおそれがあるもの

六、上記五と同

第二十条 優生保護の見地から結婚の相談に応じ遺伝その他優生保護上必要な知識の普及向上を図るとともに、適正な年齢において初回分娩が行なわれるようにするための助言及び指導その他妊娠及び分

腕に関する助言及び指導並びに受胎調節に関する適正な方法の普及指導をするため、優生保護相談所を設置する。

資料4 優生保護法の変遷と社会の移り変わり

(一九七二年十一月 「リブ新宿センター」作成資料より転載)

時代区分	優生保護法の移り変わり	社会状況(政治・風俗・etc...)
昭和十五年十二月～二十年八月十五日 (戦時体制)	十六年六月六日 国民優生法実施(初令)	十六年十二月 太平洋戦争起きる 二十年八月六日 広島に原爆投下 八月十五日 日本降伏 太平洋戦争(第二次大戦)終結
昭和二十年八月十六日～二十六年九月 (米軍占領体制)	二十三年九月 優生保護法実施(国民優生法より改正) 二十四年六月 優生保護法改正 経済的理由で//人工妊娠中絶//可能になる	二十年八月 特殊慰安施設できる 十月 婦人参政権発布(法的な男女同権) 二十五年 青少年の性的犯罪激増 六月 朝鮮戦争起きる 二十六年九月 サンフランシスコ講和条約 日米安全保障条約結ばれる

昭和二十六年
現在
(高度経済成長
時代)

二十七年五月 優生保護法改正

指定医師の判断・本人と配偶者の同意だけで
絶が可能になる

三十年七月 優生保護法一部改正案可決

受胎調節実施指導員に避妊薬の販売を認める

三十九年 厚生大臣より「墮胎天国の汚名なくそう」
の声あがる

四十年 母子保健法成立

四十二年 日本の総人口一億に達す

四十五年四月 第四十三国会で優生保護法一部改案
出される

厚生省優生保護の調査始める

四十七年四月 第六十八国会で優生保護法一部改悪
案再度出される

二十九年 住宅不足深刻
内職家庭ふえる

三十二年四月 売春防止法施行される

三十三年四月 皇太子成婚

ミッチーブームおきる

三十五年六月 安保反対闘争(新安保成立)

資料5 国民優生法(抄)

——昭和十五年施行——

第一条 本法ハ悪質ナル遺伝性疾患ノ増加ヲ防遏スルト共ニ健全ナル素質ヲ有スル者ノ増加ヲ図リ以テ国民素質ノ向上ヲ期スルトヲ目的トス

第十六条 第十三条(優生手術ノ規定)ノ規定ニヨル場合ヲ除クノ外医師生殖ヲ不能ナラシムル手術若クハ放射線照射又ハ妊娠中絶ヲ行ナハントスルトキハ予メ其要否ニ関スル他ノ医師ノ意見ヲ聴取シ且命令ノ定ムル所ニ依リ予メ行政官庁ニ届出ツベシ但シ特ニ急施ヲ要スル場合ハコノ限リニ在ラズ前項ノ届出アリタル場合ニ於テ行政官庁必要アリト認ムルトキハ其ノ指定シタル医師ノ意見ヲ更ニ聴取セシムルコトヲ得、但シ書ノ場合ニ於テ届出デラナサズシテ生殖ヲ不能ナラシムル手術若クハ放射線照射、又ハ妊娠中絶ヲ行ナイタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リテ行政官庁ニ届出ツベシ

資料6 刑法(抄)

——明治四十年施行——

第二十九章 墮胎の罪

第二百十二条(墮胎) 懷胎ノ婦女藥物ヲ用ヒ又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ墮胎シタルトキハ一年以下ノ懲役ニ処ス

第二百十三条(同意墮胎) 婦女ノ囑託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ墮胎セシメタル者ハ二年以下ノ懲役ニ処ス又因テ婦女ヲ死傷ニ致シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ処ス

第二百十四条(業務上墮胎) 医師、産婆、薬剤師又ハ藥種商、婦女ノ囑託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ墮胎セシメタルトキハ三月以上五年以下ノ懲役ニ処ス

第二百十五条(不同意墮胎) ① 婦女ノ囑託ヲ受ケズ又ハ其承諾ヲ得ズシテ墮胎セシメタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ処ス

② 前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二百十六条(不同意墮胎致死傷) 前条ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ処断ス

資料7 受胎調節、人工妊娠中絶及び

避妊手術に関する法律(第一次案)

一九七四年六月三日 日本社会党政策審議会

社会保障政策委員会

(目的)

第一条 この法律は、母性が尊重され、かつ、母性の保護が図られなければならないことにかんがみ、受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術が個人の意思に従って安全かつ適正に行われるための措置を講ずることを目的とする。

(定義)

第二条 この法律において「人工妊娠中絶」とは、胎児が母体外において生命を保持することができない時期に、人工的に胎児及びその附属物を母体外に排出することをいう。

2 この法律において「避妊手術」とは、生殖せんを除去することなしに生殖を不能にする手術で厚生省令で定めるものをいう。

3 この法律において「人工妊娠中絶手術等」とは、人工妊娠中絶の手術又は避妊手術で疾病の治療を目的としないものをいう。

(国・地方公共団体の責務)

第三条 国及び地方公共団体は、受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する知識の普及に努めなければならない。

第四条 国は、受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する方法の研究、開発及び改良に努めなければならない。

(母性相談所)

第五条 都道府県及び保健所を設置する市は、母性相談所を設置しなければならない。

2 前項の母性相談所は、保健所に附置することができる。

第六条 国、都道府県及び保健所を設置する市以外の者は、厚生大臣の認可を受けて母性相談所を設置することができる。

2 厚生大臣は、前項の母性相談所が次条第二項の基準に該当しなくなったときは、その認可を取り消すことができる。

第七条 母性相談所は、受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する相談に応ずるとともに、これらに関する必要な知識の普及を図ることを目的とする施設とする。

2 厚生大臣は、母性相談所の設備及び運営について、基準を定めなければならない。

第八条 この法律による母性相談所でなければ、その名称中に、母性相談所という文字を用いてはならない。

(受胎調節の実地指導)

第九条 女子に対して厚生大臣が指定する避妊用の器具を使用する受胎調節の実地指導は、医師のほかは、都道府県知事の指定を受けた者でなければ業として行つてはならない。ただし、子宮腔内に避妊用の器具をそう入する行為は、医師でなければ業として行つてはならない。

2 前項の都道府県知事の指定を受けることができる者は、厚生大臣が定める基準に従つて都道府県知事の認定する講習を終了した助産婦、保健婦又は看護婦とする。

3 前二項に定めるもののほか、都道府県知事の第一項の指定又は前項の認定に関して必要な事項は、政令で定める。

(医師の指定)

第十条 都道府県知事は、都道府県の区域を単位として設立された社団法人たる医師会が推薦する医師のうちから、人工妊娠中絶等審査会（以下「審査会」という。）の同意を得て、人工妊娠中絶手術等を行うことができる者を指定する。

2 前項に定めるもののほか、同項の指定に関して必要な事項は、政令で定める。

(人工妊娠中絶手術等)

第十一条 心神喪失者（精神衛生法（昭和二十五年法律第二百二十三号）第三条に規定する精神障害者で心神喪失の常況にあるものをいう。以下同じ。）以外の者は、指定医師（都道府県知事が前条第一項の規定により指定する医師をいう。以下同じ。）の行う人工妊娠中絶手術等を受けることができる。ただし、未成年者は、避妊手術を受けることができない。

2 人工妊娠中絶手術等を受けようとする者に配偶者（届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。以下同じ。）があるときは、人工妊娠中絶手術等を受けることについての配偶者の同意を得なければならない。ただし、配偶者が知れないとき又は心神喪失者であるときは、この限りでない。

第十二条 指定医師は、人工妊娠中絶手術等を受ける本人が心神喪失の状況にあると認めるときは、その者に対し人工妊娠中絶手術等を行つてはならない。

（心神喪失者に対する人工妊娠中絶手術等）

第十三条 心神喪失者の保護義務者（精神衛生法第二十條又は第二十一條に規定する保護義務者をいう。）は、当該心神喪失者に対する人工妊娠中絶手術等を行うことの適否に関する審査を審査会に申請することができる。

2 審査会は、前項の規定による申請を受けたときは、人工妊娠中絶手術等を受ける者が心神喪失者であるかどうか及び人工妊娠中絶手術等を行うことが本人の不利益にならないかどうかを審査した後、人工妊娠中絶手術等を行うことの適否を決定して、その結果を申請者に通知する。

3 前項の規定により人工妊娠中絶手術等を行うことが適当である旨の決定があったときは、指定医師は、前条の規定にかかわらず、その決定があった日の翌日から起算して十日を経過した後において当該心神喪失者に対する人工妊娠中絶手術等を行うことができる。

4 第二項の規定による決定についての異議申立ては、当該決定のあった日の翌日から起算して十日以内にしなければならない。

（審査会）

第十四条 都道府県に審査会を置く。

2 審査会は、都道府県知事の監督に属する。

3 審査会は、委員十人以内で組織する。

4 審査会は、特に必要があるときは、臨時委員を置くことができる。

5 委員及び臨時委員は、人工妊娠中絶、避妊手術又は精神衛生に関し学識経験を有する者のうちから、都道府県知事が、議会の同意を得て、任命する。

6 審査会に、委員の互選による委員長一人を置く。

7 この法律で定めるもののほか、委員の任期、委員長の職務その他審査会の運営に關して必要な事項は、政令で定める。

（届出）

第十五条 指定医師は、人工妊娠中絶手術等を行った場合は、厚生省令の定めるところにより、人工妊娠中絶手術等について、その就業地の都道府県知事に届け出なければならない。

（秘密の保持）

第十六条 次に掲げる者は、正当な理由がある場合を除き、職務上知り得た人の秘密を漏らしてはならない。

一 母性相談所の職員又はその職にあった者

二 審査会の委員若しくは臨時委員又はこれらの職にあった者

三 人工妊娠中絶手術等の審査の事務に従事した者

四 人工妊娠中絶手術等に従事した者

(禁止)

第十七条 何人も、この法律による場合のほか、正当な理由がある場合を除き、生殖を不能にすることを目的として手術又はエックス線照射を行つてはならない。

(国の補助)

第十八条 国は、母性相談所の設置及び運営に要する費用について、政令の定めるところにより、その経費の一部を補助する。

(省令への委任)

第十九条 この法律で政令に委任するものを除くほか、この法律の実施のための手続その他その執行について必要な細則は、厚生省令で定める。

(罰則)

第二十条 第十七条の規定に違反した者は、一年以下の懲役又は十万円以下の罰金に処する。

2 第十七条の規定に違反し、よつて人を死亡させた者は、五年以下の懲役に処する。

第二十一条 第十六条の規定に違反した者は、六月以下の懲役又は五万円以下の罰金に処する。

第二十二条 第九条第一項の規定に違反した者は、十万円以下の罰金に処する。

第二十三条 第六条第一項の規定に違反して、厚生大臣の認可を受けないで母性相談所を開設した者は、五万円以下の罰金に処する。

第二十四条 第十五条の規定に違反した者は、一万円以下の罰金に処する。

第二十五条 第八条の規定に違反した者は、一万円以下の過料に処する。

附 則

1 この法律は、昭和四十九年十月一日から施行する。

2 優生保護法（昭和二十三年法律第百五十六号。以下「旧法」という。）は、廃止する。

3 この法律の施行の際現に旧法第十五条第一項の都道府県知事の指定を受けている者は、この法律の施行の時に、第九条第一項

の都道府県知事の指定を受けたものとみなす。

4 旧法第三十九条の規定は、附則第二項の規定にかかわらず、この法律の施行の際現に旧法第十五条第一項の都道府県知事の指定を受けている者に関し、なお効力を有する。この場合において、旧法第三十九条第二項中「同条同項」とあるのは「受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律（昭和四十九年法律第 号）第九条第一項」とする。

5 旧法第十条の規定に基づく優生手術に関しこの法律の施行前に要した費用についての都道府県の支弁及び国庫の負担並びに旧法第二十一条第一項の優生保護相談所の設置及び運営に関しこの法律の施行前に要した費用に対する国庫の補助については、なお従前の例による。

6 この法律の施行前にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

7 厚生省設置法（昭和二十四年法律第五百一十一号）の一部を次のように改正する。

第五条第十四号中「優生保護相談所」を「母性相談所」に改める。

第九条第二号中「優生保護法（昭和二十三年法律第五百十六号）」を「受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律（昭和四十九年法律第 号）」に改める。

第十三条第二号の二中「優生保護法」を「受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術に関する法律」に改める。

第二十九条第一項の表中中央優生保護審査会の項を削る。

理 由

受胎調節、人工妊娠中絶及び避妊手術が個人の意思に従って安全かつ適正に行われるようにするための措置を講ずる必要がある。これが、この法律案を提出する理由である。

女の力、女の心を信じるあなた プロフェッショナルな仕事なら

———— BOC ^

専門的技術をもつ女性の創造力
の銀行BOC (Bank of Creativity)
は、1964年創設。誠実と創造を
モットーに、信用を得ています。
専門職なら、BOCにご用命を。

〈下記のことができます〉

- 印刷物の企画から印刷製本まで
- スライド・映画の製作
- 各国語ほん訳・通訳
- 講演・座談会等の速記・リライト
- 建築設計・室内装飾設計
- 印刷物デザイン、コピー、撮影
- 取材記事作成
- カウンセリング
- その他各種専門職

お申込みと登録は下記へ————



〒160 東京都新宿区新宿1-9-6

TEL 東京(03)354-3941(代表)

事実に基づいて女の問題を考える総合情報誌〈あごら〉

〈あごら〉=AGORAはひろば。さくのないひろばです。

女の生き方、人間の解放について考えあうひろばです。

経歴も性別も年齢も関係なく、心ひらいて話しあう場です。

みんなが同じ平場で話そう、ちがう価値観にも耳を傾けよう、そして、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、と願っています。女性解放にはいろいろな方法がありますが、私たちは、当面、情報の収集と伝達を中心に、息の長い運動を静かに、確実に、続けていきたいと話し合っています。ご参加をお待ちします。

〈あごら〉は、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係です。

運営は、会員の拠出による基金と、会費、雑誌売上代でまかなわれています。

会費 年額4000円、『あごら』(年2回刊)と『あごらミニ』(月刊)の誌代を含む。

基金 1口1000円。多少にかかわらず大歓迎!

申込 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 〈あごら〉事務局 TEL(03) 354-9014

〔編集後記〕〈あごら〉編集スタッフにも会員にも子どもがいる人がいる。もちろん子どものいない女、持たない女もいるが、女解放を思考する女たちにとってみれば、いずれ“子ども”の問題は避けられないものだった。さて、少しも避けずにどう取り組むか。生んだ女も生まない女も「生む性」と自分との距離を抱え持って、一步も辞さずと討論を重ねたが……。問題はいくつか整理されていったが、「生む性」からエロスへ、そして哲学の領域まで、会議を重ねるにつれ、多様な意見がでてきた。しかし、それをそのまま誌上に持ち込むことはできなかった。

〈あごら北海道〉の意見もあり、子育て、保育の問題は分けた。別の号でまたあらためて取り組むことにしたい。(T)

〈あごら〉 19号 1978年10月31日発行 本文白牡丹カラーA36.5kg 表紙 アートポスト 菊判125kg

①発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ②振替 東京0-5264 (あごら編集部)

③発行人 斎藤千代 ④印刷者 金沢信江 門井裕子

〈あごら〉 1号	●女が働くこと	¥200
〈あごら〉 2号	●女性の進出のために	¥200
〈あごら〉 3号	●主婦の解放をめぐる	¥200
〈あごら〉 4/5号	●何かしたい主婦のために	¥300
〈あごら〉 6/7号	●運動を進めよう	¥350
〈あごら〉 8号	●子殺しを考える	¥380
〈あごら〉 9号	●働く女と主婦の接点を求めて	¥430
〈あごら〉 10号	●女と法	¥700
〈あごら〉 11号	●女と教育	¥750
〈あごら〉 12号	●国際婦人年世界会議	¥750
〈あごら〉 13号	●国際婦人年国内集会	¥750
〈あごら〉 14号	●女の記録	¥750
〈あごら〉 15号	●職場の中の女性差別	¥750
〈あごら〉 16号	●女と結婚	¥750
〈あごら〉 17号	●女と生涯教育・生涯学習	¥780
〈あごら〉 18号	●いま女性解放は	¥1300